
『ときメロ』 - 恐怖のイケメン学園 -

兎浪みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ときメロ』 - 恐怖のイケメン学園 -

【Zコード】

Z7786S

【作者名】

兎浪みなと

【あらすじ】

「タイトルとあらすじ見たときは『なんてアホそうな作品だ…』と思ったのにここまで本格的な恋愛ゲームものだとは」「読んじゃいけない気がしていたのですが勇気を出してよかつたです」そんなご意見が続々と。どうぞタイトルで引かずにご一読ください（笑）

＊＊＊＊＊ 活火山、伽羅燃岳。全国のオタク達の萌エネルギーが臨界点に達した時、大噴火が起こり夢の2次元への扉が開く。そんなトンデモ予言が実現し、気付けばおれは姉貴が夢中の乙女ゲーム『ときメロ』の世界にトリップしていた。ってなんでおれがヒロ

インになっちゃってるわけ！？ 奔放な同居人、クールな幼馴染、
学園の王子様、年下プレイボーイ、妖艶な魔王様……迫り来るイケ
メンたちに戦々恐々。「この世界から抜け出すには全キャラ落とせ」
つてそんなバカなーー！（涙） 少女漫画の王道パターンを、
ちょっとひねくれた設定でお届けします。あなたのお好みは誰ルー
ト？（笑） 精神的BLとのご指摘を受けましたので、苦手な方
はご注意を

『ヒカルメロ』メインキャラ紹介（前書き）

> i 2 8 2 3 2 — 3 3 9 3 <
i l l u s t r a t i o n : ひなむら さん

『ときめきメロ』メインキャラ紹介

ゲーム『ときめきメロティ』遙かなる金色の日々』メインキャラクター紹介

金城 煌（かねしろ・あきら）CV・浪川 輔
春からヒロインと同居することになる。高校2年。溌剌として寛大、
スポーツ万能。開放的な性格だが、どこか飄々としてつかめないと
ころもある。牡羊座B型。

蒼木 悠斗（あおき・ゆうと）CV・中 悠一

ヒロインの幼馴染で家はお隣さん。高校1年。クールで理知的。成
績優秀、剣道も全国レベル。基本他人に無関心だがヒロインにはな
んだかんだで甘い。水瓶座A型。

北王子 梓茶（きたおうじ・あずさ）CV・岸尾だ すけ

ヒロインをバンドに引き込む。高校2年。穏やかだがさりげに強引。
気品にあふれ、笑顔を絶やさない学園の王子様で理事長の息子。あ
だ名は「王子」「王子先輩」。魚座O型。

紫葉 静流（しば・しずる）CV・内 昴輝

ヒロインの後輩にあたる中等部2年。流行に敏感で頭の回転が速い。
14歳にしてプレイボーイと名高いフェロモン系美少年。双子座A
B型。

黒川 旺眞（くろかわ・おうま） CV・諭 部順一
対立バンドのカリスマボーカリスト。高校2年。煌と犬猿の仲。財閥の御曹司。圧倒的な美貌と妖艶^{よつえん}を誇るが、傲岸不遜^{じょうがんふそん}の無愛想で超マイペースの通称「魔王」。蠍座B型。

* 7/24追記。ピアプロで一目惚れしたひなむうさん（http://piapro.jp/hinamuu）にキャラデザをしていただきました！

ここに載せたかったのですが、一枚一枚が大きくなってしまう仕様なので、小説の合間にキャラクターファイルを挿入し、そちらで順次一人ずつ掲載させて頂きます。

こちらは打合せでいただいたデフォルメイラスト。か、可愛すぎる

⋮ !

ひなむうさん最高。 hshs

> 27931-3393 <

『ヒカルメロ』メインキャラ紹介（後書き）

連載作品があと一步で終了、といつといひでの新連載ですが。
（じつても書きたくないなつちやつたので書いちやいます。
（もつ一つもちゃんと終わらせるので）容赦ください。
こんな乙女ゲーやりたい～とこいつの願望から創作w

高校に入学してから初めての「ホールデン・ワイーク」田畠。おれがリビングのソファに寄りかかって漫画を読みふけっていると、「おはよー」とやけに明るい声とともに一階から七つ上の姉貴が降りてきた。

『ねはるー』『でもう五年だけかな。
すっぴんでパジャマ姿の姉貴は、鼻歌を歌いながら一間続きのダ
イニングキッチンで冷蔵庫を漁つてゐる。

「やけに！」機嫌じゃん
「だつて、今日は久しぶりになんの予定もない休日だよ！　もう嬉しくつて

頬緩みまくりで、よそつた御飯の上に卵を落とす姉貴。仕事だ人付き合いだで忙しない日々を送る社会人の彼女にとって、真の意味での「休日」はよほどありがたいらしい。

「で、ねーちゃんはその貴重な休日を、どう過じる?」

何気なく尋ねたら、

「一日引きこもってゲーム三昧ーー！」

力強く、なんともダメな答えが返ってきて、苦笑するしかなかつた。本来根っからのインドア派の彼女には、それが大事な充電時間なんだろうけどさ。

「若い女の休日としては、あまりに不毛だろ」

「いいの。もう腐ってるから。リア充なんてクソ食らえ」

きつぱりと宣言して、御飯をかきこむ。

「……そりいえば、伽羅燃たんはどんな様子？」

ふと箸を止めて聞いてきたのは、うちの県で最近にわかれ活動が盛んになつてきてる活火山についてだった。

「たん付けすんな。伽羅燃岳は……今朝も一回噴火したみたいだな。
外見てみろよ、灰で地面まつしろ」

おれの答えに、姉貴はなぜか「そつかあ」と笑った。

「なにが嬉しいんだよ？ 噴火して灰が降ると洗濯も干せないし、農家の畑だつて大迷惑だろ。火山のすぐ近くじや空振でガラスが割れたりもしてるつつーのに」

「ふふふ、あんたは伽羅燃たんの秘密を知らないからねえ」
「秘密？」

首を傾げるおれに、姉貴は怪しい笑みを浮かべて頷く。

「伽羅燃岳は実は知る人ぞ知るパワースポットでね。日本全国のオタク達がキャラ萌えするたびにエネルギーが溜まつていつて、臨界点に達すると噴火するの。でもまだ今は序の口。もつともつと萌エネルギーが集まつて大噴火が起こつた時、『萌えー』という轟音と共にピンクの灰が舞い躍り、夢の2次元への扉が開くという伝説が」

「もついい」

ダメだこいつマジで終わってる。

「『』馳走様ー」と卵かけ御飯だけの朝食を終えたまるでダメな女、略してマダオ（ちや銀）は、リビングにせつてくると流れる動作でテレビの電源をいれ、家庭用ゲーム機に手を伸ばす。

「また乙女ゲーかあ？」

学園生活を送りつつ、色々なタイプのイケメンたちにまかせられてる逆ハーレムゲーム、通称乙女ゲーに姉貴は夢中だった。特に最近はこの『ときめきメロ』トイ～遥かなる金色の田々』がお気に入りらしい、平日などは寝る時間も削ってひたすらプレイしている。結果、睡眠不足で肌は荒れ、田の下にはクマ。部屋の掃除も滞りがちで、ハマればハマるほど『乙女』から遠ざかっているのに乙女ゲーとはこれいかに。

「『ときめきメロ』、何周プレイしてんだよ。こないだ全キャラ制覇したとか言つてなかつたっけ?」

「まだ見てないイベントや揃つてないスチルがいっぱいあるのよ」

タイトル画面でスタートボタンを連打して、『はじめから』を選択。馳れた手つきでわざと入力されたプレイヤーの名前を見て、おれはギョシッと皿をむいた。

「ちょっと待て! 『羽鳥 和希』ってなんでおれの名前ー?」「あたしの名前の『トータばつかだとわけわかんなくなるの。いいじやん、ぶっちゃけあんた、あたしより可愛いし』
「いや意味わかんねえから。なんでおれが男に口説かれなきゃなんねーんだ! ?」

「その嫌うつた反応を楽しみたいから（はあと）」

「マーマーマーマー」とやうじい笑みを浮かべる姉貴だが、[冗談じやねえ！

「ふざけんな！ 消せ！ しかも愛称『バカちん』つて～はい、強制消去」

「やだ、返してよバカちん」

無理矢理おれが姉貴からコントローラーを奪つた時だつた。

「ジジジジジ……とどこから地鳴りのよくな音が響いてきたのは。

「な、なんだー？」

「何ー？ ま、まさかこれ……」

伽羅燃たん、と姉貴が呟いた瞬間。

とんでもなく大きな爆発音と共に、辺りがビリビリと振動し、まばゆい光に包まれる。

何がなんだかわからないまま、とつと姉貴を庇おうと抱きすぐめた。

存在さえも溶け消えてしまいそうなほど強いピンクの光にぎゅつと目を閉じ、身をすくませながら、おれは確かに噴火音と共に「萌えええええ」という怨霊のよくな叫びを聞いたのだった。

1・魔女たちの本日とアーティストアート（後編）

マジでダメなお話ですみません。

2・乙女ゲーにてトリップ

…………

けたたましい電子音がする。なんだろう?　目覚まし時計みたいだけど。

爆発は、おさまった、のか……?

おそるおそる瞳を開く。光にやられてちかちかしていた視界が、徐々にだが焦点を結んでいく。

少しだけ空けられた窓から吹き込む風に、揺れるレースのカーテン。ピンク系でまとめられたファブリック。細々した小物やぬいぐるみの飾られたキャビネット。

…… オイオイ、どこだ、ここは。

少なくとも自宅のリビングではない。姉貴の部屋も、こんな少女趣味ではなかつたはずだ。

おれは、いつのまにやらベッドに横たわっていたらしく、ゆっくりと身体を起こし……息をのんだ。

部屋のドアの隣に、一人の少女の姿が見えた。

さらりと流れるちょっと茶色がかつたセミロングの髪に、きょとんと見開かれた大きな瞳。

年の頃は15・6歳といったところか。けして美少女とまではいえないが、そこそこ愛らしい容姿をしている。

パジャマ姿で、ベッドの上に半身を起こしている彼女は、おれが右手を上げると左手を上げ、おれがその手をひらひらと振ると同じように手を振つた。

…… そしておれは、不意にそれがドアの隣に置かれた、目の前の等身大の鏡に映る光景であることに、気がつく。

鏡の中の少女は、ムンクのように大きく顔を歪ませた。

「お姉ちゃん、田舎まし止めて！」いわむすべ。

ありえない事態に呆然としていたおれは、そんなどなり声でハツと我に返った。

開け放たれたドアのところに立っているのは小学校3年生くらいのツインテールの少女。

糸を脇からまわして、カッカッとヘリの横元にかかる壁など
の田原まし時計のアラームをOFFにした。

「何してるの？ もう起きてくれるお母さんもいないんだから、ちゃんと自分で起きてよね。それに、今日は“あの”日だよ、早く着替えてた方がいいんじゃない？」

呆れたように首を傾げる少女。

「え、と……君は？」

「寝ぼけてるの？ 妹の芽生でしょー。まさかお姉ちゃん、自分のことも忘れたとか言わないよね」

卷之三

とおれの顔を見つめる。
やがて、ちょっとためらいがちに、言った。

「もしかして、弟の和希？ あなたもトリップしたの？」

ガラリと変わった少女のその口調は、慣れ親しんだものだつた。

「ねーちゃん！ ねーちゃんまでそんな姿にー？ いつたいどうなつてんだー？」

思わずベッドから飛び起きて、中身は姉貴らしき小学生の肩をガシツとつかむおれ。

一方姉貴は、ブフツとふき出すと、「マジでー？ しんじらんないー」とこともあらうに爆笑しばじめたのだ。

「おい、説明しろよ！ 笑つてゐる場合じやねえだろー？」

「『メン』『メン』、だつて……ふふふ」

姉貴はまだ肩を震わせていたが、おれが本気で睨みつけるとコホンとため息をつき、ようやく落ち着きを取り戻した。

「状況を整理するわよ。今さつきの伽羅燃たんの噴火。そしてその時あたし達がやつていたゲーム。伽羅燃たんの大噴火にまつわる予言は、さつき話したばっかよね？」

“萌エネルギー”が集まつて大噴火が起こつた時、“萌えー”という轟音と共にピンクの灰が舞い躍り、夢の2次元への扉が開くという伝説が”

「……と言つ事は、つまり、信じがたいことだ。おれ達は『ときメロ』の世界にトリップしたつてことかー？」

青くなるおれに、姉貴は『クリと頷き、さらに追い討ちをかける

一言を告げた。

「アハ。でもって、あんたがヒロイン」

「…………」

「ちよつと、なんでもまたベッドで寝つて布団をかぶつてんの?」

「つむれこー。これは夢だ! もう一回寝たら現実にもどるはず! おやすみなさいこ」

「現実から田を背けてもしかたないでしょ」

「いやだ! マジでいやだ! 最低すぎるだろ―――――?」

「やかましごつ。ホラ、朝なんだから着替えるー!」

姉貴は問答無用で布団をひつぱがすと、おれの上にまたがり、パジャマのボタンを開けていく。

「一.」

田に飛び込んできたのは、それやかだけれど確かに存在を主張する柔らかな二つの膨らみ。

「~~~~~つ」

見慣れぬそれにカーッと頭に血が上り、おれは慌てて右手で鼻を押さえると、左手で姉貴を制する。

「何すんだ、やめろつ」

「あんた何自分のオッパイみて鼻血噴いてんの! ? やーい、変態変態~」

「おまえなーーー! ?」

動搖するおれの反応を楽しむよつて、いやらしい笑みをたたえた

姉貴はさりげなズボンまでずり下ろす。

「ホラホラ、女子高生の生着替えよ～？ ほつほつほ、わくがヒロイン、きめ細かい綺麗な肌をしておる」

「どっちが変態だ、やめのこの口女ーー」

必死の抵抗も空しく、氣付けばおれは初夏らしさにマジックワーパースとパークーを着せられていた。

「はい、完璧。あんたってほんと純情よねー。からかい甲斐があるつたらもつ」

満足そうに頷く姉貴。……このありえない状況で一番ありえないのは、あなたのその平常心だよ。

3・鬼畜プレイのススメ

「それで、どうせやつたら帰れると想つへ。」

おれの疑問に、姉貴はさあ？ と小首を傾げる。

「あたしはまだ帰りたくないし……ただ、一つ注意しておくと、あんたは不用意な言動は慎んでね」

「不用意つつーと？」

「『ときメロ』はイケメンたちとバンドを組んで一つずつ障害を乗り越えて、11月に開かれる『けいおん甲子園』の優勝を田指すゲームなの」

「……つてのは建前で、田指すのはお田辺のイケメンとの両想いだろ？」

ズバリと指摘すると姉貴は「そつよ」と認めた。うむ、潔い。

「でも、練習不足で途中の予選で敗退すると、そこでゲームオーバー。メインキャラとの会話の選択肢で決定的な誤りを選んで、シナリオを崩壊させてもゲームオーバー。あたしたちがプレーヤーなら、リセットボタンを押せばやり直しがきくけど、2次元世界の住人になつてこる今、もし同様のことが起じると下歩したら」

「

姉貴はそこで言葉を区切つたけど、言いたいことは伝わって、おれはゾッと身をすくませた。

世界の崩壊と、おれ達の存在の消滅。

そんな最悪の可能性も、ないわけではない。

「けどや、ゲームオーバーになつた瞬間、元の世界に帰れるつてこ

とだつてあり得ないか？」

「そうね。でも、生死をかけた危険な賭けよ。それよりはあたしだつたら、ベストエンディングを田指すわ」

なるほど。やるいとやつたからハイさよなら、の図式は確かに自然な気がする。……けどオイ、ちよつと待て。

「ベストエンディングつてあれか、お田のキャラとの両想い?」

頭痛をこらえながら恐る恐る尋ねたといふ、姉貴は「甘いわね」と首を振り、人差し指をピッと立てた。

「全キャラから恋愛マックス状態で想われながら、誰一人選ばずに全国優勝シナリオよ!」

つてなんだそれええええ。

「なんだよその鬼畜プレイ!」

「『ときメロ』はバンドの練習や学校行事をこなしながら、キャラと恋愛していくわけ。

好感度がそれぞれの基準値までたまると、その都度、恋愛シナリオに突入。それを何段階か重ねて、マックスまで上り詰めたら告白されるわけね。でも、彼への返事は全国のステージのあと。つまり、かなりの努力とテクニックは必要だけど、やつとと思えば1回のプレイで何股でもできちゃうわけよ」

「いや、おれが言いたいのは、なんでそんなんがベストエンディングなのかといつ」

「『ときメロ』は仮に『軽音甲子園』で全国優勝しても、恋愛が誰とも最終状態まで進んでいなかつたらやつぱりゲームオーバーになる。あんたが言つとおり、全国優勝なんて建前の目標。乙女ゲー

ムの神體は、逆ハーレムなのよ…

頼むから身もふたもないことを断言しないでくれ。つーか、それのどこが乙女なんだ、乙女ってなんだ。腹黒すぎるので。

「……普通に誰か一人と恋人になるんじゃダメなわけ？」

「もちろん、たった一人との運命の恋だつて超重要よ。そこがなつてない乙女ゲーなんて論外。

でも、全員のシナリオを堪能して、ちやほやされまくつて、優勝後の後夜祭で全員から未練たっぷりの贈る言葉を受け取る瞬間の快感こそ、禁断の果実にして隠された醍醐味！ その後の攻略キャラのスチルが流れるスタッフホールでも、全員分が映るわけよ。あの達成感と恍惚……あれは、幾多の苦労を乗り越えて成し遂げたものにしか味わえない代物ね」

拳を握つて力説する姉貴。

ダメなやつだと思っていたが、ここまでダメ人間だつたなんて…。

…。

「それに、その場合のHNDIINGを迎えた後だけ、ENDの文字が金色に光るのよ。だからこれが公式認定のベストエンディングつてわけ。……ちょっと、なんでまた布団にもぐつてるの？」

「うるさいー 無理だから！ おれに男口説き落とせとかありえねーからー！」

「大丈夫、あんたはもうその微笑みだけで周囲の男どもの魂を奪つ、選ばれし天然魔性だから」

「いやだ！ マジでいやだ！ 余計尚更いやになつた！ 悪夢よ早く覚めてくれー！」

「往生際が悪いつ

小学生の体とは思えないその怪力によつて布団「」と床に引きずり落とされた時、ピンポンとチャイムが鳴つた。来客だ。

瞬間、姉貴の顔がパアアツと輝く。

「キター！ いくわよ！ いい？ ゲームオーバーであほーんしちくなかったら、メインキャラに嫌われるよつた言動は慎むのよ！？」

「つて引つ張るな！ いやだ誰とも会いたくない—— おれはもう一生この部屋で暮らす——」

「~~~~つともう、じゃかーしい——」

ずるずると廊下に引きずりだされながらもまだ必死に抵抗をするおれに痺れをきらした姉貴は、おれの背中を思いつきり蹴りつけた。ことわざりにて、一階へ続く階段のすぐ手前で。

「でつ！？ うわあああああああ

おれは急勾配のその階段を派手に転がり落ち、無残にも床に正面衝突 したかとおもつたが、予想した衝撃はこなかつた。

「……大丈夫か……？」

耳元で、やけに涼やかな美声が響いた。

おれは、そこで、誰かの力強い腕に抱きこめられて最悪の事態を免れたことに気付く。

ギュッと閉じていた目をゆるゆると開き、顔を上げると……心配

そうにこつりをうかがう、ビえりい男前がすぐ間近に！

3・鬼畜プレイのススメ（後書き）

「あぼーん」は古いだろ？と思いつつ、ネット小説なので新旧ネット用語で遊ぶのもアリかなと使ってみましたw

「「めん！ そっちはこそ大丈……つ！」

床に腰をついて抱きとめる男の上に被さるようにしていた体をあわてて離そうとしたら、足首に激痛がはしつた。

「痛めたのか？ 見せてみる。……ああ、腫れてるな。ここが痛いのか？」 こつちは？」

「平氣……つわ、痛い、そこは痛い！！」

「……骨に異常はなさそうだし、ま、捻挫ねんざだろうな」

男はそう咳くと、ひょいとおれの体を横抱きにして立ち上がった
つて待てい！（汗）

「は、離せつやめろつ！ 自分で歩ける！」「
下手に動かさない方がいいぜ」

それはそうかもしけんが、何が悲しくておれがお姫様抱っこされねばならんのだ！

大暴れして下ろせ下ろせと叫んだが、男は動じた様子も見せずさつさと歩を進め、結局リビングのソファまで運ばれてしまった。
く、屈辱……。

「あの……」 これ、使ってください」

ツインテールの小学生が、しおらしく救急セットを差し出した。
つて姉貴！ てめーよくも突き落としやがったな！ 2次元じやなかつたら捻挫じやすまない落ち方だったぞ！

「ありがとう。気が利くな」

淡く笑つた男にそんな言葉をかけられ、姉貴はみるみる真っ赤に染まるといれしそうに顔をほほこねばせた。

「ーいーつーはー。

しかし姉貴のこの反応も無理のない、いい男であることは確かだつた。

端整な顔立ちとかすらつとした長身とか外見的なものだけでなく、なんつーか颯爽さつそうとしているというか、自信に満ちた淫刺はつりつとしたオーラがあつて、男のおれでも感心してしまつよつた男前。年はほとんど同じくらいに見えるのに。

かがみこんで、慣れた手つきでおれの足首に手当てあていをほどこす男の柔らかそうな髪を、窓から差し込む光が透かして金色に見せる。おれの視線に気づいたのか、ふと顔を上げ、目が合つと一ツと笑つた。

クツ、かつこいーじゃねーか。

「ほら、治療おわり。安静にしてれば問題ないと思つけど、あんまり腫れてくるようなら病院行こつな」

「ありがとうゴザイマス。ところで、あんた誰?」

「あ〜、悪い、挨拶遅れたな。金城煌かなじろあきら。力ギしまつてたけど、合鍵あいかぎ

もらつてたんでも勝手に上がらせてもらつた」

合鍵?

なおのこと怪訝けげんそうな顔をするおれを見て、ん? とこいつよつこ煌が首をかしげた。

「もしかして……書いて、ない？」

「実はお父さん、イタズラ好きで、お姉ちゃんにだけはなんにも話
してないんですねー！」

やや慌てたように姉貴が声を張り上げると、「マジで…?」と煌がギョシとしたように手を丸くした。

「それはまたすうじでシキリだな……」「ですよねー」

姉貴はうんうん、と相槌を打つてから、おれの方に向き直る。

「あのねお姉ちゃん、うちのパパとママ、昨日からしばらく仕事で海外行っちゃったでしょ？ その間、女の子だけで留守番だと物騒ぶつそうだからって、パパの親友の息子さんである金城さんが今日からついに住んでくれることになったの」

「おまえ、そんな身もふたもない……。」

おれの驚愕つぶりや明け透けな物言いがツボったのか、ふき出す

煌

笑ってる場合じゃねーだろ！ そんなハレンチな展開、おれが許

「ハレハレ、つて!!」死語だろそれ

「思春期男子の脳内なんてエロエロパラダイスなの、知つてんだか

「おまつ……頼むからちょっとストップ、腹筋ヤバい……！」

変な奴ー！ と身をよじついた煌だが、やがて眼のふちの涙をぬぐいながら、憤りのあまり真っ赤になつたままの ore に、れどすように言つた。

「安心しろよ、嫌がる相手を無理強いしてどーーーする趣味はねえから。……ま、おまえの親父さんは別に問題起ひつてもかまわないと豪快なことこつてたけどな」

「はあつー？」

またしても大きく顔を歪ませた ore の反応にニヤニヤしつつ、煌は更にとんでもねーことを言つたのだった。

「俺たち、生まれた時から決められた許嫁同士らじこから」

ore が状況についていけずにまかーんとしているつひて、煌の荷物が到着し、奴はさつさと引っ越しを終えてしまった。

部屋は 2 階の ore の部屋の隣の隣。 ore はベッドに刃物を隠し持つことを決意する。妙な気を起こしやがつたら、容赦なく刺す！

そして夕食。

食卓には、ありえないほど豪華で纖細な本格フレンチが並んでいた。

姉貴が皿をキラキラさせて、歓声をあげる。

「す、」ーー、これ全部、煌さんが作つたんですか？」
「ああ、料理は特技。昼は時間なくてカップ麺だつたけど……」

スープを一口すくって、ぶつ飛んだ。特技、の域超えてるだろ」
れ。

見た田の華やかさも、味付けも、十分プロでやつていけそうだ。

「おいしい～幸せ！ もう夢みたい……！」

「今夜は歓迎パーティーってことで、気合入れてみた」

「つて自分で主催してビーすんだよ」

「まあまあそういう訳うなつて。これから毎日、料理は俺が担当する
や。ビーだ、同居も悪くないだろ？」

……確かに、毎日」んなんが食べられるなら……つて、なに餌付
けされてんだよ、おれ！

とはいえ、ぶっちゃけ姉貴もおれも料理のスキルはゼロに等しい。
とうぶんは両親がいないらしき状況で飯の心配をしなくていいとい
うのは、非常にありがたいわけで。

黙り込んだおれに、満足げな笑みを浮かべる煌。

「明日から学校も同じだし、よろしくな。ま、1年と2年で学年は
別だけど」

「え？ 学校まで変えてうちで暮らすわけ！？ ……なんでそこま
でやるんだよ」

どう考へてもおかしいだろ、それ。いぐらニ友ゲーームが「都合主
義だとしても。

「もしかして、前の学校でなんかあつたとか？」

「別に。ただ、真治さんには借りがあるじゃ」

一瞬、煌の表情に落ちる陰。真治てのはヒロインの父親の名前ら
しいが……？

けれど、おれが追及するより先に、煌は表情を緩めると、「それに」と飄々と言葉を継いだ。

「入籍^{いりしき}前に同居するってのも、いい予行演習になるだろ?」

「……入籍とか言うなおぞましい! 親同士の約束だかなんか知らんが、今時ありえないだろ『許嫁』とか

「照れるなつて

「照れてねえ!..」

「おまえ、口悪いよな~」

「ほつとけ!..」

強い口調で突き放したのに、煌は特に凹んだ様子も見せず、あむ、とオードブルを口に運ぶ。

マ、マイペースな奴だな、オイ。

「しつかしビックリしたぜ? 真治さんからかなりドジなところとは聞いてたけど、まさかいきなり階段から落っこちてくるとはな~」

クク、と思い出したように肩を震わせる煌。

そうか、ヒロインはドジっ子設定か。あの墜落はどう姉貴のせいだけどな。

「悪かつたな」

「ふせん 慄然^{ふせん}としつつ答えたなら、煌はいや、と首を振り、せりつと言った。

「昔からの定番だろ? 天使が空から降つてくるのは」

「…………」

まちやん、と思わずスープの中にスプーンを落つことしたおれに、「ヤニヤしながら「なんてな」と付け加える煌。

おれの反応で遊んでる感じだが……この全身にたつた鳥肌、どう責任とつてくれる！？

なんか、すでに思いつきりこの女ゲーのシナリオが始まつてゐる予感ビンビンだぞ、畜生！

翌朝。ひよこ型田覉ましの音で目覚める。

一夜明けたら何もかもが夢だった……なんて展開もほのかに期待していただけに、気の重い一日の始まりだった。おれはとりあえず11月まではこの世界で暮らさなければならないのか……。

ちなみに、今日はゴールデンウイーク明けの、初めての登校日のこと。というわけで、なるたけ自分の裸を見ないように意識しながら（もろ見るとまた鼻血吹くから）ヒロインの通う私立美楠学園の制服を身にまとつ。

藍色のセーラーカラーに、オフホワイトのジャケット。空色のリボン。胸元にエンブレム。

膝上丈の藍色のブリーツスカートにワンポイント入りの黒のハイソックス……というお嬢様っぽい制服の通り、美楠は全国でも有名ななかなかの名門校らしい。

ヒロインは憧れのこの制服が着たい一心で、賢い幼馴染に教えてもらひながら必死で受験勉強して、この春、見事入学を勝ち取つた……という設定らしい。姉貴情報。

「おはよう。お、制服、似合つじゃん」

洗顔や歯みがきを終えて階下に降りていくと、エンブレム付きのライトベージュのブレザーに深緑のネクタイ、藍と緑が基調のタータンチェックのボトムという男子の制服姿の煌が出迎えた。なんでもない口調で言つてのける。

「可愛い」

「朝から気が滅入るような」と言つた、頼むから

げんなりしつつ、食卓について、用意された朝食に手を伸ばした。

やっぱ、美味しい。

ただのスクランブルエッグと野菜スープなのに、卵は絶妙のふわ
とろだし、スープも香味豊でこぐがある。

サクサクのバタートースト。

甘いのに深みがあるホットカフェオレ。

思わず顔をほころばせてがつついていたら、ふと、煌の視線に気が
づいた。

「な、なんだよ？」

「いや……おまえって、すげー幸せそうに食べるよな。作る甲斐が
あるというか」

「そうかあ？ でもこれ、マジで美味しいもん。つと、あんまりのん
びりしてる時間はねーな。ご馳走様！」

姉貴はもう早々に小学校に行つたらしい。おれもあわてて靴を履
いて……そこで、立ち止まつた。

学校への道筋がわからないからだ。

昨晩、姉貴はこの世界でヒロインがすでに知つているはずの情報を
いろいろと教えてくれたが、通学路については「心配しなくて大
丈夫」の言葉だけで終わつた。

何が大丈夫なんだよ、オイ！ と焦つた瞬間。

ピンポーン。

インターフォンの音。

ドアを開けると これまた、芸能人でもそつそついないうな
超イケメンが。

煌が目に入った瞬間パッと華やぐ太陽なら、こっちのイメージは静謐な氷。

凛として、すっと背筋が伸びて、いかにもテキる男って感じ。理知的な光を宿す瞳、すっと通った鼻梁、なめらかな肌……好みはあるだろうが、美形度でいえば煌を超すかも。あまりにも整いすぎて、無機的な印象さえ覚えるくらいだ。

煌と同じ制服を着ているが、ネクタイは青。1年生の色。

「和希、準備はできたか……？」

低めの、ちょっとだけ鼻にかかったようなイケボでそう言つた男は、そこで、かすかに目を見張つた。

視線は、おれの後ろで同じく家を出ようと準備をしていた煌に注がれている。

「あれ、和希、おまえ、彼氏いたんだ？」

トン、とつま先を床に叩いて靴を履きながら尋ねた煌に、新登場のクール系男子が淡々と答えた。

「単なる幼馴染の隣人だ。蒼木悠斗。美楠学園1 A在籍。弥生さんには頼まれて、毎朝こいつを迎えてる」

「こいつ、のところで、おれを首でつながす悠斗。弥生つてのは、ヒロインの母親の名前。

「そつちは？」

「俺は、金城煌。高2。しばらくこの家で暮らすことになった。今日から美楠にも編入するから、よろしくな」

「IJの家で暮りや……？ なんでもまた」

悠斗が眉をひそめるや、煌の瞳が悪戯っぽい光を宿す。あ、嫌な予感。

瞬間、おれの肩をぐっと抱き寄せ、煌が言い放った。

「結婚する」ことになつたから

「……つて誰と誰が！ 絶対しねーよ、ありえねえ」

「いいや。おまえは絶対、俺に惚れる」

「アホかあつー！」

なにを根拠にか自信満々に断言する煌と、真っ赤になつて抗議するおれ。

一方、悠斗はそんなおれ達の騒ぎにも全く表情を動かすことなく、「とりあえず」といたつて冷静に言葉を継いだ。

「詳しい話は、登校がてら聞かせてもらおう。IJのままだと、遅刻になる」

6・三角関係？

昨日の捻挫はそれほど悪化せずすんだようで、歩くのにもつまむんどう支障はなかつた。

並んで登校しながら、親同士の決めた許嫁なのだと説明すると、悠斗はそうか、とうなずいた。

「ついて、反応そんだけ！？」

まさかそんなにあつさつ納得されるとは思わなかつたので、ついついツツツツ口んでしまつた。クールすぎ。

「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立する。当人の意思が伴わない婚約なんて、今の時代で拘束力はない」

「だ、だよな！」

冷静なコメントに胸をなでおろすと、煌がひょいと肩をすくめた。

「『弥生さんに頼まれた』ってのは、どういふことだ？」

煌の質問に、悠斗が小さくため息を漏らした。

「和希は極度の方向音痴の上、注意力散漫でそそつかしく、おまけに重症のお人好いでトラブルに巻き込まれやすい性質でな。入学式の日も学校に到着したのは毎過ぎ、翌日も同じようなことになつたため、朝だけでもいいからビーツしても付き添つてやつてほしこと泣きつかれたんだ」

そ、そんなダメな奴なのか、ヒロイン……（汗）

「ふーん。そりやあまた、面倒の見甲斐みがいがあるな」

楽しげに口笛を吹く煌。いや、感心すると「じゃなーし。

「どうせ同じ通学路で、クラスも同じだからな。」こいつが世話の焼けるのは昔からだと、諦めた

「……昔から、ね。でも、次からは俺が一緒にいくから、大丈夫だ

ぜ？」

ピシリ。

……な、なんだ、今の空気が凍るような気配は！？

ギョッとして一人を交互に見上げたが（こいつらムカつくくらい背が高いんだ）、なにやら不敵な笑みを浮かべる煌に対し、悠斗は相変わらず無表情のポーカーフェイス。

気のせいか？ 気のせいだ、と、思いたい……。

「もういいかない。少なくとも一年の間はついていてやつてくれと言われている。面倒ではあるが、約束は約束。勝手に反ほ故にするわけにもいかない」

「律儀なことで」

バス停に到着。なんとなく一刻も早くこの場を逃れたかったおれは、ちょいぶり目的のバスがきていたのをこれ幸いにと、早々に乗り込んだ。

「おはよー、『バカちゃん』！」

1-Aの教室に入った途端、同級生からそんな挨拶をされて、おれは思いつきりつんのめつた。

「あ、バカちゃん。元気だつた？」

「おはよう。ゴールデンウイークどつかいつた？ バカちゃん」

……そういうや、姉貴のやつ、最初にヒロインのあだ名にそんなのを入力してやがつたな。やつぱあの女、帰つたらシメる……！

周囲から次々と笑顔で罵倒され、心の中で泣きながら、席に着く。窓際の後ろから一番目、悠斗の隣といつそこに腰を下ろしたら、前の席の、セミロングのパーマヘアの活発そうな女子が振り返つた。

「おはよ、バカちゃん」

いや、それはもついいから（鬱）

「今朝も蒼木くんと登校か。ちょ一羨ましいんだけど。本当に付き合つてないの？」

「ただの幼馴染だよ」

付き合つとか勘弁してくれ……と内心舌打ちしつつ、昨夜、集合写真を見ながら姉貴に教えてもらつた名前を思い出す。

たしか、ヒロインの友人で、報道部の木鹿かんな。

ワインレッドのフレームのスタイリッシュな眼鏡が、よく似合つている。

「そついえばね、2年に、すつ”いカツ”といい編入生がきたつて話なんだけど」

「……ふーん」

「つて何しれつと素知らぬ顔してんのさ！　あんたが今朝、蒼木くんの他にもう一人、見慣れぬイケメンと歩いてた情報はすでに入つてきてるんだよ」

キラリ、とレンズの奥の目を光らせるかんな。
ちつ、情報通つて設定は伊達じやねえ。

「どういう関係？　なんでも彼、例の奨学制度で編入してきたらしないじゃない」

「奨学制度？」

「ホラ、この春からうちの学校に導入された、特に優秀な生徒だけ入学費も授業料もその他もう全額免除つていう太つ腹な奨学金制度。

ただ、そうとうのレベルじゃなきゃ該当できなくて、20年に1人でるかってくらいの難度だつたはずなのに、いきなり蒼木くんが第1号で入学して全国紙でも取り上げられたりしたでしょ？」

懇切丁寧に教えてくれる。便利なキャラだな。

「それにまた、2年の編入生も受かつたつてんで、学園の教師陣は大騒ぎつて話だよ。

「金城煌、だつけ。彼、何者なの！？　白状なさい！」

「おれもよく知らないんだ。ただ、親同士が知り合いだから、なんてか、その、仲良くするように言われてて……」

かんなは報道部。許嫁だ、なんていつたら、どんな記事書かれるかわかつたもんじゃねえ。

ただ、すぐバレうことだけは、あらかじめ口止めしてる方がいいかもな……そう考えて、おれは、慎重に切り出した。

「それで、これは絶対誰にも秘密にしてほしいんだけど、その……
実はあいつ、昨日から家に住んでんだよ」

「う……!?」

叫びが飛び出でになつた口を、あわてて自分の両手でふさぐか
んな。

目をパチパチさせて、驚天動地（きんてうどうち）て感じだつたけど、おもむろに
好奇心満々の顔つきに変わつていぐ。

「何それ何それ、どうこう」と…?」

「えと、うちの両親、昨日から海外行つちゃつたんだけど、その間
おれと妹だけじゃ危険だからつて、用心棒としてうちに暮らすよつ
に親父が勝手に向こうと約束したらしくてさ……」

「うつわー、とんでもないスクープゲット！ 記事かかなきや！

『うわさの転入生、同棲中！？』

「待て待て待て！ 言つただろ？ 内緒にしてくれつて」

焦つて制すると、かんなは渋々といった様子でうなずいた。
ホツ、悪い奴ではなさそつだ。

「それに、『同棲』とか誤解をまねく表現すんなよ……はあ、マジ
で最低」

「何が最低よ？ イケメンなんでしょう？ いいじやん！ 私と代わ
れ！」

かんなは羨ましそうな声を上げたけど、おれだってできるなら代
わつてほしいつて！

一限目。窓の外では、どつかのクラスが体育でサッカーをやっていた。

やたら足が速くて運動神経のいい奴がいる、と注目してみたら、煌だつた。すごいドリブルテクニックでいいと他の生徒たちを抜いて、鮮やかにゴールシユート。

スポーツまで万能とか、チートすぎるだろ……と呆れつつも、見事な身体能力についてつい目を奪われていたら、いきなり頭に何かが飛んできた。

「いてつー！」

「いーひ、羽鳥！ ビーを見とるー！」

中年の数学教師の怒声を浴びつつ、机に落ちた飛行物体を確認して、思わず目をむいた。

チヨークだ！

おれ、チヨークを投げつけられた！

滅茶苦茶ありがちだけど現実世界ではそうそうないベタな教師の必殺技、『チヨーク投げ』を実体験してしまった……！

感動に打ち震えるおれにはお構いなしで、教師はいかめしい顔で命じる。

「授業中によそ見とは、ずいぶん余裕じやないか。なら、この問題を解いてみる。私の授業など聞かなくても簡単だから、上の空なんだろう?」

イヤミな教師だな。ああクソ、分かったよ、解いてやればいいんだろ……と黒板をみて、固まつた。

難しそうるだろ！？

そーいや名門校つってたつけ……授業内容も高度なわけね。やべー。

なーんて焦つたのは、でも一瞬のこと。

だつて、隣の席は学年トップの成績を誇る秀才、蒼木悠斗。少女マンガ的展開じゃ、こつそり答えを教えてくれるに決まつて。ほれ、早くノートなり答えを書いた紙切れなりをプリーズ！

小さな声で教えてくれるのもアリだぜ！？

じりじりと右側の悠斗のアクションを待つが、クラスメートたちの視線がおれに集中する中、こいつは一人我関せずといった具合で、教科書のずいぶん先のページをめくつて自発的な予習を進めている。オイオイ、なにその突き放した反応！ ヒロインが困つてるとんだぞ？

「どうした、解けないのか？ もういい、座れ。そんなことだらうと思つたんだ。まったく、補欠入学のくせにいい気になるから……」

「先生」

いたたまれない気持ちで着席し、あからさまな侮辱に頬が紅潮するのを感じた瞬間、凜とした声が教室に響いた。

「その一番左の例題ですが。下から三行目の方程式に誤りがあります」

事実を事実としてだけ述べるような、静かな悠斗の指摘に、教師は田を白黒させて訂正にとりかかる。結果として、おれはそれ以上の糾弾きゅうたんを免れた形になつたわけだけど。

「助けてくれるなら、もうと早く助けてほしかつたぜ」

休み時間。

ちよつと頬みがましくなつたおれに、悠斗は「甘えんな」と切り捨てた。

「よそ見をしてるおまえが悪い」

「まあ、そりゃ、そりだけビ……」

ちやんと聞いてても、あんな問題は解けないぞ、たぶん。情けない気持ちで肩を落としたひ、少しだけ顔を曇らせて、悠斗が聞いてきた。

「授業についていけないのか?」

「ああ。やばい。全然わからんねえ」

わうこや、ヒロイン、必死で勉強して滑り込み合格つて話だつたしな。

もともと勉強は苦手だけど、せめてゲームの中でくつこは賢く生まれたかったぜ。トホホ。

「……放課後、部活開始までの30分くらいなら時間がとれる。もしくは週末だな。教えてやるから、あきらめんな」

そんな言葉にハツと顔を上ると、真摯な瞳とぶつかった。でも、田が合つや、ふことわつひを向こてしまつ悠斗。

そーいや、姉貴が言ひてたつた。エロまでの間、ヒロインはバンドだけでなく勉強やらスポーツやらフューリッシュショパンセンスやらいろんなステータスを上げなきや、お皿のキャラは落とせないつて。

キャラを落とすとかそんな気はもうやうなこたで、毎日の授業でこんな調子じや、正直厳しいわけだ。

「さんめ。助かる」

「おれが両手を合せて拝むと、悠斗はうなずいて、そっけなく言った。

「難しくても、ちゃんと授業なめことけよ、鴉鹿」

昼休み。

天気がいいから、とかんなに誘われて外でお弁当を食べた流れで、そのままふらりと一人学校探検に繰り出した。

あまり人気のない校舎裏にも、足を延ばす。

理科実験室、家庭科実習室、音楽室……特別教室が並ぶ一角に差し掛かった時、流れるような旋律が鼓膜をくすぐった。

纖細なピアノで奏でられていたのは、おれがとても好きなJ・popソング。

かつて90年代に流行つて、最近また人気の女性シンガーにカバーされたこの曲は、あたたかくて、でも切なくて、どこか懐かしくて、メロディを聞いただけで胸をぎゅっと握られたみたいになる。雨上がりの澄んだ空気、木漏れ日の差しこむ森の小道……そんな光景を思い浮かべながら、いつのまにか、おれはその歌を口ずさんでいた。

そして、驚く。

すげ、ヒロイン。超いい声。

淀みなく響く優しい音色のピアノ伴奏も、心地よい。

ついつい、一番をまるまる歌いきつてしまつた。
つて、口ずさむだけのはずが、これじゃ熱唱じやん。
学校で何やってんだよ。恥ずかしい！

「はあ……」

ほのかに火照った頬を抑え、ため息をついた時。

パチパチパチ……

拍手をしながら、音楽室の窓のところに、すらりと均整のとれた影が現れた。

その第一印象は『王子様』。

ゆつくりと歩み寄り、窓枠に手を添える、ただそれだけの動作も洗練されて気品がある。

せりりと揺れるライトブラウンの髪。

色白の肌、甘いマスクに柔軟な微笑みを浮かべた彼は、まるで少女たちが夢見るおどき話の王子様像をそのまま具現化したかのようだつた。

そして王子は、優雅な仕草で長めの前髪をかきあげると、いつのたまつた。

「見つけた 僕のナイチングール」

頭のほうも王子だ――――

「ナイチングール……って、看護婦？ なんで？」

頬をひきつらせながらも疑問を口にしたおれに、王子（もうこれがあだ名こじょつ）はクス、と息を漏らす。

「そつちじやなくてね。西洋のウグイス、とも言われる鳴き声の美しい鳥の名前。 びっくりしたよ。ピアノで遊んでいたりきなり 降りてきたんだから

「 天使が舞い

キラキラキラ……

台詞とともに、王子の周囲に謎の光が飛び交った。
なんだ!? 田の錯覚か!?

「僕は、2-Eの北王子梓茶。^{きたおうじ あずか}別にあやしいものではないよ 羽^は
鳥和希さん」

「ってなんでおれの名前知つてんだよー? めぢやめぢやあやしい
だろ!?」

「実は以前、君の幼馴染の蒼木悠斗くんをスカウトしようとしたこ
とがあつてね。その時に、彼の親しい人物として自然と情報が入つ
てきたんだ」

「スカウト……?」

首をかしげるおれに、やつ、とうなずく王子。

「そして、今回のターゲットは君つてわけ。羽鳥さん、バンドに興
味はない?」

きたな。

唐突な質問だったが、思い当たる節はあった。姉貴が言つてたよ
な。

『ときメロ』はイケメンたちとバンドを組んで一つずつ障害を乗
り越えて、1-1月に開かれる『軽音甲子園』の優勝を目指すゲーム
だつて。

「『ときメロ』と見境なく勧誘しているように思われるかも知れないけ
ど、けつしてそんなことはない。蒼木くんの時も彼のベース歴7年

とこう事実を踏まえてのことだし、今は……才能を直に体感したからだ。ぜひ君に、ボーカルとして歌つて欲しい」

なるほど……」つい流れてスタートするわけか。

「だ が 断 る（きつぱり）」

「王立ちしてやう言いたい気持ちをグツとこらえたのは、ゲームオーバーの警報ランプが脳内で点滅していたから。けどこのまま、イケメンどもとキャツキヤウフフの日々に突入するのも受け入れがたかった。

言葉を探していると、掃除時間の開始を告げる予鈴。

「すぐには決められないかな。でも、考えておいてね」

甘く爽やかな声音でそう言い残し、王子はその場を軽やかに立ち去つた。

9・場外ホームランといえば

その日最後の科目は体育で、ソフトボールだった。

おれはたまりにたまつた鬱憤^{うつぶん}を晴らすように思いつきりバットを振り切り、球はクリティカルヒットして場外ホームラン。

このパターンは、と冷や汗をかいたのもつかの間、案の定、渋い顔をした教師に呼び出しを食らう。

おれの飛ばした球は、理事長室の高価な花瓶にもクリティカルヒットしたのだった。

あーあ、やつぱりな。

「どうしてくれるんだ！ 今は理事長はお留守だが、この花瓶は20万円の代物だという話だぞ」

「……意外と安かつた」

「なに！？」

「いえいえなんでも……」

ウン千万円、とか下手したら億単位かも、なんて思つてたから、ついぽろっと漏らしてしまつたが、20万円だつて十分大金だ。てか、妙にリアルで嫌だ。

でもさ、そんな貴重品を学校に置いておく方が悪いと思つ……。

運の悪いことに、理事長が部屋を留守にしている間の責任者は、あのイヤミな数学教師であつたらしい。ねちねちと一対一で説教を受け続けた。

窓の外でカラスの鳴き声が聞こえだす頃。

とりあえずまた後日^{じご}両親と相談をさせてもらひ、といつ方向でよづやくその場はおさまり、教室に戻るともつとつとホームルームも終わっていて、中にいたのは悠斗一人。

夕日差すオレンジ色の教室で、静かに本に没頭する美形の姿は、一枚絵のように様になつてゐる。

おれの足音が近づくとパタリと表紙を閉じ、真顔で見つめてきた。

表情に乏しい奴（汗）

「待つててくれたのか？」

「いや……勉強を教えるという約束をしただろ？」

悠人はそう否定したけど、部活開始時間も過ぎてるはずなのにまだ残つてゐることには、心配してくれてんだうつな、たぶん。

「花瓶、20万だつて。はあ～どうやつて正面じよつ」

自分の机に突つ伏して大きくため息をついたら、

「20万円ほしいの？」

教室の入り口から、落ち着いた甘い美声。

顔を上げると、例の王子が戸口に手をかけて微笑みを浮かべていた。いつのまに。そして情報早すぎだろ、王子……。

「ほしい」

正直に答えると、さうに笑みを深くして歩み寄つてくる王子。おれの席の前に長い脚を組んで腰かけると、手に持つていったプリントをひらりとかざして見せた。

軽音甲子園。

優勝賞金……20万円。

「君が歌つてくれれば、いける気がするんだ」

さりげなく、けれど熱を帯びた声で囁く王子に、おれは観念して、
「クリとつなづく。

「やる」

もうしないとストーリーが始まらない。もとと、どうしたってやらされる羽田になんだったら、腹をくくるしかなによな。

「あとはベースをえいれば、メンバーがわらうんだけ……」
「…………」

おれと王子、一人からじっと見つめられ、頬をヒク、と引きつらせる悠斗。

「……なぜ、俺を見る」

「だつておまえ、ベース歴7年だろー?」

「お父さんが元ベーシストで、君自身、相当のスキルがあると聞いているよ」

「俺は剣道部が……」

「別に毎日全員で合わせる必要はないよ?」

「ああ、休みの日だけいいから! 勉強はできるだけ自分でがんばるし、頼む!」

摔み倒して、おそるおそる仰ぎ見ると、腕組みして渋面を作つていた悠斗が、重い嘆息をもらした。
ふしょふしょ
不承不承、といった様子で。

「……協力は、できる範囲内でだぞ」

そのままお開きとこいつになつて、帰宅。リビングに行くと、姉貴の世界では妹の芽生の姿だけがテレビゲームをしていた。

ゲーム世界でもゲームつてシユールすぎる。たずがに、『ときメロ』ではないようだけど。

「どうだつた？ 学園生活一田田」

「悠斗、かんな、梓茶が登場。なつゆきで、バンドやるのになつた」

「ふんふん、順調じやない。いいなあ、あたしも早く悠斗くんと梓茶くんに会いたい」

「やっぱあの一人も攻略対象キャラなんだよな？」

「そうよ。見たらわかるでしょ。でも他にも、攻略キャラには共通点があるのよね~」

見たらつて、まあ…… そつなんだけども（ため息）しかし、あいつらの共通点ってなんだ？

「『『 ただしイケメンに限る』』以外に？」

「『』

姉貴は首を縦に振つたが、おれはまだピンとしない。

ま、いつか。

疲れた」とカバンを放り出してソファに寝そべつたら、「ハリセンで足をはたかれた。

「痛つてえ……つてどこから出した、そのハリセンー?」

「んなことはどうでもよろしく。パンツ見えてる! 女の子でしょ、はしたない!」

「女の子じゃねえ!」

「今は女! そんな姿、彼らに見られたら幻滅されちゃうじゃない。それに、あんたはそんなじいじうしてる余裕はないのよ。今日から半年で、全員が骨抜きになるようなハイスペック・ヒロインにならなきゃいけないんだから!」

「はあ! ? 「冗談じゃ……」

思いつきりしかめられたおれの顔の前に、不意に数枚の写真がでんと提示された。

目が点になつた後、徐々に、かあ～っと頭に血が上つていぐのを感じる。

「おま、そんなもの、いつのまに……!」

「あんた、なるべく見ないようにつつて目をつぶつてるんだもの。簡単

簡単

ホーッホッホッと高笑いしながら姉貴がかざす写真には、おれ……というか、ヒロインの着替えや入浴シーンが赤裸々に写し撮られていた(ー)

「これをばら撒かれたくなかったら、大人しく従いなさい…」

「～～ふざけんな！返せ！」

奪い返そうとどびかかるが、姉貴はひょいひょいと身軽にかわし、全くつかまらない。

「ふふふ、純真な小学生妹キャラは男にも女にも愛される無敵ポジション。あんた如きにやられるものですか！」

「な～にが純真だ、邪念の塊のくせして！」

「邪念の力をなめるなよ……」

伸ばした手をグッと握られたと思つたら、おれの体は反転して床に沈んでいた。

マジでこの妹、半端ねえ（汗）

「……で、なにをやれと？」

絶対スキ見て取り返しちやる……と心の中で誓いながら、とりあえず降伏の姿勢を示すと、鬼畜姉は「そうね……」と人差し指を唇に当てた。

「まずは、『学力』アップのため今日の宿題は当然として、予習復習。その後、腹筋、腕立て、背筋各50回。これは『運動』ステータスを上げると同時にボイストレーニングの一環として最重要の『バンド』ポイントも上がるから効果抜群よ。食事中は『マナー』に気を配つて、お風呂上りは『美容』目的で『ハイスマッサージ』とストレッチ。ファッショング雑誌に目を通して『センス』をみがくのも忘れずに。大丈夫、たまには『社交』のためテレビを見る時間も作つておくし。あとは……明日から早起きして毎日マラソン30キロく

らいやればたぶん大丈夫」

「…………！」

絶句するおれに、目の前の小学生は、一見無邪氣そのものの笑顔でいった。

「元の世界に帰るために、がんばるつね？」

「あ～もう、全然分かんねえんだけど！」

「最初はそんなもんよ。でもやつたぶんだけ間違いなくステータスが上がつてくのがゲーム世界のいいところ」

「ほんとにできるようになるのか、こんなんが！？」

ぶちぶち言いつつ、半泣きで問題を解いていたら、

「宿題？ 教えてやるつか？」

いつのまにか帰つてきていたらしい煌が、ネクタイの首元を緩めながらテーブルの向かいに腰かけた。

「どれ？」

「問3……帰り、遅いな。なんか部活でも入ったのか？」

「うんにや、ちょっと寄り道してきただけ。和希は帰宅部？」

「だつたけど、明日から軽音部に入ることになった」

「へえ？」

20万円の花瓶と北王子梓茶のことを話すと、煌は苦笑とともに大きなため息をもらした。

「そりや災難だつたな……で、バンドのあと一人のメンバーとは明日の昼休みに初顔合わせ、か。いい奴だといいな」

思いつきり他人事のようなこの台詞に、ちょっと意表を突かれる。こいつもてつきりバンドの一員になるもんだと思ってたけど、違うのか？

「ん？ どうした、不思議そうな顔して」

「いや、おまえはなにか楽器弾けたりしないの？」

「楽器？ 全つ然」

きょとんとした顔で全否定される。むむ？

……つと、それはおいといて、また別に一つ、言つとかなきやいけないことがあつたのを思い出した。

「そつそつ、いいなすけ許嫁つてことや、一緒に住んでるつてことは皆には秘密だからな」

唐突なおれの言葉に、煌は首をかしげる。

「なんで？」

「当たり前だろ！ 許嫁は親が勝手に決めただけでおれは認めてないし、家が一緒なんて妙な邪推をする輩が出るに決まってる」

からかわれたりすると「うなど、想像するだに憂鬱だ。

「まさかもう誰かに話した！？」

「いや……別に誰にも」

「じゃあ今後も絶対口外禁止！ 悠斗にも口止めしつくけど、万が

「バラしたりしたら出て行つてもいいからなー。」

「……ま、おまえがそういうなら黙つてるナジむ」

ぱりぱりと頬をかいていた煌だが、おれが「朝の登校時間もずらす」と続けた途端、形の良い眉がピク、と動いた。

「なんでだよ?」

とがめるような口調に、戸惑つ。

「だ、だつて、毎日一緒に登校してたら、家が一緒つてバレる可能性高いじゃん」

「あいつは毎日一緒に行つてんだり?」

「あいつって……悠斗? 悠斗は幼馴染でお隣さんつても皆知つてるし……」

「俺だつて近所に住んでるつてことにすりやいいだろ? 前からずつとそうだつたから、皆が知つてるから、つてだけで許されるなんて不公平だ」

不公平って、なんだよそれ(汗)

「ま、俺が邪魔で、一人つきりで通いたいってんなら仕方ないけど

頬杖ほおづえをついたまま、じつちを見る田が、急に真剣みを帯びた気がした。

「あいつのこと、好きなわけ?」

「な、に、言つてんだよ。それはないー 断固としてありえないー!」

ギョッとして全力で否定するおれを、じつと観察するように見つ

めてくる煌。

「うひ～頼むから、そんな田で見つめないでくれ、心臓に悪い！！」

「別に悠斗が特別とかじゃないからー。わかったよ、もう勝手にしてくれ」

緊張感に堪えられなくなつてつこううつと、煌の口元に大きな弧が刻まれた。

「ああ、好きにさせてもう！」

11・イケメンバンド結成

料理担当は煌だが、皿洗いはおれと姉貴の受け持ち。

それにして、この日の夕食もうまかった。

ちょっと懐かしい風味のケチャップライスを、黄金色に輝くふわふわ卵で包んだオムライスのドミグラスソース添え。魚介のうまいが溶け込んだクラムチャウダー。

食事時ばかりは、この世界も悪くないと思えるんだよな。

ぶくぶくと泡立つた洗い場でガチャガチャと作業しつつ、自然と唇から零れだした歌は、昼間に音楽室から流れていたメロディー。ヒロインの声、歌いだすとほんと澄んで、優しくて、自分でも（？）聞き惚れる。

今はここにはいない、大切な人を想う歌。

辛いことや迷うことが色々あるけれど、眩しい君とのあの日々が僕の希望。

どこか懐かしい曲調に、前向きな歌詞。だけじ、この歌がどうにも切ないのは、その強さと優しさが痛みを秘めたものだから。

绝望からの静かな再生。

限りない憧憬^{しようけい}と愛おしさ。

どこかできつとまた、逢えるから……。

楽曲の世界観にどつぶり浸つていい気分で歌つていたけれど、ふと、扉のところに立ちすくむ影に気づいて、目を見張った。

ニヤニヤしたり、唇をとがらせたり……いつも生き生きして表情豊かな煌が、その時は全身の力が抜け落ちたかのように、呆然と突

つ立っていたから。

その瞳は、おれの姿を映しながらも、同時にどこか違つ世界を見つめているよつて。

そして、まるで無防備なその無表情の頬に伝へ、一筋の雲。^{しづく}

「…………煌？」

おれはビックリして、ちょっとためらつた後、そつと呼びかける。途端に、ハツと我に返り、手の甲で涙をぬぐつ煌。

「悪い。…………シャワー、使うから」

皿を伏せてそれだけ言つと、リビングダイニングから続いた浴室へと姿を消す。着替えを持参していたから、最初からそのつもりだつたんだろうけど。

「…………おい、あいつ、なんで泣いてたんだ？」

歌に感動して、とか、そんなレベルの反応じゃあなかつた。

混乱しながらのおれの質問に、隣で一緒に皿を洗つっていた姉貴が「無理」と即答した。

「セーラー類の質問にはお答えできません。妹が助言できるのはキャラのちょつとした特徴や攻略ヒントまでつて制約があるの。当然、まだ登場していないキャラについても何も教えられないわ」

「なんだよ、ケチ！」

しかめつ面で「イー」して見せてから、皿洗い作業に戻る。黙々と泡を流しながら、それからもしばらく、どうしてもせつきのあいつの顔が脳裏に焼き付いて離れない。

「あ～、もう、なんなんだよー。」

しつゝまとわりついてくる残像を振り切るよつて叫んだ瞬間、持つていた皿をパキッと真つ二つに割つてしまい、姉貴に何しどんじやどつかれた。

シャワーから上がつてくるともう煙はいつもの煙で、なんとなく蒸し返すこともできなくて、その日はそのまま暮れたのだった。

翌日の昼休み、王子から悠斗と一人で呼び出しを受けた。校舎の離れに建つてゐる部室棟の一一番奥が、軽音部らしい。近づくにつれて、軽快なドラムの音がかすかに耳に滑り込んできた。

まだ新しそうなドアを開いた瞬間 溢れ出だした音の洪水に、全身が飲み込まれる。

息もつかさぬ怒濤の打ち込み。

奔放に飛び回つたかと思えば心地よいリズムに引き込まれ、また弾ける。

力強い音にからだのあちこちが揺すぶられて、まるで目の前でいくつもの大きな花火が炸裂してゐみたいだった。

なんだこれなんだこれ。

からだが熱い。めちゃくちゃ、ワクワクする。

心臓がバクバクして、頬が火照る。

ジャー、ダダダンッと演奏を終えて、顔を上げたのは 金城

ド迫力の演奏と、田にした光景、両方の衝撃からぽかんと口を開けたおれの姿をとらえた途端、してやつたりとばかりに、満面の笑顔。

悪戯を成功させた「子どもみたいな煌のその表情を眺めてるうちに、だんだんと状況が飲み込めて、さつきとはまったく違う理由で、かーっと体が発熱する。

あんにやひ……ハメやがつたな!
なーにが「楽器? 全つ然」だ!

きつとおれがバンドやることになつた顛末も全部知つてた上で、
飄々と初めて聞いた風を装つてたに違いない。

こんな風に、おれの度肝を抜きたいがために。

「紹介するよ。金城煌。昨日から2年に編入してきたんだけど、僕は以前からの知り合いでね……あれ、君たちも、実はすでに面識があつたりするのかな?」

「ああ、まあ、ちょっとだけ」

首をかしげる王予に、拳をフルフルさせながら頷いたところ、隣の影が動いた。

仏頂面の、悠斗。

朝の登校時間、ベースケースを背負つ悠斗にも煌は素知らぬ顔で「バンドやるんだってな。がんばれよ」なんて声かけてたからな。一杯くわされた気持ちは、おれと同じかもしれない。

悠斗は持参した青のベースをアンプにつなぐと、煌の方を仰ぐ。

「テンポ140で叩いてくれ」

ほそりと告げられた言葉に、煌は小さく口笛を鳴らして承諾を示

すと、アップテンポのリズムをシンプルに刻みだす。

ベースの低音が唸るように空気を切り裂いた、と思つた瞬間。

信じられないようなテクニックを駆使した悠斗のスラップ演奏が

始まつた。

まるで早送りを見ているような、正確無比で無駄のない手の動き。こんなに早いのに、沸き起るグループ感に、鳥肌立つ。

一つ一つの音が、ビンビン来る。

やべえ……なんだこの音。

今までんまりベース音だけで聞いたことなくて、なんとなく地味な印象だったけど、深いところからドクドク煽られる感覚というか。

すげーカッコいい。

こいつも、めちゃくちゃ巧い。

演奏が終わつてからも、まだしばらく体の中に湧き上がつたうねりの余韻が残つていた。

思わず深々と息を吐き出すおれ。いつの間にか、呼吸も忘れて聞き入つていたらしい。

「やるじょん」

煌の素直な賞賛に、冷たい視線で応える悠斗。

「いけしゃーしゃーと」

それだけ咳いて、顔をそむけた。あ、やつぱ、^{かつ}担がされたのは悔しかつたんだな。

「煌の演奏を聴いた直後にこの反応……見た目はクールだけど、か

なりの対抗意識を燃やしていくようだね、蒼木くん

笑みを含んだ声で耳打ちされてこちらを見れば、王子がなんとも楽しげに瞳を煌めかせていた。

「まさか即興でこのレベルなんて、うわさ以上の実力だ。ずっと一緒にやりたいと思つてた煌が転校してきたその日にして、こうしてバンドのメンバー全員が揃うなんて、運命的だと思わないかい？」

「運命、とか、形容が大きすぎる王子。でも、気持ちはちょっとわかつた。

立て続けにすごい演奏を目の当たりにして。実はおれも、こいつらと一緒にやるのもけつこう楽しいかも……なんて、思い始めていたから。

しかしそんなほのかなやる気は、ワインクとともに放たれた王子の一言で碎かれた。

「これからよろしくね……和希ちゃん」

「か、和希ちゃん……つて！ キモいからやめや」

「つれないなあ。僕らのお姫様は」

クス、と笑みを漏らして人差し指と親指で顎をさわるような仕草をする王子。そんな謎の動作も、こいつがやるとなぜか優雅に見える。

……果たしてこのゲームをクリアするまでに ore の精神がもつのか、それが問題だ。

11・イケメンバンド結成（後書き）

和希が歌っていた曲のイメージソングはMY LITTLE LOVERの

『Hello Again～昔からある場所～』。

去年はJUJUがカバーして再スポット当たつてましたが、私はマイラバ派かな。

初聴きした時は煌じゃないけどいいつるしました。

とにかく、ついに拙作初のお気に入り登録100件突破
「なう」様では全然底辺ですが、嬉しいものです。
いつも読んでくださっている皆さまに感謝
これからもマイペースにがんばりまーす。

12・こんなネタで大丈夫か？

「あ……んつ、だ、だめ、これ以上は……」
「クスッ。真っ赤な顔して、可愛いね。でも、まさかこれだけでもう、こんなにビチョビチョになつちやうなんて……」

からかうような王子に、おれは紅潮していた頬をさらにカツと火照らせて、押さえつけてくる腕の力が、口惜しい。

「違つ、こんなの、おれのカラダじゃ……！」
「恥ずかしがらなくていいんだよ。……最初はちょっとキツイだらうけど、我慢してね」
「やつやあつ痛つ！……痛い痛い痛い痛い！」
「そのうち、これが気持ちよくなつてくるんだよ」
「やだーつ。離せつ。このじう野郎」

涙目で訴えると、やれやれ、と吐息をつきながら王子は身を離した。

「せつかくストレッヂに付き合つてあげてるのに、その言こと草はあんまりなんじやないかい？」

そんなふうにぼやきながら、部屋の扉まで歩み寄ると、すつとそれを手前に開ける。

同時に、ツインテールの小学生が、悲鳴を上げながら倒れこんできた。

姉貴！？ もしや扉にかじついてたのか……？

「大丈夫かい？『メンね、お姫さんだとは思つたんだけど、お姫か寄りかかっていたとは思わなくて……』」

(？？益？) こんな面して起き上がりつとした姉貴だったが、ちょっと焦つたような王子に手を差し伸べられると、途端にほこりと顔面がとろけ落ちる。

「ありがとうございます……」

立ち上がってからもこの女、瞳孔ハート型にしてもじもじしてゐだけで埒^{らち}が明かないので、オイツと引っ張り寄せた。

「じょじょと小声で問う。

「何しにきたんだよ！？ 学校だぞ」

「放課後だし、いいでしょ。あんただけ毎日毎日イケメンパラダイスしてんなんですかー！ と思つて出向いてみたんだけど……びびつたわ」

そこで、何かを思い返したよつて、深々とため息を吐く姉貴。

「いつのまに1-8禁ゲームになつたのかと思つた」
「なんのこゝぢや」

わけがわからず首を傾げたら、ひたいの汗が目に入つてきて染みた。

クソツ、ボイトレのためにちょっとストレッチしただけで全身汗だくつて、どんだけ運動オンチなんだ、このヒロイン。体も異常に硬いし。

姉貴に言わせると、最初は何をやってもダメダメがテフオーリしげが……。

「妹さん？」

王子の言葉に、姉貴は「はい！」と素直な小学生・芽生モードで元気に応えた。

「最近、お姉ちゃんいつも帰りが遅くて、何してるのか気になっちゃって……勝手に学校に入り込んだりして、『ごめんなさい』

しゃん、としたよつて向く。この女、演技派だ……。

「大丈夫だ、問題ない」

そしておまえはイーノックか王子。

「初めまして。僕は北王子梓茶。君のお名前はなんていの？」

田線を合わせぬように面とで、優しく尋ねる王子。

「羽鳥芽生。10歳です」

「芽生ちゃんつていうのか。可愛いね……お姉さん」と、よく似てるさりと零れた殺し文句で、口に含んでいたボカリを思わずぶつと噴き出した。

王子のほうは殺し文句だと全く意識してなさそうなどこがまた恐ろしいわけだが。

「あの、梓茶さんは、お姉ちゃんの彼氏なんですか？」

「ひりバカ姉貴！ おまえなんとつ嫌がらせを……！」

天真爛漫な小学生を装つた腹黒女の質問に、王子は少しだけ目を丸くしてから、穏やかな笑みとともに答える。

「違うよ。そうだったら、素敵なんだろ?」
「おーまーえーはー! 誰にでもそういう歯の浮くような台詞いつのやめひー!」

耐え切れずについつい掴みかかつたおれに、王子は即感つように瞬きする。

「君みたいな子と付き合えたら、幸せだうなつて気持ちは嘘じゃないんだけど……気に障つたのなら、謝るよ」

心底すまなせやうなその様子に、脱力した。
じゅやうじゅの王子様、悪気とか女をタラじてやれりとかそういうことか他意は全くなく、じく自然にこんな恥ずかしい言葉が口に出るひしい。

根っからのフュニーストッパーか、天然の口説き魔つづーか。

「でもね。まだ恋愛感情かはわからないけど、君に興味があるのは、本当なんだ」

ふわりと微笑みながらそんなことを言われ、おれはますますゲッソリしたのだった。

12・こんなネタで大丈夫か？（後書き）

いつも以上にダメすぎるネタですが、本当に大丈夫でしょうか。ドキドキ。

そしてこんな話をよりによつて誕生日にアップする私＼（^○^）／あ、プレゼントは評価ポイントで結構です。一番いいのを頼む！w（嘘です、ただのネタなので許してください。）

それにもしてもエルシャダイ、発売日は割と最近にもかかわらず、すでにもう懐かしい感じがしますw

北王子梓茶。

理事長の息子で、容姿端麗、温厚博識。

恵まれた立場を鼻にかけることなく、氣どつた言動も不思議と嫌味に感じさせない、この美楠学園でもトップレベルの知名度と女子人気を誇る「学園の王子様」。

まー、おれとしては「学園の奇術師」と改名してもいいんじゃねーかと思つ。

どんな空間でも謎のキラキラを自家発電するし、朝の下駄箱を空けたらどーやって入つてたソレ！？ つてなくらいの大量のラブレターの山を取り出してみせるし。

そして基本、鉄壁笑顔の^{てっぺき}ポーカーフェイス。根は悪い奴じゃなさうなんだけど、なんとなく底知れない。

約1週間前に軽音部に入部したおれだつたが、放課後の活動はこいつと二人で過ごすことが多かつた。

というのも、最初の顔合わせ以来、悠斗はまだ一度も部室に来ていないし、煌もしばらくバイトが忙しいとかでほとんどないのだ。まだ個人練習も満足にできていない状態だから、無理に合わせなくともいいんじゃないかということで、初セッションは来週の月曜日ということになつてている。

それまでは、配られた楽譜を各自好きな時間や場所で練習する決まりになつていた。

「でも個人練習つて、ベースはともかくドラムは家じゃ無理だろ？ やる気あるのか、あいつ、

「ついには当然、ドラマセットなど置いてないのだ。

「空き缶や箱、雑誌を並べて、それをステイックで叩いてイメージトレーニングしてゐつて言つていたよ。本当は彼も本物を叩きたくて仕方ないんだらうけど、ね」

一緒に暮らしてゐるおれより煌のことに詳しこう。そういえば、前から知り合いだつて話してたつけ。

「いつからの知り合いなんだ？」

「小学校が同じだつたんだ。でも、2年生の時、彼が転校してしまつて」

「転校してからも、ずっと続いてたのか？」すういじやん

「ううん、音信不通だつたよ」

ん？ と眉をひそめるおれに、王子は笑みを濃くして、説明を続ける。

「去年の秋、ライブハウスの客席でたまたま隣に居合わせたんだ。8年ぶりだつたんだけど、彼、すごく印象的だつたから、面影も残つていたしもしかして……と思つてね。思い切つて声を掛けてみたら、ビンゴ。幸い、向こうも僕の事を覚えてくれていたみたいで、会話も弾んでね。それ以来、時々遊ぶようになつていたんだ」

「まあ、なるほどね。

「煌の」と、気になる。

さういふと零れた質問に、一瞬固まつてから、首をブンブン横に振るおれ。

「彼もよく女の子に声をかけられるけど、全然興味ないみたいでね。本当にそつけないんだ。ずっと好きな子がいる、ってのは聞いていたんだけど、君と一緒にいてすごく楽しそうな煌を見て、もしかしてその『ずっと好きな子』って君なんじゃないかと思つたんだけど……」

「いや、あいつとはつい一週間前に会つたばつかだし」

「そつなんだ？　じゃあ、僕の思に過ぐしかな」

そこでまた、やけに嬉しそうににっこりにっこり類をほほんばせる王子。

勘弁してくれよ……。

視線を泳がせると、部室の隅でパイプ椅子に腰かけて、空気に徹している姉貴と田が合つた。

「おい芽生、せつかく来たんだからもうとにかくたりだ？」
「いえいえ、おかまいなく。私はここ見てるだけで十分です」

「うつとつと頬を染めて、『満悦な姉貴。

いや、おれとしてはあなたの存在を混ぜることで、怪しい雰囲気になるのを少しでも防止したいのだが。

「可愛いお客様もいることだし、一人だけでも会わせてみようか？」

「そーだな」

同意すると、王子のすらりと長い指が、流れるようにキーボードの鍵盤を滑り始めた。

明るく前向きな、無条件で飛び跳ねたくなるようなポップス。
ちょっと厭世的でシニカルな、ロックティリスト。

永遠の愛を誓つ、ロマンティックなバラード。

王子が作詞作曲したといつゝ曲を、立て続けに歌い上げる。
どれもメロディアスで歌詞もそれなりにこなれていて、素人レベルを超えていふと思つ。

演奏が終わり、芽生の拍手が部屋に響いた。

「す」「す」「い、みんな素敵な曲。でも……なんでだらつ、全然違つ曲なのに、お姉ちゃんの歌、全部同じに聞こえる」

うぐつ。

いわれてみれば、その通り。声質は最高にいいけど、表現力はまだまだよな。

「音程も、まだちょっと不安定?」

メロディーが早いとまかしてる部分もあるな。

「声もけつこづれ、小れこよづな」

確かにこの声量では、ライブハウスじゃ響かないかも……。

「まだ始めたばかりだから、じつにじつものだよ。芽生ちゃんのお姉さん、毎日すうじがんばつてねから、あひどいけど上手になるよ」

容赦ない指摘に凹みまくつたおれに、王子のフォローがじんわり

と沁みる。

「王子へ。おまえ、変だけどいい奴だよな～～」

「あはは、変つて！ それじゃあ褒められていくんだか貶けなされてい
るんだかわからないよ」

微妙なおれの言葉さえも、爽やかに流す王子。

「ところで和希ちゃんは、この3曲の中ではどれが好き？」

確かに、一番完成度の高い曲で『軽音王子園』都大会に臨むのだ。
その参考に……ついてこだわつ。

「おれは、一曲田のポップなやつかな。歌つて、単純に樂しくて
ハッピーな気分になれる」

「本当？ 僕もその曲が一番氣に入ってるんだ」

パツと王子の顔が輝く。その背後で、姉貴が親指をグッと立てて
るのが、ちょっと気になつた。
なんだあ？

13・2人練習　with王予（後書き）

誕生日ポイントをくださった方、ありがとうございました。
もちろん、以前から入れてくださっていた方々にも、とっても感謝
しております^v

拍手もそうですが、やはり、目に見える反応をいただけたと、
更新意欲もてきめんにアップしますので
無論、閲覧してもらえるだけありがたい、という気持ちも真実。
今後も妄想ばく進していきますので、よろしくお付き合いで下さい。

その週の金曜は、球技大会だった。

「金城先輩のバスケットか？ あの距離からのダンク！ ドリブル早いしフェイクもすごいし、信じられない運動神経と反射神経！ ちよーうカッコいいんだけど！」

「蒼木くんもサッカー、かなり上手いよね。どんなときも平常心で、360度に目があるんじゃないかなってくらい絶妙のバスの連発。うちのクラスのメンバー貧弱かと思つてたけど、彼のおかげで優勝しちやつたりして」

「なんと言つても王子先輩のテニスでしょ！ あんなに激しく動いてるのに、どんなプレイも優雅にみえるし、真剣なお顔つきでもやつぱりどこか余裕があつて……飛び散る汗も眩しくて、ミントの香りが漂つてきそうだわ」

イケメン君たちがそれぞれに「活躍なさつてるらしき」とが、周囲の女子たちのキャピキャピした会話から聞こえてくる。しかしミントの香りの汗つて、体組織おかしいだろソレ。

「バカちゃん、次のサッカー、でるんだよね？」

「ああ、おれ、サッカーはわりと得意だし。男女でクラスW優勝狙つてやる」

がぜん燃えるおれに、かんなが「気を付けて」と声をひそめた。

「相手のクラスの女子、王子先輩の熱狂的ファンが何人かいるから。通称『王子様親衛隊』。バカちゃんが王子先輩とバンドを始めたって聞いて、嫉妬に狂つてるらしいから……なんか仕掛けてくるかも」

親衛隊キター。

そして、かんなの忠告は当たり、おれは試合中、審判の隙に乘じては髪を引っ張られたり足を踏まれたり引っかかれたり、相手チームから何度も執拗なじがらせ行為を受ける。

「…………痛うつ…………」

派手に転倒し、すりむいたひざ小僧を押さえるおれを、縦ロールのいかにも意地悪そうな目つきをした女子が薄笑いで見下ろした。

「あ～ら、ずいぶんと鈍くね～」と。何もないところで「転ぶなんて、ダッサ～い」

「おまえが足をひっかけたんだろ！～？」

カツとして喰いかかったところ、周囲の女子たちが声高にさわぎ始める。

「言いがかりは止していただける？」

「そうよそうよ、かおる薰子さんは何もしてなかつたわよ」

「薰子さんがあ美しいからって、ひがまないでちよ～だい」

うーん、じつこつ役つて可哀想だよな……。誰からも愛されない完全なザコキャラ。

近寄ってきた審判の指示で、おれは試合をぬけて保健室にいくことになった。

「バカちん、大丈夫？」「ゴメン、私、もうバスケの試合行かなきゃ

「いけなくて」

「ああ、ほんくらい、一人で平氣だつて。がんばれよ」

申し訳なさそうに体育館に走つていいくかんなを見送つて、ふと隣の「パートに田をやつたら、悠斗がじつとじつと見ていた。

「バカ！ 試合中だろー。集中しろー」

大声でしかつてやると、うなずきを返して、ボールへと駆け出す。あいつらしくないやけに好戦的なプレイで強引に球を奪つて、そのままキラーシュートを放つた。

「ナイシューー！」

やつた！ 決勝点！

ゲームの中とはい、こいつ勝負事ではつい熱くなつてしまつおれ。単純だつてよく姉貴にはバカにされるけど、性格だから仕方ない。

「いいぞ悠斗ー！」

ハイテンションの声援を送つてから、よたよたと治療へと向かつた。

じついうシチュだとまた誰か手当てにくんのかなくと戦々恐々と構えていたが、保健室にはちゃんと保険医さんがいた。

順番待ちで時間を食つたけど、消毒して、でつかいバンソーホー

を貼つただけで普通に終了。

廊下に出ると もう試合は終わったのか、そのままのイジワル女子軍団が待ち構えていて、いつしかがメインだったのかと語る。

数にまかせて薄暗い廊下の隅へ追い立てられ、バケツで水をぶつかれた。

「あんたにはそれがお似合いよ、雌豚！」

「こんなちんしふりんが王子先輩の田に留まるなんて、ありえないし

し

「どんな汚い手を使ったのか、吐きなさい、このアバズレ女！」

絵にかいたような集団イジメ。

てかおまえら、さつきはお嬢様言葉使つてたくせに、キャラ固定しろよ！

「ブス！ テブ！ 超キモいし！」

「存在自体罪なんだよ。消えろ出来そこない。このガミガー！」

……哀れに思つてたけど、いつも延々と酷い暴言を浴びせられ続けると、さすがにムカついた。

「ふざけんな！ 言つていいこと悪いことがあるだろ！ 水ぶつかけるとかやりすぎだし！ 人の痛みがわからんない、わからうとしない、おまえらみたいな奴こそゴミだから！ 群れないと何もできなくせに、優位に立つたと思った途端つけあがんじゃねーよ、恥を知れ恥を！」

ああ、おれ、なに真面目に説教してんだろ。ビーセ単純だよ、ちつ。

しかし、この啖呵たんかは親衛隊たちの怒りにさらに火を注いだらしい。複数の手が伸びてきたと思ったら、おれは無理やり床に押さえつけられた。体操服の上着をまくしあげられ、短パンまで脱がされそうになる。

そして、ボスの薰子の手には、カメラ。

「なつ、おまえら、ここまでやると完全に犯罪だから…」

この乙女ゲーがどこまで過激なことをやるのか予想もつかず、おれはさすがに蒼白になつて暴れた。

クッソ、離せ、冗談じゃねえ…！

「学校中に、ばらまいてやる」

醜いとしかいよいのない笑みを浮かべながら、薰子がレンズを構える。

ブラのホックが外され、短パンもずり下ろされ、世界が真っ黒になつたような錯覚に陥つた

14・球技大会と親衛隊（後書き）

和希大ピンチ。果たしてヒロインの行く末は…？（　白々しい）

その瞬間。

「何をしている…？」

鋭い声が、空間を切り裂いた。クモの子を散らしたように逃げていく親衛隊。おれはあわてて、着衣の乱れを直す。階段を降りてきて登場したのは、H子だった。いつになく顔をこわばらせ、「ひどいな……」と呻きながら、手を差し伸べる。

「おまえが、自分のファンの管理はしっかりしてくれ」

全身に広がる安堵感に大きく息をはきだしてから、ちゅうと恨みがましい声で告げると、H子は衝撃を受けたように瞳を見開いてから、唇をかんだ。

こつもよりトーンの紙ご声で「いあん」とうそばく。

「まやか彼女たちがここまで暴走するなんて……しかるべき処置は、講じさせてもらひつ

全身にゅうりつ、と静かな怒りをまとつH子の、その瞳に浮かぶ残忍とでも形容できそうな光を見た途端、おれはやつせ以上の恐怖にゾックと背筋を凍らせた。

「いや、一応、未遂で済んだし… もうひつ、ひやんと指導してや

「あの大事だらうナビ、あくまで穏便に……」

「うわ、かばうようなことを言つてしまひ。

だつて、すつげー、恐いんだもん、王子。

放つておくと、何をどこまでするかわからないカンジ（滝汗）

「あの、だから、頼む。あんまり酷いことさせないでやつてくれ

あいつらだつて、好きであんなキャラやつてんじやないだらうからな。悪いのは製作者だし、うん。

「おまえに嫌われるつてだけであいつら相当ダメージ受けるだらうし、や。衝動的にいろいろやつちやうバカな奴らだから、追い詰めあざると血書しかねないし」

散々な目に合わされたのに、なぜか必死で弁護するおれを、王子は少し驚いたように見詰めていた。

やがて、ふと苦笑する。呆れるみたいに。

「こんな目に合わされたのに、君も相当のお人よしだね。わかつたよ、君がそこまで言うなら、罰は軽減してやることにする。でも……」

「大丈夫？ 怖かつただろ？」

「はあ？ 別にあんな奴ら、なんでもねー、よ……つー？」

ようやく表情を緩めた王子に心底ほつとして、そう答えたけれど、その瞬間、ぽろりといきなり田からでつかい雲くもが飛び出してきて、おれは口をつぐんだ。

ちよつと待てちよつと待てちよつと待て。

「の反応はまづいだろ！ オイ！」

「ちが、これはなんかの間違い！ たぶん、緊張がゆるんだせいでのなんかおかしくて……」

焦るおれの意志に反して、次から次へと零れ落ちる涙の粒。
その様子を呆然としたように見ていた王子だったが、やがて、堪じうえきれなくなつたように両腕を伸ばし おれは、強く抱きしめられていた。

ぎやあああああああああ。
嫌あああああああああ。

「本当じゆうに、『めん……』

切なげにそう耳元で囁く王子。
一方、おれは完全に硬直し、今にも魂魄じんぱくが口から抜け出しそうだ。
すると、その時。

「和希……？」

向こうから、新たな人影が登場した。
蒼木悠斗。

「！？」

「」の状況を見て息を飲んでから、おれの顔が涙でぐしょぐしょなのに氣づくや、顔色を変えた。

「何、泣かせて……！」

グッと拳を握り、突っ込んでくる。
まず一つ。

「違うんだ、ここに泣かされたわけじゃなくて！」

王子の腕を振りほどき、両手を広げて立ち塞がった。……おれのために戦うとか、本氣でやめてほしい。もう、切実に。

親衛隊にやられたのだと説明すると、悠斗は既々しそうに顔をしかめたが、多少冷静になつたようだった。

「とりあえず危機一髪のところ、助かったよ、王子。じゃあな、また来週！ 行こうぜ、悠斗」

とにかく王子から逃げ出したい一心で、悠斗を促してその場を後にした。さすがに今日は部活も出る気にならない。

「保健室から戻るのが遅いようなので探しにきたんだが……もつと早く、くるべきだったな」

艶つやのある悠斗の低音には、悔悟かごがにじんでいた。

「あー……が、王子が来ててくれたわけだし。心配してくれてサンキユナ」

「……おまえは、ここで待つてろ。着替えをとつてくる」

悠斗が促したのは、あまり使われていない女子トイレ。

そつか、このずぶ濡れの姿のまま教室戻つても、むやみに注目浴びるだけだよな……。

素直に従つてしまはらく待つと、おれの制服とスポーツタオルを手にした悠斗が戻ってきた。

「 ありがとう、助かった」

着替え終わつてでていくと、悠斗はふつと嘆息をもらし、おれの頭にタオルをかぶせる。

「まだ濡れてる。ちやんと乾かさないと、風邪をひくぞ。おまえは一度寝込んだら、長いんだから」

「わっ！？ 自分でやるから、いいよ

「…………」

悠斗は無言のまま、わしゃわしゃと拭く。タオルの隙間から見えたのは、ブスッとした仏頂面。

……なんとなく、すげー、機嫌が悪い感じ？ 何かに対して、怒つてゐみたいな。

でも、頭を拭く手つきは、丁寧で優しい。

グッと押さえたり、ぽんぽんと挟んだり……なんだかマッサージを受けてるみたいで気持ちよくて、ま、いつか、とそのまま身を委ねることにした。

「さうだ、試合、どうなった？ うちのクラスの結果」

ふと思いつ出して尋ねたところ、短い沈黙の後、ぽつりと「負けた」という声。

「あの後、立て続けに2点連続で入れられて、逆転負けだ」

「……そつか」

力なく相槌を打つおれに、悠斗は淡々と続ける。

「うちの女子は選手数がギリギリだつた。おまえが抜けると10人でのプレイになつたからな」

「畜生、おれのせいいか~」

「おまえのせいじゃなく、あの卑怯な女たちのせいだらつ」

それでも、やつぱり、悔しい。
でも待てよ。

「女子は負けたけど……男子は？」

タオルを外して見上げると、悠斗が、少しだけ笑った。

「優勝だ」

「……やつたー！ すげーじゃん！ もめどり！」

一気にテンションあがって手をかざすと、瞬きしてから、パン、
と手をたたき返してくれた。

「……単純」

笑いを含んだよつた声で、からかわれる。

「こーじゅん。嬉しこことは思いつきつ喜ばないと損なんだし…」

おれの言葉に、呆れたように漏らした悠斗のため息に、どこか
ホッとしたよつた響きも感じられた。

土曜日。高校も休みなのでゆっくりと起きあぐねて壁際に降りこべり、
煌が玄関で靴を履いていた。

「お。おはよ」

「おかけるのか？」
「ああ、バイ」「ア」と顔をせり出しながら、こまかに、今
日もイケメンですね。

「出かけるのか？」
「よく働くな。そんなに野めて何に使つんだ？」

「ん~、将来のための資金作りかな」

「将来?」

「ホラ、結婚式とか?」

は? と呆れるおれに、煌はニヤツと笑つてから「朝食は冷蔵庫にあるから」と言い残し、出て行つた。

……はぐりかされた気がする。あいつ、屈託なくて開放的な性格っぽいけど、さりげに秘密主義なんじゃないだろうか。そんなことを考えていたら、ケータイが鳴り始めた。

「もしもし?」

『和希ちゃん? おはよ~。北王子です』

王子! ? なんで番号知つてるんだ……と思つたけど、入部届けに記入したな、そういえば。

『昨日は本当にめんね。風邪引いたりしてないかい?』

「ああ、全然。で、どうした、いきなり」

『突然なんだけど、今日の午後つて、空いてるかな?』

「特になにも予定はないけど……』

答えながら、ハツと氣付く。やばい、このパターンはまさか。

『昨日のお読みをさせてほしいんだ。今日午後2時、君の家に迎えに行くな。それじゃあ』

「ちょ、待て、王子! おれはまだ……』

一言も行くとか言つてないぞお~つと続ける前に、通話は切れていた。

強引すぎるだろ、王子……。

ガクツと首を垂らしていれば、含み笑いをしながら姉貴が近寄ってきた。

「梓茶くんからトークのお誘いきた？」

「ああ、よくわかつたな」

「ほら、こないだ部室で演奏した後、『3曲の中どれが好き?』って聞かれたじゃない。あれで梓茶くん好みのポップスを選んだ場合だけ、今日のトークイベントが起るのよ~。グッジョブ!」

なんだとーー!? あんな普通の会話にもそんなトラップが……。

「ま、いいや。フケてやる」

悪いが、男とトークとがあり得ないし……とそのままリビングに入ろうとしたが、「アホか!」と脳天にハリセン攻撃。

「いって! 何すんだよー?」

「ちゃんと全員落とさなきゃ元の世界に戻れないいつつてんでしょう!? いーかげん、かんねんなさい。もし従わなければ……」

一タリ、と嗜虐的な笑みを浮かべながら眞を取り出す姉貴。……あの親衛隊とやつてること変わらぬよな。むしろこのやのがタチ悪い気がする……。o_r_n

「ほらほら、さつあと朝食済ませて、服選ばなきや! 男性キャラたちにはそれ好みのファッショングがあつてね。煌くんは普段は可愛いけど気取らないカジュアル系が好きみたいだけど、トークの時は清楚なお嬢さんっぽい感じが受けがいいのよね。もちろん行き先にも寄るんだけど、いつもとのギャップっていうの? で、悠斗くんは、普段はわりとなんでもいいみたいだけど、トークでは少し

だけ大人っぽく、肌見せしたりしてセクシーに。これも、幼馴染の
あの子が、気付けばこんな成長を……みたいな感じよね。ただしや
りすぎは厳禁。そして、梓茶くんが

「

「あーもー、どーでもいい！ 服くらいは勝手に選ばせろよー」

17・甘いものはお好き?

2時ピッタリに、チャイムがなつた。ドアを開けると、ライトブラウンの髪の、甘い微笑を浮かべた美青年が。

仕立ての良さやうなシャツにコットンジャケット、グレンチェックのボトムといつその姿はさながら英國紳士風。それをけして気負つた感じはなく、肌に馴染むように実に自然に着こなしている。手には大きな薔薇の花束。……似合いすぎる。

「今朝、うちの庭で摘んだばかりなんだ。見た瞬間に、君を思い出した……もうつてくれるかな?」

うちの庭つて、どんな豪邸住んでんだよ王子（汗）

「えつと……荷物になるから、置いてくぞ?」

「もちろん、構わないよ。ところで、君の私服姿は初めて見たけど……」

ちよつとビッグサイズのTシャツに、デニムのショーパン。

男受けとか知ったことかと着心地重視で選んだ服だったのだが、次の瞬間、王子の周囲に無数のキラキラが飛び交つた。しかも、いつもより30%増量バージョン！

「すごく可愛いね。潑刺^{はつりつ}とした君の魅力が、よく引き立つ

……意外にもボーイッシュがお好みでしたか。

家の前には黒いいかにもな高級車が停まっていた。ちなみに王子

は毎朝、ここつで学園に送迎されてくる。

扉を開き、「どうぞ」と優雅に促す王子が、深々とため息をつきながら乗り込む。

内部は思ったよりもずっと広くて、座席もふかふか。いよいよ、セレブ。

「で、どう行くんだ？」

「和希ちゃんは、甘いものは好き?」

「好きだけど」

「じゃあ、どうぞ美味しきケーキを食べに行こう

ケーキか……そーいや、しばらく食べてないな。

デートとか、いったい何をすることになるのかと心配していたが、そーゆーことなら悪くないかも……。

なんとうつかり油断したおれが、馬鹿でした。

「一度、ここで降りてもらえるかな?」

停まつた場所は、なにやらパンペーには敷居が高そうなブティック店の前。

「じめんね、その格好、よく似合つし本当に可愛いんだけど、これからいく場所はそれだと入れないから……」

「??? わい、王子? ちょっと待て、どうこうだー?」

「北王子様、お待ちしておりました」

中には気品のある柔軟そうな女性店員がすらりと立ち並び、王子は「頼むよ」とだけ告げ、混乱するおれを引き渡す。

直後、おれは女性店員に群がられ、あつと言う間に髪型から靴まで全身をドレスアップさせられていた。顔にはほんのりとマーク

まで施されている。

「うん……いいね」

「素材がよろしくので、腕のふるい甲斐がありましたわ」

特撮ヒーローもビックリの早着替えにポカーンとしているおれをみて、満足げにうなずく王子。

「こんな素敵なレディをエスコートできるなんて、幸せだな」

「ケーキ食べにいくんじゃなかつたのか……？」

「もちろん。さあ、行こう」

そして着いた場所は、都心にある、おれでも知ってる超ビ級のラグジュアリーホテル。海外セレブが来日した時もよく泊まつたりするあそこだ。

都会の景色が見渡せる45階の展望レストラン。
まるで宝石のよつた纖細なスイーツの乗つたアフタヌーン・ティー

一セツト。

「お味はいかがかな？」

「ありえないほど美味しい……」

感動に打ち震えるおれを、「よかつた」と最高の笑顔で眺める王子。

「おまえは紅茶だけなのか？」

「僕は、君の笑顔をご馳走になつてやるから」

よべ出でべるよな、いりこつ台詞。

半ば感心しつつ、フォークを口に運ぶ。つーむ、絶品。

「……でもおれ、絶対小遣い足りねえ。週明けには返すから、貸してくれるか?」

「テートで女性に出費させるなんて、恥ずかしいことしないよ」「いや、それはおかしい。お互に学生なんだし、男も女も関係ねーだろ?」「

思わず強い口調でそう言つたけれど、続けて「この洋服代まで入るどんくらいになるんだ……?」と尋ねる声はビクビクしたもののになってしまった。

王子はパチパチと瞬きしてから、苦笑する。

「本当に、君がお金のことを心配する必要はないから。それに、最初にも言つただろう? 昨日のお詫びだつて。全部、僕からのプレゼントだから、受け取つてよ」

「でも……」

なおも食い下がるうとしたおれの口に、何かが押し込まれた。

ケーキに添えられていた、母。
もぐもぐ、と仕方なくそれを^{そしゃく}租借するおれを見ながら、自分の指につけたクリームをペロリと悪戯^{いたずら}っぽく舐^なめて、王子が微笑む。

「それ以上つるわることをこつね口なら、今度は別の方法で塞^{ふさ}がなくちゃいけないかな?」

「ここで発狂せずにこりえたおれの精神力は、大いに褒め称^{たた}えられてしかるべきだと思つ。

「貴重な君の一冊を、僕にくれてありがとう……」

おれを送り届けた自宅前でそんな台詞を残し、王子の乗り込んだ車は立ち去つて行つた。最後まで氣障な奴……。

疲れた……とふと視線をすらすと、煌がカバンを肩にかけて佇んでいた。

こいつもちよづび帰つてきたところだつたらしい。

おれのめかしこんだ姿に、ちょっと驚いたように目を丸くしていつたが、気を取り直したように話しかけてくる。

「梓茶と出かけてたのか？」

「ああ。びびつたぜ。いきなり全身飾り立てられて、連れて行かれたのはあのホテルリツ。ケーキ吃べるとは聞いてたけど、大仰すが……」

凝つた首をひねつたり押さえたりしてほぐしながら、家に入る。煌も後に続いてきた。

「へえ……すごいじやん。美味かつただろ？」

「マジで半端なかつた！ けど……やっぱあーゆーといつて、肩凝るし、苦手だ。ぶっちゃけ、家でおまえの飯食う方がいい」

ハイヒールを脱ぎ捨てながら率直な感想を述べただけだったのだが、一瞬訪れた沈黙に振り返ると、虚をつかれたような煌の顔。直後、頭をぐしゃぐしゃとかき回された。

「なつ！？ なにすんだよ！？」
「べーつー！」……そんじやまあ、バイト疲れただけど、がんばつて

夕食つべつてやつましょつかねえ

ひらひらと後ろ姿で手を振つて、ダイニングへと消える長身。

「つたく、髪ボサボサ……あれ、芽生、いたのか」

こつまにか階段のところに立つていた姉貴は、おれをじつと見つめていたが、一瞬、田田といつ呟つた。

「和希……恐るじこそー。」

なにが！？

翌月曜日が、初めての音合わせ。

とりあえず候補の3曲を立て続けに流してみたけど……なんだろう、本当に「流してみた」感じというか。

ドラムもベースもキーボードもそれぞれレベル高くて、演奏も完璧なのだが、なんていうか、えーと……バラバラ？

「ま、しかたねーよな。和希も梓茶も悠斗も、バンドは初めてだろ？ ボリュームのバランスとか、タイミングとか、一人で弾くのと他人と合わせるのは全然違うから、練習を重ねていけばよくなつてくつて」

沈んだ空氣を打ち破るように、あつけらかんとそつ言つたのは煌だった。

「周りの音を聞けつつたつて、そんなすぐにつきのよになれるもんでもねーしな。これからは俺もなるべく練習来るよつにするし、悠斗もできる範囲で頼む」

「ああ……。金城、おまえは、バンドの経験があるのか？」

「前の学校でちょっとだけな。ほんの数か月。 一次選考に送る

録音テープの締め切りはいつだったつけ？」

「6月5日。日曜日。……いまからちょうど、2週間だね」

王子の言葉に煌はうなずいて、おれたちを見まわす。

「2週間もあれば、このメンバーなら大丈夫だ。とにかく回数を重ねて、調整しながら、カンをつかんでいくこと。……曲はしぶつた方が良いかもな。どれにするか、意見を出し合おうぜ」

いくつものスポットライトで照らされ眩しく輝くステージの上で、ボーカルが激しいラップをがなり立てている。

ジャカジャカと鳴り響く電子音。体を揺らす観客たちを一番後ろの壁際から眺めながら、おれの脣からは無意識のため息がこぼれた。

「どうした？」

「Jの喧騒けんそうの中、小さな吐息が聞こえたはずもないのだが、隣にいた悠斗が敏感に反応する。

「いや……JんなとJにこじる暇あるなら、練習した方が良いんじゃねーかと思って」

その週は他に水、金、土と集まって練習したが、相変わらず、今一つしつくりこないままだった。

そして日曜日の今日は、王子の提案で、メンバー全員で集まってキヤパー300人ほどのライブハウスに来ているところ。

人の演奏を聞くのも参考になるんじゃないかといつことだつたのだが……今はそれよりも、少しでも多く音合わせをしたい気分だった。

もし優勝できなきや、ゲームオーバーで存在が消えてしまつかもしれないのだ。できることはやつてゐるつもりだが、本当にこのやりかたで大丈夫なのか、焦る気持ちはあった。

「たぶん、おれが一番足を引っ張つてるんだよな……声量たりないし、おまけの音に引きずられて、ふらふらしちゃつて」

ボイトレ量を増やしても、家では姉貴に「バンド練習ばっかしてもダメなのよ！ステータスはバランスよく上げなきゃ！」と阻まれ、やりたくもない勉強や美容などでスケジュールがびっちり埋まっていた。

「演奏が合わないのは俺たちの力不足だ。和希が落ち込む必要はない……おまえは、よくやつてる」

悠斗はそんなふうに言つてくれたが、不安はおさまらない。

「正直、参考になりそうなステージでもないよな」

「いら立ちからつにそんな悪態をついてしまったところ、バーカウンターから戻つてきた王子が「あと少し待つて」とグラスを渡してくれた。

「UJの次のバンドは、なかなかおもしろいから。高校生バンドだけど、間違いなく今度の大会での優勝候補だ」

「へえ……？」

オレンジジュースの氷を潤し、からからとストローで氷をかき回したりしていたところ、やけに会場が込み合つてきただことに気付いた。

客が、どんどん増えていく。しかも、女ばっか。

「まだ？」

「UJの次よ！」

「今のうちに前に行かなきゃ」

……そんな会話を耳にしてくる間に、こつまにか超満員。

「なんていうグルーパ?」

「『Der Luxusstod』……ドイツ語で『悦楽死』」

王子の答えに、煌の顔がなぜかこわばつたように見えた。
なんだ?

直後、ラップグループの退場後にインテーバルで点灯していた照明が、パツと落とされた。同時に巻き起る、大歓声。

うわっ、うるせえ!!

鼓膜を引き裂くようなギターの音が鳴り響き、幕が上ると、更にボリュームを増した黄色い声援が沸き立つ。

「キヤアアアアアアアアアア」

「旺眞様ああああああああああ」

青白いライトに照らし出されたステージの上には、黒を基調にしたゴシック調の衣装をまとった男3人、女1人の姿。

高校生のくせに、ヴィジュアル系!? と度肝を抜かれたのもつかの間、ステージの中央に立つ男の姿から、眼がそらせなくなる。

漆黒の、腰まで伸びたサラサラの長髪。

物憂げな切れ長の鋭い瞳に、恐ろしいまでに整った鼻梁。

陶器のように白くなめらかな肌。

シャツの大きく開いた襟元で、チカチカ光るライトに浮かび上がる蠱惑的な鎖骨のライン。

しなやかでたくましく、完璧な均衡を誇るその長身からゆらりと立ち昇る、なんとも言えない妖艶さ 日本人離れした、なんて言葉では全然足りない。

人間離れした、まるで魔性の如き悪魔的美貌。

そしてインストロが終わり、その男が口を開いた刹那 その場の
全てがそいつに吸い込まれたような錯覚を受けた。
やかましく飛び交っていた嬌声^{きようせい}もピタリと消え、女たちの表情が
一斉に陶然としたものへと変わっていく。

体の奥底を揺^{くすぐ}られるような、ハスキーな低音。

有無^{あり}を言わせずひきよせられ、飲み込まれ、存在の全てがその甘美な檻に囚^{とら}われる。

時も、空間も、思考回路も、何もかも支配され、めぐるめぐ退廃と耽美に翻弄^{ひね}されるのみ。

全身を驚嘆^{せんりつ}の戦慄^{せんりつ}が駆け巡る。

なんという、圧倒的なボーカル。

これが『カリスマ』というやつか。

昨日になつて急にアクセス数が伸びたのですが、何があつた！？ともあれ、新キャラ登場です。

登場人物紹介を読んで、「あのキャラっぽい」と思つてる方もいらっしゃるかもですが

男性キャラは基本オリキャラなので（鉄板設定は色々張り付けてますぐw）、

予想と違つてくるだらう」とは「容赦くださいm（――）m

19・最悪のファースト・ショット（前書き）

すみません、下ネタ入ります。

19・最悪のファースト・コンタクト

「 ちゃん、和希ちゃん
「えつ……あ、王子……？」

ハツと我に返った時には、もつライブは終わり、ホールもガラガラになつていた。

心配そうにこちらを見下ろしていた王子、悠斗、煌が、反応を見せたおれに一様にホツとしたように表情を緩める。

「悪い、すうすぎで、ボーランとしてたわ。にしても、みんな、撤収早いな」

「女の子たちは、出待ちをしたいつたみたいだね」

既にいっぱしにファンがつこてるのか……ま、あの美貌と実力なら、無理もない。

「おれ、トイレいつてくるから、先に外で待つてくれ」
「一人で大丈夫？ 迷子にならないようにね」
「子どもじやねーんだから」

王子の言葉を鼻で笑つたおれだが 見事に迷つた。（ドーン）

おれが悪いんじやねえ。このヒロインの方向感覚がおかしいんだ、絶対。

限界を訴える膀胱をなだめつつ、しばらくウロウロと歩き回つて、このうちこ、ようやくトイレマークを発見し、飛び込む。

小用便器の前に立ち、ベルトを外しつつ何気なく横をチラ見して、ビビった。

で、でけえ！ ナーニコレ珍百景。

思わず顔を確認して一度ビックリ。

さつきのカリスマボーカルじゃねえか……！

女どもに「旺眞」と呼ばれていたそいつも、なぜか、ひどく驚いたように切れ長の眼を大きく見開き、おれを凝視（ぎょうし）していた。

ん？ なんだあ？？

一拍の空白の後、ようやくその視線の意味に気がつき、血の気がサ一ツとひいた。

間違えた——！

おれ、今、女になつてんだった！

しかし、今更女子トイレを探しに行く余裕はもはやなく、そのまま男性用の洋式トイレに飛び込み、用を済ますと高速で飛び出した。

「失礼しましたー」

「待て」

絶対零度の声に呼び止められ、足がピシリと固まる。

恐る恐る振り返ると、不機嫌を絵にかいたようなしかめつ面の旺眞（旺眞）が、両腕を組んでにらみ付けていた。

なまじ凄まじく顔が整つているせいで、迫力があることにの上な

い。

「虫けらが……ど」から潜り込んできた！？」

む、虫けら！？ と内心大いにシッ ハリハリ、おれは勢いよく頭を下げる。

「「めん！ トイレを探してたんだけど迷っちゃって、漏れそうだったからよく確認せずに飛び込んでじゃって」

「見え透いた嘘をつくな！」

ビリビリ、と空氣を震わせるような低音の一喝。

思わず言葉を失つていたら、「魔王さま、何事～？」と歌つような調子とともに脇の扉が開き、さつきステージで見たメンバーがぞろぞろと出てきた。

魔王、か。確かにここにひつたりのあだ名だ……！

「そり感心するおれに、前髪を長めに伸ばしたド派手な赤い頭の男 たしかすつげークレイジーなギターをかき鳴らしてた奴だが、ニヤニヤしながら叫ぶ。

「ありや、ダメじゃーん。お嬢ちゃん。楽屋までは追つかけ禁止だぜ？」

「そうだ、ここは貴様のような下等生物が入り込んでよい場所ではない

下等生物……！

いちいち台詞が大仰だぞ、魔王！

「だから、間違えただけなんだって。わざとじゃないし、すぐ出でいくから」

「身の程をわきまえず、樂屋傍までやつてきただけでは飽き足りず、よもやこのような変態行為にまで及ぶとは……覚悟はできてるのだろうな」

弁明など聞く耳持たず、魔王はいきなりおれの胸倉につかみかかつた。

「ぐ、ぐるし……」

「女だからと言つて、容赦はせぬ」

魔王の両手が掲げられ、グッとおれののどが締めつけられる。目が、本気だ。

呼吸が詰まり、視界が白くかすんでいく。

やべえ、殺される。

ゾッと全身が恐怖に包まれた瞬間。

「和希！」

新たにその場に現れた影が叫び、おれはドン、と地面上に投げ出された。

「大丈夫か！？」

駆け寄ってきたのは、煌だった。

ゲホゲホ、と激しく咳き込むおれの背中を撫で、怒りに燃えた瞳で魔王をねめつける。

「てめえ……！ 和希に何しやがるー！」

「金城、煌……」

一方、魔王の方は、意外そうにその名を呼ぶや、みるみるとその表情を凍りつかせた。

その瞳に浮かぶのは、さっきおれに向けていたもの以上の、激しい憎悪。

「貴様こそ、今更なんのつもりで俺の前へ現れる！？」

……こいつら、知り合いなのか？

張りつめた空気を破ったのは、赤い髪の男だった。

「オレ様はとっくに気づいてたぜ。ライブの時から客席にいたよな

」
「ロン……

煌に『ロン』と呼ばれたそいつは、頭の後ろで両手を組み、ひょろじとした細身を傾ける。

「もしかしてえ、またオレ達と組みたくなった？ なーんてありえねーか。ヒヤハハハハツ」

返事も待たずに、一人でゲラゲラ笑い始める。こいつも、やべえ

（汗）

「おまえらと組むことは生涯ねえよ。それに、俺は今は、こいつとやつてゐる」

拳動不審なロンに臆することなく、そつけなく返す煌。ロンが爬虫類めいた瞳を、んあ？ と丸くした。

「煌と同じバンドをやってて、オレ達のファンなわけ？」

「だからおれはファンじゃねえって！ ここには迷い込んだだけ！」

今日だって、軽音甲子園のための参考になるかもつてきただけで

」

「へえ？ あの大会、あんたらも出るんだ～。お嬢ちゃんの担当は

？」

「ボーカル」

おれが答えた途端、ハツ！ と嘲笑が響いた。魔王だ。

「笑止！ こんなひよつ子がボーカルとは……バンドの力量もたかが知れたものだな」

「聞きもせずにほざくんじゃねーよ。相変わらず、心底ムカつく野郎だな」

「貴様こそ田障りだ。その変態女を連れて、とつとと俺の視界から消え失せろ」

「言わせておけばこの野郎……」

恐ろしいほど険悪な眼差しでにらみ合つ二人。

「和希、先帰つてろ」

グッと拳を握つて一步を踏み出そつとした鬼氣迫る煌を、おれは必死で押し留めた。

「待て、落ち着け！ 暴力沙汰はまずい！」

「おまえのことまで侮辱されて退けるかよ……！」

「決着をつけるなら 音楽でだ……」

とつてに叫んだ一言で、その場の全員が黙り込んだ。

……あ、やっぱ、クサかつた？

照れたのもつかの間、クククククツと肩を揺らし始める魔王。

「いいだろう……決着の日までせいぜい足搔あがくがよい。貴様らの貧弱なプライドはおろか存在基盤かんぶさえ粉々になるほど、完膚なきまでに叩き潰してやる……！」

クツクツク……ハーツハツハツハツハツハツハ！ と高笑いを響かせながら、カツカツカツ……と足音も大きく反対方向へと歩いていく。「キヒヒ、おもしれー」となつてきましたじやん！ セイゼイガツカリさせないでくれよ~」

口笛を吹きながら、ロンや、その他のメンバーも後に続いていった。

樂屋はすぐそこにはずだけ、ビニールごくんだり、あいつら。

魔王軍団の姿が完全に消えるまで、呆然と見送っていたが、「帰るか」と煌に肩をたたかれ、持ち直した。

煌の表情はまだ苦々しいが、大分平静を取り戻したようだ。

「あいつらが、前のバンドのメンバー？」

「ああ」

「それはまた……大変だったな」

しみじみとコメントを寄せると、煌も重々しく首肯した。

それにも魔王　あまりにも残念なイケメンだ。

それにもこの魔王、ノリノリである。w

前回更新曰、なんどジャンル別口聞ランキング第4位をいただきました。

ランキングなんて雲の上すぎて完全にノーマークだったので親友にメッセをもらつて仰天した次第です。まさかこんなミラクルが起ころとは……

これも応援してくださつている皆様のおかげです。心から感謝！！

そしてその次の回が下ネタとか我ながら何やつとんだという感じですが。

活動報告のほうではダメ小説らしくダメ企画でいつそりお祝い中です。その名も

↙勝手にキャラソン@ボカラ曲【歌つてみた】↙

二回動のアカウントをお持ひで「もつもつと妄想に付き合つてやるわ」といふ

奇特な方はのぞいてみて下さい……美声パラダイスなので損はさせませんよ！w

イラッ ときたかたは何卒スルーで。

（二回二回動画は本当に「才能の宝石箱」だと思つてます。大好き）

ライブが終わった後、ファミレスで夕食がてら、その日の感想を語り合つことになった。

「『Der Luxus töd』は確かにすこかつたけど……あんなアグの強いバンドの何を参考にすりゃいいんだ？」

ハンバーグをほお張りながら首をひねるおれの口元を、王子が「クスッ。ケチャップついてるよ」とナップキンでふいた。グハッ。

「メンバー全員がすごく個性的なんだよね、あのバンド。魔王くんの存在感は圧倒的だけど、それだけじゃなく、全パートのレベルが高い。そして、どの楽器も尖^とがってるし、すこしく自由に演奏しているのに、バラバラにはなってないだろ?」

王子の言葉に、うなずきつつ、考えをまとめるよつて田を細める悠斗。

「自己表現と協調性のバランス……というよりは魔王の歌声で有無を言わせずまとめあげている、という印象を受けたが。確固たるバンドの世界観や方向性が定まっているのも大きいだろうな」「似てるところもあると思うんだ。僕は、せっかく和希ちゃんという稀^{かけ}有な才能を秘めた歌姫がいるんだから、その声を生かせるような曲作りをしたいと思つてる」

相変わらず、真面目な顔でしゃばしゃくなるような台詞を語つ王子。

「俺も、それでいいと思つぜ。やっぱボーカルが華だしな」

「同感だ。今度の大会出場はそもそもここの花瓶代のためだし、曲や音について自己主張を始めるときりがないと思っている。だから演奏も極力、和希を立てるようにしたいとは意識しているんだが」

三人の言葉に、あわてたのはおれだ。

「ちょっと待て、でも、おれに気を遣つて勢いが消えたらもつたないだろ！？ おまえら皆、すっげー上手くて、とびきりいい音もつてんのこ、今ままじやそれが全然出てない気がする」

そうか、しつづこないのはこの辺も原因だったのかも。

「経験一番浅くて、実力がないのは間違いなくダントツでおれだ。おれは魔王とは違う。おれのレベルまで落とすことねーよ。おれは、とにかくおまえらに負けねーようにがんばるから！」

面食らつたような男どもを見回しつつ、おれは、必死で言葉を紡ぐ。

「だから、おれに、ボーカルに合わせるんじゃなくて……ドラムー。そう、煌に合わせようぜ。煌のリズム感は抜群だし、悠斗だつて、初めての顔合わせあんなかつけーセッション決めてたじやん？」

「リズムの主体はドラムだけど、グルーヴを司るのはベースだよ？ その双方の絡み合いは無視できない。……でもそうか、リードは煌で、蒼木くんが煌のドラムに合わせてメロディとの架け橋になる、和希ちゃんはその一人のビートを感じて歌う……」

「でもって梓茶は全体をみて調整しつつ彩を添える……ってスタンスなら、悪くないかもな」

王子の意見を、煌が引き継ぐ。

うん、いい感じいい感じ！

悠斗も同意を示すようにうなずいた後、鞄から楽譜の束を取り出した。

「じゃあ次は、曲の解釈だな。おまえ達はこの曲では特にどのフレーズを意識して弾いてるんだ？」

・その後も意見の交換は続き、閉店時間の23時まで居座つてしまふ。

・週明けの練習、今までの停滞が嘘だつたように気持ちよくやる気。

・回数を重ねる」とに完成度UP！

・締め切り前日、録音完了。CDを一次選考に応募。

・予選通過を信じ、都大会のステージに向けてひたすら練習する」と2週間。

・ついに予選通過通達が届く。イマコロ

「機嫌だな」、和希

「そりやそーだろ！ 祝、予選突破！ 今夜はケーキ焼いてくれ

「気が早すぎだろ」

部活後の帰り道、舞い上がるおれの様子に肩をすくめる煌。呆れたように笑いながら、その目に浮かぶ光は柔らかい。

悠斗は今日は剣道部だったから、帰りは一人だけだった。

「だつて、大半がこの予選で落とされるんだろ？ ま、おまえらの実力なら受かるとは思つてたけど、やっぱがんばったのが報われると感慨が……」

「あぶねっ

「あぶねっ

弾むよつな足取りで喋り続けていたおれを、煌がとつさに引き寄せた。それまでおれがいたすぐ真横を、車が高速で突つ切つていく。

「住宅街でみんなスピード出しやがつて……和希、おまえはそつち歩いてる」

大きな手で一の腕をつかまれたまま、守るよつに歩道側に誘導された。

あわてて振り払つ。

「やめろよ、そーゆー変な気を遣つるの」

「俺が恥ずかしいんだよ。女に車道側歩かせるよつな、気の利かない奴だと周りに思われると」

そういうわれると、反論もできない。
畜生、女じやねーんだけどな……。

「……魔王たちと同じバンドだったつてことは、おまえもヴィジュアル系の衣装着てたわけ？」

ちょっとからかうよつな口調で尋ねたところ、煌の顔が微妙にひきつった。

「悪かったな。どうせ柄じやねーよ」

「いや、似合つと感づけど」

「あぶねっ

「あぶねっ

じうせイケメン。

軽くいじけるおれの内心など知る由もない、煌の説明は明快だった。

「ドーム叩ければ、何でもよかつたんだ、俺は」

「じゃ、『Der Luxusstadt』を抜けたのは、転校が原因

？」

「いや、価値観の不一致」

キッパリ宣言する煌。

確かにあの魔王軍団と渡り合つていいくのは、並の神経じゃ無理だろうが。

「おまえって、どんな相手でも氣後れしないで上手く付き合えるタイプだと思ってたけど、さすがにあの魔王……黒川旺眞、だつける。あいつは例外だったんだな」

「ニヤニヤとほおを緩めて感想を述べたところ、返ってきたのは、わずかな沈黙。

お、これは反撃のチャンス？

いつも振り回される一方なので、今が好機とばかりに、言葉を継ぐ。

「あっちの剣幕も相当だったじゃん。よっぽど派手に喧嘩別れしたんじゃねーの？」

「……和希」

名前を呼んだ煌の声が、なんだか妙に深刻な色を帯びているものだったで、ちょっと動搖した。

「なんだよ？」
「実は、ち……」

ため、ひみつに瞳を揺らしながら、煌が口を開いた時。
ポツリ。

大きな水滴が、頭の上に落ちてきた。

「！？」

一人して見上げた空は、いつのまにかどんよりとした灰色の雲に埋まつていて。

そこから、次から次へと大粒の雲が零れてきたと思つやいなや、あつという間に土砂降りになる。

「やべえ……
「走るぞー！」

そこから家まではほんの数分、といつ距離だつたけれど、玄関をくぐつた時にはもうお互に全身ずぶ濡れになつっていた。

「なんだよ、このバケツをひっくり返したよ！ つな雨ー！」

スカートを絞りながら悪態あくたいつくおれを見て、煌がぶつと噴き出す。

「和希、おまえ、ひつで一格好！」
「なつ、おまえだつて人のこと言えた義理かよー！」
「俺は『水も滴るイイ男』だから」

ふてぶてしく言い放つた煌だが、否定できないのが腹立たしい。

髪をかき上げてもなお、端整な鼻筋やほおに流れ落ちていく露と
いい、ほどよくたましい肢体に張り付いた制服のシャツといい、
姉貴がみたら盛大に鼻血をぶつ放しそうな色気が漂っている。

「自分で言つなよ、バカ」

悔しかつたのでそれだけ返して、びっしょりで気持ちの悪い上着
を脱ぎ、セーラー服のすそに手をかける。

「おー、やめろ、こんなとこで……！？」

ギクリと焦つたような煌の声を無視して勢いよくガバッと脱いで
みせた。

「！」

「ふはははは！ 期待させて悪かったな。タンクトップ着てました

ー

「……」

拳を握つてうめいた煌は、心もち赤面しているように見える。

ざまーみる。おれだつて、やられっぱなしじゃねーんだ！

少しだけふてくされたように半目になつていた煌だが、おれの肩
に視線を留めるや、小さく息をのんだ。

「和希、それ……」

実はおれもわりと最近気付いたのだが、ヒロインの右肩後方
には、掌サイズほどの傷跡があった。

一見淡いピンクの痣のようにも見えるそれは、痛ましさを覚える

ような類の傷ではなかつたが、ヒロインの色白の肌では立つといえばそこそこ立つ。

「なんか、ガキの頃に火傷した跡らしい。おれは、もう全然覚えてないんだけど」

ただれたり引きつたりはしていないが、今でもまだ残っているということは、それなりに大きな怪我だつたのかもしれない。

「…………」

ポタリ、と伝った零を頸から滴りせ。煌が、吸い寄せられるように、そっとおれの傷跡に手を伸ばす。

「煌？」

おれの声に、ピクッとした指が制止し、ビームが虚ろだつた瞳が、いつもの光を取り戻した。

「タオルとつてへる。和希、先にシャワー使えよ」

何事もなかつたかのようになつて、家に上がつていいく煌。

……そういえば、わざと道端で言いかけてたことつてなんだったんだろ？

気になつたけれど、今更もう一度蒸し返しても、またいつものよ

うにはぐらかされてしまつだけだという予感がした。

あつとこう間に日々は経過し、今田は6月最後の土曜日　都大
会当日。

予選を突破した10組が、ステージ発表に臨む。会場には6名の
審査員の他に、500名ほどの中の観客が集まっていた。

女子更衣室で姉貴に渡された衣装は、肩がむき出しのベアトップ
に、ウェストから下がふんわりと膨らんだカラフルな水玉柄スカー
トに切り替わった80年代風ワンピース。髪の毛は高い位置でポニ
ーテールに結び、腕や足にもコサージュつきのリボンをくるくると
巻きつけて、ポップで華やかな雰囲気だ。

「ちょっと派手じゃねーか？」

「ステージではこれくらいでちょうどいいの。今田の選曲との相性
やキャラ受けの効率も考慮してのベストセレクトなんだから文句言
うな」

キャラ受けねえ……とため息をつきつつ、着替え終わって廊下へ
出ると、黒いゴシック調の衣装に身を包んだ背の高い男が向こうか
らやってきた。

……魔王……！

稀代きだいの彫刻家が精魂込めて創りあげた芸術品のように美しいその
顔が、おれに気付くやピクリと眉を跳ね上げた。

「誰かと思えば……あの時の変態女ではないか
「変態じやねえ！　間違つただけだつつてんだろ」

魔王はおれの抗議なんて聞こえていなによ、黙つてまじまじ

とおれの全身を見つめてくる。

「なんだよ?」

「……馬子にも衣装だな」

「悪かつたな!」

氣色ばむと、フッと唇の端を吊り上げ、そのまままれ違つた。

「せいぜいあがいて見せるが良い。もとより貴様らの俚俗な演奏に期待なぞしておらぬが、あまりにも手応えがないのも興醒めだ」

傲慢な台詞を残し、すれ違つていく。

「そつちじや、吠え面かくなよ!」

2.1・通りぬ（後書き）

今回から章を設けてみました。

あと、本編とは関係ないですが、短編を一つアップ。
「4歳児が『桃太郎』を語つたらこうなりました。」

<http://nocode.syosetu.com/n1214u/>

完全実話です。よろしかつたらどうぞ。

ひかえじつ
控室に入ると、まず扉のそばにいたのは悠斗だった。

「……！」

「ひつちをみて一瞬目を見張つたが、無言ですぐ視線をそらしてしまつ。

ん？ これつて外してんじゃねーか？

続いて王子がにっこり笑顔で出迎えた。

「やつぱり女性は華があつていいね。特にそのポーネーテール！ 髪型を変えると、君のまた別の魅力が引き出されてちょっとビデキドキしちやうよ」

そして煌。

「いいじやん。似合つて、曲の雰囲気にも合つてるぜ」

「さて問題です。一番好感度が上昇したのは誰でしょ？？」

「ひそつと姉貴が耳打ちしてきた。

知るか！ と舌打ちしたい気分だが、下手にスルーすると反撃が恐ろしい。

「あーつと、王子？」

その辺が妥当かと思つたのだが、ブブーッと手でバッテンされた。

「答えは悠斗15、梓茶10、煌5、旺眞5でした。ああ見えて悠

オバ桑、内心ドンキドキなのが一ムツツ

「シンボンって奴かよ……って待て、旺眞つて、あの魔王も攻略対象!?

「当たり前でしょ」

マジでーー?

「おまえらあんなのと付き合いたいのか!? あんな彼氏が理想なのか!?

「ま、リアルではありえないけど。てんじょうてんげゆいがとくせん天上天下唯我独尊の俺様つぶりはいつも清々しいくらいだし、可愛いところもあって、結構クセになるキャラなのよ~。そしてなんといつても 口こといろがいい」

「タリ……、と怪しい笑みを浮かべる姉貴。
駄目だこいつ……早くなんとかしないと……。

我が姉ながらゾン引きしていたところ、スタッフが呼びに来た。

「よいよかー!

ギクリ、と緊張に身をこわばらせるおれの肩を、悠斗、王子、煌がすれ違こざま、順に叩いて先に行く。

「ここまできたら、あとは余計なこと考えず」、音にだけ集中しろ

「あれだけ練習したんだから、大丈夫」

「本番は、思いつきり楽しんでいいよ」。音楽は『音を楽しむ』も

のだからな

よし、やってやるぜー

「ヒントコーナンバー」、私立美楠学園『ヒローロード』」

それぞれのカラーが溶け合つて田の前の景色を塗り変えるような音楽を作り、曲」とに違つた魅力や色彩を引き出せぬよつたバンドを田描そつ……そんな意図で名づけられたバンド名。

そういうば、ここからの名前つて全員色が入つてゐよな。黒川旺眞もそう。

そつか、前、姉貴の言つてた攻略キャラの共通点つて「色」だつたのか……

ドキドキ跳ねる鼓動を抑えながらそんなことに思つてを巡らせていたら、アナウンスと共に、幕が上がつた。

「曲は『Let's Party』」

瞳に飛び込んでくるスポットライトの光が強烈過ぎて、視界が真っ白になる。眩^{まぶ}しくて観客が見えないのは、緊張せずにすんでもうど良かつた。

煌のシンバルの4連打がスタートの合図。

ベースとキーボードが、曲の中で幾度も繰り返されるキーフレーズを同時に奏で、一気にテンションが膨れ上がる。

最高のリズム感で打ち鳴らされる、心躍るよつなドーラム。

安定感抜群の、低音ながら口口口口と口^{カタカタ}口口口を踏むよつなベースライン。

インストロからグッと惹きつくる、明るく弾むキーボのメロディ。やべえ、こいつら、むちやくちやいに音出してくる。おれだつて、負けないぜ。

願わくば、聞いてるみんなも一緒に参加してくれよ レツツパ

———

ステージが終わり、幕が完全に下りると、おれはへなへなとその場にへたり込んでしまった。

「大丈夫か？」

一番傍にいた悠斗が、手を差し出してくる。

「じめん……おれ、まさか、こんなことになるなんて」

たぶん、おれの顔色は真っ青になっていたと思つ。

最初は良かつたんだ。バンド演奏に合わせて無心に歌つてただけなんだけど。

途中から目がなれて、客席の様子が見えてきて。

高校生を中心に集められた観客が、みんな、顔を輝かせて、身体を揺すつて、おれ達の音に乗ってくれてるのがわかつて、テンションが振り切れた。

客席には、腕を組んでしかめつ面でこっちを睨む魔王もいたけど、かんなや学校の知り合いの姿も見つけて、そいつらのとびきりの笑顔がまた嬉しかった。

気分がグングン上昇していつて、いつのまにか飛び跳ねて、ステージを走り回つて……やつべー、楽しすぎる~と舞い上がりまくつたせいで、なんと、2番のサビの歌詞が頭から丸つきり抜けてしまったのだ。

どうしようもなくて、以降、全て「ララララ~」で乗り切ったとい

う力技。

……みんな、本当にいい演奏してたのに、おれのせいでもち壊しだ。

頭を抱えるおれに、悠斗の反応は意外なものだった。

「こや、上出来だらう」

「どこの!? そんな遠慮せず、黙つてくれたつていいんだぜ」

食つてかかるおれの肩に、「落ち着けつて」と手を置いたのは煌。

「おれも、別に問題なかつたと思つぜ。梓茶のフォローも上手かつたし」

「やうだ、王子! マジで助かつた! ありがとうな!」

おれが「ラララ～」しか言えなくなつたと悟るや、コーラス用のマイクを通して王子が「皆さんも一緒に!」と客席に声をかけてくれたのだ。

おかげで、観客もそーゆーノリだと思つて一緒に歌つてくれていたフシはあつた。覚えやすいキャッチーなメロディだつたし。

王子はゆるゆると首を横に振ると、こつこつと微笑む。

「和希ちゃんも、パーティを表には出さずに楽しそうに歌つていたからね。そもそも楽曲の「コンセプトが『皆で楽しむ』だつたし、お密さんも参加できる形になつて、怪我の功名だつたんじゃないかと思つよ?」

「……本当に?」

とても信じられなくて、三人の顔を見回すと、全員が自信たつぶりにまつさりとうなずいた。

「うう、マジで大丈夫だろ？……怖ええよおお。

23・奪われた

そして、運命の結果発表。

「優勝は エントリーナンバー4、私立真海学園『Der Lüxusstod』」

……負けた。

目の前が真っ暗になつたような気がした。

ああ、やつぱり、ダメだつたんだ……バカバカおれの大バカ者。もう、悔やんでも悔やみきれない。

都大会ごときで、まさかのゲームオーバー。

短いおれの人生よ、さようなら。

そうだ、消えるとしたら姉貴も一緒なんだな、ごめんな、ふがいない弟で。

さも当然といったように、表情を変えずにステージ前方へと出て行く魔王たちの姿をみながら、絶望にのまれかけていたところ、次のアナウンス。

「また、惜しくも優勝には届きませんでしたが、今後の成長に期待するバンドとして、エントリーナンバー7、私立美楠学園『COL OF FUL』^{しゃくさいじょんじょりゅうがいじょ}には審査員奨励賞が贈られます。以上の2校は、関東大会のステージでもがんばってください。」

ベタだ――!

くそつ、このあまりにベタ過ぎる展開にうつかり気付かなかつた

自分が悔しい！！

客席では、動搖するおれを姉貴があからさまに「ヨウ（< > < ）」^{アカハラ}ギヤーと嘲笑つ^{アカハラ}ているのが見えて、ますます凹んだ。
あーもー！ デーセバカだよ、この野郎！

帰りの準備をするとこつとも、ボーカルとドラムは樂ちんだ。

「玄関で待つてるぜ」

何かと持ち運ぶ機材の多い二人に声を掛け、煌と一足先に樂屋を出た。

「こしても、おまえつて、度胸あるよなあ」

並んで廊下を歩く道すがら、感心したよつとやう言われて、おれは危うく転びかける。

「なんだよ、イヤミ？ いや、叱責は甘んじて受けたけどな

恨みがましく見上げると、「そんなんじゃなくて」と苦笑する煌。

「本心から。歌詞は飛んだけど、それって、ステージに夢中になりすぎつて感じだつただろ？ 初めての大舞台で、そこまで楽しめる奴もそうそういないつて」

「それは……おまえらが、あまりにもいい音出すからや。勝手に体がガーッと熱もつて、抑えきれなくなつたんだよ」

あまりにも短絡的かつ衝動的なこの行動パターンは、自分で分析

してみても少々情けない。

案の定、煌の口からば「ハッ」と息が漏れた。

してみても少々情けない。

「おまえって……マジで、単純だな」「そーだよ、どーせ単細胞の熱血バカ。それはもつ、よーつて身に染みたから!」

ふてくされ氣味に言い捨てるおれに、ハハハッと愉快そうに身を揺すつてから、煌は言つた。

「俺はおまえのそーゆーとこ、好きだぜ」「ああ、ハイハイ、ありがとな。……けど、魔王との勝負を考えると……」「

途端に、煌の表情もさつと曇る。

優勝と、審査員奨励賞。どっちが上かと問われれば、敗北を認めざるを得ないだろう。

暗澹とした氣分で自動扉をくぐつて会場の外へでたおれ達は、ギクリと足を止めた。

なんというタイミング。

入り口付近に、えらべど派手な集団が溜まっていたのだ。

そう、今もつとも遭遇したくなかった相手……真海学園の魔王軍団。

赤い頭に極彩色の奇抜な衣装をまとつたロンを筆頭に、ゴスロリワンピースに身を包み蜘蛛柄のパラソルを差した青鈍色の髪の少女、ショッピングピンクのサテン地のシャツにヘソ出し、ショートパンツにガーターベルトというパーマヘアの男など、私服になつたこいつらはステージ衣装よりむしろ目立つてやりたい放題。

そんなけばけばしい連中の中でも、全身黒一色の「一デイナイト

の魔王が一際圧倒的な存在感を放っているのは、その外人モデルのよつな長身と絶世の美貌のためだけでもなさそうだった。

「おーっと、負け組さん達じやあありませんか

」ヒーッチの姿を見つけたロンが、嫌な笑いを張り付かせながら、近寄ってきた。

緊迫して全身を強張らせるおれ達。

「『決着をつけるなら音楽で』つってたけど、この結果には、どういうアクションとつてくれるのかなあ？」とつあえず、ジャンピング土下座でもいつとく、煌けやん？

ロンのいたぶる様な台詞に、煌はグッと拳を握り締めていたが、やがてふーっと息をもらした。覚悟を決めた瞳。

「負けは負けだからな」とドサリと鞄かばこを投げ出し、ひざを突くような気配を見せたので、おれは焦つてその腕をつかんで制止する。

「待て！ 煌は完璧だつた！ 贠けたのは、おれのせいだ。土下座でもなんでもおれがするから、それで勘弁してくれ！」

「和希、おまえ何言つて」

「うるせえ！ 煌も悠斗も王子も、プロ顔負けの最高の演奏してたんだ。減点対象になるのは、どう考えたつて歌詞忘れたボーカルだろ。足引っ張ったのは、おれだ。おれが責任取る！」

断固として宣言して、進み出た。

「まつ……おもしろい

口元に笑みを浮かべながら、ゆらり、と前に歩み寄つてくる魔王。長身の煌や悠斗よりも更に高い位置にある艶麗な面立ち、その中でもとりわけ印象的な切れ長の瞳が、強い光を宿して、こちらを見下ろした。

その威圧感に、ゾクリ、と背筋が震えたが、気力だけは負けじとにらみ返してやつた。

「旺眞！ 和希に近づくんじゃねえ……畜生、離せ、てめーらー！」

煌が、ニヤニヤと成り行きに注目するロンとももう一人の男メンバーに羽交い絞めにされて身動きできなくなつてるのが視界の隅っこに映つたが、おれは目の前の魔王と対峙するだけでせいいっぱいだ。ちょっと気を抜けば、ひざが崩れ落ちそうだつた。

それにしてもなんだろ、かすかに妙な香りのよつなものが鼻について、くらくらする。不快なものではなく、ビックリかといつと、いい匂いなんだけど……？

不意に、魔王の手が、伸びてくる。

殴られる！

とつさに目をつむつたおれは、次の瞬間、顎をクイッとつかまれ唇を、塞がれていた。

。

。

コノ クチノナカ ヲ ウゴメクモノ ハ ナンダ?
ブブーツ、ハンベツ不能。
思考回路、カンゼン停止。

人間離れした美しい顔が、満足そうな微笑を漏らしながらゆっく
りと離れていくのを、おれは、ただ呆然と見ていた。

「……フン、いかにも稚拙おかけであるのに、不思議と昂たかぶる。勝利の証、
確かに受け取つた」

それだけ言って、悠然と立ち去つていく。

自分のひざの力が抜けて、その場にへたり込んだ、気がした。

「 ざけんな、ぶつ殺してやる！」

激怒した煌が声を半分かすれさせながら吠え、両腕に絡まつてい
たロンたちを力任せに振りほどくのも、そこで到着した悠斗と王子
が、魔王に殴りかかるとする煌を慌ててまた押さえつけるのも、
まるで別世界の映像を見るようだ。

「離せ！ あいつ、絶対許さねえ！」

「落ち着け、何があつたかは知らないが、こんな場所で暴れるな」

「問題を起こして出場停止にでもなつたら、一番困るのは誰だかわ
かつてる！？」

いたが。
いためられた煌が、悔しそうに大きく顔を歪めるのまでは覚えて

そこまで、おれの意識は、ぷつりと途絶えた 。

アーメン(ちーん)

田覚めたのは、医務室だった。すぐ近くで椅子に腰かけていたらしい悠斗と王子が、のぞき込むよじにして尋ねてくる。

「大丈夫か？ 和希」

「ごめんね、寝ている女の子の顔を見ているなんてマナー違反かとも思ったんだけど、心配で。気分はどう？」「

気分はむろん、最悪だ。

「悪い、ちょっと貧血。別に体を壊したとかじゃねーから、心配すんな」

とにかく急かつたが、いつまでもここに寝ているわけにもいかないだろう。

起き上がりながら部屋を見回すと、少し離れたところに座る芽生と、入り口付近で壁にもたれて立っている煌の姿もあった。煌は、おれと田が合うと、痛みをこらえるような複雑な表情になり、そのまま黙つて部屋を出て行つた。

「何があった？ 金城に尋ねても、言葉を濁すだけだった」

悠斗に聞かれたが、おれも、とても説明する気にはなれない。ギュッと掛布かけふのシーツを握りしめていたところ、芽生のはつきりした声が響いた。

「お姉ちゃん、真海学園の人にはいきなりキスされちゃつたんです

~~~~~しつかり見てたのかよ！ てか思い出すわんな、クソ姉貴！

改めて、全身が粟立つた。

ぐああああああ、おぞましい！

「……黒川……とかいつたか」

低く唸り、拳を握つて立ち上がつた悠斗の全身には、なにやらメラメラと赤いオーラがたぎつていた。

「繰り返すけど、暴力沙汰はまずい」

その腕をグツと引き留めた王子も、凍りつきそつた冷氣をまとつて見えるのは氣のせいか。

「 僕だつて、はらわた煮えくり返つてるよ？」

氣のせいじゃなかつた。てか田だけ冷たく光らせて薄笑い浮かべるとか、怖すぎなんだけど！

しかし。

「 そりが……倒れてしまつべう、ショックだつたんだね」

おれに視線を向けた王子は、またいつも穏やかな王子に戻つていた。気遣わしげな、慈しむよつた眼差し。

「こつらからしたら、ヒロイン、めっちゃ純情少女に見えるんだね」

おれの受けたばかりしれないダメージなど、想像で見るはずもない……。

「悪いんだけど、しばらく一人にしてくれ」

田線をそらし、不愛想に『う』言い捨てると、男どもは素直に立ち去つていった。

部屋に残つたのは、おれと芽生。

「まあ、そこまで落ち込むことでもないんじゃない?」

ポリポリ、と頬をかきながら『そんな』ことを言いやがる姉貴。

「ほら、しょせん、たかがキスだし」

……そう、だよな。

うん、たかが、キス。

「これがファーストキスだつたりしたら悲惨だけど

「……！」

グサツ。

「初めての相手が男で、しかも『ティープ』だとなると、さすがのあたしでも同情を禁じえないわね」

「……！」

ザクツブシユツ。

言葉のナイフでMPに痛恨の一撃を食らいまくり、瀕死状態のお

マインドパワー

れに、姉貴は一転キラキラと顔を輝かせ。

「で、レモンの味はした？」  
Mr.不幸（はあと）

「わかつてて言つてやがつたなこのクソ姉貴ー！」

半立きでつかみかかつたおれを、鬼畜姉おどりひどり、となだめる。

おれは黒かよ！

「旺鳳くんはす」」このテクニシャンって設定だけビ、キスも上手だつた?」

「知るか！」

「ふふふ、言葉に詰まつたわね！ あんたつてほんと、嘘つけないんだから。実は感じちゃつたんでしょ？」

卷之三

おれはあらん限りの大声でわめくと、布団を頭からかぶつた。

…… そうなのだ。

「心の底からものす」「おおおおおおく嫌悪感を覚えながらも、なぜか！」  
果てしなく理解しがたいことに！

これが何よりのショックで、自我崩壊寸前なのだ。

二〇一〇年九月二日

も嘘ではなく

「ま、あんたじやなぐ、ヒロインの体が反応してるのかも」

なんかちょっと口汚い(汗)

「いいじゃない、せつかくの機会なんだしwwwどんどん女としての快感も味わっちゃえwww」

「モード」と書いた

ゾーッと全身を突き抜ける悪寒の嵐に身をすくませながら、おれは、意識を改めた。

忘れちゃダメだ、この世界は異常なのだ。

バンドが意外と楽しくて、口説き文句にもちよつとずつだが免疫がついてきて、どうせ逃れられないならと最近微妙にこの生活を満喫していた節があつたが、あまりにものんき過ぎた。一刻も早くここから脱出しなければ、「おれ」という存在が危うい氣がする。

「この世界から抜け出したい？」

おれの心を読んだように、姉貴が囁きかける。

「たりめーだろ」

「じゃあ、バンドに励む以上に、確実に全キャラと親しくなる」と  
ね。都大会を乗り越えたことで、また大幅に親密度も上がったし、  
イベントも増えてくる。

今後、彼らからの誘いは断らない、あからさまに冷たくふるまわない。もし至高EDを達成できなかつた場合 ゲームオーバー以外にももう一つ、考えられる可能性があるの」

淡々と説明する姉貴に、おれは布団から少しだけ顔を出し、「ぐり」とのどを鳴らした。

「それは  
無限ループ  
?」

## 24・ひつひの可能性（後書き）

「愛顧に感謝して、ウエブ拍手をひとつと申しました。自己満足乙。

それから、もこいちよ短編投下。

「4歳児の『日常』を切り取つたらひつなりました。」

<http://nocode.syosetu.com/n3159u/>

「…………」

地獄行きを宣告されたような衝撃だった。

「『ときメロ』は全キャラ制覇の至高エンディング以外のエンディングを迎えた後、『セーブしますか？』ってテロップが流れるので、セーブするしないにかかわらず、その後しばらく放つておくと、またオープニングが始まるのよ。もし、今回もそのケースが当たるとしても……」

「完全にクリアするまで、何度も同じ時間やシチュエーションを繰り返し、体験する羽田になる……？」

「冗談じゃねえ。果てしない時空の輪をぐるぐるとまわり続けるなんて、気が狂いそうだ。」

「必ずしも同じとは、限らないけどね。今だつて、あんたが体験してる世界は、あたしが知ってる『ときメロ』とは結構ずれてきてるの」

「ずれてきてる……？」

「そう。登場キャラは同じだし、基本設定や重要なイベントはたぶんそう変わつてないと思うんだけど、例えば旺眞くんとトイレで遭遇したり、今日のあんたがぶつ倒れて彼らに介抱されたり……なんてのは、ゲームの時にはなかつたシナリオ。普段あんたと彼らが交わす言葉なんかも、ゲーム『ときメロ』にはない台詞ばかりよ。キャラもこの世界で怒つたり笑つたり悩んだりしながら『生きてる』わけで、それに絡むヒロインもテンプレの女の子じゃなくて『羽鳥和希』って人格を有する、しかも特異な状況におかれた個なわ

けだから、別の物語が生まれていくのは当然なのかもしれないわ

……難しい話になつてきただぞ。

「正直、あたしも自信たつぱりにこの方法でいけば大丈夫、つて言  
い切ることはできないの。この先どういう風に世界が展開していく  
か、把握できているわけじゃないんだもの。もちろん、基盤となる  
攻略知識は汎用性はんようせいがあるとは思うけど」

「……よくわからんねーけど、バンドをしつつ、男どもに言い寄られ  
まくるという構造は変わつてないんだよな？」

「ええ。そこだけは搖るぎようがないわね。つまり、無限ループに  
陥ると、延々彼らに迫られる日々が続くってこと」

「それはいやだ！ 拷問以外の何物でもねえ！ でもおれがあいつ  
らを口説くなんてのも出来そうな気がしねえ……！」

悶絶し、頭を抱えるおれ。

一方、姉貴は「まー、そう悲觀しなさんな」と一転、能天氣な口  
調でたしなめた。

「あからさまに拒絶しなきや大丈夫な気がするわ。今までのところ  
そういう順調に仲良くなつてるみたいだし……あんたはたぶん、天  
然の乙女ゲーマスターだから」

「悪い、最後の方、よく聞こえなかつたんだけど？」

「あ～気にしないで。とにかく、変に攻略とかは意識せず、バッド  
エンドだけは避けるように行動すること。あとは、これまで以上に  
真剣にステータスUPに励むこと。OK？」

ピッと人差し指を向けられて、おれは、重々しく頷いた。  
「これから脱出する最短のルートがそれ以外なら、やつてやる  
しかねえよな……。

あ、でも全員と親しくつてつまり、魔王との接近も避けられないつてことか？

……やっぱだああああああああ！

その日は、行きは電車だったのだが、帰りは悠斗も一緒に王子が車で送ってくれた。

おれが「もう忘れないからあの話は蒸し返すな」と伝え、努めて普段どおりにふるまつたせいか、一人もそれに合わせてくれた。煌はすでに荷物ごと会場を去つていて、自宅へ帰ってきたのも、深夜になつてからだつた。

大会でへとへとながらも期末試験に向けて『勉強』ステータスの増強に励んでいたおれは、午前2時過ぎのその時間でもまだ起きていて（夜更かしは『美容』が下がるから諸刃の剣らしいけど）、たまたまトイレに行こうと玄関前にいた時だつた。

「おかえり」

ガチャリと鍵を開けて中に入つてきた煌は、出迎えるおれを見てギクリと全身を硬直させてから、うつむいたまま靴を脱ぎ、無言で2階へ上がろうとする。

なんか、無性にムカついた。

「無視すんじゃねーよ！ なんでおまえがそんないかにも傷ついたつて顔してんだよ！」

おれの一喝に、煌の背中が立ち止まつた。それでも、振り向こうとはしない。

「おれはもう、アレは犬に噛まれたもんだと思つて忘れる」とことじた！ けどおまえがいつまでもそんな態度じや、忘れようにも忘れねーだろー！」

「…………」

背を向けたまま、ただその両の拳が握りしめられたのがわかつた。

「田の前で何もできなかつた、そういう男のプライドみたいなヤツがあるのはわかるけど、当事者はおれなんだよー。おまえまで被害者ぶつてんじやねえよ、情けねえー！」

『ゲームオーバーであほーんしたくなかったら、メインキャラに嫌われるよつな言動は慎むのよー。』

芽生の忠告が脳裏に蘇つたけど、感情を抑えられなかつた。

「いつも滲刺として、屈託なくて、飄々となんでもこなして。2次元キャラつてわかつてても、じついう男になれたらいいよなつて憧れみたいな気持ちがあつた。だから。

「おまえのそんな女々しい面、いつまでも見ていたくねーんだよ…」

「…………」

「そもそも責任取るつて前に出たのはおれだし、おまえはどうぞーしよ

ーもなかつただろ？

どうしても自分が許せねえつーなら、明日、おれのために超豪華な夕食作れ。それで全部キャラにしてやるー。」

有無を言わせない命令口調で言い渡しても、じばらく煌は無言だ

つた。

怒らせたか……？

大声を出したせいか次第に冷静が戻ってきて、言い過ぎたかも、と内心ビクビクしながらも、早く何か言つてほしくて、また横柄に付け加えた。

「関東大会進出のお祝いだ！ 文句あつか？」

ふーっと大きなため息を漏らし、煌が振り返つた。

「……ケーキも焼くか？」

ちょっと疲れたような笑顔で、そう尋ねてくる。

心底ホッとして、おれの顔はきっとめぢやめぢや緩んでたと思つ。

「当然！」

## 25・都大会終了（後書き）

以前に拍手メソセでいただいた「天然乙女ゲームスター」の表現がとてもツボつたので、使わせていただきました\

恋愛つてどこでするんでしょうねえ……。心？ 脳みそ？ 体？ たぶんそれぞれが影響を及ぼしあうものだと思うのですが、その割合が人によつていろいろなのかな。

……今のところまだBLタグを付ける予定はありません（笑）

とりあえず、これにて都大会編は終了。

メインシナリオは煌ですが、今後は他のキャラのシナリオも動き出します。

出番を魔王に飛ばされた誰かさんも、そろそろ出でてくる……はず（笑）

2ndシーズンも、どうぞよろしくお願いします。

## キャラクターファイル？

名前：羽鳥 和希

身長：158

星座：獅子座

血液型：O

年齢：15

一人称：おれ

二人称：煌。悠斗。王子。静流。魔王。

趣味：漫画。ゲーム。サッカー。カラオケ。音楽鑑賞。

花に例えるなら：タンポポ

イメージボイス：佐 利奈

（＊ 身長や声はヒロインバージョン。）

単純、熱血、素直な純情少年。

普段からいじめられまくりに違いないお姉さんも、ピンチの状況では助けようとする、いい子。

お人よし度合いはテンプレのヒロインといい勝負かも。

イケメンたちのアプローチやステータスアップにひーひー言いながらも、持ち前のプラス思考と打たれ強さで2次元ライフにしつかり順応。

本人は無自覚ですが、素で男どもの心を乱す自爆系天然魔性。

次の煌からはなんと！ イラストつきです

## キャラクターファイル？

名前：金城 煌

身長：181

星座：牡羊座

血液型：B

年齢：17

一人称：俺

二人称：和希。悠斗。梓茶。静流。旺眞。

趣味：ドラマ。料理。スポーツ全般。F1観戦。放浪。

花に例えるなら：ひまわり

イメージボイス：浪川 輔

>+28033-3393<

ひなむうさん（http://papero.jp/hinamu  
u）に描いていただきました！  
ありがとうございます♪

まだまだ謎多きキャラクター。

一応メインシナリオという位置づけなので、出番も一番多いかと。  
前向きで活動的、けっこつ兄貴肌。社交的だけど、ちょっと秘密主義。

テーマは「一途」。

彼の一番の魅力は、実は料理スキルじゃないかと思つてます（笑）

専属「ツクちょー羨ましい！！

奔放つて設定のわりに常識的な振る舞いばかりでちょっと無念。  
もっと色々やらかして和希を翻弄できるように仕向けてたいのですがｗ  
どのキャラにも言えますが、シリアル要素とコメディ要素、お話の

流れと乙女ゲー・シナリオをどんな割合でどう不自然じゃなく融合させるのかは一つの悩みどころです。

## キャラクターファイル？

名前：蒼木 悠斗

身長：182

星座：水瓶座

血液型：A

年齢：15

一人称：俺

二人称：和希。金城。北王子。静流。黒川。

趣味：ベース。剣道。天体観測。読書。微分積分。

花に例えるなら…あやめ

イメージボイス…中 悠一

> i 2 8 0 3 4 — 3 3 9 3 <

ひなむうさん（<http://piapro.jp/hinamu>）に描いていただきました！  
ありがとうございます♪

「自分だけの和希だと思っていたのに、いきなり怒涛のように現れたイケメンたちに気が気でない毎日でしょう」とのメッセをいただき、吹きました。確かに！ 不憫な子です。

煌は天才肌ですが、悠斗は努力家タイプ。

力を抜くというのが苦手なので、人知れず勉強も部活も黙々と真面目にとりくみます。

テーマは「幼馴染」…ってそのまんまやん！（笑）

先輩を呼び捨てとか、さりげに不遜ですが。

常に冷静沈着、律儀で根はいい奴だけど、態度や言葉を取り繕つことがないのでトラブルの元になることも。不器用なシンデレです。



## キャラクターファイル？

名前：北王子 梓茶

身長：176

星座：魚座

血液型：O

年齢：16

一人称：僕

二人称：和希ちゃん。煌。蒼木くん。紫葉くん。魔王くん。

趣味：ピアノ。作詞作曲。芸術鑑賞。ダーツ。乗馬。薔薇の栽培。花にたとえるなら：バラ（これしかない）

イメージボイス：岸尾だ すけ

> i 2 8 0 3 5 - 3 3 9 3 <

ひなむうさん（http://piapro.jp/hinamu）に描いていただきました！  
ありがとうございます♪

とにかく器量がでかくて底知れない人。  
彼ならきっとかぼちゃパンツでも笑顔で履きこなして見せるに違いないw

温和で気さくな天然口説き魔。

でも誰にでも……というわけでもなく、好きになつた相手に誠実。どんな気障な言動もイヤミに感じさせないのは育ちの良さの賜物。でも実はこつそりストレスも溜めていたり？

テーマはまたしてもまんまで「王子様」。

乙女ゲー的優等生で、とても描きやすい反面、ギャグ担当みたいになってしまつても可哀想かなという気持ちも。

カツコいい部分も見せられるようにがんばりたいものですがはてさて?

残りのキャラはまた今度。2nd Phaseの合間に挿入予定です。

タイトルちょっとございました。

都大会翌日の日曜日。

おれは睡眠不足でボーッとする頭で、繁華街へ来ていた。

本当は家で勉強していたいのだが、今日は特大セール日だから絶対に夏服を揃えろと姉貴の厳命を受けたのだ。

煌対策にはこの店、悠斗対策にはあの店、小物を買ううならあの雑貨屋……などと渡されたメモの細かい指示を守りながら任務を遂行し、最後に本屋に入った。

読めば『勉強』ステータスが大幅に上がる、という反則のような素晴らしい参考書が売っているらしい。

「『サルでもわかる数？虎の巻』……」これが

本棚のちょっと高いところにあるそれに背伸びして手を伸ばしたらい、ちょうど同じタイミングで同じ本に興味を持つたらしい誰かと指が触れあつた。

すらっとした細身の長身に、理知的な容貌。眼鏡をかけていたので一瞬戸惑つたが、見知った顔だつた。

愛想の欠片も無いのになぜか甘く響く低音が、耳を擊つ。

「和希……」

「悠斗じゃん。奇遇だな～」

言つてから、んなわけねーな、と気づいた。このいかにもな出会い方、どう考へても図られたイベントだ。

悠斗はうなずいてから、ひょいと参考書を抜き出し、ホラ、とそれで軽くおれの頭をたたいた。

譲ってくれるらしい。

「最後の一冊だけど、いいのか？」

「かまわない。もともと、おまえにどづかと思つて手を伸ばした」

「そう、なんだ。サンキューな。……眼鏡つて、珍しいな」

「今朝はコンタクトの調子が悪かつたんだ」

そういや、悠斗は小学校高学年で視力が下がつて眼鏡になつたのだが、中学からは剣道で不便だからコンタクトに変えたのだと姉貴が言つていた。

それにしてもよく似合つ。

超、頭良さそう。実際いいんだけど。

ついまじまじと眺めていたところ、悠斗の眉間に、かすかなしづわが寄せられた。

「……おまえ、昨夜はちゃんと眠れたのか？ 顔色がよくないぞ」「ああ、テスト勉強で夜更かしあがつて……ベッドに入つてからも、嫌な夢ばつかみちゃつてほとんど寝れなかつたんだよ」

「これは魔王のせいだ。奴に迫られる悪夢を見ては飛び起きての繰り返しだった。

悠斗は気遣わしげにちらりと瞳を揺らしたが、出た言葉は毒舌だった。

「馬鹿か。買い物なんかにきてる場合じやないだろ？ 家で寝てろ」「今日はどーしても外せなかつたの！ んなことより悠斗、これから空いてる？ 帰つて勉強教えてくれねーか？ 今度の期末、ヤバそうなんだよ」

両手を合わせて拌み倒すおれに、悠斗は「それはかまわないが……」と言いかけ、何かを考えるように手を組めた。

「そうだな……その前に、ちょっと俺の用事に付き合え。とりあえず、昼をその辺で食べてからだな」

悠斗が向かったのは、そのショッピングモールに併設されたプレネタリウムだつた。

おれのプレネタリウム経験は小学生の時、しかもわりと小型でシヨボイ場所だつた記憶があるのだが、ここは全然違う。

ゆつたりとした座り心地のいいリクライニング・チエアーから見上げたドーム型の天井には、信じられないほどリアルで、息をのむほど美しい星空が広がつていた。

作り物だとわかついても、感動してしまつ。

「すげえ……」

思わず、感嘆の囁きを漏らしたら、隣の席の悠斗が小さく笑つたような気がした。真つ暗で見えないんだけど、なぜか。

耳なじみのいいアナウンスとともに、幻想的な星物語が語られていく。

どこから、優しい花の香り。

美しい満天の星の下、小さく流れるヒーリングミュージックに誘われるよつに、おれの意識はふわふわと漂い始めた。

「 和希

「ん？ あつ、悪い、おれ、寝てた！？」

気が付いたら、悠斗の肩にもたれかかるよつな態勢で、急いで身を離す。

「熟睡だ」

「言ひながら、悠斗がハンカチを差し出した。

「よだれ垂れてるや」

「ゲッ、マジ! ? うつわ、恥ずかしー」

さすがに赤面してしまったら、悠斗の肩が震えた。  
顔を見るともう二つものお面顔だったけど、絶対笑われたよな、  
今。

「せつかくいこうと連れてきてくれたのにな……」

「いや、寝かそうと思つてきたんだ。このプログラムのテーマは『  
癒し』だからな」

それでアロマがたかれてたりしたのか……。

「寝ぼけた頭で学習しても効率が悪いからな。1時間の睡眠でもす  
つきりするだろ? ?」

「ああ、なんつーか、上質の眠りをもらつた感じ。でも、やっぱも  
つたない。ちゃんと見たかった!」

「……また連れてきてやるから」

そう言つと、背を向けて立つと出口へ向かう悠斗。おれも返事  
のじよつがなかつたから、じよつじよつにけど。  
「おい、自分で持つからいって

「重いものを持つてフラフラされると、危なっかしい  
」

買い物の荷物を全部奪われた状態で、帰途につく。  
……ま、いつか、楽だし。

「…………」

おれが黙ると、会話はなくなつた。無口な奴……。

「星、好きなんだよな」

これまた姉貴情報を掘り返しつつ、話しかけてみる。

「ああ。5歳の夏、うちと羽鳥家と合図で石垣島に行つたのを覚えてこむか？あの時の星空は忘れられないな……」

悠斗が話出したとたん、脳内に、ヒロインの過去の記憶が映画のように流れ始めた。

過去の追憶は幼馴染の鉄板ですね。

ベンションの傍<sup>わざ</sup>でバーべキューしながら談笑する両家の家族。そこからちよつと離れた静かな場所で、両足を投げ出して芝生に座り、無心に降るような満天の星空を見上げる幼い悠斗。今よりずっと無防備であざけなくて、くらくりした目がなんとも可愛い。

その、吸い込まれるように空に向けられていた瞳が、ふと、何かを探すように左右を彷徨<sup>さまよ</sup>い、一か所に止まつたとたん、ギョッとしたように見開かれた。

『和希！ 何してんだよ』

5歳のヒロインが、その辺で一番高い木に登る<sup>のび</sup>つとしていた。（おれはヒロインのはずなのに、他者視点なのはゲーム的<sup>じ</sup>都合主義つてやつだらう。）

『悠ちゃんに、お星さまとつてあげるの！』

『バカ！ ところへせに何やつてんだよ！ あぶないから早くおりろ！』

『だいじょうぶ……だつて、おじさんのがベースをきいてるとき以外で、そんなに何かにむちゅうになつてゐる悠ちゃん、初めてだもん。大好きなんでしょ？ お星さま』

やうにうひロインの声は、震えている。まだそれほど<sup>ほど</sup>の高度ではないが、高いところは得意ではないらしい。

『ケガするぞ！ 早くおつてこ！』

『へいきだつて！』

不意に、ヒロインが足をかけた枝が嫌な音を立て、小さな体が落  
下する。

『……』

『うう……！』

幸い、ヒロインは無傷だつたらしい とつさに飛び込んだ悠斗  
が下敷きになつたおかげで。

大きく顔を歪めて、声もなく痛みに震える幼い悠斗の姿を見て、  
ヒロインは蒼白になり、慌てて大人たちを呼びに行つた。

『悠斗、大丈夫か！？』

『 肋骨ろっこつが折れてるかもしれない。救急車を！』

.....。

「和希、どうした？」

「つむいてしまつたおれに、現在の15歳の悠斗が怪訝けげんそうに首  
を傾げた。

「その旅行でおまえに大怪我させたこと思い出して……まさかそん  
な昔から迷惑かけまくつてるとは……」

自分のことではないとはい、面目なくて、深々とため息をつい  
てしまつたおれに、悠斗は肩をすくめる。

「何を今更。それに、あれもそつ嫌な思い出でも

そこで、おもむろにバツが悪そ「にロ」も「の悠斗。

「なんで？」  
肋骨折るくらいの大怪我だろ？」

「……覚えていないなら、それでいい」

仏頂面で先に行つてしまふ。

「おい、待てよ……」

後を追いかけたが、ふと、何かの予感がして、視線を横に流した。

屋内に設置された噴水広場。

若い女性達やガツブル、家族連れなど様々な客で賑わう。その場所の向こう側に、これまた、知り合いの姿があつた。

王子だ。

いた。隣にすげースタイルのいい大人の女二て感じの美女を連れて

二  
二

このモーリの名物にもなつてしる噴水はイルミネーションによつて、一刻一刻と鮮やかに色彩を変化させているが、それを眺めることもせず、お互い喋るのに夢中になつてゐるよう見えた。その近い距離感は、まるで恋人同士のようだ。

「ああ、ユーリーのつて、姉とか従姉なんだよなあ……。」  
と苦笑した瞬間、美女が王子のネクタイをグイッとかみ、王子  
が前屈みになる。

二人の唇が重なつた。

କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା - ?

美女からの強引なキスに見えたが、王子のほうも、拒む気配はない。

人目をはばからない情熱的なキスだ。

「和希？」

悠斗が振り返る。

「い、今行く！」

見てはいけないものを見てしまった気がして（てか冷静に考えれば見なければいけないものなんだるうけど）、おれはあたふたとその場を立ち去ったのだった。

その後、悠斗の家で約束通り勉強を教えてもらつた。

要点を押さえて非常にわかりやすい上、辛抱強く丁寧に指導して

くれたおかげで、なんだかずいぶん頭が良くなつたような気がする。

夕方までみつちりやつてから帰宅すると、エプロンを外しながら煌が出迎えた。

「おかえり。ちょうど夕飯、できたとこだぜ」

関東大会進出のお祝い、ということで煌が本気を出した夕食は、計10品が皿に並ぶピュッフェ形式だったが、どれもキラキラ光つてみえるほど見目麗しく、一口食べると天にも上る心地がするほど美味かつた。

特に牛肉の赤ワイン煮の、口に入れた瞬間ほろほろと崩れ、同時にぶわーっと肉汁が広がっていく感動たるやもひ……筆舌に尽くし難いとはこのことだ。

ふと我が家の中のHンゲル係数が心配になつたが、月頭に親の仕送りの中から一一定額しか渡してないはずだった。

やりくり上手にもほどがある。ビバ<sup>2</sup>次元。

「「」馳走様！ もー、最高だつた。煌様天才！」

「ケーキもあるけど、さすがに明日にしどくか？」

「ん……食べるー！」

迷つたが、煌が取り出したそれがまたあまりにも美味そつだつたので、見た瞬間叫んでしまつた。煌が吹き出す。

「なんつー顔してんだよ。おまえは犬か！」

「だつてだつて、マジ美味そつなんだもん。くれ！ 早く食べたい！」

おれのがつづく姿にカラカラ笑いながら、煌はおれ達の前に綺麗に<sup>ヒヤリ</sup>コレーションされたケーキを切り分けてくれた。

「ああ……今なら死ねる」

隣の芽生の言葉も、あながち大げさでもない。

「幸せすぎ……」

陶然<sup>とうぜん</sup>とケーキを食<sup>は</sup>んでいたら、「そんなに美味いか？」と煌。

「美味しいよ！ おまえも食べてみるつてー！」

思わずフォークをブンブン振つて力説したら、煌はうなずいて、  
おれの手首をつかむと自分の方へ引き寄せ、そのままフォークに刺  
さつていたケーキをパクリと口に入れた。

.....!.....

「モロモロ」

ムをペロつと舐めとりやがった……！」

「ん、美味い」

アホかああああああああ！　おまけ、信じられねえ、こーゆーのやめろー！」

「おまえが食べてみろつづつたんじやん」  
「ふざけんな！ もしまたこんな真似したら即行追い出す！」一度

「はいはい」とずんなり

真っ赤になつて怒り狂うおれに、しかし煌は悪びれた様子も見せず飄然としている。マジで叩き出してやりたい。

「つたく、どっちが犬だよ……。」 そうこやか、王子ひいて彼女いるの？」

モールで見た光景がふと頭をよぎり、尋ねてみた。  
煌は少し不思議そうに首を傾けながら、「いいや」と否定する。

「去年はいたつて聞いたけど、今はフリーなはずだぜ」  
「去年はいたんだ！ いいな……ってそうじやなかつた。じゃ、  
実はあいつ、すっげー遊び人だつたりする？」  
「んなこたかない。梓茶は確かに色んな女にいい顔するけど、それ  
は筋金入りのフェミニストだからで、だからこそ不実で女を泣かせ  
るようなことは絶対しない」

淡々と語りつつ、おれの内心を探るような瞳で見つめてくるから、  
またちょっと居心地が悪くなつてくる。

「女たらしつつたら、黒川旺眞だな。おまえ、もつあいつには絶  
対近付くな」

はき捨てるよつに飛び出したその名に、おれはギクッと身を強張  
らせた。

できるならおれも近付きたくないけど、クリアするためににはそつ  
いうわけにもいかない。となると、情報収集も必要になつてくるわ  
けで……。

「あいつ、そんなひどいんだ？」

「最悪だ。片つ端から女を落としまくつてはがらせてる。あいつの

そばに寄ると、なぜか女はおかしくなる。あいつからは『魔王フロモモン』が出てるんだ」「

ま、魔王フロモモンー！？  
やだ、なにそれこわい。

「そして手を出すのは早いが、飽きるのも早い。さんざん放蕩の限りをつくしていよいよ收拾がつかなくなると……あちこちに圧力かけまくつて『金で解決』だ」

不機嫌に言い放つ煌。ひいー最低すぎる。

「そのくせ『俺は誰も愛したことなどない』とかほざく、傲慢で身勝手なナルシストだ。とにかく関わるなよ」

おれだつて関わりたくないよ！ 心から！

けど、なるほどな。煌と魔王が険悪なつて、その辺が原因か？ 魔王のあまりにひどい振る舞いに、煌が食つて掛かつてこじれたとか……？

ん、でも、煌は基本的に個人主義だ。魔王の行動を毛嫌いしても、あくまで他人事と割り切つて、そこまでつっこんだ追及はしない気がする。この2ヶ月くらい一緒に生活してこいつを見てきた印象からすると。

あそこまで徹底的に決裂するには、もっと他の原因があつたんじやないかって思えるんだよな……。

それをきこうかと口を開きかけた途端、

「食事が不味くなるような話して悪かったな。」の話はこれで終わ

りにしよう

と打ち切られてしまい、またしても機会を逸したおれなのだつた。がくり。

週が明けて登校したおれは、ちょっとした学園の有名人になつていた。

というのも、かんなが朝一で校内新聞を掲示板に貼り付けて、各クラスにも配つて回つていたから。

記事には、おれ達のステージのでつかい写真つきで、軽音甲子園都大会での活躍が報告されていた。仕事早すぎだろ。

「なんだよこの煽り文句。『美楠が誇るハイパーイケメンバンド、ここに見参!』『世紀の歌姫の光臨を、次は君もじかに体感しよう!』……つて、大げさすぎるだろ! 周りの視線が痛いんだけど!」

昼休み。

弁当をつつきつつ、校内新聞の文面をピシピシと叩くように抗議したが、かんなは「こーゆーのはちょっとくらい誇張するもんよ?」と反省する様子もない。

「ま、私はあながち誇張とも思つてないけどね……美楠のアイドル神スリーが集結してるのは事実だし、バカちんもステージの上に立つと、すごいキラキラしていつもと別人みたいに見えたもん。オーラがあるというか。歌もうまい、以上に、なんていうか、胸に直球で飛び込んでくる感じで。とにかく、めっちゃカッコよかつたよ。興奮した!」

「え、マ、マジ？ わんわ……」

慣れない賞賛の嵐につい「テレテレ」になってしまった。仕方ねえなあ、記事のことも今回は大田にみてやろウ。……。

「でも見にきてたなら、声かけてくれてもよかつたのに」

「開場前はバタバタしてそうだから、結果発表の後ケータイにかけたんだけど、全然通じなくてね。仕方ないから、先に帰ったのよ」

あ、そっか。ステージの前に電源オフにして、その後はあの「ざ」いざで夜までずっとそのままにしてたんだった。

「悪い、ちょっとトラブルがあつたんだ」

おれがそう答えると、ちう一つとパックのカフュオレをストローで吸っていたかんなのメガネがキラリと光った。

「そうそう、あんたも、黒川旺眞にキスされたらしいじゃん？」

「…」

思わず箸はしでつかんでいたおかずを落としてしまう。

なんでここつまで、なんこと知つてんだよー？

「あそここのバンドの追っかけの子達が田撃したらしくて、すつ「」い騒いでたよ。ま、あの男の手の早さはファンの間でも有名っぽいから、皆またただの気まぐれだらうとは言つてたけど、悔しがつてたわ

「……そ、なんだ」

追っかけ、か。また女の嫉妬に巻き込まれるのは心底かんべんし

てほしい。王子様親衛隊の方は、あれ以来さっぱり出番も接觸もないけど。

「けどバカちゃん、気をつけなよ。黒川旺眞は銀行とか百貨店とか色々やつてるあの黒川グループの御曹司であると同時に、『一晩で20人の処女を落とした魔王』の異名を持つ、超危険人物なんだから」「ぶつ」

かんなの突拍子もない台詞に、おれは口に入れてたおにぎりを噴き出しけた。

なんだよ、そのふざけた異名！ ビーウー状況なんだそれは！？ でも、魔王の話題になつたのは、チャンスなのかもしれない。

「……煌は前に魔王と同じ学校通つてたっぽいんだけど、なんかすげー仲悪くてさ。同じバンドをやつてて決裂したのまでは知つてるけど、その二人の間に何があつたかとかまでは……さすがにかんなでも、知らねーよな？」

駄目モトで尋ねたところ、かんなの表情にかすかな困惑が浮かんだ。

「……ちよつとは知つてる、けど、そうホイホイと広めていい話題じゃあないのよね」

「な、なんだあ？ 絶対に他言しないって誓つから、教えてくれよ。頼む！」

勝手に他人の秘密を探るのは気が引けるが、煌にはまだ謎の部分が多すぎる。追究できる時に、しておきたかった。

かんなはためらうような様子を見せていたが、真剣に頼み込むおれの姿に、「バカちゃんなら大丈夫か」と吐息を漏らした。

声を潜めて、ぼんぼんと語り始める。

「一昨日、あんたが魔王と接触を持つたって知つて、すぐに真海学園に通つてゐる一個上のイト」に連絡とつたのよ。で、魔王のことについて、だけでなく、キスの前、なんか魔王軍団と金城先輩がもめてたらしきつてのも小耳にはさんでたから、そこになんか因縁あるのかつてのも聞いてみたのね」

すごい好奇心と行動力だ……とこつそり感心していたおれだつたが、かんなの次の言葉には、度肝を抜かれた。

「なんでも、魔王の父親と、金城先輩の母親、不倫してたんですね」

なんか急に昏ドラ始まつたぞオイ！

「金城先輩の父親はずいぶん前に亡くなつたらしいんだけど、魔王にはちゃんと父親も母親も存命してゐるのよ。

魔王も金城先輩も、親たちのそんな関係は全然知らないで一緒にバンドをやつていたんだけど、ある日、魔王とバンドのメンバーのもう一人が、二人の親が一緒に夜の街にいるところを目撃したらしくて……結果、金城先輩はバンドを脱退」

かんなの話を聞きながら、おれは情報を整理しようと努めた。えーと、煌は確か、ヒロインの父親の親友の息子つづー話だつたよな。その親友つて、不倫してた母親？ それとも死んだ父親？ どつちにしろ、煌はずいぶん複雑な境遇もちみたいだが……。

「つてことは、もしや時期はずれの転校は……それが学校中に広ま

つて居辛くなつたから、とか？」

「ううん、それはないみたい。バンドを脱退したのは去年の夏頃だつて話だし、バンド内では相当もめたみたいだけど、その事実が学校にまで広がつたつてことはなかつたみたいよ」

「じゃあ、おまえのイトコはなんでそんな事情通なわけ？」

もしや、イトコも報道部？ と心の中でつゝこんだのだが、かんなは何故かちよつと顔をしかめ、こう答えた。

「実はその真海のバンドのメンバーなのよ、うちのイトコも

「……そのメンバーつてもしかして」

「ギター弾いてた、道家口（みやかぐち）」

ド派手な赤い頭をした、壊れ系のニヤニヤ笑いが脳裏に蘇る。

「親戚とはいえ、普段は極力関わりたくない奴なんだけどね……」

と、ため息をつくかんな。

一方おれは、とりあえず、まさかとは思いつつ奴が攻略キャラではないことがはつきりと判明して、その点には心の底から安堵したのだった。

よかつた。本当に、よかつた。

「和希。今日は向こうに出来るから」

放課後。ホームルームが終わり、竹刀を軽く掲げる悠斗に、おれは大きくうなずいた。

「ああ、おまえ、先週も先々週もずっとバンドに付き合つてくれてたもんな。『メンな……大丈夫か?』  
「謝る必要はない。やると云々受けたからこな、中途半端は嫌だつただけだ」

きつぱりと答えて、去つていぐ。男前。

軽音部の扉を開くと、一番乗りだつた。いつも通り、からだをほぐすストレッチから始める。

歌うのにどうしてストレッチ? と最初は疑問に思ったのだが、歌が上手くなるには、『歌うためのからだ』を作ることが必要なのだといつ。そのからだ作りこそがボイストレーニングであり、ストレッヂはその大切な準備運動、というわけだ。

首を左右、前後に倒し、ぐるぐると回転。これを5回。

首の横の筋肉をもみほぐした後、顔面マッサージ。

そして、開脚。からだを前に倒す。始めたばかりの頃よりは多少、柔らかくなってきた気がする……などと思つていたら。

「つひやひやうー?」

いきなり首の後ろに冷たい何かを当てられて、おれは弾かれたようになに身を起こした。

「早いね、和希ちゃん」

振り返ると、缶ジュークを手にした王子が楽しげに瞳をきらめかしていた。

「何すんだよ! 心臓止まるかと思つたぞ! ?」

「「めん」「めん。暑くなってきたし、水分補給はちゃんとしようね。終わったらこれ、飲んで」

確かに、のどはぢょ「うじカラカラ」だった。くつ、もう少し抗議してやりたい……が、差し入れは正直ありがたい。

「~~~~~わんきゅー。」

しばしの逡巡の後、複雑な表情で受け取つたおれに、王子はクスクスと肩を揺らした。

「手伝おつか？ ストレッチ」

「やだ。おまえ、すぐ痛いことすんだもん」

「」の男、爽やかな顔してさり気に少しだと懶つ。それを指摘してやつたら、王子は驚いたように瞬きしてみせた。

「そうかい？ 「ーん……確かに、和希ちゃんに對してはそういう面もあるかもね。」「めん。だけど、君の反応がいつもあんまりにも可愛いものだから、つい」

「」の男と微笑みながら、相変わらずとんでもないことを告白していく。つたぐ、「」の男は！

「んなこといつて、見たぞ？ 昨日、年上美人とデートしてると」。彼女いるなら他の女にまでいい顔すんじやねーよ」

ズバリと言つてやつたら、王子の顔色がさつと青ざめた。

「和希ちゃん……誤解だよ」

「言い訳無用。キスまでしてて、ただの友達なんかのわけねーだろ！」

怒るような口調になってしまったのは、誤魔化しがキライだから。煌はこいつのこと不実な奴じゃないとか言ってたが、あの時、王子だって、しつかりキスに応えていた。にもかかわらずヒロインにまで手を出そうなんて、やっぱ節操なしじゃん！？

魔王に与えられた屈辱がよみがえり、王子にだぶつて見えたのかもしれない。

冷たい目で睨みつけてやると、王子はハツと息をのみ、うつむいた。

……そんな傷ついたような顔したって、知るものか。

「……どうした？」

新たに入ってきた煌が、その場の不穏な空気を察したのか、微妙な顔をした。

「なんでもねー。悠斗は今日は剣道だから、ミーティング始めようぜ」

王子はこちらを見て、一回、何か言いたげに口を開きかけたが、おれが素知らぬ顔で「次の関東大会でやる曲はどうする?」と話を振ると、少しだけぎこちのない笑みを浮かべた。

「……関東大会は、8月下旬のステージ発表のみ。演奏曲を今焦つて決める必要はないと思うんだ。その前に、もつと色々な曲に挑戦してみて、バンドとしての実力や幅を広げるのはどうだらう?」

「……賛成」

怪訝けげんそうにあれ達を見やつていた煌だが、とりあえずそつとしておへりとに決めたらしい。王子に同意を示して、言葉を継ぐ。

「なにより、ステージに立つ経験をもつと積んだ方がいい。関東前に、ライブハウスができるだけライブやるひつぜ」

「いいな、それ！」

舞台慣れしてないのが、都大会のおれの敗因だった。経験を重ねれば、舞い上がることもなくなるだろつ。

「やるうぜ、ライブ！」

「俺がバイトしてるライブハウスなら、わりと規模もでかいし、いい予行練習になると思う」

「へえ、おまえ、ライブハウスでバイトしてたんだ？」

「ああ。オーナーは気さくな人だし、ときどきドラマも叩かせてもらえるし、いい所だぜ。設備も充実してる。ただ、持ち歌がオリジナルで5曲あることと、オーディションで合格することが、ステージに立つ条件」

「おおっと、条件付きかい。

王子がうなずく。

「楽曲のストックはあるよ。前練習してた3曲にあと2曲加えればいいんだから……あ、でも明日からテスト週間で部活禁止だね」

「楽譜だけ今日配つて、あとはしばらく各自、個人練習だな。……和希、おまえは無理すんなよ」

「テスト……と思いだし、ずーんと落ち込むおれの肩をポンポンと叩いて、苦笑する煌。

「ああ、どうせおまえらは焦つて勉強したりする必要ないんだろ？ なあ。」（やつかみ）

「テスト爆発しろ。賢いやつら爆発しろー！」

部活後、校門前でかんなに会つた。

「バカちん、ちゅうどいことこりにー。明日から遊び自重しなきゃだし、寄り道して帰るー！」

「Jの季節になると、下校時刻でもまだずいぶんと明るい。

そつそつ、制服も今日から夏服になつたんだ。白の半袖ブラウスに赤いリボン。ダークグレーのボックスプリーツのスカートは裾に一本ラインが入つて、黒レースがチラリとのぞくように付けられているのがちょっと特徴的。

「駅前に、すつJへ美味しいクレープ屋さんができたんだって

おお、それは行かねばなるまい！ とついていつた先のクレープはなかなか美味かつたが、その後でかんなが「あ、セールやつてる。ちょっとみてつていい？」と入つた店を見てギョッとした。

女性用下着ショップ。無理！

「Jの辺にCD屋ねえかな？」

「J先の通りにあるよ～すぐわかると思つ」

「じゃ、そつちで待つてる」

と、分かれたのが運の尽き。

迷つた。(ドグーン)

やつぱJのヒロイン、絶望的方音痴。

しかも、なんか薄暗い、怪しい雰囲気の路地に来てしまつた。早く引き返さなきや……

「お嬢ちゃん、激力ワイヤね～。オレらと遊ばない？」

ホラきたー！

出のと思つたんだよ、Jーゅー奴らが！

「美楠の制服ってことは、けつこうお嬢様じゃない?」

「学校のベンキヨー以外のこと、いろいろ教えてあげるよ」

「全力で断る！」

きつぱり言ってチノペラ達の囮みを抜けようとしたが、腕をつかまれ、拘束された。

「エンリコさんなよ」

——緒に渝しておつづけ下さい。

ぐるり、と脇の周りをなめ回して、いやらしい笑みを浮かべる男  
ども……ひい～キモいキモいキモい！

と、チシヒラ達の表情が変わった。一点の方向へ、ガンを飛はしている。その視線の先を辿ると、逆光に佇む一つの黒い影。

おれの中に、ピアノの重低音の和音の連打と「おとづせんおとづせん」と泣きわめく子どもの歌詞が印象的な、ショーベルトの超有名曲が響き渡る。 魔王。

「ああん? 何見てんだ……ひでぶ」

魔王が繰り出した拳にあつさり吹っ飛んだ。

「チ、チンピラA - - ! てめえ、何しやが……あべし」

二十一

- 104 -

ナニヤ！

「ぱりびつぶつペリモモウ」

……まさに瞬殺。

魔王はピクリとも表情を動かさず高速の拳や蹴りで迫りくるザウードもをやすやすと躊躇<sup>ちゆう</sup>と、フンと不遜<sup>ふそん</sup>に鼻を鳴らした。息一つ乱していない。

「あ、ありがとな。助かった」

「別に貴様を助けようとしたわけではない。腹の虫<sup>むし</sup>が悪い」とハンド田障りな蠅<sup>はえ</sup>どもが煩<sup>うなづ</sup>かつたから、駆除したまでのことで

不機嫌<sup>こまげ</sup>そうに言<sup>こと</sup>い放つと、ギロコ<sup>こひら</sup>とこひらを一齧<sup>こちく</sup>した。

「気分が優れぬ。憂<sup>う</sup>さ晴らしこ付<sup>つ</sup>き合<sup>あ</sup>」

「は？ いや、おれは友達<sup>ともだ</sup>ときてるし……」

「先に帰れと命じればよい」

問答無用でおれの腕をつかみ、ずんずんと勝手に歩き始める魔王。振りほどきたくとも、ビクともしない。

ぎやー！ 拉致<sup>らし</sup>られるー！

助けられたはずが、余計<sup>よけい</sup>ピンチに陥つてゐる<sup>さが</sup>がするんですけどー！？

魔王が入つていったのは、地下の高級そうなバーだった。ちょ、未成年!!

店内には、アクアリウムつていうんだつけ……たくさんの水槽が展示され、緻密ちみつに配置された色とりどりの熱帯魚やサンゴ、水草など、青白い光に照らされて幻想的な水中世界を演出している。

「貸切だ」

魔王が告げると、オーナーらしき人物は「かしこまりました」とすつと腰を折つた。（まだ早い時間だから、他の客はいなかつた模様。）

奥にはちょっとしたステージとマイク。

その前の大理石のテーブルに魔王が腰を下ろすと、さつとウェイターがきてボトルを差し出した。ピンクのダンペリ……だから未成年だろおまえ!!

「和希」

鼻にかかつたような艶美えんびな低音で名前を呼ばれ、あーいでくいっとステージを指し示された。

「何か歌え」

「はあ!? いきなり何言つて……」

「聴いてやるから、俺のために歌えと言つている」

な、なんつー無茶苦茶な。しかもこんなオサレなバーでなにを歌えとー?

ちょっと悩んだが、運ばれてきたカラオケ機にええい！と入力したのは、かつて社会現象も巻き起こしたというロボットアニメの有名なOPテーマ。残酷なうで始まるアレ。

中途半端なJ-POPなんかよりは魔王の雰囲気にしつくづくる気がしたから。「使途」とか「原罪」とか好きそうだし、こいつ。生ハムをつまみながらグラスを傾ける魔王（すこく慣れてる感じがするのがどうかと思う）の前で、マイクを握る。いくぞ。上等のスピーカーなのか、流れ出した伴奏は高音質だった。

ああ、やっぱ、ヒロインの声、いいな。

ボイトレのおかげか、声量もでてきたと思う。

とにかく歌いやすいし、テンションあがる曲なので、またいつのまにかノリノリで気持ちよく歌つっていた。

最後のフレーズを叫ぶように歌いきり、魔王に視線をやると、肘ひじをついて両手を前で組み、そこに口元を隠すように神妙な面持ちをしていたので、すつ転びそうになつた。

「おま、そのポーズ……！」

「？ どうした？」

怪訝けげんそうに眉をひそめる魔王。

「初めて聴いた曲だつたが……悪くない。もつと歌え」

無自覚のゲンドウ！？

実はこいつ、天然キャラ！？

内心大いにツッコみつつ、次におれが入力したのは、奇抜な衣装やパフォーマンスで何かと話題の女性シンガーのヒット曲。ちょっと前に来日報道でよく流れてたのが頭に残っていたし、純粹に好き

だつたから。

もうカラオケにきたと思つて『ままに歌つ』とした。いかにもな『テー』トより、正直助かるし。

魔王も、聴いているのかいないのかイマイチよくわからないが、マイペースにグラスを傾けながら、目線はずつとこっちに向けられていた。

そんな感じで何曲か流していただつた。いきなりふらつと魔王の体が傾いだと思つと、ソファに埋もれるように倒れここんでしまつた。

「魔王！？ バカ、飲みすぎじゃねーかと思つてたんだ……」

駆け寄つてみたが、呼吸が荒く、ただの酔つ払いではなさそうだった。ひたに触れたら、めちゃめちゃ熱い。

「たわけが。酒に酔つたことなぞ一度もないわ……」

憎憎しげに言葉を吐き出す魔王は、無理やり身体を起ししたが、ひどくしこぞうだつた。

「不覚。俺ともあらうものが、ウイルス如きにこじまでやられるとは……」

『『ウイルス如き』つてじやあ、風邪か！？ 単なるー！？』

重病もひとかじやあねーんだな？ はあーつ、びびりせやがつて。

「体調悪いなら家で寝てろよ」

「フン、風邪など酒を飲んでいれば治る」

「てめーはどこのなんべえ親父だー！」

おれのツツコウ!! 魔王はムツとしたよつて口を開きかけたが、その気力もわかなつらしく、ぐつたりとしていた。

「病院行くか?」

「……医者は嫌いだ」

「子どもみてーなこと書つてんじゃねえよー！」

ああ、もう、なんなんだー! いつ。

それでも魔王が頑として拒むので、結局家に帰すことになつた。店の前にタクシーを呼んでもらつて、乗り込む。気だるげに囁かれる住所をなんとか聞き取つて運転手に伝え、たどり着いたのは都心の高層マンション。

でかい身体をやつとかつと支えて運び、最上階の一つしかない玄関のインターフォン（二階全部魔王の家らしい）を押したが、応答はなかつた。

「当然だ。一人で住んでるからな……」

弱りながらも尊大に呴いた魔王が出した鍵で扉を開き、なんとか寝室のベッドまで連れて行つた。

あーつ、重かつた！

横たわつた魔王は、ハアハアと荒い息を吐き、頬を紅潮させている。玉のような汗で生え際の髪がしつとつ濡れ、なんだか艶かしい。

乱れたシャツの襟<sup>えり</sup>元からのぞく、くつきりと浮かび上がつた鎖骨

つてなんかおれ、妙に心臓ドキドキしてんんですけどー? ？

心なしか頭がボーッとなつて、体も熱い。そういえば、いつのま

にかどこから、前も嗅いだよつなほのかない香りが……ま、まさかこれが煌の言つてた『魔王フエロモン』つてやつ！？  
ひい～勘弁してくれ！ おれはそーゆー趣味ないから！

ビシッと自分の両頬を叩いて気合を入れなおすと、冰水を洗面器に張つて、探し出してきたタオルを浸して魔王のひたいに載せてやつた。

苦痛にゆがんでいた口元が、心地よさげに少しだけふつと緩む。

「実家の電話番号は？ 誰か来てもうつたほうがいいだろ？」

「両親は……ともに、仕事最優先だ。忙殺されて、滅多に家には戻らないし、別々に暮らす前から、俺が倒れたからといって帰ってきたことなど……皆無だ」

途切れ途切れに語られる内容に、一瞬言葉を失う。

設定としちゃ、よくある話だ。けど、魔王本人にとつては『設定』なんかじゃない『現実』で、『よくある』なんて割り切れるもんじやないだろ。

寂しい、よな……。

だからといつて、同情の言葉をかけても「こつが喜ばない」とはわかつた。から、「そつか」とだけ心えて顔をしかめて見せた。

「つたぐ、風邪引いてるのに遅くまでフラフラしてんじゃねーよ」

「俺も、さつさと帰るつもりで、いた……」

「じゃあなんで……」

眉をひそめたおれに、魔王は呼吸を乱しつつ「貴様のせいだ」と吐き捨てるように言つ。

「貴様にさえ、会わなければ……」

「はあ！？ 人のせいにすんなよ！」

呆れてそう返すと、魔王はチッと不本意そうに舌打ちした。  
こいつ、ほんと態度悪いな……とため息を漏らした時だつた。  
不意に、熱い掌が伸びてきて、おれの手首をつかむ。  
あ、と思ったときにはベッドに引きずり込まれていた。

3-1・魔王、襲来（後書き）

れあ、さうめで血量こよひ（笑）

おれの頭の左右に両ひじをつきながら両手首を押され、上から覆いかぶさるような体勢をとつた魔王は、苦しげな息を吐きつつも、煽情的な笑みを浮かべている。

ぎょえええええ。

ヒマージュンシー。ヒマージュンシー。緊急事態発生……！

「アホか！ おまえ、こんなことしてると場合じやねーだろー…？」

「汗をかけば、風邪の治りは早いといつ……」

魔王の田は間近で見ると、翠がかつた不思議な色で。その瞳でじつと見つめられた途端、また例の匂いがして、全身の力が抜けていつた。

魔王の舌先が、首筋に触れる。

背筋に奔った震えに、おれはビクリと身を弾き

「ふつぎ、けんなーーーーー！」

渾身の力をふりしぼつ急所を蹴り上げてやつたら、魔王は無言で悶絶した。その隙に、即脱出。

ああああああ危なかつた……！

鳥肌！ マジで全身チキン肌！

「心配したおれが馬鹿だつた！ そのまま朽ち果てて冥界へ帰れー！」

叫んで、部屋を飛び出す。

つたく、腹立たしい！

あんにやう一、恩を仇で返すような真似をしやがつて……！

マンションの廊下を、ドスドスと突き進んだ。

……けど。

全身の恐怖がおさまるに従つて、脳裏に浮かび上がつたのは、ぐつたりとした魔王の弱りきつた様子だった。

あいつ、本当に、具合悪そうだつた。

ガランとだだっぴろい、魔王の家。家具はどれも凝つてて高級そ�で、でもどこか無機質で殺風景なあの場所で、たつた一人でゼエゼエと苦しむあいつの姿を想像すると、なんだか胸がモヤモヤした。家族がダメなら友達とか呼ぶならいいけど、そーゆータイプとも思えない。

……があーつ、クソ！ 知つたことか！

おれはむしゃくしゃする気持ちを持て余したまま、エレベーターの降下ボタンを連打した。

「 氷枕！ 買つてきてやつたから使え」

戻ってきたおれを見て、魔王は虚をつかれたように小さく口を開いた。いつもむつりと不機嫌そなこいつが、こんな無防備な顔をするのもけつこう稀少価値なんじやないだろーか。

「レトルトがゆと薬も買ってきてやつたから大いに感謝しろよ！  
言つておぐが、今度妙な真似しやがつたら本気で刺す」

おれが皿を据わらせて果物ナイフを突き出すと、魔王は2、3度  
瞬きしてから、掌を広げて自分の顔面を覆つた。その肩が、ククク  
クク……と震えだす。

「奇妙な女だ……なぜ、そこまでする。俺に惚れてるのかとも思つ  
たが、そうではないらしい」

「当たり前だ！」

「当たり前ではない。俺を拒む女など、未だかつていなかつた」

真顔で言つものだから、シバキ倒したくなつた。落ち着けおれ、  
一応こいつは病人だ……。

「ほり、おかゆ、これ食つてから薬だ」

さしだしたおかゆを素直に受け取り、咀嚼そしゃくする魔王。

「味はどうだ？」  
「不味い」

……が、レトルトだしな。

その時、おれのケータイが鳴り出した。表示は、煌。

「もしもし」  
『和希？』

煌が、受話器の向こうでホツとため息を漏らしたのが伝わつた。  
そーいや、もう21時を回つてゐる。今まで、こんな時間まで出か

けてたことなかつたな……。

「悪い、夕食、帰つたら食べるから。ラップして置いといてくれ」  
『ああ。気をつけて帰れよ……今どこだ? 迎えに行つてやるうか?  
?』

「あへう……つと、その、かんなの家、だけど、勉強してゐるうちに遅くなつただけだから。まだ何時になるかわからんねーし、迎えはいいよ」

とつねに嘘、ついてしまつた。

かんなに、煌と魔王の因縁を聞いたばかりだつたから、魔王と一緒にいるなんて言えなくて。

『.....』

沈黙がなんだか氣まずくて、おれは早口で言葉を継ぐ。

「大丈夫、一人でちゃんと帰れるつて。もつと今まで子どもじやねーんだから、心配すんな」

『.....馬鹿。子どもじやねーから、心配なんだ』

少し怒つたよつにそつ言つてから、あんまり遅くなつたらタクシ一使えよと言つ添えて、通話は切れた。

.....もしや夕食、待つてくれたんだるーか。かんなには連絡したんだけど、家にも一言言つてた方がよかつたな.....と反省しつつ、顔をあげると、魔王が怒りの形相でこぢりを睨んでいた。

「貴様.....金城煌の女だつたのか」

通話の声が漏れ聞こえたのか？ 音楽やる奴は耳がいにいつていうけど、さすが魔王、地獄耳……つてつまうこと言つて居る場合じやねえ！

「だーれーが！ 失礼なことほぞぞくな。おれは誰の女でもねえよ！ おれはおれ自身のもんだ！」

本氣でムカついたので全力で怒鳴りつけてやつたら、魔王の両目が意表をつかれたように見張られた。

「あいつとは訳あつて、一緒に暮らして居るだけだ」

「一緒に暮らしていて、何もないわけがない」

「全人類がてめーみたいに下半身主体で生きてると思つなつ…」

「ふむ……？」と魔王はいかにも不可解そうに首をひねつていたが、それ以上は何も言わなかつた。まあ、また体調悪くなつてきたみたいだし、もうそんな体力もないのだろう。

「ほら、食べ終わつたなら薬、飲め」

「……口移しでなら飲んでやつても良い」

「こいつそ息の根止めてやるうか……？」

マンションのセキュリティは抜つなくなつてんだとか  
酒飲んだ後の薬は……とか、細かいこと（^\_~）は気にしない。

### 33・嘘がばれて

その後しばらく様子を見ていたが、薬が効いてきたのかだいぶ落ち着いてきたらしいので、さすがに帰ることにした。

「待て……アシ代だ」

魔王が懐から取り出した万札の束に、盛大に吹いた。何センチあんだソレ。

「おれは海外在住かよ！……釣りは次会えたとき返す」

一枚だけありがたく頂戴したら、魔王は不服そうに唇を尖らせたが、何も言わなかつた。眠くなつてきてるっぽい。

「ちゃんと治るまで夜遊びは控えろよ  
「俺に意見するなど、小瀬な……」

偉そうな口調も、弱つてゐるせいか、妙なおかしみがあつた。思わず口元が緩んだまま、「<sup>よつじょつ</sup>養生しろよ」と声をかけ、部屋を後にした。

帰りついた自宅のリビングでは、煌がテレビを見ていた。

「ただいま。腹減つた！」

「ああ。おかえり」

ソファからちらりとこちらに投げた視線を、すぐにまた液晶画面

に戻す。

なんとなく、よそよそしい……と思つたら、椅子におれの学校指定の補助バックを見つけて、一気に血の気が引いた。

「これ……ー?」

「クレープ屋に忘れてたって、かんなが届けにきた」

ぐわーーん。

自分の馬鹿加減に本氣で泣きたくなつた。

おれ、さつきこいつに、かんなといふつて言ひやがつたの……。

「嘘ついて、ゴメンー ちょっと、事情があつて」

回り込んで真正面から頭を下げた。

「……別に、俺にはおまえの行動の全てを知る権利なんてないけど……」

「ふせんとした表情でそういう煌の瞳には、なんとも言いがたいやるせなさが騒っていた。

……傷つけた……！

その事実が、胸をえぐり、のどが詰まる。心配してくれてたのに。

「……ごめん」

心底自分に嫌気が差して、申し訳なさにこゝばになつて、うな

垂れていたら、煌が立ち上がるのが気配でわかつた。

緊張に身を強張らせるおれの頭に手が伸びて、前髪をかき上げる  
よつに、軽く上向かれる。

「！？」

キュッシュキュッシュキュ

黒マジックで、ひたいに何か書かれた。

…………は！？

「似合ひづ

□元に大きく弧を描きながら煌が渡した手鏡、それに映るおれの  
「口」には、はつきりと「肉」の一文字が。

「なんじやこりやーー！」

意味不明の展開に絶叫するおれに、煌は腹を抱えて爆笑してから、  
「嘘ついたバツだ」と胸を張つた。

バツつて……小学生のイタズラじゃねーんだから……。

「でもおまえ、嘘下手すぎ。どうせ最初からバレバレだつたつー  
の」

からかいつのような口調でそう言われて……やべ、またうつと、泣  
きたくなってきた。  
せつかく、フォローしてくれようとしてんのに。

だからこそ、余計。

唇をかんで黙り込むおれに、煌はふと真顔になつて、言った。  
まつすぐこっちを見つめながら。

「俺はおまえが無事なら、それでいい」

「…………って、おまえはおれの保護者かよー」

言葉を失つて、よじやくしぼり出したのがそれだった。

「ほんとだな、冗談かよつて思つ、我ながら」

明朗に笑う煌に背を向けて、2階に駆け上がつた。つて飯食つ前に自室に戻つてビースンだよ、おれ！ なんかパニクつてるじゃん  
……！

きっと、こんなに真つ向から好意をぶつけられたのは生まれて初めてで、無性に照れくさくなつたんだと思つ。

あいつの視線の先にいるのは、あくまでこのゲームの「ヒロイン」で。その根底に恋愛感情があるのは間違いないのに、どうしてどう、嫌な気持ちは生じなかつた。

……たぶん。この時あいつから感じられたのは、男とか女とかを超えた、相手の存在の全肯定だった……から、かもしれない。

確かに「保護者」の言葉が、しつくつくるよつた。

そんな恋愛感情が実在するか知らないけど、この時は確かに、そんな感じがしたんだ。

それにしても、都大会が終了した途端になんだこの怒濤のイベントラッシュ……と思いきや、それから一週間のテスト期間は逆にぱつたりと何もなく過ぎていった。部活もないし、ひたすら勉強中心で、ときどき新曲の個人練習をしながら日々を送る。

心配していた期末の手応えは、結果がまだ出でないので不安も大きいが、現時点のおれの実力にしてはそこそこできた方じやないかと。

必死のがんばりの甲斐あって、追試はまぬがれた、と思つ。

最後の科目が終わつた7月5日火曜日の放課後。  
テスト休みが明けて顔をだした久々の軽音部は……暑かつた。  
今日は全国各地で猛暑日だとか。  
窓を開け放して扇風機を回すが、温い風が吹き付けるだけでなんともきびしい。

「年々暑くなつてゐるよな、絶対……」  
「熱中症には気をつけなきやね。食べるかい？」

ハンカチで汗を押さえつゝ、王子が塩分補給飴えんぶんほけいとうあめを渡してくれた。お得意のキラキラも、今日は飛んでいない。どことなく疲れて見えるのは、さすがの王子も暑さでまといつてゐるからか。

「コンビニでアイスでも買つてくるか」

煌の提案に、「じゃあ」と手を挙げた。

「ジャンケンで負けた奴がみんなの分の買い出しなー はい、じゃんけん……」

ポン、でその場に出されたのはチョキ、チョキ、チョキ、おれだけパー。

「がんばれよ、言い出しつべ」

「えーっとぶーたれながら炎天下の中、校門へと向かっていたところ、「和希ちゃん」と呼び止められた。後ろから駆け寄つてくるのは、王子。

「どうした?」

「今日の部活のあと、時間くれないかな? どうしても、聞いてほしい話があるんだ」

こつになく真剣な表情で頼み込まれて、思わずたじろぐ。

「別に、いいけど」

承諾すると、王子はホッとしたように田元を緩めた。

「ありがとう。……買い出し、一緒に行こうか?」

「んにゃ、たかがアイス4人分だし。先にボーカル抜きで練習しつけよ。早くオーディション受かつてライブしたいし」

せっぱり断ると、王子は少し残念そうにうなずき、戻つていった。

容赦なく降り注ぐ熱光線。ジジジジジ……とつねにアブレゼンの泣き声。

アスファルトの歩道にはゅらりと陽炎が浮かび、コンビニでgettしたアイスもたちどころに溶けてしまいそうだ。

ああ、これならガリガリ君じゃなくてアイスボックスにすりやよかつた……！

学校への帰路を急ぎ、駆け足で角を曲がつたとたん、向こうからきた誰かと思いつきり衝突した。

「！」  
「うわ！」

ドン、とお互い路面に尻餅をつく。

「いててすみません、大丈夫……？」

腰を押さえながら相手に視線をやつたおれは、ハッと息をのんだ。

……なんだ、この美少女……！

レイヤーの入ったセミロングヘアに、長い睫毛にふちぞられた利発そうな大きな瞳。

暑さのためか淡い薄紅色に色づいた、透明感のあるみずみずしい肌。形の良い小さな鼻に、木苺のようにふるんとした唇。

ノースリーブブラウスやシフォンのミニスカートから伸びた、すらりと長い手足。

あどけないのに、凜とした雰囲気があって、ぶつちやけ超タイプ

だつた。

「うん、平氣。あなたこそ、ケガとかしなかった?」

立ち上がり、ポンポンと汚れをはたきながら、感じのいい微笑とともに紡がれた声は、意外にも落ち着いたアルト。どこか艶を感じさせるその美声と、童顔の容姿とのギャップに、鼓動がまた跳ね上がつた。

ああ、可愛い。マジ可愛い。

って舞い上がる場合じゃねえ! アイスが全壊しちゃうだろ!-

「大丈夫! ごめんな、注意せず曲がっちゃって。じゃ、おれ、急いでるから」

ちょっとだけ心残りだったけど、それだけ早口でまくし立てておれはまた走り出した。

「ただいまー」

「お~、お疲れさん」

「お疲れ」

「暑かつたでしょう? ありがと!」

もともと開け放たれていたドアをくぐると、ちょうど演奏も一区切りついたところで、三人がそれぞれの楽器から顔をあげてねぎらつてくれた。

「うつわ、ドロドロ……」

「しゃーねーだろ! これでもダッシュで帰ってきたんだから」

「次からは自分で買いに行つてすぐに食べるべきだな」

「でも美味しいよ。ありがとう、和希ちゃん」

苦笑しつつ、みんなで半分溶けたアイスを食べた。

ふつ……んまい。

シャリシャリとした歯<sup>あ</sup>いたえと共に口に広がる冷氣<sup>あ</sup>に、生き返る心地<sup>あ</sup>がある。

「モーコやモー、悠斗、たぶんうちのクラス、もつあべ転校生来るや！」

パタパタと下敷きをうちわ代わりに扇<sup>あ</sup>ぎながらやつ言<sup>あ</sup>つたおれに、

悠斗が少し首を傾げた。

「木鹿にでも聞いたのか？」

「いや、そんな情報はないけど。やつも道の角ですづ<sup>あ</sup>ー美少女と

衝突したんだ。あれが転校生でないわけがない！」

「……暑さでやられたか？」

悠斗の返事は氷のように冷たい。なんでだよ、少女漫画的にこのパターンはどう考えても転校生だろ<sup>あ</sup>ー？

でも、考えてみりやこれつて乙女ゲーなのに、女の子が転校していくのはビーサーことだ？ あ、もしかして、ライバルキャラ<sup>あ</sup>ー？

？？

その後みつちり練習して、下校時刻。

「ああ、バテた<sup>あ</sup>ー」

「やつと期末も明けたし、どうか寄つてくれか？」

「腹も減つたしな……バス停近くのお好み焼き屋は？」

煌や悠斗の誘いに、いや今田せ……と口を開きかけた時。  
ぐこつと腕をつかまれて、王予に手を寄せられた。

「じめんね。今田の和希ちゃんは僕が先約済み」

「…？」

爽やかな笑顔で言い切ると、呆気にとられたような男どもを残し、  
おれの手を引いたまま、ずんずんと校門へ進んでいく王予。

「おい、王予？」  
「たしかにお腹も空いてたし、何か軽べつまみながらでもかまわ  
ないかな？」  
「別にいいけど……」「

強引な雰囲気にちよつとたじたじとなりながらもつはずくと、王  
子は二ヶ口リと微笑み、すでに停車されていた高級車におれをうな  
がした。

で、気付けば瀟洒なレストランで夕景を見ながら「こつと向  
かい合つていたわけだが。

「おいおいおい！ 全然軽くねーだろコノ。  
メニューを開いても、舌を噛みしきるような単語が並ぶばかりで、どん  
な料理かよくわからぬ」。

「オススメは姫帆立のHスカベッシュ」  
「んじやそれで」  
「あと数品、適当に頼んじゃつていいかな」  
「任せる」

王子がウェイターに呪文のような言葉をペラペラと告げると、間もなくグラスが二つ運ばれてきた。中にはショウガと細かい泡を立てる淡い「ゴールド」の液体。

「君の瞳に、乾杯」

淡い笑みと共にセリフと超定番の台詞を口にし、チン、とグラスを鳴らす王子。ここでの「一五一」とは「めいごくい」と思つ。

「シャンパン……？」

「ノンアルコールだから、大丈夫」

口をつむると、やたらいい香りがするソーダ水、て感じだった。ウマー。

### 34・謎の美少女（後書き）

28万PV&5万ユニーク達成しました。いつも本当に、ありがとうございます。

お祝いに、掌編をアップ。他愛もない話ですがよろしかつたら、どうぞ。

つ『ときメロ』番外編 ↴和希ダイエットするの巻（<http://nocode.syosetu.com/n9094uu/>）

時期は7月下旬頃。静流も本編にフライングして登場しています。w

珍しくシリアルな王子です。

「……で、話つて？」

おれが振ると、王子は少し緊張したように歯を引き結んだ後、両手を机の上に組んで話し始めた。

「都大会の翌日、僕と一緒に出かけていた女性のことなんだ。彼女は、綾小路麗華さんといって、去年、半年だけお付き合いをしていた人でね……」

「またよりを戻したってことか？」

「そうじゃない」

語尾も消えないうちに強い口調で否定され、おれは口をつぐむ。ここは黙つて聞くことにしよう。

「もともと、両家の親たちが熱心に勧めてきた交際だつたんだ。北王子家と綾小路家はビジネスの上で互いに太いパイプを欲していたから、彼らの思惑はその先を見据えた『結婚』だといつことは明白だつた」

ふむ、政略結婚つてやつか。金持ちも大変だな……。

「僕は生涯のパートナーは自分で選びたいと断つたんだけど、うちの父は一度決めたら頑として譲らない人で、とにかく一度会つてみるしつこくて……仕方なく、一度だけ一緒に食事をすることになった。

実際、会話してみると魅力的な女性で、どうやら彼女の方もこちらと状況はまったく同じで、親がうつるさくて辟易へきえきしていふと言つた。

だ。僕らは互いに共感を覚え、意気投合した

そこで食事が運ばれてきた。

王子に促されて、おれはエスカベッシュとやらを口にする。……マリネみたいな感じ。ぷりぷりと新鮮な帆立の甘さとソースの酸味が絶妙だ。

頬をほころばせるおれを見て少し瞳を和ませてから、王子はまた続きを語り始めた。

「しばらく話が弾んだところで、麗華さんが言つたんだ。

『どちらかに好きな相手が見つかるまでは、付き合つてみるのも一つの手じゃないかしら?』って。付き合つて、上手くいかなかつたと報告すれば、うるさい親たちも諦めてくれるんじやないか。それまでは、契約上の『恋人』になるのはどうだろ? って。

まるでゲームを思いついたかのように悪戯っぽく微笑む彼女の提案に、僕はおもしろそうだと思った

「……なるほどな」

確かに、他に好きな人がいなくて、あんな美女に付き合おうつて言わされたら、そりや悪い気はしないだろう。

「実際付き合つてしまえば、もつ親たちも干渉してこないだろ?…逆に言えば、付き合つまでは、そうとう執拗に食い下がられることは確実だつたし、他に好きな相手ができればすぐに尾を引かずには別れる、という条件も気に入つた。

それで半年間『恋人』として過ごして……去年の冬に、彼女の方から好きな人ができたと報告を受けて、僕らの関係はすっぱりと終わつた。……はずだつたんだけど

そこで王子ははあつと重い吐息をもらし、グラスを持ち上げた。

「終わってなかつた、のか？」

「やうなんだ」

「」べりと一口ジュー<sup>ス</sup>を含んでのどを潤してから、憂鬱<sup>ゆううつ</sup>そうに王子は言葉を継いだ。

「突然、彼女から、また『恋人』になつてくれないかと頼まれた。僕はお断りしたんだけど……彼女はあんなに煩わしく思つていたはずの『家』を通して、再び話をもつてきたんだ。折しも綾小路との商談の真つ最中で、なんとしても向こうの機嫌を損ねたくない父の圧力はすさまじくて……ちゃんと揉めた末、一日だけという条件である日、もう一度『恋人』に戻つたんだ」

「……」

「デート中、請われるままに甘い言葉を囁いて、彼女に触れて、『恋人』の笑顔を浮かべながら、そんな自分に吐きそつた。親に反抗する力もなく、『一度だけ』『一日だけ』そんな言葉で結局するずると家の言いなりになつて……カネのために、自分にも相手にも嘘をつく

顔を歪めて自嘲の笑みを浮かべる王子に、どんな言葉をかければいいかわからなかつた。

「でも、もう絶対に、こんなことは繰り返さない。誓つよ。不条理のいいなりには、ならない」

「……そつか。わかつた。おまえにも事情があつたのに、責めるようなこと言つて、悪かつたな」

やつとそれだけ伝えると、昏かつた王子の瞳に、ほのかな光が灯つた気がした。

「よかつた……」

と心から<sup>あんぱ</sup>安堵したよつて、深々と息を吐く。

「一刻も早く誤解を解きたかったんだけど、試験期間中だからと我慢してたから、本当に苦しかったよ。こんなに何をしても手につかないことなんて、初めてだつた」

「ハハツ、期末の結果が恐いんじゃねえ？」

からかうよつて言ひてやつたら、王子は「クニヒツなずいた。

「10位以内すら厳しいね」

……いつも何位なんですか？ 真顔で言つから始末悪いよなこいつ。

それからは他愛もない会話をしながら料理をつまみ、王子の表情にいつも明るさが戻ってきた、と思つた時だつた。

「梓茶くんじやないか」

でつぱりと体格のいい見知らぬおっさんが、あからさまな愛想笑いを浮かべながら近づいてきた。

「ああ、田野尻さん、お久しぶりです」

立ち上がり、如才<sup>じょせ</sup>ない笑顔で腰を折る王子。

「いやいや、座りたまえ。それにしてもまた、立派になつて。君に

最後に会つたのは西園寺家のパーティーでだつたかな。学校の方はどうだい？ なにか困つてることはないかい？」

「はい、素晴らしい先生方と友人に恵まれて、充実した日々を送っています……」

澁みなく応じる王子の言葉に、おっさんは「そうかいそうかい」と表向きは親密そうに空虚な相槌あいづちを打ち、ポン、と王子の肩をたたく。

### 35・王様の事情（後書き）

もつひょつと王様のターン続きます。

全然関係ないのですが、先日3DSの録音機能の再生ボタンを押したら、

娘の声で「王様の耳はネコの耳~ 王様の耳はネコの耳~」。

王様にそんな萌え属性が……！ と驚愕しました。

「何かあつたらこつでも頼つてくれよ。そういうえば北王子グループは最近、四菱<sup>よつびし</sup>系列の株を積極的に集めているようだけど……」  
 「申し訳ありません。経営に関してはまだ僕はノータッチなので」「ああ、やうだよなあ。だが、古池グループとのホテル事業における合併の際には、君の提言<sup>ていげん</sup>が大きなヒントになつたと……」

探りを入れるおっさんを、やんわりとあしら<sup>あしら</sup>い続ける王子。  
 攻防はしばし続き、長にな、とおれが思つたそのタイミングで、王子が言つた。

「申し訳ありません、今日はやめやめ……」

ちらりとこちらに視線を投げると、おっさんもよつやく「おお、これは失礼」と諦めたようだつた。

「くれぐれも、『両親によるごくへ』といへりかえしながら、席へと戻つていく。

それを微笑みとともに見送つてから、こちらに向か<sup>むか</sup>りに直つ、王子は「ごめんね」と肩をすべめた。

「わるわる出ようか」

「……王子、これから予定は?」

「予定? 帰つて今日の課題をやるくらいだけ……」

「おまえ賢いんだからそれくらいこすぐ終わるよな? じゃあ、今度はおれにちよつと付か<sup>むか</sup>せ」

有無を言わせない口調で立ち上がつたおれに、王子は驚いたよつて顔をあらとさせたが、やがて、ゆるゆると笑みを広げ、「喜

んで」と会釈した。

低速でジワジワと上昇していく高度と緊張感。

それが臨界点まで達した直後、急降下とともに全身に襲い掛かる

風圧。無重力状態。

満点のスリルに自然、歓喜の叫びがあがる。

「あーっ、最高! 特にあの観覧車の隙間くぐり抜けたとか、めちゃドキドキした!」

都会のど真ん中にあるこの遊園地は、入園料無料なので、ふらつと寄つて好きなアトラクションだけ遊んだりできるところが便利。

「見て、途中で撮影された写真。アハハ、僕、ひどい顔だね」

出口で販売してた写真を手に破願する王子の心から楽しそうな様子に、おれは胸を撫で下ろした。

さつき、おっさんと話していた後に、王子の顔に一瞬よぎった深い翳。疲弊したようなひどく辛そうなその様子に、いつも笑顔のこいつが実はすごいストレスを抱え込んでるんじゃないかなって、そんな気がしたから。

さつきのレストランからの景色で、観覧車やジョットロースターが近くにあるのが見えたので、ちょうどいいと思つたのだ。

今日は、ここで思いつきリストレス発散させてやる!

「次はあれ行こうぜ、水の中落つっちゃうやつ!」

「あれは、けつこうビショビショになるみたいだよ。大丈夫?」

「いいじゃん、夏なんだし。濡れるのが楽しいんだろー?」

時刻は20時を回った頃。暖の熱気はおさまって、いい感じの風が吹いていた。これなら濡れてもきっとすぐ乾くだろ？。

「つと、ちょっとといいか？」

先週と同じ愚は犯すまい、と家に連絡することにする。

王子は入部届けを出した時点でおれと煌の住所が同じ事に気付く、おれ達の同居を知る数少ない人間の一人だったから、気兼ねなく目の前で電話をかけた。

「……あ、煌？……うん、今、王子と遊園地にきてるんだけど、夕飯もしてくれたなら食べたいから、残して……ひゃんっ」

妙な奇声をあげてしまったのは、王子がいきなり耳に息を吹きかけてきやがったからだ。

「お、王子ー？ 何しやがる……」

不意打ちに力のぬけたおれの手からケータイを奪うと、王子は「和希ちゃんは僕が責任を持つて送り届けるから、心配しないで。じゃあ」

と告げ、そのまま通話を切ってしまった。

「……君が煌と一緒に住んでる、その事実が、どれだけ僕の心をかき乱してるか、君は想像もつかないだろ？」

「……！？」

「今だけは、君を独り占めさせて」

切なげに見つめられながら請われて、ズガーン、ヒショックを受けた。

勢いで誘つちまつたけど……この状況、もしかして思いつきり「

ートー?

「じゃ、水上コースター乗るうか。あそこでポンチョ売つてゐよ

がらりと雰囲気を変えて、まるで子供のよつこ無邪氣に相好を

崩す王子。

あ、～～もう、深く考えないことにする！ 遊びまくるだ！

田ぼしいアトラクションをひとしきり回り、最後に乗つたのは観  
覧車だった。

個室に2人きりは危険な気がしたが、こいつは魔王とは違つて紳士キャラだし、そう無茶な真似はしないだろ？

いざとなつたら、鞄に潜ませたナイフもある……て悲壯すぎて我ながら泣けてくる。よよよ。

初めて乗つた夜の観覧車は、昼とは違つた魅力があった。

目前に広がる宝石をちりばめたような都会の絶景に、思わず感嘆のため息が漏れる。

「すげー。綺麗だな……！」

張り付くよに見ていた窓から王子の方を振り返つたが、こいつは外の景色なんて大して興味がないらしく、こっちを見て甘く微笑むだけだ。

「君の方が、ずっと綺麗だ」

……言ひと思つたよこと畜生（脱力）

「君みたいな子、初めてだよ。……幼稚舎時代から、僕は美楠に通つていてね。理事長の子どもだってことで、教師も保護者も周りはみんな、どこか僕を特別視していた。そんな大人の意識は子どもにも伝わるみたいで、クラスメートたちと親しくしても、どうしてもみんな遠巻きなところがあつて、壁を感じて……。

でも、君は初めて会つたときから、物怖じせずに、自然体で接してくれて……肩書きや外見だけでない僕自身を見ててくれて、すげ、嬉しかつたんだ」

「煌は？ 仲良さうに見えるけど」

「……いつ、基本的に他人には「さん」や「くん」付けなのに、煌だけは呼び捨てなんだよな。」

王子は目元を緩めて、うなずく。

「そうだね。煌も、特別。とても稀少な……心を許すことのできる、初めての友人だった。実は最初に君に会つた時、彼に似てて、驚いたんだ」

「似てる？ おれと煌が？」

それは意外な指摘で、ついつい頓狂な声をあげてしまった。だが、王子は「うん」と、はつきりと肯定する。

「君たちは、まつっている空気がとても似てるよ。明るくて、まっすぐで、優しくて……否応なしに他者の心の中に飛び込んでくる。でも、君と接する時間が増えるにつれ……僕にとつて、君は煌とはまた全然違う存在として、輝き始めた」

「……おまえさ、他人に壁を感じてつたけど、それ、おまえが壁をつくつてる部分もあると思うぞ？」

おれの言葉に、王子は少し沈黙してから、そうかな？と首を傾げた。

「ああ、おまえって、いつも一口一口してとつつきやすそうだけど、周りのこと考えすぎて、あんまり感情を表に出さないところねえか？それで逆に、人当たりいいけど何考えてるかわからなくて、近づけない感じになつてんじゃねーかなあ。

でも、おれに対しては最初からわりと強引だし、好きに振る舞つたりするじゃん？ その辺が違つたんじゃねーかな、今までとは

王子は人差し指と親指で自分の顎に触れながらしばらく考えるような仕草を見せていたが、やがて、なぜか苦笑しながら言った。

「うん……そういう面も、たしかに、あつたかも。壁を壊したかったら、自分から心を開けつてことだよね。それが難しいんだけど」「おまえは気を遣いすぎるんだよ、きっと。親にもさ、もつと自己主張していいんじゃないかと思つた？ そこまで物分りいい振りしなくていいって」

おれは心から思つたまんまをアドバイスしたんだけじ、この無責任な台詞を、おれは後にとても後悔することになるのだった。

せつと出せたー！

翌日の放課後。

軽音部で、練習を始めようと各部のチューニングやマイクのボリューム、ドラム位置の調整などのセッティングをしていたら、トントン、ヒノックの音がした。

「あつ……」

思わず声をあげる。暑さ対策でもともと開け放たれていた扉のところに佇んでいたのは、昨日道でぶつかったあの美少女だったのだ。しかし前回とはガラリと雰囲気が変わり、ずいぶんとボーカルユだつた。

えりにボリュームがある黒のパーカー型ベストとタンクトップに、ハーフ丈のデザインカーボ、足元はレザーサンダル。パーカーのダブルジップは上まできつちりしめられ、下の少し空けられた部分からぞく赤いベルトと、フード裏のチョック柄がアクセントになってオシャレ。

髪型はラフにくしゃりと後ろで一つにまとめて、肩には、ギターケースを抱えていた。

美少女はおれの方を見ると、田を輝かせ、にっこりと微笑む。うわ～、やっぱ可愛い！

「ほんにひづま。オレのこと、覚えてるかな？」

その花びらのようにに可憐な唇からとびだした声は……記憶のそれとは、なんか違った。はつきり言つて、低くて、ちょっと男っぽい。  
……ん？『オレ』？

「昨日、道の角でぶつかった女の子、だよな……？」

なんとなく脇ふに落ちない気持ちで確認したといひ、美少女は「あはは」と楽しげに笑い声を上げた。

「『めん、あれば知り合ひの悪ふざけどけよつと女裝をせられてたの。オレほんとは、正真正銘、男』

ドッカーン！ と背後で何かが爆発したよつた衝撃が走る。

男 ! ?

しかし、たしかにそつ思つて眺めれば、今の『こつは確かにちやんと男である。

最初のインパクトがでかすぎたが、冷静に判断すれば、女の子みたいな綺麗な顔をした、細身の今風の少年。

「でも、声は……？」

「ああ、あれは咽喉の辺を締めるみつにして発声したら、女っぽくなるんだ。『いんな風に』」

途中でガラリとトーンが上がり、艶っぽいアルトに変わる。すげー。両声類つてやつ！ ?

「あのカツコで男の声もキモイかと思つて、とつれに声作つちやつた」

「それで、いつたいこになんの用だ、静流？」

悠斗の一言に、静流と呼ばれた美少女もとい美少年は、くいつと口の端を吊り上げた。ん、こいつら、知り合いか？

「お久しぶり、悠斗さん。でも用があるのはあんたにじゃなくて……」

…

美少年はお邪魔します、と一言断つてから、おれの方にツカツカと寄ってきて、何かを差し出した。

「昨日、ぶつかった時に落としたよ

「あ、生徒手帳」

サンキュー、と伸ばした手をつかまれて持ち上げられたと思つたら、次の瞬間に手の甲に軽く口付けられていた。

「…？」

「よつやく会えて嬉しいよ、シンデレラ」

ギョッと田を見張るおれに、美少年はクス、と蠱惑的<sup>いぢわくてき</sup>な笑みを浮かべてみせる。

「なんちやつてね。オレは、中等部2年の紫葉<sup>しは</sup>静流。『軽音甲子園』の都大会でセンパイのファンになつて、ずっと会いにきたいと思つてたんだ」

「ファン！？」

頗狂<sup>とんき</sup>な声をあげるおれに、大きくうなずく静流。

「でも、しばらく高等部は試験休みっぽかっただから、お預けをくらつて……昨日はビックリしたよ。まさか、あんな状況で憧れの人には再会するとは思わなかつたから。センパイの歌を聴いた日から、ずっとセンパイの声が頭から離れないんだ。同時に、あの時の輝くよつの笑顔も……」

熱っぽい視線で見つめてくる静流にギターやっていたら、

「ギター弾くのか?」

煌がドラムの椅子から下りて、近付いてきた。顎で、静流のギターケースを指す。

「うん、まあ手遊び程度にね。あ、それでね、センパイ達、よかつたら一回でいいから、オレとセッションしてくれない?」

「セッション?」

意外な申し出に、みんなして顔を見合わせてしまった。

「ん、都大会とまつたく同じに演奏してくれたら、それにオレがギターで混ざるから。あの曲……『Let's Party』、すごく気に入っちゃったから、一緒に弾いてみたいんだ」

……ダメかな? と心なしか潤んだ大きな瞳で頬み込まれて、言葉に詰まる。

何ドキドキしてんだよ、おれ! いくら好みの顔してたって、こいつは男なんだって!

「……んじゃねえ? おもしろうだ

「そうだね」

「……練習前の肩慣らしになるか」

なにやらやる気になつて準備を始める面々。ま、断る理由もないか。

軽快に響く、煌のシンバル4連打。

ベースとキーボの奏でるフレーズに、ギターが被さり、いきなりおおっと思った。  
なんか、音にぐんと厚みが！

静流は不規則に弦をかき鳴らしたり、メロディーに重ねたり、かと思えば細かくリズムを刻んだり、一見気ままに弾いているようだつたが、曲全体が賑やかになつて迫力が増していた。

そして、間奏。いかにも楽しげに瞳を煌かせながら静流が始めたギターソロに、おれはぽかんと口を開けた。

背筋がゾクゾクするようなすっげーエキサイティングな音が、超カッコいいオリジナルのフレーズを奏でながらビートを刻む。

これは……巧すぎるだろオイ！ センスありますぎー！

細い指先が魔法のように閃き、絶対難しそうなのに、なんでもないようすにさらりと弾いてやがるのが信じられない。

ぐあーっとあお煽あおられるように全身に高まっていく、熱。うわあああ、燃えてきた！

最後のサビ以降は、ひたすら激しく弾奏して、全員で揃えるラストで完全燃焼。

……すげー、ダイナミック。

華やかさと躍动感が増し、パーティの規模が格段にでかくなつていた。

こいつ、この曲、都大会で一回聴いただけなんだよな？

なんでこんなとんでもねー演奏がいきなり合わせられるんだ？

「最高！」

無邪気に微笑む静流に対し、あまりの凄さに半ば呆然とする一同

……いや、悠斗だけは冷静で、小さなため息を漏らしていた。

「……紫葉くん、君も僕たちと一緒にバンドやらないかい？」

頬をかすかに紅潮させ、勧誘を始めた王子に、静流はふるふると首を振った。

「いえ、練習とかめんどいし、大会出場すとか熱血するの、好きじゃないんで」

「んー？ 仲間になるんじゃねーのか？？」

「でも」

と静流は大きな手をぐるりとさせ、言葉を継いだ。

「じゃあ部屋には顔出せてもいいといいかな？ バンドはしないけど、軽音部には入りたい。センパイたちの音楽、凄く好きなんで。曲のアレンジとかもアドバイスさせてもらえるなら、協力できると感心だ」

「俺が中1まで通つてたギター・ベース教室に、あいつも通つていたんだ」

部活の終わった下校途中。バス停前の売店で買ったソフトクリームを舐めながら、「ビーチー知り合いで?」と尋ねたおれに、悠斗は淡々と答えた。

「やめてからは会つてなかつたから、だいたい3年ぶりだな。中等部にいるということは小耳に挟んでいたが……」

「可愛くなつてたから思わずトキメいちやつたんじゃねえ?」

揶揄するように言つてやつたが、悠斗は意味不明とこいつに置き去りにされた。ジョークのわからん奴だな……。

「たしかに小学生の頃はしょっちゅう女と間違えられていたようだが。あいつもそれをネタにわざと騙すような悪戯もしていた記憶がある」

まあ、今でもあんだけ美少女然としてるんだから、幼い頃はさぞかし可憐だったことだらう。

「思い出した! 紫葉静流!」

たこ焼きをつつきながら何やら田を眇めていた煌が、不意に声をあげた。

「『天才ギター少年』つって、ガキの頃けつこつてレジで出したよな

？」

「ああ。あいつは天才だ……ギターの技量も、アレンジの才能も。本気になれば、きっとプロでも通用する」

「一時期かなりメディアに出まくってたけど、パタツと見なくなつたんだよな。なんかあつたのか？」

「……さあな」

煌の疑問に、悠斗はそつなくそれだけ返し、飲み終わったペットボトルを傍らのゴミ箱に投げ捨てた。

ん~、なんか知つてそうだけど、話す気はないって感じか？

「でも、王子つてば勧誘してたけど、そもそも『軽音甲子園』に中学生が出れるわけ？」

「たしか『軽音甲子園』の出場条件は年齢が18歳以下であることと、メンバーに一人でも高校生が入っていること。途中メンバーの追加や交代も一人までは認められてたから、その点は問題ないはずだぜ？」

そーなんだ。

「ギターも加われば更に演奏の自由度は広がるけど……ま、今の4ピースでも十分だろ。この調子なら、オーディション受けて、再来週末にはライブってのもギリいけるかも？」

話しつつ、ホレ、とばかりに煌が差し出た爪楊枝つまようじのたこ焼きにかぶりついていたおれは、むぐっとあわててそれを飲み込んでから、問い合わせた。

「え……そんなトントンと出れちゃうもんなの？」

「ちょうど24日に、いくつかのバンドが出演するライブイベント

が予定されててな。異例ではあるけど来週前半までにオーディションをクリアできれば、出てもいいってオーナーが。俺の人望のおかげだな。ただ、もちろんオーディションはいつさい妥協しないって」「うわ、それは出たい！……けど、来週前半ってことは、あと一週間か」

「うーん、本当にギリギリだな。第一、悠斗がどれくらい練習に参加できるのか……。

おれがそつと右隣を仰ぎ見ると、悠斗は小さく嘆息した。

「わかった。オーディションまでは、毎日来よ！」

「で、でも、ずっと都大会練習でこっちに付き合ってくれて、その後すぐ試験休みだつたら？ で、昨日も今日もバンドに顔出して……剣道、ほとんど出でないじやん。大丈夫か？」

「基本的に個人スポーツだから、周りに迷惑はかけないし、自己鍛錬を怠つていなければ問題ない」

「次の大会は団体戦もあるんだろ？ 剣道部の他の奴らは、何か言つてきたりしねーの？」

煌の指摘に、悠斗は泰然<sup>たいぜん</sup>と言い切つた。

「そういう奴らは、実力で黙らせればいい

すげー自信。

でも、こういうのつてめっちゃ反感買<sup>い</sup>いそ<sup>う</sup>だ。大丈夫か？  
とはいえ、バンドに協力してくれるのは、非常にありがたいわけ  
で。

おれと煌は、不安の混じつた田線を互いに交差させたが、言葉を見つける暇なくすぐにバスがやってきて、その話題は終わってしまった。

その晩は熱帯夜だった。ビルにも寝苦しくて、外の空氣に当たらうと窓辺によると、隣の家の庭で竹刀の素振りをする悠斗の姿が見えた。

……こんな遅くまでやつてんのか、あいつ。

朝も、早くからジョギングしてゐるのに遭遇したことがあった。おれはせいぜい2キロコースだけど、あいつは毎日もつとずっと走りここんでるっぽかった。

「お疲れさん」

一段落ついて、ふうっと大きく息を吐きながらタオルで汗を拭つていた悠斗は、庭に入ってきたおれを見てギクッとしたように身じろぎした。

こつも沈着冷静なこつが、こんな反応をするのは珍しい。

「おまえ、そんな格好で……」

やべ、パジャマのままつてのは、やっぱ非常識か。でも着替えるのめんどくせかつたんだよ……。

「いーじゃん、すぐ隣なんだし。ほい、差し入れ」

冷蔵庫から見つけてきたポカリを渡すと、悠斗は無言のまま少し怒ったような顔で受け取った。

「なんだよ、礼ぐらい言えよ」

「……おまえは、隙すきが多すぎない」

いり立たしげに告げられた言葉の棘<sup>とげ</sup>に、カチン<sup>と</sup>いた。

「はあ！？ なんだよ、人がせつかく……」

「そんなんだから黒川にも襲われるんだ。誰にでも無防備に色氣をふりまくな

「い、色氣つて……そんなもん出してるつもりねーし……変なこと言つな！」

あんまりな言ひ草にかあつと頭に血が上つた。なんだよ、すげー

ムカつく！

クソ、こんなことなら来なけりやよかつた。そのポカリ返せといいたい。

「いぐらなんでも魔王の前にパジャマで出でたりしねーよ。おまえならいとと思つたのー！」

「いっつは他の奴らみたいな口説き文句やあからさまな好意をほどんど見せないし、そーゆー面では一緒にいて一番気楽な相手だった。普通の男友達みたいな感じで。

真面目で理性的な奴だから、いきなり馬鹿な真似もしないだろうし……そんな信頼があつたから来たのに。

「別に誰にでもつてわけじやねーよ。見ぐびるな！」

ビシッと言つてやつたら、悠斗は複雑そうな表情で黙り込んだ。竹刀を持つ手をグッと握り締めて、のぞに絡んだよつながれ声で何か呟く。

「…………だからそういうことじるが…………」

「なんだよ？」

「……もういい」

悠斗はムスッとしたままペットボトルのふたを開けると、唇に流逝んだ。月明かりに、「コクッ」「コクッ」と震える咽喉が照らし出される。

勢い余つて一筋口の端から零れ落ちたそれを手首でふくと、こちらを鋭い瞳で一瞥してからフイツと逸らした。その射るような眼差しに、心臓が一回ドキッと大きく跳ねる。

静寂が訪れる。

庭に植えられた白い花が、柔らかい月光を浴びながらぼんやりと闇夜に浮かび上がつて綺麗だった。

確かに、この花は『クチナシ』……無口なこいつにぴつたりだ、と思つとちよつとおかしくなつて、次第に怒りもほどけていく。

静かな夜の空間で、ふわりと漂つてくる芳香をしばし堪能して心を落ち着けてから、おれは、「あのセ」とかたわらの仏頂面を見上げた。

「バンドに引き込んだのはおれで、こんなこと言つのもおかしいんだけど、あんま無理すんなよ」

これが伝えたくて、出てきたんだ。

「おまえ、適当に力抜くとか苦手そうだし、さ。かんなに聞いたけど、団体戦の大将に指名されたらしいじゃん? にもかかわらず、練習出れないってのは……」

「黒川に、負けたくない」

おれの台詞を遮るように放たれた一言。その静かだけれど熱のこもった響きに、気圧された。

「おまえのためじゃない。俺が、勝ちたいんだ。……絶対に」

搖るぎない意志の宿つた、瞳。

「……でも」

「しばらく早朝から道場を開放してもらえるよつて、学園に交渉するつもりだ。実現すれば朝稽古ができるから、練習量も補える。……朝は一緒に登校できなくなるが、金城がいるから大丈夫だらう?」

有無を言わせない口調で淡々と説かれると、何も言えなくなつた。もじかしい思いでただ見上げていたら、悠斗はかすかに表情を緩め、安心させるよつておれの頭をポンポン、と叩いた。

「ライブ経験を積むことは、確実にバンドのプラスになる。……最高の演奏をしよう」

その時みせた強気の小さな笑みは……悔しいけど、男のおれから見てもすげーカッコよかつた。

「無理……」

ゲーセンのアーケードマシンの前で撃沈したおれに、右後方からひょいと静流がのぞきこんできた。

「あれ、ゲームオーバー？」

「ああ、この曲はいくらなんでも鬼過ぎる」

肩を落とすおれに、静流はクスッと笑みを漏らし、ポケットから取り出したコインを投入するとコンティニューを選択した。

怒涛のドラマビー<sup>とこ</sup>トに合わせて、画面上部から雨霰<sup>あめあられ</sup>のよう<sup>よ</sup>に降り注ぐオブジェの弾丸。それらが下部の赤いラインに重なった瞬間、一寸の狂いもなく対応するボタンを高速連打していく。

絶え間なく点滅する、虹色に輝くG R E A T の文字。抜群のリズム感と驚異的な情報処理能力を否が応にも見せ付ける神業プレイだつた。

最後のG R E A T を軽快に叩き込むと、静流は「リベンジ完了!」  
ヒュー<sup>ヒュー</sup>スサイン。

……おみそれしました。

「週末限定でアイスクリーム・フェスティバルってのがあるんだけど、センパイ、興味ない？」

そんな誘いにのつて、試験明けの初めての日曜日、おれは静流と繁華街にきていた。自慢<sup>ほほん</sup>じゃないが、アイスは大好物なのだ。

イベント会場であるショッピングビルに向かう途中、ゲーセンにちょっと寄り道していたのだが……

「おまえ、もしかしてゲームマニア？」

「どうだろ？ ゲームは好きだけど……それよりセンパイ、はい、これ」

プレゼント、と静流が差し出したぬいぐるみに、おれは目を丸くした。

これは……リラッ マのお祭りシリーズ！  
ゲーセン限定の激レアものだった。ねじり鉢巻とハッピが、めち  
やめちや可愛い。

思わずほにゃ～っと顔が溶けかけたが、あわてて引き締める。

「なんだよ、突然」

おれのコラッ マ好きは誰にも話したことなかったはずだ。ぶ  
つきらぼうに尋ねると、静流はちょっと首を傾げた。

「好きなんでしょう？ わりきりFのキャラ通りかかった時、  
目線釘付けだつたじやん」「す、好きじやねえつ」

思わず赤面して否定すると、静流は不思議そうに大きな瞳を瞬か  
せる。

「可愛い女の子が可愛いものを好きで、何を恥ずかしげることがあ  
るのさ」

……田からウロコが落ちた気がした。

そうか、今のおれは女、堂々とファンシーグッズ好きでもおかしく  
ないのか！

「……ありがと」

なんかおれ……初めて女になつてよかつたと思えたかも。  
ぬいぐるみを抱きしめて思う存分もきゅもきゅしていたら、静流  
が口元に笑みをたたえながら自分のケータイを見せてきた。

「実はオレも好きなんだ。いいでしょ、『』」

待ち受けには、超キュートなリラックマのイラスト。

「素材サイトで落とせるよ。よかつたらアドレス送るけど」

「頼む！ われのメアドは……」

「了解」

鮮やかな手つきで入力をすませ、キラリと瞳を閃かせた静流に、ハツとした。

もしかして今こいつ、われのアドレス聞きだすためにわざと……！？

### 39・勝利の誓い（後書き）

活動報告では先日お知らせしましたが、ひなむうさんにキャラデザをしていただきました。

最初のメインキャラ紹介のページに5人のデフォルメイラストを、1st phase終了後の位置にキャラクターファイルを挟んで

煌、悠斗、王子のイラストをアップ。

残り二人は次回更新後に順次うｐ予定です。

綺麗に仕上げていただいたので、よろしかったらチェックしてみて下さい^ ^

## 40・アイスクリーム・フェスティバル

アイスクリーム・フェスティバルは、全国各地の人気行列店のアイスを始めとして、イタリアンジヨラートやトルコの伸びるアイス、台湾風かき氷など世界のアイスも販売されている盛り沢山なイベントだった。

「うわ～うわ～どれも美味そ～…迷う！」

「好きなだけ食べていいよ。オレ、奢つちやう」

「は？ いや、中学生に金を出してもらう筋合には……」

「付き合つてくれたお礼。ちよつと先日、一儲けしたとこだし」

「儲け？」と眉をひそめたおれに、静流は両手を頭の後ろに回しながら、さらりと「株取引」と答えた。

「か、株……！？ つて中学生で！？」

「保護者に口座さえ作つてもらえば年齢関係なくできるよ」

な……なんつー14歳だ。

「あぜん」とするおれを、静流は「あれテレビでみたやつだ。いつみよつ、センパイ」と誘導した。実にさりげなく手を握つて。

「センパイ、毎日アイス食べてるもんね。絶対二一年の喜んでくれると思つたんだ」

椅子に腰掛けて戦利品を堪能するおれを眺めながら、顔をほこりばせる静流。

「そのシコシコ、可愛いね。華やかなイエローは元気なセンパイによく似合つ」

「『ベーベー』自然に零れるほめ言葉は王子にも通じるものがあるが、こここの場合は……確信犯だ。

「おまえ、そういう遊んでるだろ？ けど、おれには『一ゅータラシ文句は無駄だから』

ズバリと言つてやると、静流は不意をつかれたように少し黙り込んだ。

「おれのファンだとかも嘘なんじゃねーの？ ただ単に、新しい獲物に近付くための口実」

「……ほんと、調子狂うなあ」

静流はひょいと肩をすくめると、クスリと唇の端を吊り上げた。  
それは、今までの可愛い笑顔とは全く別種の、皮肉な色を帶びたもの。

「あんた、本当に女？」

全てを見透かすような視線でまっすぐに問われて、今度はおれが言葉を失つた。

な……こを言い出すんだ、ここつー？

動搖するおれだったが、静流は「なんてね」とペロッと舌を出した。

「失礼なこと言つて」めぐ。でも、ほんと、不思議で仕方ないんだ。

オレの知る限り、女の子ってのはどんなに素直で純粋な子でも、みんな必ず無意識の媚こびつてやつを備えてるものなんだよ。オレはそれを糾弾きゅうたんするつもりはなくて、むしろ健氣けなげで可愛いとさえ思つ。それは性格の良い悪い無関係に、遺伝子を残そうとする生物として当然の行動。でも……センパイには、それがない

テーブルに頬杖ほおづえをつきながら人差し指で示されて、おれは静流の分析力に感心すると同時に、衝撃も受けていた。こんなゲームのシナリオは、あるはずがない。こいつは、たしかに『おれ』をみて話をしてくる。

「あれだけイイ男に囮まれていながら、少しも舞い上がることなく、どこまでもあけすけで天真爛漫てんしんらんまんで……そんな女の子、初めて見たから、すごく興味深いんだ。これは、心からの気持ち。それから、ファンつてのも、嘘じやないよ。センパイの歌は、本当に好き」

真顔で、じつと見つめられながら宣言された。……うーん、どうなんだろ?。

「信じてやりたいけど、信じられないって感じ?」

その通りだつたのでコクリとうなづくと、静流は特に気落ちした様子もなく「だろうね」と応じた。

「オレは恋愛は駆け引きを楽しむゲーム、人生のスペースみたいなものだと思ってるし、重いのは真つ平ゴメン。それが信条で遊んできたから、女の子の喜ぶ言葉ももうクセみたいにどんどん出ちやうんだ。

実際、ほめればほめるだけ女の子は可愛くなるものだし、世の中に可愛い女の子が増えればオレも嬉しい。全然悪いことじやないで

しょ？」「

「自分の言動が相手にどんな影響を及ぼすか、わかつてやつてているけど、悪意はないといいたいのか？」

「うん。オレの言葉は軽薄で、性格もひねくれてるところがあるって自覚してるから、信用ならないと警戒するのも無理ないけど……でも、センパイには嘘はつかない。それだけは、約束するよ」

リラック マも本当に好きだしね、と茶目っ氣たっぷりにウインクする静流の目は澄んでいて、「センパイには嘘はつかない」この言葉は、信じてもいい気がした。

「センパイはオレみたいなの、きっとタイプじゃないだろ？けど……オレはもつともつとセンパイのこと、近くで見て、知つていい。『女』を感じさせないようなのに無性に男を惹きつける神秘性も、まだまだ底知れない『テュナミス』としての音楽的な才能も、わかりやすい明るさも素直さも無邪氣さも、全てが魅力的でスリリングだから」「

なんだよ『テュナミス』って……。それにしてもよく回る口と頭だ、と内心舌を巻いていたら、テーブル越しにぐっと顔を寄せて、囁いてきた。

「ね、いいでしょ？ センパイ」

近い近い！……確信犯とはいえ、やはりこいつも天性の女たらしなのは間違ひなかつた。

ンを受けた。

収容客数280人のそのライブハウスは、音楽活動をする人たちの間ではなかなか有名で、プロ志望者もよく利用する場所らしい。とはいえ、知名度は問わない完全な実力主義で、オリジナル5曲の生演奏オーディションに受かりさえすれば、すぐにライブに出演できるとか。

「ぼさぼさ頭に無精ひげの熊みたいなオーナーは、大らかで人懐っこい感じの人だつたけれど、オーディションが始まると、真剣な顔でおれ達の演奏に耳を傾けていた。

ぶっちゃけ都大会より緊張したが、最後の一曲が終わるとオーナーは満面の笑顔でパイプ椅子から立ち上がり、大きな拍手をくれた。

「さすが煌が強気で売り込んできたバンドのことだけある。お客さんの反応が楽しみだよ」

「ありがとうございます！ それでは来週24日のイベントの参加も許可していただけますのでしょうか？」

「ああ。君たちの出番は3番目あたりにしようか。それから、うちは基本的にはチャージバック制なんだけど、初回だけはチケットノルマが……」

バンドの代表者である王子とオーナーの打ち合わせが始まると、ようやくふつふつと実感が湧いてきた。ふらつとひざが崩れかけたところを、煌に支えられる。

「おい、大丈夫か？」

「ああ……なんか、安心して力が抜けた。……でも、ほんとよかつた。おれ、あんまりライブハウスって行つたことないけど、ここがいい場所なんだってのはわかる。緊張したけど、音の響きがよくて歌いやすかったし、店の雰囲気も好きだ」

まだ半ば放心しながらの ore の言葉に、煌が少し誇りしげに田を細めた。

「ここは、俺も中学の時から密としてよく通つてた。オーナー達に顔を覚えてもらつて、15歳になると同時にバイトするようになつたんだ」

「そーいや、おまえ、ここでどんな仕事をしてんだ？」

「主に受付とパブ」

「パブ？」

「つつても22時前は酒は売らないから、俺はジュースを出したり、軽食とかノンアルコール・カクテル作つたり……」

「煌がカウンター入るようになつてから売り上げがグッと上がつたよ。ただの軽食でも一工夫あつて美味しいし……」

打ち合せが一段落ついたのか、オーナーが話に混ざつてくる。なるほどな。まあ、こいつがバー・テン服着て立つてゐるだけで、女性客の反応は上々だらう。

「それにしても、ようやくお田にかかるて感無量だよ。ずっと会つてみたかったんだ、煌の『天使』……つ

鷹揚と語つていたオーナーが、ore の肩をポンとたたくや否や、おもむろに屈みこんだ。

「こんな時間からなに酔っぱらつてんすか？ 奥さんに言つつけますよ？」

彼の向こう脇を思いつつきり蹴りつけた煌が腕組みして、顔面の下半分だけで笑う。よく見るとひたいがヒクヒクと震えていた。

## キャラクターファイル？

名前：紫葉 静流

身長：168

星座：双子座

血液型：AB

年齢：14

一人称：オレ

二人称：センパイ。煌先輩。悠斗さん。王子先輩。魔王-sama。

趣味：ギター。ゲーム。ショッピング。ビリヤード。インターネット。株取引。

花にたとえるなら：フジ

イメージボイス：内 昴輝

> i28036-3393 <

ひなむうさん (http://piapro.jp/hinamu

u) に描いていただきました！

ありがとうございます♪

美少女と見まじめばかりの美少年で両声類。趣味爆発ですみません

(笑)

空気を読むのが得意な今風の少年。

相手の話をよく聞いて覚えていて、要領がいい気配り上手。

誰にでも愛想が良いけど、クールに一歩引いてる部分があり、ひねくれてるところもありますが根はいい子。

テーマは「年下小悪魔」。

遊びだったのがだんだん本気になつていく、てのは個人的に萌えま

すね～。

男は女の初めての男になりたい一方、女は男の最後の女になりたい  
そうです。

悠斗とは過去になにやらあつた模様。堅物キャラと遊び入つてのも  
萌える組み合わせです（

## キャラクターファイル？

名前：黒川 旺眞

身長：185

星座：蠍座

血液型：B

年齢：16

一人称：俺

二人称：和希。金城煌。蒼木悠斗。北王子梓茶。紫葉静流。

趣味：オペラ鑑賞。チエス。水泳。昼寝。酒。タバコ。女（

花にたとえるなら：黒蝶（黒ダリア）

イメージボイス：諏訪部 一

> i 2 8 0 3 7 — 3 3 9 3 <

ひなむうさん（http://piaapro.jp/hinamu  
u）に描いていただきました！  
ありがとうございます！

圧倒的な美貌と妖艶を誇る『ロメロ』のエロ担当。

でもただのワガママなお子ちゃまだという気もしないでもない俺様魔王

王様w

本人は無自覚ですが親の愛に飢えてるので女で満たしてるのでしょ  
う…元から女好きなのは間違いないですが（おい）

彼自身は積極的に口説き落とそうとするタイプではなく、生まれながらの『魔王フェロモン』で勝手に女が寄つてくる状態です。

そんな絶対の自信をもつていた自分の魅力の通じない和希は、彼にとっては衝撃以外の何ものでもなく、すっかりご執心。

テーマは「本能の愛」。考えるんじゃなく問答無用に惹かれる遺伝

子的恋愛。

ヒロインとの体の相性は最高といつ裏設定……って作者自重！

## キャラクターファイル？

名前：羽鳥 莺生

身長：143

星座：乙女座

血液型：AB

年齢：10

一人称：あたし

二人称：お姉ちゃん（和希）。煌お兄ちゃん。悠斗お兄ちゃん。北王子さん。紫葉さん。黒川さん。（素では男性キャラは名前に「くん」づけ）

趣味：ゲーム。妄想。イケメンウォッチング。お絵かき。グルメ。

弟（姉）イジメ。

花にたとえるなら・見た目はスミレ。実態はラフレシア。

イメージボイス：釤宮 恵

一見淡々と社会的役割をこなしているけれど、脳内は常に妄想の花が咲き乱れているという、それこそ世間に腐るほどいのつつかすでに手遅れなまでに腐りきっていますが何か？ 的腐女子の一人。ほぼ作者の分身みたいなキャラ……とはいえ私はこんなドジやないし腹も据わっていませんが。

ヒロインは色々と努力を強いられる一方、気楽な小学生に転生し、毎日煌の料理を食べてイケメン見放題、可愛い弟をいびり放題の彼女こそ真の勝ち組。

恋愛沙汰に関わりたいという気は皆無で、彼らを愛でることができれば幸せなので、普段は空氣に徹していますが、姿が見えないと起きるストーキングや隠しカメラ、盗聴器で、ほぼ読者と同レベルにイベントを把握していると思われますw

ちなみに 2nd Phase 以降は 和希の服装や髪型は 基本 彼女が 毎日 コーディネート しているので、見た目の好感度も バツチリ です。

#### 41・絶体絶命！？

「言つてたじやないか～天、…」  
「言つてねえから～」

珍しくつむたえるよつた煙に、プツと吹き出したのは、見学に来てた静流だった。

「煌先輩、意外とロマンティスト？」  
「なつ……」

食つて掛かるうとした煌の肩をグッとつかみ、うんうん、と頷いたのは、王子（キラキラつむ）。

「わかるよ……和希ちゃんは、天使だ。事実なんだから、そんな恥ずかしがらなくともいいのに」  
「だからそんな事実はねえつ！ こら悠斗、てめーも口押さえて、笑うのこらえてるだろ！？」  
「……よくもまあ……そんなきずな気障な台詞を口にできるものだな……」  
「だから誤解だつづーの！」  
「……たぶんあれだら、最初に会つた時、おれが階段から降つてきだから、その話をした時にジョークで……おまえ、『天使が空から～』とか言つてたしな」

あまりにもいたたまれず、助け舟を出してやつたのだが、オーナーは「いやいや」と即座に否定した。

「ジョークじやなく、たしかにそんなよつたことを中学の時に……」

中学？

「だから全部オーナーの勘違いなんだって。いい加減怒りますよ？」

これまで聞いた事のないような冷ややかさで煌が言い切ると、オーナーはハッとしたように頬を強張らせ「すまん」と呟いた。

「じゃあ次は音響機材についてだけ、うちはアンプやキーボードの貸し出しもやっていて……」

そそくせと話題を移すオーナー。

……ヒロインが知らないところで、過去に会っていたのか？ けど、なんで隠すんだろう？

オーディション翌週の7月21日木曜日。

この日は一学期の終業式が行われた。明日からは夏休み……つても、進学校であるここは、8月に入るまでは全員参加が義務付けられた補習授業が毎日みっちり7時間あるらしい。そんなの全然夏休みじゃねーじゃん！ 詐欺だー。

終業式の後も普通に授業があつて、清掃時間。

むわっとした熱気と焼けつくような陽射しにうんざりしながら外掃除に向かっていたおれは、焼却炉の方からなんとなく挙動不審な男子生徒が一人、やってくるのに遭遇した。

妙な胸騒ぎを覚えて、まだ火のついていない焼却炉を確認し、息をのむ。

中に捨ててあつたそれをつかむと、ダッシュでさつきの生徒達に

追いついた。

「待てよー。なんだよこれー。」

呼び止めるど、一人はギクリと身を弾き、バツが悪そうな様子で互いの顔を見合せた。

おれが掲げたのは、「蒼木」とかかれた竹刀と胴着セット。

「……ムカつくんだよ、あいつ。練習サボつてばつかのくせに、レギュラーとかふざけんな！」

「中学で全国レベルだつたか知らねーけど、普段ろくに竹刀も握つてなくて大将なんか務まるわけねえ。部長もコーチも、えこひいきしてんだよ！」

開き直つたように言い訳を並べる男たちは、いかにも小物つて感じでモブキャラ臭が漂い、氣の毒なくらいだ。

「そう思うなら直に悠斗と勝負するなり、部長やコーチに訴えるなりすればいいだろ？ 陰険なことしてんじゃねーよ」

「「……つるせええええ！」」

とつとつと諭そうとしたおれに、突然男達は奇声を発しながら襲いかかって來た。

ゲゲッなんだ、この急展開！？

中庭の木々の生い茂つた影に押し倒されて、二人がかりで押さえつけられる。

ぎょえええええ、ちょ、おまえら、まだ昼間だしー。こい学校だしー。

さつきまでおどおどして氣弱そうに見えた男子生徒たちは、ゼエゼエと荒い息を吐きながら血走った目でおれを見下ろし、歪んだ笑みを浮かべた。

「おまえ、蒼木のオンナだろ？ おまえを滅茶苦茶にしてやつたら、あいつもさぞかし悔しがるだろ？ なあ？」

「毎日毎日受験勉強しながら必死に部活も両立させてきたのに、最後の大会もレギュラー落ちして、明日からはひたすら勉強漬け……たまには愉<sup>たの</sup>しませてもらつてもバチあたんねーだろー？」

やべえ。こいつら、ブチキレてる。暑<sup>さ</sup>、受験ストレス、コンプレックス……色んなもんが混ざり合って抑圧されてた衝動が一気に爆発した感じ！？ って冷静に分析してられる状況じゃねえつ。手足はがつちりと拘束されて、ピクリとも動かせない。半分まくれあがつたスカート。

「や……！」

大声を出そうとした口は、手で塞<sup>ふさ</sup>がれた。興奮もあらわな生臭い息が顔にかかる。

汗ばんだ掌がせわしく太ももをなで、血が凍るような感覚に包まれたその瞬間、おれの上に馬乗りになつていた男が勢いよく吹っ飛んだ。

「あ、蒼……グエッ」

もう一人も、現れた悠斗に容赦なく腹を蹴<sup>け</sup>られて転がる。

よよよよかつた～！ ……来るとは思つたけど！ 絶対来な

いわけがないとわかりきつてたけど！ それでも寿命縮んだぞ。

ドックインバックンとけたましく跳ねる鼓動をなだめつつ、深々とため息を吐いていたら、

「センパイ、大丈夫？」

少年っぽいのに低くも響く、独特の声音とともに、皿の前に手が差し出された。

「静流……なんでおまえが

「中等部はもう授業終わってね、早いけど部室に行こうと黙つて通りかかったんだけど……すごいな、完全にネジ飛んじゃってね」

そう言つて肩をすくめた静流の田線をたどり……おれはサーッと責めた。

とこりのめ、今度は悠斗の方が無表情ながら完全にブチキレ、悪役コンビを延々タタ殴り。一向にやめる気配がなかつたからだ。

「また、悠斗、ストップ！ もつ終わり！ それ以上やつたらこいつら、ヤバい！ それにおまえの手も 怪我したらベース弾けなくなるぞ！」

必死で背中にしがみついて叫んだら、ようやく悠斗の動きが止まつた。怒りに染まつてけぶるよつになつていた瞳にも、理性の色が戻つてくる。

「う……訴えてやる……」

ボコボコにされた悪役Aが、恨めしそうに呻いた。

「無抵抗のオレ達に暴力ふるつて……」これでおまえは剣道もバンドも出場停止だ。ざまーみろ！」

#### 41・絶体絶命！？（後書き）

一人きりなら気障なことも言えるけど、第三者に指摘されると恥ずかしい 煌

周りとかお構いなしの天然口説き魔 王子

状況に応じては人目も気にせず口説きまくりの確信犯 静流

口説き文句とか恥ずかしくてほとんど言えないし、簡単に言つせん  
じやないと思ってる 悠斗

口説き文句なんか必要ない、行動あるのみ 魔王

……」んな感じ。

そしてまたやつてしまつた「ヒーローがピンチに現れてヒロインを助ける」パターン。大好物なもので。お許しを。

「見苦しいね」

その場を切り裂くように軽蔑交じりの響きを発したのは、静流だった。その手には……ボイスレコーダー。

「オレ、実はセンパイがあんたたちを呼び止めるところから見ててさ。なんか不穏な雰囲気だったから、録音してたんだ」

静流が再生ボタンを押すと、『ムカつくんだよ、あいつ。練習サボってばっかのくせに、レギュラーとかふざけんな!』と罵の悪役Aの声がクリアに流れてきた。

更に早送ると、『おまえを滅茶苦茶にしてやつたら、あいつもさぞかし悔しがるだろ?』や、『毎日毎日受験勉強しながら必死に部活も両立させてきたのに、最後の大会もレギュラー落ちして……』といった台詞も飛び出し、一人はみるみる色を失くしていく。

「あんたたちが訴えたら確かにこっちも出場辞退になるかもだけど、同時にあんたたちは婦女暴行未遂で刑事告発、よくて退学処分ってところ? 受験前にこの不祥事は致命的だと思つけどなあ」

嘲りを含んだ静流の言葉に、「お、覚えてろよ……」とみじめな捨て台詞を残し、よろよろと立ち去り去つとする悪役達。

「待てよ! おまえら、悠斗が練習してねえとか竹刀握つてねえとか言つてたけど、こいつは毎日家で素振り1000本と走りこみ10キロはやつてるだ。おまえらはそれ以上のことしてたのか!?」

おれが呼びかけると、奴らの背中が一度止まつたが、やがて、無言で遠ざかつていった。

「……よくもつてたな、ボイスレコーダー」

「ふつと音が浮かんだ時とか、忘れないようにうに録音するために持ち歩いてるんだ。……言つとくけど、ただのうのうと見物決め込むつもりはなかつたよ？ いい加減シャレになんないぞつて飛び出そうとした瞬間に、悠斗さんに先越されたんだからね？」

「ああ、助かつたよ。……悠斗も、ありがとう」

仰いだ悠斗の面持せは、沈痛で、自責の念に覆われていた。

「……俺のせいで、こんな田舎わせて……悪かつた」

録音内容から、事情を察したらしい。

「おまえのせいじゃねーよ。悪いのはあいつらだ」

「でも、確かに悠斗さんが口頭のフォローを怠つてた感は否めないね。学校の部活は、ただ成果を上げればいいってもんじゃない。あんたが剣道部内の不和を乱してるのは、きつと事実だよ」

静流の辛辣な指摘に、悠斗はぐつと唇を引き締め、そのまま黙つて立ち去つた。

「……おまえって、なんか悠斗に冷たくねえ？」

基本誰にでも愛想がいい静流だが、悠斗にだけは妙に温度差があるような気がしていたのだ。

おれの言葉に、静流はあっさりと同意した。

「うん、オレ、あの人キライだから」

「……」

「堅物だし、クールに見えて実はスボ根全開で暑苦しいし、いちいちかつこつけすぎ。そのくせベースだけはあんな音出してきて……あんなイライラする人、他にいないよ」

冷ややかに言い切る静流に、言葉を失つた。

「センパイの幼馴染なのに、ゴメンね。でも、ほんと、対人関係不器用な人だよねえ……もう少しうまく立ち回つたらいいのに」

夏の日差しに手をかざし、目を眇めながら、「そーゆーところがまたイラつくんだ」と静流は呟いた。

いよいよライブイベント本番当日。

前日にリハも済ませ、まだ時間に余裕があつたので、一人散歩がてら外に出た。

会場近くの通りをぶらぶらしていたところ、全身黒ずくめで漆黒の髪を腰まで伸ばした長身と、極彩色の獨創的な衣装をまとう赤頭という、対照的だけめちゃめちゃ目立つ二人連れに遭遇する。

「魔王！ もう体調はいいのか？」

「……フン、濾過性病原体」ときにいつまでも屈する俺ではないわ

魔王はおれを見るとわずかに切れ長の瞳を開いたが、すぐにいつも通りの傲慢さで鼻を鳴らした。

「そろそろ、こないだのタクシー代のお釣り……」

「見縊るな。そんなはした金、無用だ」

「それはおれに対する挑戦状か？ ぶっちゃけおれの一ヶ月の小遣いとそう変わんねーぞ……」

グッと手を握り締めて怒りをこらえていたら、ロンが「なあなあとこいつと耳打ちしてきた。

「アンタ、いつたい全体どんな超絶テク使ったわけ？ 魔王-sama、都大会以来なあんかおかしーんだけど？」

「テクって……んなもんねーよ！」

「またまた～。なんか病気の看病したりもしたらしージャン？ 禁断のお医者さんゴッコ？ いいクスリあるなら紹介してほしーんだけど」

「ヤーヤ笑いながら囁いてくるロン。う、うぜえ。

「今日だつて、お嬢ちゃんがライブに出演するつて話を聞きつけるなり問答無用の即行でチケット手配したんだぜ？ しかも昨日の深夜にいきなり！ あちこち奔りまわされたオレ様の苦労たるや……」

「五月蠅い」

魔王にギロリ、と鋭利な視線で凄まれて、ロンは首をすくめた。

「え、今日、おまえらも見に来るのか？」

「暇つぶしだ。せいぜい恥をかかぬようにな

不機嫌そうにそつ言つて、身を翻す魔王。

偉そうなことこの上ないが、それでもこいつなりのエールつてやつなのかもしれない。

今日の舞台衣装はちょっとオシャレな普段着で、とこりうりとで、ふわっとした白いチュニックにペールブルーの花柄ショートパンツ、グラディエーターサンダル。別に変なところはないよな？？ 楽屋の鏡前でそわそわとチェックをしていたおれに、静流が安心させるようにこり笑う。

「大丈夫、可愛いよセンパイ」

そう太鼓判を押してくれた静流は、クラッシュ加工のタンクトップに、ベルト飾りがいっぱいいたシャーリングクロップドパンツ、ブーツサンダル。ハット、ネックレスに指輪までつけて、おれよりよほどスキなく決まっている。

「おまえって普段から、いつでもステージ上がれそうなかつこしてるよな……」

「人は誰でも常に、人生というステージに立っているからね」

おどけるように答えるながら、「ピンはこっちのがいいかな」とおれの髪の飾りピンの位置を動かした。ちょっと止め方を変えただけでグッと垢抜けて見えるのが不思議。

「よかつたらアメ、食べる？ 大丈夫、あれだけ練習してきたんだから、絶対成功するつて」

差し出してきた飴玉を口にいれると、その甘さに、緊張がわずかにほぐれていく気がした。やたら気が利くよな、こいつ……いねーだろ、こんな14歳。

「それで、おまえのやつ、じつはしたんだらうな？」

樂屋に立すの姿はまだない。遅れてくるところ連絡は朝もあつたのだが、さすがにそろそろ時間が……と心配になつてきたその時、ノックの音。

「うわさきすれば……てやつか？」

駆け寄つて開けたドアの向こうに立つたのは、かんなだつた。

「やつほー。舞台直前突撃インタビュー どう、緊張してる?」「ああ、朝から何度もトイレ行つてる。来てくれてありがとう!ところで、チケット大丈夫だつたか? ちゃんと全部さばけた?」

ノルマとして課されていたチケットは、かんなが「まかせて」と全て買い取つてくれたのだ。

「当然よ。 神スリー のバンドだもん。むしろ争奪戦で高額取引。報道部の資金潤沢にござ協力ありがとうございましたー」

「機嫌でブイサイン。あ、さいでつか。

かんなは「では早速」とメモ帳を取り出すと、バンドについてのインタビューを始めた。

おれへの簡単な質問が終わると、今度は煌、そして悠斗へと順番に向かつていく。

「蒼木くんは一昨日、剣道部に休部届けを出したつてきいたんだけど、それはこのバンドへの意気込みの表れと受け取つていいのかしら?」

かんなの言葉に、一瞬頭が真つ白になつた。

「悠斗! それ本当か! ? 剣道部やめたつて……」

部屋のすみでベースのボディーを磨いていた悠斗は、いつもの無表情で「ああ」とうなづく。

「まだ受理されたわけではないが……」一区切りつくまで、じつじて集中したいと思つた

「そんな……あんなに、がんばつてたのに」

「どつちつかずになるのは嫌だつた。今の俺にとつて何が一番大切なかを考えて、選択した結果だ」

「……」

動搖するおれに、「『ごめんバカちん』とかんなが手を含わせる。

「まさか、知らないとは思わなくて……演奏前に、不用意なこと言つてごめん」

「いや……大丈夫」

「ところで、王子先輩は？ もつまもなく開演でしょ？」

かんなの疑問に、煌がいつになく焦りがにじむ表情で答えた。

「さつきから何度もかけてるんだが、ケータイ通じないんだ。家に電話したら留守だつていうから、もうでてるはずなんだが……何かトラブルがあつたのかもしれない」

「あいつがすっぽかすような真似するはずねえ。大丈夫、王子はきっとくるさ」

おれはきつぱりとそう言い切つたけれど 脳の中には、どうしようもなく不吉な暗雲が急速に立ち込めていた。

「もうスタンバイの時間だ。これ以上は待てない」

険しい表情でおれ達を見回す煌。

「舞台に穴を空けるわけにはいかない。キーボード抜きで、やるしかない」

「ソロパートは、俺達がアドリブで埋めることにするか……」

とはいって、今日予定してた3曲は、キーボ、ベース、ドラムの全てが重要な役割を担つていてる曲ばかりだし、どの楽器がかけてもガクツとしょぼくなるのは間違いない。他でフォローすると言つても、限界があるだらう。

このライブを目指して、がんばってきたのに。いいバンドやグループばかり出てるイベントなのに、全体のレベルを落とすようなことほんとしなかった。

「…………したらいいんだらう。どうせやったんだよ、王手！」

グッと唇をかみ締めて、深刻な顔を見合させていたら、ふつと大きなため息が聞こえた。

「オレが出来る」

無理矢理のように唇の端を吊つ上げてやつたのは、静流だつた。

「オレがギターで、キーボのパートがなくても不自然じゃないようにカバーするよ。センパイ達は、いつもじおり演奏してくれたらいい」

煌がうなずいて、オーナーに許可もひつてへる、とすぐさま部屋を出て行つた。

「……ここのか、静流」

歩み寄り、真正面からじつとの『わき』むよつに尋ねた悠斗から、すつと視線を逸らして「オレならできるもん。でもってオレしかできないでしょ、この場合」と肩をすくめる静流。

それは、諦めと悟りと興奮と皮肉が織りまざつたような、複雑な表情だった。

おれが見つめていることに気が付くと、わざと笑顔を形作つて、ウインク。

「終わつたらちゃんと『」ハナビ『』」ハナビ美ちょうだいね、センパイ」  
「ああ、もうなんだつてくれてやるー。頼むぞー。」

満員の客席には、うちの学校の生徒らしき顔もいっぱいあった。舞台上に上がつたメンバーの中に王子がいないことに気が付いたのだら、ざわめきが起つる中、マイクから煌のよく通る声が響き渡つた。

「『』ハナビ『』『』ハナビ『』です！ 今田は事情があつてキーボードの梓茶がいないけど、代わりに強力な助つ人がきてくれた。紫葉静流ー。」

名前を呼ばれた直後、かき鳴らされたギターの音色に、散漫としていた会場の空気が一変する。

「今日はみんなを思つつきり気持ちよくなつから、覚悟しててね」

圧倒的な実力を見せ付ける先制攻撃とともにどこか艶かしさを漂わせて宣言する美少年に、会場のボルテージは急速に高まり、ライブの幕は切って落とされた。

ステージが始まると、都大会と同じであつといふ間で。

演奏にはさすがに揃わないといふや勢い任せのところもあつたけど、それでも初合わせのアドリブとしては驚異的なレベルで、静流は見事にキーボの穴をフォローしてくれた。

舞台上に上がつた時に胸に渦巻いていた不安は、いつのまにか霧散<sup>むさん</sup>していた。

おれはこんな状況にもかかわらず、溢れ出す音の洪水に全てをゆだね、血肉<sup>けにく</sup>わき立つリズムやビート、響きあうことでいつそ輝くメロディの奔流<sup>ほんりゅう</sup>を、そしてそれを共有し、更に高い段階へと誘つてくれる会場の熱気と興奮を、ただただ純粹に楽しんでいた。

ブウン、と半歩ずらしたベースの音を最後に演奏は終了し、割れんばかりの拍手や指笛に送られて、舞台からはける。

「……終わっちゃつた」

ぽつり、と頼りない声で呟いた静流の、どこか上の空のよつた紅潮した顔を見た瞬間、両肩をつかんで叫んでいた。

「これからもずっと、一緒にやろう!… おまえが入ると、またもつとずっと楽しくなる! おまえもそだだり!… おれ達とのライブ、めちゃめちゃ楽しかつただろ!…?」

静流はおれの勢いにのまれたよつて、大きな瞳を見開いていたけれど、沈黙したままだった。

「おまえ、やっぱ嘘つきだよな」

「何……？」

突然のおれの指摘に戸惑う静流の左手をつかみ、田の高さに持ち上げる。その指先は、白く硬く膨らんで、つるつるで指紋もないくらいだつた。

「弦<sup>げん</sup>だ！」悠斗の左手と同じだ。ギターを毎日弾いて弾いて弾きまくつてないと、ここまでならねーだろ？ なにが『練習<sup>ねりゅう</sup>とかめんどい』だよ、大嘘つき！」

「…………」

静流はパチパチと瞬きしてから、やがて、深々とため息をついた。降参したというように両手をあげる。

「あ～もひ、わかつたよ。オレの負け。バンドに入る。てか、入れてください！」

「よっしゃー！」

ガツツッポーズをするおれに苦笑を浮かべていた静流の瞳が、ふと、不敵に煌<sup>きらめ</sup>いた。

へ？ と思つた瞬間、ぐい、と引き寄せられて、頬に、柔らかい何かが触れる。

うわああああ！？

「な、何すんだよ、いきなり！」

キスされた頬を押さえながら大きくあとずさつたおれに、「い」<sup>ほ</sup>寝<sup>ほ</sup>美<sup>うび</sup>くれるつていつたでしょ？」と涼しい顔で微笑む静流。そしてその目に挑戦的な光を宿して、言つた。

「でもセンパイ、オレを本気にさせたんだから……覚悟してね？」  
「ああ、一緒にいい音楽作ろうぜ」

なんだか、音楽的な意味だけじゃない何かが含まれてそうな台詞だつたが、そつちは華麗にスルーすることにした。

超好みの顔立ちだからこそ、煽情的な眼差しで見つめられると心臓に悪い。だからこいつはいくら可愛くても男なんだって！

……でもおれは今女だから、問題ないのか？ いや、ある！ なに惑わされそうになつてんだよ、おれ！

田線を流した先で、硬い表情でケータイを耳に当てる煌の姿が'affた。

「……ダメだ、やつぱり、つながらない。おまえら、オーナーへの挨拶任せいいか？ 僕からもまた後で謝つとくけど……ちょっと梓茶の家まで行ってみる」

「あ、煌、おれも……」

一緒にいく、と言い終わる前に、煌は荷物もそのままに飛び出してしまつた。ライブ中は快活でそんなそぶり見せなかつたけど、そういう心配していたらしき。

さうだよな、考えてみれば、何か事故とかに巻き込まれたつて可能性もあるもんな。

王子はメインキャラだし、まさかいきなり命を落とすなんて急展開はないと思うけど……ステージに立つたとたん、あいつのことも頭から吹つ飛んじやうなんて、おれ、すっげー薄情もんだ……。

自己嫌悪に襲われながら、どうか無事でいてくれ、と心から祈つたけれど。

結局、王子からの連絡はなこまま、その日は終わったのだった。

翌日の学校にも、王子の姿はなかつた。

「補習も休んでるひしいから、また家にかけてみたら、執事が出て『お取次ぎできません』って応じられた。昨日ライブハウスからいつの家までたどつたけど、特に事故の形跡なんかはなかつたし、念のため警察に確認したけど、事件の報告もないくて」

部屋での煌の説明に、とりあえず体は無事っぽいなと一同、胸をなで下ろす。

「これは俺の勘だけど……監禁されてんじゃないかな、あいつ『監禁！？』って血を出しつ？」

びつくりして問い合わせたおれに、煌は神妙につなづく。

「梓茶、最近、バンド活動を親に反対されてたらしくんだよ。あそこの親父さん、厳格で『バンドなど不良のやることだ』って思い込みがあるらしくて……理事長であるお袋さんの方はまだ理解があり、この部屋も作ってくれたりしたらしくんだけど」

「じゃ、昨日のライブも親父さんが出演させなによつて無理やり家に閉じ込めてた、ってわけ？」

「ああ。あそこの家は召使も大勢いるし、たぶんSAYとかに囲まれて、抜け出すことができずにいるんだと思つ」

「まさか、自分の親とそこまでこじれるとは……」

「王子先輩は、その辺の交渉は得意そうなのだが、ちょっと意外だな」

三人の声を聞きながら、おれは、頭を抱えていた。

おれの、せいなのかもしない。おれがあいつに以前言った言葉。

『親にもれ、もつと自己主張していいんじゃねーかと思つた? まだ高校生なんだし、そこまで物分りいい振りしなくていいって』

王子と父親が、実際にどんな親子関係にあるのかとか全然知らないくせに、無責任にアドバイスした。結果として、あいつをピンチに追い込むようなことに……!?

「俺たちはまだしょせん子供もだしな。養つてもうつっている立場にある以上、成人までは、最終的な決定権は全部、親にある……」

煌らしくない台詞だと思つたけれど、妙に重みがあつて、胸を突かれた。そりゃあ、そうだけど……。

「でも、それじゃ王子の意志はどうなるんだよ! ? 子供もは親の人物じやねーだろ! ?」

「そう思つて、王子先輩も行動した結果が、今の状況なんだろ? 「梓茶の奴、ああ見えて頑固だからな……基本的に柔軟だけど、一度こうと腹を決めたら、あいつも譲らない。このまま親父さんが折れなかつたら、いつまで膠着状態が続くのか……飯とか、ちゃんと食つてんのかな」

『JOLDFISH』は王子が作ったバンドで、Jのバンドに一番思い入れが強いのもきっと王子だ。

毎日練習を重ねてオーディションをクリアして、ようやくたどり着いた大事なライブを放棄する形になってしまった、そしてその結果すらわからない今の状況は、どれだけあいつを苦悩させてるかとだろう。

「のまま親との平行状態が続いたら、王手をひきするんだが。絶望して自殺なんてことはいくらなんでもしないと思うが、交渉手段としての自傷……くらになら、下手したらやりかねない気がした。

……おれが、余計なことを言つたせいだ？

いや、これはあらかじめ決められたシナリオなのかもしれない。どっちでも関係ない。そんなの、運命論と一緒に無意味だ。人生のあらゆる出来事が、すでに運命で定められたものとしても、おれ達はその時その時でできる選択をしてせいいっぱい乗り越えていくしかないんだから。

青やめて唇をかみしめるおれの肩に、悠斗が励ますよつとべつと手を添えた。

「とりあえず、北王子の家へ行つてみよう。何ができるか分からないが、ここにどうしてこられるよつましだらうへ。」

最寄<sup>もより</sup>といつ駅から歩くこと数分。なんだか白くて高い壁<sup>が</sup>ずーっと続くのでなんの施設かと思つたが、これが北王子邸の外壁だつたらしい。

複雑な装飾が施された外門は、竜を思わせる取っ手がついた分厚い鉄製。正面からの强行突破は、どう考へても無理そうだ。

「とりあえず、なんとかして王子に会いたいよなあ。どうかに秘密の抜け穴とかねえのかな？」

「そんなものあつたら、防犯意識低すぎだろ？」

「庭の木にロープを投げて結びつけて、それをつかんで壁をよじ登るー。」

「そう都合よく侵入者を受け入れるような場所に木は植えないと思うよ？」

「じゃあロックライミングみたいに壁に釘を打ちつけて登つていくとか……煌ならできそう」

「器物破損<sup>きぶつはそん</sup>は避けたいし、中にはドーベルマンが放し飼いされてるらしいぞ。ちゃんと躊躇<sup>じゅしゅ</sup>られてるから、睡眠薬入りの餌<sup>えさ</sup>なんかも食べないって」

伝統的な侵入方法の数々を、片つ端から計定される。むう。

「正攻法で行こう」

そう言つた煌は、インターホンを押した。

『はい』と若い女の声。メイドさんだろつか。

「」んにちは。俺たち、梓茶くんと同じ学校の友人なんですが、梓茶くんにお取り次ぎ願えますか？」

『申し訳ござりませんが、梓茶様は体調を崩されておりますので、本田はお引き取り下さい』

「寧な口調でピシリと断られたが、煌はレンズをじつと見つめて食い下がる。

「インターほん越しに話すだけでも、無理ですか？ お願ひします、  
笹木さん」

名前を呼ばれた女は少しだけ沈黙してから、「無理です」と困ったように答える。

『金城さんのお願いなら聞いて差し上げたいのですが、旦那様のご命令なのです』

……なんか、ちょっと親密そつた雰囲気だわ。

「じゃあ、梓茶のお父さんとお話をいたしませんか？ もちろん、今すぐでなくて、時間と場所を『』指定いただければ、出向かせていただきまーす」

真摯に頼み込む煌に、  
笹木さんは『しばりへお待ちください』と一度離れた。

「煌先輩もスミリぬけないね」

ふふ、と含み笑いをする静流に、「一緒にするなよ遊び人」と顔

をしかめる煌。

「たまたま前に遊びに行つた時挨拶して、声と名札を覚えてたメイドさんだつたんだ。名前呼ばれると心理的な距離も近づいて、頼み『』ともきこてくれやすくなるかと思つて」

人の名前と顔を覚えるのが苦手なおれからしたら、羨ましきる能力だ。

「梓茶に会えないなら、親父さんを説得しよう。説得とか偉そうな立場じゃなく、頼み込む、が正解かもしれないけど」

煌の言葉にうなずいていたら、インターほんの向こうに笛木さんが戻ってきた。

『やあ、羽鳥和希様はいらっしゃいますか？』

「は、はい！」

『羽鳥様となら』面会したいとの旦那様の『』意向です。ただいまお迎えに上がりますので、お待ち下さ』

おれだけ……？ と戸惑つたが、心配そうな三人の表情に気付き、無理やり笑つてみせた。

「よし、王手はおれが必ず救い出して見せる。おまえらは、先に帰つてろ」

それにしても『お迎え』ってどーゆーことだ？と思つたが、開かれた外門の中を見て、納得した。広すぎる。アホみたいに広いのだ。庭が。

なんで東京にこんなベルサイユ宮殿もどきがあるんだよ！ 遊びすぎだろ製作スタッフ。

敷地内を車で運ばれ、お城のような豪邸へ案内される。

バロック調とロココ調が融和したキラキラした内装に圧倒されつつ、通された客間（というよりホール？）でしばらく待つていると、板垣退助のようにひげを伸ばした、いかめしい顔つきのおっさんが入ってきた。

なぜか紋付はかまを身につけてるのが、思いつきりローロピアンな周囲との間に物凄いギャップを醸し出している。

「梓茶の父親、北王子菊光<sup>きくみつ</sup>だ。君が、羽鳥和希くんかね？」

ソファに腰を下ろし、ギロリ、と鋭い目線で睨んでくるおっさんは、全然王子に似ていない。その迫力にのまれないよう、「はい」とはつきりと答えると、王子父は、「率直に言おう」と切り出した。

「 これで、梓茶と別れてくれ」

同時に付き人が机の上に載せたのは、ピカピカ輝く金塊<sup>きんかい</sup>。

は！？

田が点になつて固まるおれに、「足りないか、ではこれでどうだ」とひょいひょいと積み上げられていくまばゆい山。

「ちょ、ちょっと待つた！ いや、別れるも何も、おれ達はまだ付

き合つてもいなし」

「なにい！ 梓茶とのことは遊びだというのか！？」

「いや、 そうじゃなくて！ 王子は大事なバンド仲間であつて、 そういうごう関係じやありません」

「嘘をつけー！ おまえがバンドを餌に純粹な梓茶をタラシこんだんだろう…？ 」この悪女が…！」

「なつ…」

言葉を失うおれに、 王子父は「確かに梓茶はいい男だ……」と遠い目をして語り始める。

「優しく、 賢く、 美しく、 数多くの才能に恵まれ、 にもかかわらずそれを鼻にかけることもない生まれながらの貴族。 まさしく神々の寵兒。 歩くノブレス・オブリージュ。 感受性豊かで慈悲深く高潔、 なのに少し天然なところもひとつじよつもなく魅力的だらう」

……なんだこのおっさん。 驚異的な親バカ……！

「可愛い可愛い一人息子だ。 幸せになつてほしい。だから、 親として最高の縁組を考えてある。 君は辛いだろうが、 梓茶にはすでに決まつた女性がいるのだ。 諦めてくれ」

「その女性ってのが、 綾小路麗華サン？」

「そのとおり。 あれは、 いい女だ。 才色兼備のナイスバディ。 むろん性格も悪くない。 華族の血をひく由緒正しき家柄で、 血統も申し分なし。 何より……梓茶を深く愛してくれている。 これ以上の女性は他にいないだろう」

「……でも、 親たちがうるさいから場当たり的な契約での交際だつたつてきいたぞ？」

おれの指摘に、 ふふん、 と王子父は鼻を鳴らした。

「最初はそうだったらしいな。だが、麗華さんは話してくれた。『付き合つていろいろひひこ、どうじょうもなく梓茶のことを好きになつてしまつた。契約恋愛なのにこれ以上本気になると苦しいので、嘘をついて別れたけれど、どうしても忘れられない。梓茶のことを想うと気が狂いそうなほど愛している』と……あんな女性にこれほど想われるのだ、幸せにならないわけがない」

なるほどな……麗華サンは片思いの苦しさに、手段を選ばず一日だけとわかつても王子とデートしたかったってことか。たしかに、ちょっと氣の毒ではあるけど……。

「でも、王子の気持ちはー? 王子は相手は自分で選びたいって言つてるんでしょう? バンドもそうだよ。なんでも自分で決め付けて、まずちゃんと王子の話を聞いて下さー」

「つむれーー 子どもの害になるものを取り除くのは親の責任。バンドなどぐだらん不良の遊びだ!」

「ふざけんな! 遊びかもしけねーけど、おれ達は真剣だ! くだらなくなんかねえ! あいつがどんだけ自分のバンドを大事に思つて一生懸命やつてきたか、知らねーくせに勝手なこと抜かすな! あいつのためつつてもあいつの気持ちをくみ取ろうともしないで何が幸せだ! そんなのただの親の口の押し付けじゃん!?」

高圧的な怒鳴り声とあまりの独善つぶりに堪忍袋の緒が切れて、思いつきり啖呵たんかを切つてしまつた。

やべ、と思つたときには、王子父の顔は真つ赤で、怒りにヒクヒクと引きつっていた。

「この小娘を、つまみだせ」

## 45・HINをとつもんせー！（後書き）

いつのまにやら40万PV＆7万ユーチューブ達成。

いつも妄想にお付き合いいただき、心から感謝しております。

自分でもビックリのこの更新ペースはひとえに温かい応援あればこそ^\_^\*

今後もよろしくお願ひします。

でもつてまたしょーこりもなく、帰ってきたダメ企画。

『勝手にキャラソン@歌つてみた。Part2』

<http://www.nicovideo.jp/mystic/26470300>

今回は完全乙女専用の選曲です。

意外とヒロインが好きと書いてくれる方が多いので、和希のイメージソングも追加。

皆さまあまりにも美声vv 神曲&イケボ天国、ござります

（ダメ企画その1 <http://www.nicovideo.jp/mystic/17544452>）

#### 46・キタオウジ画殿の一幕（前書き）

シリオアスかコメティか迷いつつ、こんな配分に。

命令とともに、SMPたちに両腕をつかまれ、ドアの方へと引きずられる。

「は、離せっ！ なあ、よく考えてくれ！ 王子はきっと今、すごく苦しんだる。大事なものを親に否定されて、奪われて、それが幸せなのか！？ 王子を大切に思つなら、どうかあいつの話をきいてやつてください！… お願ひします！」

「うるわこつるわこつるわこつるわこつるわ… いい加減に…」

「 いい加減にするのは、あなたです」

わめくよつな王子父の言葉をさえぎるように、扉が開かれた。

現れたのは、王子。疲労が色濃く、少しあつれてはいたが、無事が確認できてホッとする。

王子はおれの方を見て、喜びと痛みが入り混じつたよつて瞳を眇すがめたが、すぐに厳しい顔つきに戻り、父親に向き合つた。

「すぐに和希ちゃんを解放して下せ。彼女への無礼は、いかに父さんといえど、許しません」

背筋が凍るような冷たさで言つ放つ王子に、王子父は顔をしかめ、「手を離せ」とSMPたちに命じた。

「この女とバンドに打ち込むよつになつてから、おまえは変わつた。昔のように素直でなくなり、わしと話をしていてもどこか上の空。成績も下がつたではないか……」 全てはこの女のせいだらうー。」

拳を握り締め、うなるよつて声の王子父に、王子はフツとこいつ

にはかなり珍しい、皮肉な笑みを漏らした。

「そうですね……たしかに、彼女のせい、とも言えるかもしない。でもそれは、僕が彼女に 恋をしたから」

瞬間、愁いに満ちた王子の背後に、大量の薔薇の幻が出現した。  
うおおっ、新技！？

「バンドは、一人ではなく複数で音楽を奏でる喜びをくれると同時に、心を許せる友人を僕に与えてくれた、宝物です。一緒に試行錯誤しながら新しい音を作り上げる、その過程で、僕がいつも無意識に他人との間に築いてしまう壁も崩れていった。

みんなで合わせることで生まれる音は、美しくて、楽しくて、刺激に溢れて……彼らとの時間は、僕が今まで味わったことがなかつたくらい、幸せで、満ち足りたもので……そして、そのきっかけをくれたのが、彼女だつた

……あ、穴があつたら入りたいというのは、こういう気分なのだろうか。なんとも気まずくて、おれは黙つてうつむくしかできない。

「馬鹿をいうな！ どこがいいのだ、こんなちんちくり……！？」

狼狽したような王子父の叫びは、不自然に途切れた。

何が起こったのかと顔をあげると、王子父の頬に一筋の赤い糸がはしり、その後ろの壁には、一本の薔薇が突き刺さっていた。

投げた！？ この薔薇、王子が投げた！……！？  
タキード仮面様！？

「彼女への侮辱は許さない」

まっすぐに伸びていた腕を置み、もう片方の腕に添えながら、王子は真剣な表情で父親を見据えた。

「和希ちゃんは世界中の誰よりも魅力的です。和希ちゃんに会つて、世界は変わった。和希ちゃんは僕の太陽だ。和希ちゃんのいない人生なんて、もう考えられない……！」

あああああああ、助けてくれ。恥ずかしきりで、死にそうなんですけどおおおお。

王子の告白に、しん、と静まり返つた部屋。その片隅で悶絶するおれ。

静寂を破つたのは、凛と響く新たな声だった。

「あなたの負けよ、菊光さん」

「じ」から、と視線をめぐらせると、おれ達の頭上、左後方のバルコニー部分から「ゴンドラ」が下りてきて、それに乗つてる女性が発したものだった。

「もへ、じつなつてんだよ、この家族……！」

髪を高く結い上げた女性は、王子によく似た、気品漂う落ち着いた美人だった。王子は母親似なんだな。

「梓茶が今までこんなに自己主張したことがありましたか。梓茶は優しいけれど、自分の気持ちを押し殺すようなところがあつて心配していたけれど……わたくしは、息子の成長を喜ばしく思います。そして、なにより嬉しいのは、梓茶がこんなにも心から愛せる女性

「めぐり合えたこと……」

玲瓏とした声で語る王子母に、王子父はしばらく沈黙し、目を閉じていた。

やがて、どこか悟りを開いたような力の抜けた風情で、つそづく。

「……もづ、『パパン』と足に絡み付いてきた幼い梓茶ではないのだな」

「パパン……！　そのナリでパパン……！」

「わかった。結婚を認めよう」

「　つて待てい！　話飛びすぎだろーーー？」

怒濤の展開からようやく持ち直してシッコんだが、この王室は聞く耳など持たないらしい。

「ありがとうございます」

晴れやかな笑顔の王子に肩を抱かれ、おれは抵抗するとの無駄を悟り、ガクリと首を垂らした。もうやだ、ここいら。

車で外門まで送り届けてもひつ途中、「ちょっと停めて」と同席していた王子の声。

「ちょっとだけ歩かないかい？」

立派な噴水や花壇、ブロンズ像などが配置された庭園の散歩道は、

木陰になつていて、噴水から飛んでくる細かな水しぶきのおかげもあつて、とても涼しかつた。

「おまえの父親、会社のために子供もを道具に使つてゐるのかと思つてたけど、そうじやなかつたな。会社の方は建前で、おまえに良かれと思つての縁談だつたみたいだぜ」

おれの言葉に、王子は複雑な笑いをもらす。

「うん……知らなかつた。そういうことなら、そういう言つてくれたらいいのに……素直じやない人だよね」

「表現方法は強引だけど、ちゃんとそこに『親の愛』ってやつがみて、おれはホッとしたな。まー、思い込み強すぎて大変だらうけど、ちゃんと話し合えれば通じない人じやないことがわかつたし」「その『話し合ひ』まで持つていくのが、今までできなかつたんだよ。それで、お互いすつと誤解して……今日君が来てくれなかつたら、きっともつとこじれていたと思つ。心から、ありがとう。君のおかげだ」

穏やかに、真心のこもつた感謝の言葉を述べられて、少し頬が紅潮した。

「おれは特になんもしてねーよ。カツとして怒りをあおるようなこと言つて、つまみ出されそうになつただけだし。おまえが勇気出して本心ぶつけた結果だろ」

照れてるのを誤魔化したくて仏頂面で応えたところ、王子はクスッと口元を緩めたけれど、次第にその表情にはみるみる陰が広がっていく。

「……昨日は本当に、『めんよ。閉じ込められて、どうしても抜け出さ』」とができないなかつた。いくら謝つても、謝りきれるものじゃなければ……」

「大丈夫だ！ 静流が一緒にステージに上がつて、フォローしてくれたから。完璧、とはさすがに言えなかつたけど、いいライブだつたぜ。それに、おかげで静流がバンド入るつて言つてくれてさ。怪我の功名つてやつ？」

「へえ……それは、すごい収穫だね」

少し驚いたように田を見開いたが、それでも王子は落ち込んだ様子。おれは、明るい口調を意識して、続ける。

「オーナーも心配してくれてたから、ちゃんと事情を話して謝ればわかってくれると感づいて……もちろんおれ達も、また一緒に謝るし」

王子はしばらく沈黙してから、思いつめたような悲壮な表情で、苦しげに吐き出した。

「僕は……バンドを続ける権利があるんだろうか。許してもらえるだろうか。みんなに」

「はあ！？ あつたりまえだろーー だつて」

ちょうどそのタイミングで、外門に到着した。

開いていく扉の外に立つていた三つの影が、王子の姿を田にした途端、それぞれの顔をパッと輝かせる。

「みんな、おまえのこと、すげー心配してたんだから。な？」

もみくちゃにされながら、王子は少し泣きやうな小声で、「うん」と答えた。



バンド練習を基盤にステータスアップに打ち込むうち、日々はあっという間に流れ、カレンダーは8月に変わった。

補習授業が終わっても、おれ達はできる限り毎日学校に集まって練習に励んだ。

メンバーが5人になつたことでより演奏に厚みが出たし、自由度が広がり、更に楽しくなった。バンドの持ち曲も増え、個人個人の技術は磨かれ、互いの呼吸もかなりつかめるようになつてきて、2度目に挑戦したライブは文句なしの大成功。

そんな流れで既に8月中旬の日暮れ時。

「ただいまー」

「おかれり！ ここで会つたが百年目！ 待ちわびたぞこんなにやろー！」

スーパーハイテンションで玄関先に飛び出してきたおれに、バイクから帰宅した煌は目を丸くした。

「何事だ？」

「今日、新譜が配られたんだ。王子と静流が一人で作った超名曲！ 関東大会はこれで行こう！」

「へえ……どれどれ」

靴を脱ぎながら、おれが渡した楽譜の束に目を通していった煌の口元に、徐々に、大きな弧が描かれていく。すべてをめぐり終えると、はあーっと深い吐息を漏らした。

「 これは、すげーな。難しい。けど、全パート文句なしで、マジでカッコいい」

「 だろ！？ もうおれ興奮しちゃって……あいつら天才だよー。これをステージで演奏するとか、想像しただけでドキドキする！」

「 歌詞もいいな。でも、大会まであと2週間か……この難曲を仕上げようと思つと、今回も相当ギリギリになるんじゃないか？」

「 だから来週のどつかにでも、王子の別荘で泊3日で合宿やつて話になつてる」

「 3日間練習漬けか……おもしれーじゃん」

煌はもう一度楽譜に視線を落とし、空いた片手でもう片方の腕をぐっと握つた。

「 やばい、イマトレだけでも今すぐしちえ……けど、先にメシ作んなきやな」

「 おまえ、バイトで疲れてるだろーし、今日は出前でもいいぜ。たまにほのんびりしろよ」

自分で作らうとは言わないおれ。だつて作れないし。……ひつとくらには覚えた方が良いのかもしれんが。

煌は「じゃそーするか」とうなずき、リビングに上がつてくる。

店屋物のメニューを取り出して渡した時、窓際の風鈴がちらんちらんと心地よく鳴つた。

「 夏祭りつて、いつなんだろうな」

おれの唐突な言葉に、テーブル向かいのメニューを眺めていた煌が不意を突かれたように顔を上げる。

「いや、夏と言えば海、花火、スイカ、かき氷にお祭りだろ？ 海、花火は合宿で補強できそつだけど、お祭りはどうなんだろ？と思つてさ」

「そりいえばお姉ちゃん。今日ちよつと、通販で頼んでた浴衣が届いてたよー」

扇風機の前に陣取つてマンガを読んでいた芽生が発した一言に、「浴衣！？」と食いついたのは煌だつた。

「いいな浴衣！ 見たい。和希、着てみるよ」「はー？ やだよ、祭りいくならともかく。面倒くさい」

そもそもおれじゃなく、姉貴が勝手に注文してたものだしな……。素つ気なく返すと、煌は「今日つて13日だよな」と呟きながらケータイをいじり始めた。

しばらくして、ニヤリと会心の笑みを漏らす。

「折しもつけの地元の神社で夏祭りが絶賛開催中だ」「つて今日ー？ 今からー？」

急展開にビビるおれに、煌は手を口元に添えると身をかがめ、「わたあめ。イカ焼き。かき氷……」と歌うように耳のそばで囁き始めた。

「おまえ、おれがそんな簡単に食べ物でつられると……」「焼きモロコシ。カルメ焼き。チヨコバナナ。たこ焼き。焼きそば。ラムネ。リンゴ飴……」

催眠術をかけるかのようにつぶかれる美声とともに、脳内を巡

る、甘い誘惑。なんだか、いつぱい香りが漂つてくるような錯覚まで覚え……いつのまにかのどにいつぱいたまつっていた唾つばを「クリ」と飲み込むと同時に、おれは自らの敗北を認めた。

「～～行くよ、行きますよ、連れて行ってください～」

「あのや……そんなに、見ないでほしいんですケド」

電車の中、ドアのそばの隅すみつに立ちながらおずおずと切り出したおれに、煌は「無理」と即答した。

「おまえの浴衣姿なんて、次いつ見れるかわからんねーじゃん。心のアルバムに活写はくしゃくしどかねえと。ってそうだ、写真！写メはOK？」  
「NG…」

力いつぱい否定してやつたら、煌は「ケチ」と唇を尖らせたが、またすぐに田元を和ませた。

「……おまえ、今日ほお緩み過ぎだから」

「やつやーやつでしょ、田の前にこんな和希がいるんだから」

堂々と言こ切つて、極上の笑顔。

「最高に可愛い」

……消えたい。

煌の地元は、電車を1回乗り換えて40分くらいの場所にあった。駅の近くの神社で催されていた夏祭りは、なかなか規模がでかく、ものすごい人の数だった。

「さ、どこのから回る？」

そんな言葉とともにさつざなぐ手をとりられて、あわてて引っこめた。

「な、なにすんだよ！」

「だつて、この人じみだぜ？ ちゃんと繋いがないと、はぐれる」

「だからって手なんか握れるかよ！」

「じゃあどうするんだ？」

おれは少し黙考してから、煌の浴衣の袂たもとをギュウッとつかむ。

「これでいい？」

「……」

煌はぽかんとしたように少し口を開いてから、なぜかぱつと顔を背けた。ため息交じりにぼそつと呟く。

「……とこ、凶悪……」

「なにが。おつと、イカ焼き発見！ 突撃 一！」

#### 47・ぬしませ浴衣（後書き）

なんだいの廿々モード……！

さりげに煌も浴衣着用。高校生の浴衣モードとか、当時はまだ興味なかつたけど今は猛烈に憧れます。がんばりとかやよかつた！  
色々と！

笛や太鼓の祭囃子。屋台の呼び込み。喧騒とわめき。蒸し蒸しする真夏の夜だが、いくつもの提灯の光に照らし出される人々の表情は、興奮がにじみ、どこか浮かれている。この独特のお祭りの空氣、どうしようもなく大好きだ。

「お祭りで食べるかき氷って、なんでこんなに美味いんだろうな~」

人の波から少し離れたところでぼくぼくと甘味を堪能していたら、煌が「……つん」とうなずき、かすかな笑みとともにしみじみとしたように言った。

「やつぱおまえは、笑つてるのが一番いいよな  
「～～んな」と聞いてねえし…」

クソッ、あまりの不意打ちでつっかり赤面しちゃったじゃねーか。てかなんだよこのイベント、おれをいじめ殺す気か……！

「そういうふうな悠斗、よかつたよ。剣道部復活してくれて」

おれの言葉に、煌もラムネを一口含んでからじぶつと首肯した。

「ああ。主将やコーチに泣きつかれるような形で慰留されて、断りきれなかつたんだって？ あいつ、あー見えて頼られるとなつておけない性質だよな~」

「同感。いい奴だよな。なのに、なんで静流は悠斗を嫌つてるんだ  
「ひい

おれの疑問に、煌は「そうか？」と首をかしげる。

「俺には、そうは見えないけどな。ほら、静流って可愛いけど、ち  
ょいひねくれもんだし。……これはかんな情報だけど、あいつら、  
3年前に静流からの提案でユニット組んで、音楽コンクールのキッ  
ズ部門で全国大会まで行つたらしいぜ」

「マジ！？ あの一人が！？ まあ実力的には優勝とかでも全然お  
かしくないけど……結果は？」

「それが、全国大会当日に、ユニット解散で棄権したんだって。し  
かも、詳しくは分からぬけど、どうも静流からの要望らしい」

……それはまた奇怪な。

自分から誘つておいて解散主張つて超ワガママっぽいけど、静流  
は年齢のわりにかなりオトナな奴だ。気まぐれなところはありそうだ  
が、ただ感情的に周りを振り回すようなタイプじゃない。……まあ、  
3年前のあいつはまだ小5だから、精神的にも今よりずいぶん幼か  
つただろうけど……。

でも、そんな過去があるなら、むしろ悠斗の方が静流を嫌つてい  
てもよさそうなのに、悠斗は自分にだけ冷淡な静流の態度にも特に  
傷ついたそぶりは見せず、普通にしているのも不思議だつた。

「本当に嫌いな奴になら、ユニット組もうなんて持ちかけないだろ  
？ 組んでから性格が見えてきて険悪に、て可能性もなぐはないけ  
ど……なんか事情がありそうだよな」

「たしかに」

煌の言葉に同意してから、おれは半分溶けたかき氷を一気に飲み  
干して、首の後ろがキーンとなつてしまらく悶絶するはめになつ  
た。

……「ララ煌、てめえ、笑いすぎ……！」

その後も気ままに縁日をのぞきつつ、金魚すくいや食べ歩きをしていたら。

「あーっ！ 煙ちゃん！」

「うそっ 煙！？」

「うわー、会いたかったーーー！」

にぎやかな声とともに、見慣れない男女グループが近付いてきた。

「なんだよ、いつのまに帰ってきたの？」

「金城先輩、ひどいですっ！ 何も言わずにいきなり転校しちゃうなんて……」

あつという間に取り囲まれた煙は「おお、久しぶりー」と破顔しながら、「前の学校の友達」と説明してくれた。そつか、地元だもんな。

「その子、誰？ 煙、とうとう彼女つくったの？」

一人の男子の質問に、無邪気そのものの笑顔を浮かべていた女子グループが一斉に踏み出すような視線を送ってきた。マジこええ。どうし、ゆづくつしていいから

「ああ、こいつは

「友達！ ……煙、おれあつちの境内けいだいの方で待ってるわ。久しぶり

それだけ告げて、その場から離れた。

電車で40分ならまだ通えない距離じゃないし、前の学校でも友

達多かつたみたいなのに、本当にビリして転校までしたんだりつ、あいつ。

屋台の列から外れた境内の方には、祭りの喧騒けんそうを逃れ、親密けんしつそうに話し合つたり、身を寄せ合うカップルの姿が目立つた。  
賽錢箱さいせんのそばの石段に座り、ちらほらと田の前を行き交う祭りから帰る人、逆にこれから行こうとする人々を眺めていたら、やけにきやんきやんとテンションの高い女子グループの声が神社の階段の下から近づいてきた。

「ねえ、何から回る?」

「まゆか、リン」「飴食べたあーい

「旺眞様は、リン」「飴好き?」

……ん?  
旺眞?

耳に入つた名前に思わず目をやると、果たして階段を上つてきたのは派手めのナイスバディ美女を何人もはべらせた魔王だった。

「……和希」

いつもの不機嫌そうな仏頂面ぶつじょうめんだつた魔王は、おれに氣づくと田をかすかに見開き、フツと唇の端を吊り上げた。

「ねえねえ、旺眞様あー

「つるねこ

からみ付いていた女達を振りほどくと、ズンズンといつにちに近づいてくる。

「ちよつと、旺眞様、何……」

「貴様らは即刻立ち去れ。邪魔だ」

振り返り、冷徹に言い放つた魔王に、女達はぽかんとあつけてられたよつこ、魔王とおれを見比べる。

「聞こえなかつたか。俺を怒らせたくなかったら、帰れ」

ビシリと響き渡つた宣告に、大きく顔を歪めながら、女達は上ってきたばかりの階段をまた降りていぐ。全員が去り際、おれを憎悪のこもつた瞳でこらみ付けてから。

なんでもいいで恨むのが魔王じゃなく、おれなんだよ……不条理だ。

「久しづりだな」

「久しづり……だけじ、おまえ、今の扱いはあんまりだろ?」

立ち上がりつてパンパンと砂をはたきながら、非難の言葉を投げたおれを、魔王はフン、と鼻であしらつ。

「いつのまにやら勝手についてきた有象無象どもよ。俺の行動の決定権は俺のみにある。俺は、今宵はおまえと過ごす」

勝手にやう宣言すると、おれの肩を抱きわたり歩き出す魔王。

「行くぞ」

「ば、馬鹿言つな!」

「浴衣姿ともなれば、おまえでも少しの色氣がでるよつだ。なかな

かに艶やかでよ。……」

「なんことどじーでもいいからー。離せ、おれだつて連れがいんだよ

「関係ない」

「ないわけあるかー。おまえワガママす。こつもなんでもかんでも自分の思に通りになると思つなよ」

手を振り払こせつぱつぱついやると、魔王の顔がみるみる険しくなつた。

「なぜ……おまえは……ー」

いら立たしげに呻いてから、鋭い目で見据えてくる。

「何が欲しい？ 欲しいものは、なんでも『えいやる』

「！？」

「金か？ ダイヤか？ ブランド品か？」

「んなもん……興味ねーよ」

いいながら、ゆらり、と迫つてくる魔王の迫力に圧されて、徐々に足が後ずかる。

「目が眩むよ。宝飾品も、頬が溶けるよ。美酒美肴も、甘美な忘我と恍惚も……俺の元にくればこぐらでもくれてや。」

「なに言つて……」

ドン、と背中が大きな木にぶつかり、行き止まる。衝撃で、アッシュした髪に挿したかんざしの鈴がシャランと大きく音を立てた。

おれの左右に両手をついて見下しながら、艶美な低音で魔王は囁いた。

「あんな女ども、千人集まつと、おまえには及ばない」

「……！」

すぐ間近で切なげに揺れる、翠がかつた瞳。  
蠱惑的<sup>こわくてき</sup>な香りが鼻腔<sup>びこう</sup>をくすぐり、脳が痺<sup>しび</sup>れ、力が抜ける。

「俺の女になれ……和希」

耳元で吐息<sup>あわ</sup>交じりに懇願され、ゾクリ、と自分でもよく分からない感覚に肌が粟立<sup>あわ</sup>つた刹那

「和希から離れる。旺眞」

鋭い刃物のような、絶対零度の怒りを秘めた声が空間を切り裂き、魔王はぴたりと動きを止めた。

一転、修羅場です。

#### 49・転校の理由（前書き）

色々辛こじらひ、心つかお付き合こくだせこおれ

「また俺の邪魔をするのか、金城煌」「邪魔なのはおまえだ。和希はもともと俺と来た。いますぐ離れない」と

ゾツとするほど冷酷な光を目に宿しながら、両手を強く握りしめる煌。

魔王は凍りついたような無表情でゆるゆると身を起し、フン、と嘲るように鼻を鳴らした。

「もともと？ だからどうした。これは俺のものだ。貴様などに譲る気はない」

「譲るとか譲らないとか、人のこと物みたいに言つんじゃねえ！」

響き渡つたおれの一喝に、一人がかすかに身じろぎした。

「魔王、煌の方が筋が通ってる。悪いけど……」

そう言いながら離れよつとしたおれに、魔王の眉が跳ね上がった。

「……なるほど」

愕然がくぜんとしたような表情から一転、美しい冷笑を口元に浮かべながら、その次に魔王が吐き出した言葉は。

「泥棒猫の息子も、泥棒か」

「！」

パン、と乾いた音が響いた。

切れ長の田をいつぱいに見開く魔王。煌も、飛び出しかけた拳もそのままに、固まっている。

「いい加減にしろ。……行け、煌

赤みを帯びていいく魔王の片頬を一警してから、おれはぐるりと背を向けて、早足で歩きだす。本気で叩いた右の掌が、じんじん痛かった。

『キヤラに嫌われるような言動は』

また、芽生の言葉が蘇つたけど、その時のおれは本当に怒っていたので、どうしようもなかつた。

黙つたまま歩き続けて、ずいぶん遠くまで来たときに一度だけちらりと振り返つてみると、黒いシルエットがさつきと同じ場所でまだそこに佇んでいた。

祭りを冷やかす気分でもなくなつてしまつて、結局その後すぐに家に帰ることにした。

電車でもお互い言葉少なだつたが、駅からの歩きの道で、おれは長く胸に抱いていた疑問を、ついに口にした。

「おまえが真海から美楠にわざわざ転校してきたのって、どうして

？」

誤魔化さないでほしい……そつ気持ちを込めて横から見上げていたら、目線は前に向けたまま、煌がぽつりと語りだした。

「俺の母親、旺眞の父親の愛人なんだ。俺が中3になつたばつかの時から……今も」

「……」

おれの歩幅に合わせた、ややゆっくりの速度で歩きながら。端整な横顔のまま、淡々と続ける。

「うちは父親が、俺が小さい頃に亡くなつて、その後母親は一度再婚したんだけど、また離婚して……でも、彼女は一人じゃ生きていけない人なんだ」

彼女。一步引いたような言い方に、胸がギリツと痛んだ。

「俺は、彼女の新しい恋人が旺眞の父親だなんて知らないで、旺眞とバンドを組んで……夏頃、その事実を知つて、脱退した。その時母親に問い合わせて、俺の真海学園への学費は全部旺眞の父親に出してもらつてる事を聞いた。……学校やめてやるつて一時は本気で考えたけど、どんなにしんどくても、高校は出てた方がいいってオーナーやバイト先の人たちに説得されて……我慢して通つてたけど、苦しかつた」

『俺たちはまだしょせん子どもだしな。養つてもらつている立場にある以上、成人までは、最終的な決定権は全部、親にある……』

こいつかのこいつの台詞が蘇つて、そこに込められていた重みと痛

みに、やつきれの思いがした。

「住んでるマンションも、旺眞の父親に買つてもらつたものだつたから、家に居るのも辛かつた。俺の日常は、人の家庭をぶち壊した歪みの上に成り立つてゐる、汚物にまみれたものとしか思えなかつた。俺は、とにかく早く一人立ちしたくて、オーナーに無理言つて毎日遅くまで働かせてもらつてた。そんなさなか……真治さんに、再会したんだ」

「おれの父親に？ 再会つて……」

青白い蛍光灯の下、煌はそれまでの感情を押し殺すようだつた表情を少し和らげて、おれの方を見た。

「真治さんは、俺の父親の親友で。父親が死んだ直後や、母親の離婚の時……大変なとき、いつも親身になつて助けてくれたんだ。でも、母親は真治さんを避けるようなところがあつて、引っ越しもしたりして連絡不通になつてたんだけど、今年の四月の半ばに俺のバイト先にたまたま来てくれて。

どうしてこんな遅くまで働いてるんだつて問い合わせられて、事情を話したら、うちに……羽鳥家に泊まりなさいつて言つてくれた。

難しいけど、美楠には今年から学費全額免除の奨学制度もできたから、それも駄目モトで受けてみたらどうかつて教えてくれて……そこまで甘えていいか悩んだけど、もし奨学制度に受かるなら許されるんじやないかつて、そう思つことにしたんだ。自分ルールつてやつ

「……なんだよ、それ。横断歩道で白だけで渡りきれたら今日はラッキー、みたいな？」

いつたいどんな言葉をかけるべきか、全然わからなかつたけれど、最後は煌が少しおどけるように言つていたので、無理矢理、苦笑し

てツツ「なんだ。

「やうやく」「やうやく」

「なるほどな……時期外れの転校は、そりそり理由だつたのか」

「うん。あ、あとで、せっかくなら許婚いいなむけと一緒に学校に通いたいじゃん」

「許婚……そいやそーだつたつけ。本氣で忘れてた」

「あつひでえ。俺達は生まれたときから決められた許婚です。大事なことだから一回言います。俺達は……」

「おれは認めてねえもん」

いつのまにか軽口の応酬おうしゅうに変わつていて、煌がこのやるせない話を終わらせたがつてるのがわかつた。けど。

「じめん、もう一つだけ質問。おれ達、この五月より前に、会つたことあるのか?」

ちえーっと拗すねたふりをして歩き出していた背中が、止まつた。ゆつくり振り返つた煌の顔は、影になつてよく見えなかつたけれど。闇の中から、「あるよ」と、静かな声が聞こえた。

「いつ?」

「中学の時、俺が見かけたの。おまえは、気付かなかつたけど……歌、うたつてた」

「どこで?」

「おまえ、一つだけつて言つたじやん。もう一つ答えたから、終わ

り」

「ケチ!」

むへ、と膨れて近寄ると、口の形をイーッとするように笑うこつ

もの煌の顔が見えて、なんかわかんないけどホッとした。

でも、謎は一つ解けたとはいえ……まだ色々隠してそうだよな、  
ここつ。

唐突ですが私、今まで「ヤンデレ」って「ヤンキー+デレ」かと勘違いしていました。

調べてみれば「病む+デレ」で、好きすぎてキャラがおかしくなっちゃった状態なのですね。おもしろそう！

と妄想刺激された勢いで、ガガツと短編一つ仕上げて同時アップ。

「『ときメロ』番外編？～和希バースデーを迎えるの巻」

<http://nocode.syosetu.com/n833>

本編の流れガン無視の、一部キャラがポジティブに病んでるお馬鹿話。

みんないつもより壊れ気味ですが、ようしかつたら、ども。

追記。番外編、これは『ヤンデレ』とは違つとの指摘をたまわりました。あれ、勘違い（汗）ただキャラが暴走してるだけのようです……失礼しましたー。

「……海だああああ！」

朝早く駅に集合して電車に揺られることが約一時間半。窓の外に見えてきた、キラキラ日差しを反射して輝く青の広がりに、おれは歓声を上げた。

「海！ 海！ ああ、早く泳ぎてえ～」

「和希……遊びに行くんじゃないんだぞ？」

「センパイ、はしゃぎますぜ。子どもみたい」

隣で悠斗がため息を漏らし、向かいの席では静流がブツと吹きだした。

「そーゆー静流は、せっかくの合宿初日だつてのに、やけにテンション低くねえ？」

「昨日ちょっと夜更かししちゃつて……あ、言つとくけど、女の子じゃないよ？」

「オレ、そーゆーのはもう止める」としたから

「『もう』つて……おまえの親はその乱れた生活について何も言わないわけ？」

呆れて指摘すると、静流はペロリと舌を出した。

「オレ、大学生の従兄いとこと住んでるから。美楠中等部に合格した直後、親の転勤が決まっちゃつて、両親だけ九州に引っ越したんだ。オレの保護者兼監視役つてことになつててる従兄も、彼女の家に同棲どうせい状態でほとんど帰つてこないから、それを黙つてあげる代わりにこっちも遊びたい放題。成績さえちゃんと維持しとけばバレないもんだよ」

な、なんという由々しき事態。」ついして不良少年が一人出来上がりてしまったというわけか……。

「けど、そーゆーのつて、普通親父さんの単身赴任だよな。息子置いてまで母ちゃんもついてくつて、そういう夫婦仲いーんだな」「それ言つたらセンパイの両親だつてそーじやん。まあ、思春期の子どもを野放しにしていくなんて迂闊すぎるよね……親がいたら、自分の娘に男4人と泊まりで遠出なんてまず許可しないと思うし」

さらりと言われて固まつた。そーいや、おれ、すっかり男友達と旅行みたいなノリだつたけど……よく考えたらけつこうヤバいシチュエーション！？

「そうだ、センパイ。悪い狼が夜這いかけたりしないようにオレが添い寝してあげようか？」

ポン、と名案を思いついたというように手を打つ静流に、「アホか」と通路を挟んだ席から煌がツッコむ。

「おまえが一番危険だつづーの」

「和希ちゃんは芽生ちゃんと同室でいいかな？ あとは僕と煌、蒼木くんと紫葉くんがペアになるつか」

王子の提案に、「はーい」と機嫌で姉貴が手を擧げる。小学生一人で留守番は不安だからつて連れてくることになつたんだけど……そういう意味では、芽生が一緒でよかつたのかもな。やれやれ。

到着した駅から、迎えの車に乗ること約30分。緑に囲まれた景色の中に、いかにも金持ちの別荘然とした2階建ての洋館が見えてきた。

「1階の広間にドライマセットがあるから、セイフを練習室にしてよ。」

各自部屋に荷物を置くと、さっそく練習に取り掛かる。人里離れた場所なので、音量も気にせず、思う存分1~3時までみっちりやつた。

管理人さんの作ってくれた冷やし中華を食べた後は、お楽しみの

「海だああああーー！」

すでに別荘で中に水着を着てきていたおれは、浜辺に到着するや即行で服を脱ぎ捨て、真っ先に駆け出して行った。

輝くような白い砂浜。青く高い空。エメラルドグリーンとゴバルトブルーのグラデーションが美しい海。

つてか、綺麗すぎるー。どこの南の島だよってくらいの、綺麗な海。

そして、全然混んでない。ここ、2次元なんだなあとこんなところでまた実感する。

「和希、ちゃんと準備運動をしてから……」

後ろから近付いてきた悠斗は、振り返ったおれを見て、変なタイミングで言葉を止めた。

かと思つと秀麗なその面おもてが無表情のままみるみる赤く染まつていったので、ビビる。

「ど、どひした?」

「……準備運動は、しっかりやれよ」

それだけ言つて、自分はそのままざぶざぶと海に入つていってしまつた。

「センパイ、ヤバい。センパイの水着姿、めちゃめちゃ可愛い!」

そう声をかけてきた静流も、頬がやや紅潮し、テンション高め。あ、そか、水着か……。

胸元にリボンを結んだマリンボーダーのホルタービギー。ビキニは嫌だ、と言つたのに姉貴に却下され、フリルや花柄の他の候補よりはまだマシかと選んだ一品だつた。

まあ、この水着イベントで好感度下げないために、必死でダイエットしたり発狂寸前の全身脱毛したり、いろいろ苦労したからな。この三か月、朝夕のスキンケアやヘアケア、風呂上りのボディマッサージおよびストレッチ etc……を毎日続けてきた成果もあつたのかも?『女の子』するつてマジで大変。

「オレ、今ほどバンド入つて良かつたって思ったことないよ。ありがとう、渚のマーメイド」

とひけるような笑顔でお礼まで言われてしまつた。でもマーメイドっておま……。

ちなみに、胸にはちぢつかり補正パッドを入れてあるのは内緒だ。まるで本物のようにふるふる揺れ、更には寄せて上げる機能でヒロ

インの小ぶりのバストでも見事な谷間ができる。『美容』『パラメータ大幅上昇（ただし一回限り）の必殺アイテムらしい……「バ  
レなきやいいのよ」って詐欺だろコ。』

王子が手をかざし、眩しそうに目を眇めた。

「……まったくな。あまりにも君が綺麗すぎて、直視できない」

「和希ちゃん、あまり沖のほうへ行つては駄目だよ……海の神様が  
一日惚れして、君をわざわざしまうかもしない」

頼むから真顔で言わないでくれ……。

一回浮かれる中、煌はなんだか複雑そうな表情だった。

「ちよつと、露出しそぎじやねえか？」

「あ、やつぱり？ 背伸びしそぎかと思つてたんだよ」

「いや、最高なんだけど……他の奴には、見せたくないつづーか」

…………あーつもう、泳ぐぞ…… 今日は泳ぎまくのぞこん畜生

……（ やけ）

## 50・合宿スタート（後書き）

明日から帰省で執筆ができなくなるので、更新もしばらく止めます。  
再開は10日後の予定。  
サイトのログインはちよいちよいする予定ですが……  
ではではよ、酷暑が続ますが体調に気をつけて一夏をお過ごして下さい。

鮮やかな青空の一部をトリコロールの球体が切り取る。

煌の狙い済ましたアタックが相手コートのすみに突き刺さった  
と思いきや、悠斗がすべり込んで辛くもセーブ。静流が高くレス  
ポンを上げ、稼いだ時間で起き上がった悠斗がバックアタックを放  
つ。

体勢が整っていなかつたのか、威力がそがれていたそれを煌はい  
きなりオーバートスで弾き、

「和希！」

「おう！」

電光石火のコンビネーションでジャンピングアタック。  
おれがネット間際から叩きつけたビーチボールはそのまま砂浜に  
落下して、王子がピーッと試合終了の笛を鳴らした。

「煌、和希ちゃんチームの勝利！」

「よっしゃ！」

「ナイス和希！」

満面笑顔の煌と、ハイタッチ。イエーイ、勝つた勝つた！

「おまえ、最近からだの動きが良くなってきたよな。普段の動作も  
きびきびしてきた感じ」

煌の指摘に、『運動』パラメータもあがってきたのかな、と思う。  
勉強も前よりはわかるよつになつてきたし、歌もどんどん上達して

きている実感がある。

日々の必死の努力が、ちゃんと報われてきていのかもしれない。

「金城……あそこの岩場まで、泳がないか？」

悔しそうに表情を強張らせた悠斗がもちかけると、煌が一ヶと瞬の端を吊り上げた。

「リベンジってやつ？　いいぜ、競争な」

すんすんと連れ立つて海に向かっていく一人の背中を見送りながら、「元気だねえ」と静流が呆れたよつたため息を漏らした。

「あんな激しく動いた後なのに……。こしてもセンパイ、こっちハンドありすぎだよ」

「ハンド？」

「センパイの弾けるボディを真正面から見せ付けられるんだよ。集中できるわけないって」

「アホか！」

どうしてくれよう、このセクハラ小僧……と思いつつ、何気なく視線を巡らせた先に、一いつの立派な洋館が見えた。

一つは、おれ達が滞在中の王子の別荘。そこからもう離れていな

い場所に、もう一つ……。  
……そこはかとなく、そのつづり合ひに出来こなうな予感がした。

「ちょっと休憩するかい？　芽生ちゃんも、よかつたらおいで。お茶やジユース……チョコもあるよ」

大きなパラソルの下で、クーラーボックスから王子が取り出してくれたチョコは、冷たくて美味しかった。こういう時、飲み物だけじゃなくちょっとしたお菓子もあるとか、うれしいよな。

「……ちょっと距くなつちやつた。寝ていい？」

心地よい潮風に当たりながら、波紋が天然のレース模様を揺らめかすエメラルドグリーンの海にみどれていたら、隣に座っていた静流が少しどりんとした声で言つた。

「ああ。おまえ、昨日寝てないつて言つてたもんな」

「うなずくと、『じゃあお言葉に甘えて』といひんと横になら……おれのひざを枕にして。

「なつ……！」「おまえ何……」

ギョッとして抗議の声を上げたが、この男、のび太もビックリの寝つきの良さで、すでにすーっと寝息を立てていた。

あまりに早かつたのでタヌキ寝入りかとも思つたが、どうも本氣で寝入つてるらしい。

「……ったく」

呼吸に合わせて小さく肩を上下させる静流の寝顔は、無防備で抜けなくて、やつぱり女の子みたいだ。睫毛、まつげ、長……。

「いつのこの姿勢つて、警戒心薄れさせるんだよな。だからか普段から、ついついスキンシップを許してしまいがちな気がする。あ、でも、それを武器に女の懐にもぐり込むのがいつもの手なの

かも……！

ハツと氣づいてたたき起しそうとも思つたが、あんまりにも安らかに、気持ちよさそうに寝てるので、結局げんなりしつつそのままにしておこうとした。

「……つらやましこな」

ため息交じりに苦笑しつつ、静流にバスタオルをかけてやる王予。

「でも、本当に無邪気な寝顔だね。紫葉くんはいつも大人びてるけど、寝ているときはさすがに年相応なんだな……」

「ああ、こじつて一コ二コしても本心読めない感じあるよな。おまえも大概だと思つけど」

「そりゃかい？ 僕はいつでも真心で接してるよ。あ、別に紫葉くんが気持ちを偽つてるっていうわけじゃないけど……でも、紫葉くんは意図的に周囲から一定の距離を保ちたがるところがあるよね。常に客観的な立場にいようとしたりとか」

王予もなかなか鋭い。確かに、そんな感じだ。

「でも、ギター弾てる時だけは、急にそういうのが消えて素になれる気がしねえ？ 特にバンドの時は、心底楽しそうで、だから一緒に演つてることもすげー楽しくなる」

「わかるよ。本当に好きなんだろ？ 音楽は、一人で自由にやるものも楽しいけど、誰かと一緒に響き合つてもっと楽しくなる。それを共有して盛り上がってくれる人がいると、更に更に楽しい」

王予の言葉に、そうだよな、と何度もうなずいてしまった。

おれ、こんなとんでもねー状況で始めることになつたけど、バン

ドは好きだ。ライブも。正直、すっかりハマっていた。

「さて、あと10分もしたら戻つて練習再開だね。紫葉くんは僕が見てるから、和希ちゃんは遊んできていいいよ?」

「いや、なんか疲れたし、いいや。ここで海眺めてるだけで、気持ちいいし。王子こそ、ビーチバレーでもずっと審判だつたし、遊んでここよ」

王子は「うつむく」と首を振り、薔薇を背負つた必殺笑顔で応えた。

「僕は、君といつてこられる時間が、一番幸せだから

……あ、せいですか。

「……僕、この冬にイギリスに留学することになつているんだ」

おれは口に運びかけていたコーラをピタリと止めて、隣を振り向いた。

王子は田の前の海を見つめながら、静かな声で続ける。

「その後は、そのままあつちの大学を受験する予定。日本の僕の学生生活は高2の冬までで、それまでに、何か思い出を作りたくて……バンドをやりたいと思った。

自分で何か新しいことを始めるのは初めてで、すこく勇気のいることで……思い立ったのは4月だつたけど、なかなかメンバーが集まらなかつたし、あきらめかけていたんだ。でも

そこでおれの方を見て、柔らかく微笑む。

「君の歌を聞いて、もう一度、夢をみたいと思つた。必死だつたか

「う、強引に引かれてじゃつて、『めんね。驚いただろ？』でも、あきらめなくて、よかつたよ」

『でも続く果てしないね。コントラストで映える白く力強い入道雲。

寄せては返す透き通つた波。

輝くような海の向こうで、不意打ちの大波をくらつた煌と悠斗が笑いながら何か言い合つてゐる。

ふかふかと浮き輪に乗つて漂つゝ芽生の姿。

さわさわと、海風。潮の香り。

静流の穏やかな寝息。

永遠のような、夏の一寸。

今、ここにある全てをまぶたに焼き付けよつとあるのかのよつと、じつと瞳をこらしながら。

「本当に、よかつたと思つてゐ」と、王子は呟いた。

やべ、今何時だ！？

夕食後、ちょっとだけのつもりでベッドに横になつたおれは、いつのまにか深く眠り込んでいたらしい。次に目覚めたとき、時計の針は22時を回っていた。

『お風呂は一つしかないから、19時から20時が女湯で、20時から21時が男湯にしよう』

そう王子に提案されたのだが、一度昼に泳いだ後軽くシャワーを浴びたとはいえ、寝汗もかいていたし、風呂にはちゃんと入りたかった。

わざと浴びさせてもらつていよいよな……。

王子の別荘はホテル並みの内装だったが、風呂もすこかつた。巧緻<sup>こうち</sup>なモザイク模様のタイル、大理石の大きな浴槽、噴水や天使像まで設えられて、お湯は天然の温泉らしい。

「ふう～極楽極楽」

とろりとした乳白色にバラの花びらの浮かんだ湯はロマンティックだが、これに男どもも浸かつたと想像すると、絵的にちょっと笑了。

最初の頃は自分の身体見て鼻血噴いたりしてたけど、さすがにもう慣れてきた。

日々姉貴の鬼指導の下『美容』に励んでるだけあって、肌は玉のように磨かれているし、ウェストはキュッとくびれて細いけれどやせすぎというわけでもなく、柔らかなラインは女性的。自分(?)で言うのもなんだけどなかなかのスタイル美人になりつつある。よくアニメやドラマで見るみたいに片足をピシと湯面に上げて、どうだ、この脚線美……って馬鹿かおれ。

ま、胸はもうちょっとあつてもいいと思うけど……それでも当初よりは育ってきたよな、と視線をやりかけて、やつぱり逸らす。くつ、まだこの部分はおいそれと直視できねー！

解放感から心なしかはしゃぎつつ、のんびりつかって、さあ、そろそろあがるか……と立ち上がった時。

ガラリ、と突然扉が開いた。

現れたのは、しなやかな筋肉に覆われた、均整のとれた長身。意表をつかれて呆けるおれを前に、同じく呆気に取られたように目をみはる、煌。

しまつた油断した——！

いつか起ころるんじゃないかと家では常に細心の注意を払っていたお約束の『お風呂でバツタリ事件』、まさかこの合宿でもつてくるとは……！ バカバカおれのバカ～！

脳内では自分をポカポカ殴つて、と転げまわりたい気分だったが、現実ではショックでただひたすら瞳を見開いて固まるだけのおれ。

一方、我に返つたらしい煌はくるりと後ろを向いて、かすれた声

で叫ぶ。

「 悪い！」

耳を真っ赤に染めながら閉められた扉の向こうで、立て続けにガコンバタンと何かが派手に倒れる音と「痛っ……！」とうめき声が聞こえた。

「口ミ箱につまずいたはずみに足の小指でもぶつけたのだろうか。いいから落ち着け……と、笑う余裕は、おれにもなかつた。

扉の奥に消えるほんの一瞬、田に飛び込んできた光景。海ではラッショガードで覆われていたあいつの背中。そこには、ヒロインの肩にあるのと同じような、火傷の跡がみてとれたのだった……。

木造平屋の日本家屋の一室。  
開け放された縁側からは、奔放に植物が萌えた、目にも鮮やかな緑の庭が見える。

パタパタと、洗濯したばかりの白いシーツが風に揺れていた。淡い煙をたゆたわせる蚊取り線香。時折ちりんと涼やかな音を鳴らす、朝顔の絵が描かれた風鈴。

ゆつくりと首を振る、年代物の扇風機。ミーンミーンと蝉の声が響く明るい夏の午後、簡素な長方形の机の周りを、4つの影が囮んでいた。

卓上には、スパイシーな香りが食欲をそそるカレーの盛られた皿が並べられている。

『へえ、これ、煌と和希が作ったのか』

感心したようにつそぶく男は、30代前半くらい。どこか余裕を漂わせる端整な容貌といい、大らかで快活そうな雰囲気といい、煌にとてもよく似ている。

『「ひん、和希はさいしょに一ソソジン切るとき、包丁でゆびをきつちやつてね、せんせん手伝えなかつたの』

『さきのぬいぐるみを抱きながら、しょぼん、とつなだれるのは、小学校に入るか入らないかといつぐらこの年頃のヒロインだ。この頃から、ドジつ子らしき。』

『見せてみる……ああ、可哀想にな。痛かつただろう？ 大丈夫か？』

男に手を取られて心配そうの元気いまれ、ヒロインのほおがボツと色づく。

『大丈夫……』

消え入るような声で答えたヒロインに、男は皿を和ませるとよしとその頭を撫でた。

『まあ……美味しくできたことー、煌ちゃんはお料理が上手なのね。和希ちゃんも食べていいんだ。』

腰の曲がつたばあちゃんに「一口一口と勧められ、ヒロインもぬいぐるみをかたわらに置いて、スプーンを一匙、口に運ぶ。瞬間、その顔がまぶしいほどにほころんだ。

『ほんとだ、美味しい！－すい、煌ちゃん、天才！－！』

心の底から幸せそうに、ヒロインはパクパクとカレーをほおばる。

『和希、ケガしちゃって悲しかったけど、さすがに元気出でました。煌ちゃんのカレーは、魔法のカレーだよー。』

『お、おおげやー。』

ヒロインに向かいに座っていた少年 煌は、少し赤面してぶつめいぽつにそりひづいたて笑つた……。

夢か。

朝、いつもとは違う別荘のベッドで目覚めたおれは、今見た光景を、頭の中でもう一度反芻する。

夢だけど、あのカレーの匂いといい、机に置かれたコップの外側に浮かんだ水滴といい、細部までとてもリアルで、これはきっとヒロインの忘れていた『記憶』なのだろうと確信する。

あいつ、中学の時に会つたとかいつてたけど、大嘘つきめ。

あんなガキの頃から、知り合いなんじゃねーか……。

でも、なんで普通に覚えていしないんだろ。まあ、あのくらいの幼い時の記憶なんて、あやふやなもんだけだ。

朝食に向かおうと部屋の扉を開くと、中途半端に片手をあげた煌がすぐそこに立っていた。

ギョッとして見つめ合ってから、その互いのあからさまな動転つぶりに、一人して吹きだしてしまった。

「……なんだよ、バツクリさせんなよ」

「それはこいつちの台詞。やつと覚悟決めてノックしようとしたらいきなり出でてくるとか。心臓止まるかと思つたぜ」

苦笑を交わしてから、「で、なに?」とうながすと、煌はすっと真面目な顔になり、頭を下げた。

「昨日は『』めん。まさか、あの時間におまえがいるなんて思いもしなくて……」

「……ああ、別に、お互い様だし。おれ『』、悪かったな」

どうにもバツが悪くなつて、ボソボソと答えながら、まっすぐ見れない。

おれの方は男の裸なんて見慣れてるし、見られたつて別にびーつてこともないんだけど……こいつの心情を考えるとなんとも複雑だ。好意を持つてる子の裸を見てしまつた男の気持ち。リアルに想像できるだけに、いろいろと、辛い。

できれば忘れてほしいけど、そんなの無理だらうしな…………ぬああ~、ダメだ! 発狂しそうになる。もつ、考えるのやめよう~

「あのや、おまえが昨日、風呂の時間みんなどうしてたのつて……背中の傷のせい?」

おれが尋ねると、煌の眉が一瞬だけ小さくひそめられた。まるで痛みをこらえるように。

「おれの肩にある火傷の跡と、そつくりだった。おれ、この時のことや、おまえと昔会つたことも覚えてなかつたけど……昨日、夢を見たんだ。小学校に上がるかどうかつてくらいの年の頃、田舎っぽい家で、おまえと、おまえの親父さんと、優しそうなばあちゃんと一緒にカレー食べてる夢。あれ、夢じゃなくて、本当にあつたことだよな?」

「…………」

沈黙してしまつた煌に、おれはたたみかける。

「この火傷つて、その時のものなのか? いつたい、何があつたんだ? どうしておれは、何も覚えてないんだろう?」

「…………俺は

いつさい表情の読めない静かな面持ちで、煌が口を開いた。

「おまえが思こ出さない限り、なにも話すつもりはないよ」「なんで……」

抗議しようとしたおれの頭に、ぽんと手を置いて、言い聞かせるよひこで小さく笑う。

「無理に、思こ出さなくていいんだ」

それは優しいけれど、おれの追究心を全しほませてしまつよひ、胸が締め付けられる何かを含んだ笑顔だった。

朝食後、前田に弓を續き新曲の練習。

『Aquarium』というこの曲は、疾走感のある美しいメロディに乗つて、まるで幻想的な水中世界に溺れるような恋のもどかしさと切なさが歌われるジャズ調ポップス。

鮮烈で印象的なギターリフに始まり、深い部分を自在に撫で上げ興奮を誘う、心地よいベース、水に漂うようなスווイングのリズムでかき鳴らされる即興風のピアノ、くすぶる恋心を煽り立てるよう多彩なパターンで刻まれるドラム……とすべての楽器がそれぞれに見せ場満載で、歌詞もレトリックに富んで洗練されている。

カツ「よすぎて悶絶ものの神曲 なのだが、音域は広いし、リズムがとりにくく、なかなかグルーヴを生むことができなかつた。

「うん…… 今回も、おれが足、ひっぱってるな」

つまく歌えないことの一ツに、この大人っぽい曲に見合うような色気が全然足りていないこともありそうだつた。みんなはまだ不完全とはいへ、音には既にゾクゾクするような艶が滲んでいるのに……。

「和希ちゃんが謝る必要なんてないよ。」  
「和希ちゃんをごめん。君の特性を生かせるような曲作りについて今までのコンセプトからは、外れてる樂曲だよね」

「最近のセンパイの表現力、どんどん広がってるから、また新しい側面を引き出せたらっていう挑戦の意味もあつたんだけど、背伸びしそぎたかな……大会用は、他の曲にする?」

申し訳なさそうな王子と静流に、おれはぶんぶんと頭を振った。

「いや、絶対この曲がいい！でも……なんでおまえらはそんな、なんていうか、艶っぽい音が出せるんだ？」

落ち込みながら尋ねたところ、四人は困惑したように顔を見合わせた。

苦笑しながら、王子が言つ。

「曲の世界観に共感できるから、かな。溺れるような恋の苦しみやもどかしさ、夢の世界を漂うよつた陶酔感……」

……やべ、おれ、地雷踏んだ！？

「センパイも恋したらわかるよ。相手はオレとか、どう？……とびきり大事にするから」

いたずらっぽくのぞき込んで囁いてくる静流に、ぶんぶんと頭を横に振つてから、「ちよつと煮詰まつてきたし散歩してくる」と練習室を後にした。

恋かあ……。小学校低学年の時、隣の席の女の子にほのかな思いを寄せたことはあつたけど、淡い初恋で苦しみとかは無縁だった。胸が焦がれるような強い気持ちを誰かに抱くよつたくなる事なんて、おれにもあるんだろうか？

潮の匂いがまざつた風にそよがれながら縁の小道を歩いていたら、向こうの方に、のどかな周囲の風景から浮きまくりのサイケな衣装を身にまとつた、ひょろりと細身のシリエットが現れた。

ロンだ。

それにしても、こいつの格好はいつ見ても独創的である……孔雀へくじやくをモチーフにしたらしき極彩色のプリントタンク。

ボトムもカラフルで、ブロッキーチェックにこじれビンケンダムなボーダーが走ったボリュームあるサムエルシリエット。スパンコール付のサンダル。アクセサリーをジャラジャラ。前髪を長めに伸ばした頭はサイドをツンツンに立てたウルフヘアで色は真っ赤つか……とにかくこれでもかといつくらい派手+派手+派手で、常人には到底理解できないセンスだ。

その奇抜なファッショントをまじまじと見つめているうちに、気だるげに周りの風景を眺めていたあいつもこっちに気づいたらしく。爬虫類つぽいその瞳をみると大きく見開くと「ああーっ」と叫び声をあげ、おれを指差してきた。

なんだここの、幽霊にでも会つたような大げさな反応（汗）

「よう、こそこどでおまえに会つとまな」

ある程度予想はしてたけど、と胸のうちで呟きながら挨拶のつもりで上げた手を、いきなりガシッとつかまれた。

「マジかよ、なんつーミラクル！！ オレの目の錯覚とか幻じゃねーよな！？」

「なんだよ、何事だ！？」

眼を瞬くおれに、ロンは、今までのこいつからまども想像できないくらい真剣な表情で、言つた。

「頼む、オレと一緒に来て、あの人……眞面目に、会つてやつてくれ

「魔王に？」

「魔王に？ なんでまた」

そのあまりの必死っぷりに軽く動搖しつつ質問すると、ロンは、  
とんでもないことを語り始めた。

### 5.3・練習もじてある（後書き）

新曲のイメージは喜兵衛Pの「jから」の神曲です。

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9450347>

全部の楽器がカッコよすぎてたまりません……特にベース！

clinearさん×ぼこたさんのカバーverは着つたフルで落としましたw  
大好き。

「あの人、実はガキの頃から不治の病でもうすぐ寿命なんだ。20まで生きられないって医者に宣告されてる。だから親も周りもみんな甘やかして、あんなふうに育つたんだ。

本人も自分が長くないことを知ってるから、自暴自棄でやりたい放題でここまでできただけど……最近、急に体調が悪化して倒れて、この数日でベッドから起きることもできなくなつた」

真っ白になつたおれの脳裏のうりにゆっくりと蘇つたのは、前に、バーのソファで倒れた魔王のゼエゼエと荒い息を吐く姿。

あいつ、風邪とか言つてやがつたけど、本当は……！

「何もかもどうでもいいって、好き勝手やりながらほんとは全てに無関心だったあの人、初めて興味を持った人間がアンタだつたんだ。今この近くで静養中だから、最期に一目、アンタに会わせてやりてえんだよ。頼む。一緒に来てくれ……！」

ロンに連れて行かれたのは、案の定、海辺から見えたあのもう一つの別荘だつた。

うながされてドアを開けると、広い洋室の奥の窓際、天蓋付の大きなベッドの上で、横たわつた魔王が瞳を閉じていた。

透き通るような白皙の肌。鴉の濡れ羽のよつた漆黒の髪。

完璧な造形を誇る、あまりに美しすぎるその面は、まるで魂の宿らない精巧な彫像のようだつた。

「魔王……？」

ぴくりとも動かない、少し瘦せた端整なその姿に、ゾッとした。  
最後にここに会つた時、おれは何をした？ まさか、あれで全部が終わつたとか、そんなこと、ないよな！？

「おこ、[冗談はよせよー。 田を開けろー。]

おれは思わずベッドに翻け寄り、その肩を乱暴に搖わふつた。

「こんな、こんなの嫌だ！ お願いだから、死ぬなよ、旺眞  
！」

祈るよつた気持ちで叫んだ時、翠がかつた深い色の瞳が、ぱちりと開かれた。

「和希……」

心底驚いたように、まじまじと見つめてくる魔王の手を、おれは涙ぐみながらグッと握る。

「馬鹿野郎……なんぞ、こんなギリギリで呼びつけやがる。本当に、  
勝手な奴！ 病氣なら病氣だつて、もつと早く

「病氣？ なんのことだ？」

魔王がいふかしげに片眉をあげ、おれの中の一瞬の空白が生まれたその刹那。

ブブーッと盛大に吹きだすような音が、背後から聞こえた。

！」

振り返ると、ロンが身をよじつて爆笑している。

「信じらんねー。今時、こんな話を1ミリも疑わず真に受けバカがいるなんてよお！ ちょっと前に流行った純愛モノじやあるまいし、不治の病ネタなんてそうそう転がつてたまるかつーのー！」

2次元キャラのおまえが言うなあ――

つとブチ切れそうになつたが、なんとか抑え込んだ。

つたつつーの。バー口ー！

「お嬢ちゃん、素直すぎー！ いやー、マジおもしれえ。魔王サマのお氣に入りじゃなかつたら、オレ様の玩具おもちゃにしてやるのに」

なにやら不穏な事をほざきながら、笑いすぎて滲んだ涙をふき、  
ロンはふりと踵を返す。

「ごへいゆる、めがけむ」

ニヤニヤ笑いとともにそんな一言を残し、パタリと閉ざされる扉。

「……俺が死ぬと、本気で思つたのか？」

静かな声で問われて視線を向けると、上体を起ししながら、かすかに笑みを含んだような魔王の眼差し。

羞恥に、かーっと血が上った。

「悪かったな！ てめーのまぎらわしい言動のせいだよ！ なんで

真昼間から寝てやがる」

「俺の趣味は酒と女と昼寝だ」

「つて自堕落極まりない趣味を偉そうに語るなーー。」

不意に魔王の手が伸びてきて、おれの田元の涙をぬぐう。瞬間、  
からだに謎の震えが奔つた。

「泣くほど、心配したか」

「知るかよ」

おもしきろそうに口元を緩める魔王の腕を振り払い、顔を背けた。  
……相変わらず、わけわからん魔力を放ちやがるぜ、この野郎。  
危険すぎる。

「……あれがおまえとの最後なんて、後味が悪すぎると思ったんだ  
よ」

ちらりと視線を向けると、魔王の田元がすつと細まった。

「おまえ、どうしてあんなに煌につつかるんだ。……家庭を壊さ  
れたから。」

ためらいながらも尋ねると、魔王はフン、と鼻を鳴らした。

「家庭……黒川にそんなもの、もとより存在せぬわ。父も母も、お  
のの無数の愛人を持つ。そもそもただ一人想いあうなど幻想。  
結婚など契約でしかなく、永遠の愛などというものは現実を見ない

わざわざと言い切る魔王に、強がるそぶりは見られなかつた。

「じゃあ、なんで……」

「あの男は、俺を裏切つた」

憎々しげに、吐き捨てる魔王。

「金城煌のドラムは、この俺が認めて、俺が自らバンドに誘つてやつたのだ。にもかかわらず、あの男はたつた2か月でバンドを抜け出るなどと言つ出した。親たちのことがわかつた以上、俺とやることはできない、などという勝手な理屈で……！」

顔を歪めて悔しげに語る様子に、呆氣にひかれた。

「こいつ……もしかして煌のこと、本当ほめたりや好きだつたんじやないか？」

気に入つてたのに（こいつからしたら）一方的な理由で出て行かれて、愛したを余つて憎き百倍、みたいな感じに思えてきた。

「煌からしたら当然じゃねーか？ 自分の親が、仲間の親と不倫してるなんて知つて、今まで通りに過ごせるわけねーよ」

「なぜだ。親は子とは別物だ。親が何をしたからといって、金城煌が気に病む必要はなかつ。そもそも、たかが不倫の何が悪い」

「なるほど、『価値観の不一致』か……。

「けど、親と子は別物つて思つてゐるなら、なんで祭りの時はあんなこと言つたんだよ」

おれの指摘に、それまで堂々としていた魔王が初めて、ぐと言  
いよびんだ。

「あれは……」

苦虫を噛み潰したよみつな顔で黙りこむが、その瞳に滲むのは  
おそらく、後悔の念。

「つにカツとして、思つてもないことを言つちまつたつてのか?」

「…………

ブスッとしたまま目を伏せたのを、おれは肯[可]と受け取った。

## 5.4・魔王の秘密（後書き）

過去のweb拍手小話を読みたいといつていただいたので、小ネタページを作つてみました。

他愛もないのですが、一応ご報告をば。

『ときメロ』小ネタ集http://ncode.sysset  
u.com/n3560w/

「反省してるんなら、煌に謝れよ。『ありがとう』と『いぬんなさい』は人間社会の基本中の基本だぞ」

「『』の俺が、謝るだと……！？」

「当たり前だ。それから、なんでも自分の物差しで測れると思うな。相手の立場を想像することを覚えねーなら、おれはもうおまえとは会わない」

「貴様、何様のつもりだ……！」

魔王がサッと顔色を変えて眼光を鋭くするや、そのからだから黒い奔流が舞い踊り、激しい風圧に吹き飛ばされそうになった。キャビネットの小物が倒れ、窓ガラスがビリビリと震える。

うわ、なんだこれ！

内心仰天したが、『』で引いては男がする。負けじと両足をこらえて、ひるまずににらみ返し続けると、にわかに魔王がフツと表情を和らげた。

同時に、圧迫感が立ち消え、黒い嵐も霧散する。

「……おもしろい。これでも、意志は萎えぬか」

『これでも』ってなんだよソレ具体的に説明ブリーズ！？ とよほどジックりんでやうつかと思つたが、その前に魔王が言葉を継いだ。

「やうだな……おまえの行動しだいでは、考えてやらぬ」ともなこ

思ひつきり不条理な気がしたが、無駄にプライドエベレスト級なこつには、おれが何かする代わりに「やってやる」という大義名

分が必要なのかもしれない、とふと思つた。

「……どうしようと？」

「今から俺とセック」

「却下」

「なぜだ。間違いなく、俺とおまえの相性は最高だ」「てめーはいい加減に自重しろ……」

「このH口エロ大魔王が……」と青筋を立てる俺に、「ならば」と魔王は前髪をかき上げながら、つまらんなやうに言つた。

「ひとりでもよい。なにか歌え」

「……ひとりでも？」

「セックションは駄目なのだわ！」

セックション？……あ、セックションだつたんですか。

「……何を赤くなつてゐる？まさかおまえ、セック……」「わ～わ～わ～！　んなわけねーだろ、馬鹿！」

大声を出してささやかると、クツ……クククククツ、と魔王の肩が震えた。

大きな手で覆われてゐるので表情はみえねーけど、確実に爆笑されてゐる。

くそつ……不覚！

「でもいきなり歌えとか……なんだよ、おまえ、もしかしておれのファンになつたわけ？」

前に二つと出かけたときも、同じように言われたもんな。

「五月蠅い。なんでもよいからかうと歌うのがよい」

なんでもいって言われても……あんまり長いのも避けたいし、アカペラで気軽に歌える曲……あ。そうだ、ちまた巷で大人気のあれにしよ。

「ううーううーううううううううーううーううーううううううー 消

臭力～」

「……」

「……」

「……」

「……」

……沈黙が、絶望的なほど、重かつた。

「なんだ、それは？」

「なんでもいってつただろー？ 約束だからな、ちゃんと謝れよ

！」

早口でまくしたて、「じゃあなー」と帰れつとしたら、手首をつかまれた。

「行くな。俺とともにいる」

「残念ながら、おれは遊びにきてるんじゃねーんだよ。バンド練習を中抜けしたところだつたし」

「そんなもの……」

いいかけて、魔王は口をつぐんだ。チッと心底つまらなそうに打ちし、拘束をとく。

お、改善傾向？

「……以前、倒れた時の礼がまだだつたな」

唐突な言葉にきよとんとするおれに、魔王はフツと不敵な笑みを浮かべた。

「今宵、おまえに最高の花束を贈つてやる」

「花あ？ 別にそんな……」

「四五の言わずに受け取れ。『ありがと』『はじめんなさい』は基本中の基本なのだろう

「……こんな偉そうな『ありがと』初めてだけどな……」

呆れつつ、「わかったよ」とうなずくと、魔王はフン、と鼻を鳴らした。

「それでよこのだ。 とつとと帰るがよい」

「……なんかこいつ、どーしょーもない奴だけど、妙に憎めないんだよな……」

そんなことを思ひながら部屋から出ると、廊下で待機していたらしいロンが壁に寄りかかったまま口笛を鳴らした。

「アンタ、すげーな。の人と渡り合える女なんて初めて見たぜ」

「……さつきはよくも、だましてくれたな？」

おれがこじらむと、ロンはいつものニヤニヤ笑いを貼りつかせながら、肩をすくめる。

「先週末の祭りの日以来、あの人、荒れに荒れて手が付けられない状態だつたんだぜ？ 散々暴れまくつて、さすがに親にこの別荘での謹慎きんしんを言い渡されたわけだけど、今度は食事もろくにとらず寝込んでる状態。何事かと話を聞いてみたら、どーもアンタに振られたのが原因っぽいじゃん？ 関東大会も間近だつてのにいつまでも腑ふ抜けでいられてもオレ達も困るわけよ。そんな時アンタにばつたり出会つたけど、喧嘩別れしたなら普通に話したところでついてきてくれるかわからんねえ……という状況で思いついた苦肉の策があのホラ話なのでしたー。チャンチャン」

……よくしゃべる男だな、と呆氣にとられるおれを、ロンは腕組みしながらじろじろと眺め回した。

「……んなガキのどこがいいんだつて思つてたけど……たしかに、なんつか引っかかるところはあるよな。磨けば光るタイプかも……？」

「んな品定めするような目で人を見るんじゃねーよ。失礼な奴だな」

ピシャリとはねつけて玄関へと向かうおれの背中に、「いいねいねー」と俄然がぜんテンションを跳ね上げるロン。

「気が強い女は好きだぜー……調教し甲斐めいがある」

……マジでこいつ、対象外でよかつた。

夕闇に沈み、ちらちらと星の輝きだした海辺。

潮の音をBGMに、熱く焼けた鉄板からもつもつと上がる白い煙。  
ジュージューッと食欲を刺激する音と肉の焼ける香ばしい匂いに、  
なまつば  
おれはゴクリと生睡なまつばを飲み込んだ。

「ん、そろそろいい感じだな。ホラ、和希」

煌がよそつてくれた肉に、「いただきまーす」とかぶりついたおれは、瞬間、口から七色の龍が飛び出すような衝撃をおぼえた。

フ・リ・イ・ル・ベ・ル・ル・ル・ル・ル

昼間にいきなり、煌宛てに届いたクール宅急便。中には「悪かつた」の走り書きとともに高級黒毛和牛肉がひとつさりと詰め込まれていた。差出人は、魔王。

……唐突か（素）氣無を過ぎて「????」状態だった煌におれが説明を補足してやると、大いに苦笑しながら「ありがとな」と礼を言わされた。いや、おれに言われても。

というわけで、合宿一回の夕食は急遽海辺でバーべキューする  
ことに相成ったのだが……なんだよ」の肉の「今そこで殺してきま  
した」みたいな鮮度。  
さる うきよ

視覚的にも圧巻の霜降りロース。驚異的に分厚いタン。トロット  
ロのカルビにハラミ。

味、食感、肉汁、全てが神がかつており、煌様特製の焼肉のタレ効果も相まって、今なら太平洋をクロールで横断することも宇宙へ飛んでいくことも巨大化して大阪城を破壊することもできそうだつ

た。

「魔王サマも粋なことしてくれるね」

「ん？ 静流も魔王のこと知ってるの？」

「うん、夜遊びしてるとひに知り合つた遊び仲間。あの人、おもしろいよねー」

こんなとこでも意外なつながりが。

でも中学生が夜遊びすんなよ……と呆れながら、簡易テープルの上の飲み物に手を伸ばしたところ、静流が焦つたように声をあげた。

「あ、センパイ、それは……」

サイダーだと思つたそれを口に含んだ瞬間、おれはブーッと派手に吹き出した。なななんだこれ！？

「ビッククリさせちゃつて」めん。それは、オレ用のジンリックキー

「つて酒だろ！？ しかもかなり強いし」

「いいじやん無礼ぶれいじり講つてことで。……にしても、今のセンパイの反応……！」

クククッと肩を震わせる静流。この不良少年が～～！

「没収！」

「ええ～つひどー！」

ぶーたれる静流からコップを奪い、地面に流そうかと思つたが、ふとイタズラ心がわいてきた。

少し離れたところで照明の調節をしていた悠斗に近付き、「お疲れさん」とコップを差し出す。いつも冷静なこいつのリアクション

……アブ、ちょっと見ものかも。

「悪いな」

ジンリックキーを受け取った悠斗は、ワクテカと胸を弾ませる俺の目の前でそれを咽喉に流し込み そのまま、ゴクッゴクッと全部飲み干してしまった。

「え？ と……悠斗？」

予想外の反応に困惑おれに、悠斗はコップを投げ捨て、ニヤリと口の端を吊り上げた。

「……それで？ 僕を酔わせて、ビーフがあるつもりだ？」

「あ……悠斗……？」

こじわるそうな微笑。その瞳に見たこともないような嗜虐的な色を浮かべながら、悠斗はおれの顎をつかんでクイッと持ち上げた。

「やけに積極的じゃねーか、和希。そーだよな、オマエの本性は悪女だからな。清純そうなツラして男を誑かして、俺達をさんざん翻弄して、楽しいか？ ん？」

ペリリと自身の唇の周りを舌で舐め回してから、固まるおれをいたぶるよつこ、悠斗は囁く。

「オマエが熱い夜を望むなら、一晩中でも付き合つてやるよ。浜邊でつてのも、スリリングじゃん？」

「ば、馬鹿、何言って……！」

「嫌がつてみせても好きなんだろ、この痴女が」

「 「 いい加減にしろ！」 「

瞬間、3つの声が重なつておれの体が引き離され、同時に悠斗には頭からバケツいっぱいの水がぶつ掛けられた。

全身ずぶ濡れになつた悠斗は、パチパチと瞬きしてから、「俺は今まで何を……？」と眉をひそめる。

……酒飲んで人格豹変つて、どこまでベタやりつづく気だよ』と  
きメロ』！！

バーべキューの締めは、手持ち花火だつた。

シユボツと点火するや鮮やかな火花を放つ赤や黄色、緑と同時に、もつもつと上がる煙の量が凄まじくて、むせてしまつ。

「和希、そつち風下！」

「僕、こういう花火つて初めてやるよ」

「つて王子、そんないくつも束にしてまとめて火をつけんじゃねえつ。あぶねーだろ」

「わ、ネズミ花火もあるんだ。これ、つける時けつこう危ないよねえ、というわけで悠斗さん点火して」

「その流れで俺を名指しするか？……馬鹿、炎を人に向けるな！」

ぎやーぎやー騒ぎながら、花火から花火へと絶え間なく火を継いで、弾ける刹那<sup>せつな</sup>の輝きを堪能する。

「ん？ なんだこれ」

謎の黒い物体を見つけて首を傾げたら、「知らない？ ヘビ花火

だよー」と芽生が教えてくれた。

点火してみると……うわ、なんか生えてきたー！ 花火と書いても発光はせず、黒く細長い何かがにょきにょきと飛び出してくるのだつた。

「すげー。でもこんな黒いとベビーハーフーよりウン……あぶねつ」「不適切な発言は慎んでね」

ヒロインにあるまじき単語を口にしかけたおれを、ニッコリ笑顔で牽制する姉貴。だからってロケット花火を人に向けて放つなよ！

「残像で絵や文字も描けるね。……和希ちゃん！」

呼びかけられて振り向くと、王子は「一ノ口」しながら花火を振つて「○v○と描いて見せた。あるある。

「センパイ、ロケット花火のとばしつ！」

「線香花火は最後にとつておくか」

「ああ、一番最初に落とした奴は罰ゲームな」

炎に照らし出されるみんなの笑顔を眺めているうちに、めっちゃ楽しいのに、ふと、グッと胸を締め付けられるような感覚に襲われた。

大好きな「夏」がもうすぐ終わってしまうという寂寥感。せきりょうかん それもあるけど、ただそれだけじゃないような……。

「和希、どうした？」

「なんでもねー。どうだ、二刀流！」

自分でもよくつかめない気持ちを振り払つよつて、おれは両手の

花火に点火し、ひらひらと大きく振つてみせた。

## 56・夢花火（後書き）

魚と違つて殺したてのお肉は美味しいぞうです。  
和希かんちがい！（キャラのせいにするやつ）

57・肝試しと光の花束（前書き）

合宿編ラスト。

たよりない懐中電灯の光が、夜の山道を照らす。  
夏の定番、肝試し。とはいえた内容は別荘から2キロほど離れたところにあるお墓の入り口に置いてある田印をとつて帰つてくる、といつ他愛もないものだ。

「えーっと、こっちでいいんだよな」

「センパイ、違う、右」

分かれ道で見事に反対方向へ進みかけ、暗闇の中、静流が苦笑する気配がした。

「ま、オレはコース外れても全然かまわなってかむしろ喜んでつて感じだけど」

「いや、こんな夜中に変な道進むと下手すりや遭難するだろ」

「いいね～センパイと遭難！　山小屋の一夜。人肌で温めあう一人の心と体……」

おま、おぞましい妄想すんじゃねえ！　めちゃめちゃサブいぼ立つたぞ！

とはいえたこの世界ではマジでそんな展開も起こりかねない。

「OK、この先は今まで以上に慎重に進もう」

表情を引き締めて言つたといへ、ファツと噴き出す静流。

「変なの。肝試しなのに、お化けよりも迷子が恐いみたい」

一番恐いのはおまえらとラブライブ状況に追い込まれる」けどだけ  
な……。

ちなみに、他の男どもは基本一人で行っている。おれと芽生だけ  
は、ジャンケンで決めた1位と2位が同行するとこつるール。……  
ジャンケン大会でのみんなの気合の入りっぷりは、思い出すだに頭  
が痛い……。

「女の子とお化け屋敷なんて行くと、みんな大げさなくらいしがみ  
ついてくるもんだけど……センパイはお化けは平氣なんだ?」

「平氣じゃねーけど、夜の道歩くへらにならな

墓場に着いたら、多少やばいかもしれない。とはいえやはつプラ  
イドもあるので、やつやつ情けない姿をむりあ<sup>氣</sup>はなかつた。

いたつて普段どおりに歩を進めるおれに、静流は少しだけつまら  
なさそろに肩をすくめてから、おもむろにふつと声を和らげた。

「……でもま、変なのはオレもやうかも」

「とこうと?」

「こんな状況なのに、こつもよつとくへらかな氣分」

そう話す静流は、確かに、肩の力が抜けて穏やかな雰囲気。夜目  
にも慣れてきて、淡く微笑を浮かべてるのがわかつた。

「肝試しで和<sup>な</sup>んでびーすんだよ」

「ほんとにね。でも、センパイとこると、不思議と落ち着くんだよ。  
もちろん、ドキッとさせられたり、ふとした仕草や反応に可愛いー。  
ってテンションあがりまくつの」ともじょっちゅうだけど……ど  
つちかとこうと、癒<sup>いや</sup>される感じ

「はいはい、そーやつて口説くの何人目だ？」

まーた始まつた、と軽く流すと、静流は拗ねたように唇を尖らせた。

「…………どういえれば、信じてもらえるのかなあ

そうぽつりと呟いて以降、黙り込んでしまつた。

リリリリ……ジジジ……と周囲から虫の音だけが、響く。

「静流…………？」

闇の中に浮かび上がるまだあどけなさの残る綺麗な横顔は、いつになくむつりと不機嫌そうで、少し不安になつて呼びかけたら「ごめん」と苦笑された。

「ちょっと、自分に腹が立つて。センパイがオレの言葉を本気に取れないのだつて、全部オレのせいだからさ……あ、そろそろ着いたね」

木立を抜けた先の開けたところに、墓地が広がつていた。  
たよりない月明かりに照らし出される墓石や卒塔婆。そとば吹きつけた風にざわざわと木々が揺らめく様も、まるでこの世ならぬものたちがどよめいているような錯覚をつけた。  
夜の墓場は、さすがに不気味だ。

「大丈夫？ センパイ、ちょっと震えてるけど  
「気のせいだ！ やあ、目印はどこ……」

瞬間、後ろから、グイッと強い力で肩をつかまれた…… 静流は前にいるのに、

「ああああああああああああああ」

パニックになつて、必死で殴りかかる。

「ちょ、センパイ、落ち着いて！」

「やめろ 和希！」

静流の声以外にもう一つ、耳に滑り込んできた低音に、おれはぴたりと手を止める。懐中電灯で浮かび上がつたのは、幽霊じゃなくて魔王。

おれに何度もポカスカ殴られた魔王は、ヒクヒクと額を震わせながら妖艶に笑つた。

「ずいぶんな挨拶だな、和希」

「わ、悪い！ でもビーフしておまえがこんなところ…… まさか、黒魔術の儀式！？」

「なぜ俺がそんなものに手を染めねばならぬ。浜辺での打ち合わせの帰路だ」

打ち合わせ？ と首を傾げるおれに、魔王はいらだたしげに「そんなことより」と続けた。

「おまえこなせこのような場所にいる。早く帰るぞ」「おれ達は肝試しで…… つてオイ、なんだよ、押すなよ！ わかった、帰るからその前に田代のものを取らせらつて」

早々に田印をゲットして別荘前に戻ると、すでに肝試しを終えて待っていたおれ達以外の全員が、驚いたように田を見張った。視線は一様に、意外な同伴者に注がれている。

「魔王くん……？」

「なぜ、おまえが一緒に……？」

「そんなことはどうでもよい。この屋敷でもいつも見晴らしのよい場所に案内せよ」

魔王の突然の要請に王子は何事かといつぱり眉をひそめたが、おれがうなづくと内部へ促した。

「うわちだよ」

みんなで2階バルコニーに出てまもなく。

不意に、ドン、と全身を揺さぶるような破裂音とともに、夜空に光が破裂した。

おれ達の瞳に映つたのは、鮮やかに咲き誇る大輪の花。

ヒューッドン、ドーン。大迫力の響きとともに、いくつもの花火が闇夜を彩る。

すぐ向こうの浜辺から、打ち上げられているようだった。

『今宵、おまえに最高の花束を贈つてやる』

脳裏に蘇つたのは、昼間の言葉。

「すげー……やつてくれんじゃん！」

隣の長身を見上げて笑うと、仮面の口元が満足げに少しだけ緩んだ。

「ドン、ドン、ドーンと骨にまで染み入るような轟音と、見事な百花繚乱に見入つてゐるうちに、ふつふつとからだに何かが湧きあがつてくるような気がした。」

「関東大会、おれ達も、最高の花火をぶつ放してやるつぜ……！」

体内の昂りをそのまま吐き出すように宣言したところ、一瞬の沈黙のち、普段と一緒に噴き出された。がーん。

「なんでおまえはそつ……江戸っ子？」

「でも、和希ちゃんはそういうところがまた可愛いよね」

「花火も何も、俺たちの曲は水中世界の歌だろ？」

「打ち上げるのは良いけど、派手に散るのは嫌だなあ」

「俺の歌の前に星となつて消えゆくがよい」

みんなして呆れたような笑みを浮かべながらからかつてくる。な、なんだよ。おれ一人盛り上がりつて恥ずかしいじゃん……！」

「……もう……」

いたたまれず背をむけたら、また笑われた気配がした。クソ、無駄に熱血で悪かったな！

「拗ねるなよ。……でかい花火、咲かそくな」

投げかけられた言葉に、もう、揶揄するような響きは消えていた

やう

けれど。

すぐには振り向くことができず、おれはまだまつて夜空に次々と咲き誇る華やかな彩花を見上げていた。

明日からも、また、歌の練習をしよう。

いっぱい歌って、ボイトレもがんばって、もっともっと上手くなりたい。

ゲームクリアのため、それはそのだけど。

それ以上にステージで、今できる、今しかできない最高の演奏がしたい……そう思った。

関東大会の4日前。

命懸けでみつちり練習しまくつた甲斐あつて、完成がギリギリかと心配された難曲も、各楽器とも既にすっかりモノにしてしまった。

おれの歌だけが、あと一步。

リズムには乗れるようになつてきたし、音程や高音の声量も問題ないのだが、あとはあれだ……色氣が来い。

「僕は今ままでも十分だと思つけどなあ。本当に、和希ちゃんの歌、どんどん上手になつてるとね」

「ああ。もともと歌心は群を抜いてたけど、それに技術も加わって田を見張る成長ぶりだと思つぜ」

口々に賞賛され、ちょっと照れる。

ふつふつふ、ビーだ、ヒロインはやればできる子なんだぜ？

「でも、和希ちゃん、大丈夫？ ちょっとがんばりすぎじゃない？」

「それは俺も気になつてた。おまえ、このところ、かなり遅くまで起きてるよな。早朝の走りこみも距離増やしてるんだろ？ 肺活量を強化したいのはわかるけど……無理はするなよ」

「平気平気。最後の追い込みだし、満足できるまでとことんやりたいからな。……とはいって、艶つてびつやつたら出せやんのだ……」

お手上げ状態で疑問を口にしたといひ、蠱惑的な笑みとともに静流の提案。

「オレに一晩預けてくれたら、変えてみせる自信はあるよ？」

即座に「アホ」と一刀両断し、残念、とばかりに静流が肩をすぐめた時、着メロが鳴った。

「 何？」

ケータイを耳に当てながら部室の外へ出て行つた静流だったが、次に戻ってきたとき、その顔は青ざめて、ざことなく強張<sup>じわば</sup>っていた。

「 静流……？」

眉をひそめるおれ達に、静流は、声だけはいつもどおり、「ごめん」と話し出した。

「大会直前のこんなとき」「すゞく申し訳ないんだけど……」しばらく練習、休ませて「……！？」

言葉を失う一同に、静流はもつ一度、ごめん、と謝る。

「これから、九州にいくことになった。大会当日には、絶対、戻つてくるから。それじゃ」

あまりの急展開に呆然とするおれ達を残し、そのまま立ち去つた。静流を呼び止めたのは、「待て」という鋭い声だった。

「 もしかして……？」

張り詰めた表情で問いかける悠斗に、静流は一回ノクリとうなづく。

「離婚決まつたって」

無表情でそれだけ言って、部室を飛び出していく。足早に遠ざかっていく靴音が完全に消えると、辺りは静寂に包まれた。

オレンジの西田の差し込む室内に、ヒグラシの鳴き声だけが、やけに大きく響いて聞こえる。

「……離婚つて、静流の両親が？　あいつの親、子どもほっぽつて地方勤務に連れ添つくらい仲良かつたんじやないのかよ？」

混乱しながら問い合わせたおれに、悠斗は「いや……」と首を振つた。

「むしろ逆だ。何年も前から亀裂きれつが生じていて……静流の母親は、父親の不倫の再発を恐れてついていつたのだと聞いた」

「……」

「3年前」

言葉を失つたおれに代わつて、口を開いたのは煌だつた。

「おまえと静流がコンクールに出場したとき、静流が大会当日にバタキヤンしたつて。……似てるよな」

悠斗は少し沈黙していたが、大きくため息をつくと、顔をあげた。

「3年前も、たしかに同じような状況だつた。ただ、あの時の静流はまったくなんの心の準備もない状態で……ヒステリー状態に陥つた母親に、ひどい言いがかりを受けたんだ。『全部あなたのギター

のせいだ』つて

「……！？」

意味がわからず困惑するおれ達に、悠斗は眉根を寄せながら言葉を継ぐ。

「あいつはかつて2年ほど芸能活動をしていたんだが……母親は自分も仕事をしている上に静流の芸能活動も忙しくて、家庭のことがおろそかになっていたらしい。やがて夫の浮気が発覚してノイローゼになつて、いた彼女は、それが夫婦のすれ違いの原因だと、静流にハツ当たりしたんだ。『あんたがギターなんてやらなければこんなことにならなかつたんだ』……と。自分の仕事第一で放任主義の父親も、あいつをかばうことはなかつた

「そんな……」

「不条理以外の何ものでもない」

「苦々しげに吐き捨てて、悠斗にしては珍しく、憤つたようにまくしたてる。

「芸能活動のきっかけはスカウトで、別に静流が無茶を言つたわけじゃない。最初は母親も自慢げだった。デビューが決まったときはギター教室で言いふらしていたしな。予想外に出演依頼が増えて、管理しきれなくなつたにしろ、静流になんの落ち度もない……筋違いいもいいところだ。

だが、泣いて取り乱した親に突然離婚の危機を告げられて、激しくなじられて、しかもそれが大会前夜だった。あの時のあいつは、到底ステージに立てる状態じゃなかつた

そんなん……あんまりだ。

まだ小学生だった静流のその時の気持ち……想像なんてつくはず

もないけど、胸がつぶれるような思いで、じわり、と視界が滲んだ。

「結局、その時は離婚には至らなかつたが、その後すぐに静流はギター教室をやめて、人前での演奏もやめた。一度はギターそのものをやめようとしていたが……それだけは、手放せるわけがないことはわかつていた」

「けわ険しい面持ちで語つていた悠斗が、そこで、おれに手を合わせて、少しだけ表情を緩めた。

「あいつが、ステージに立つと言つた時、心底驚いたんだ。静流は何よりライブが本当に好きで……でも、3年前のあの日以来、頑なにそれを拒んでいたトラウマは、そうとつのものだつたはずだから。おまえの歌が、あいつをステージに呼び戻すきっかけになつた。

今、たしかにあの時と状況は酷似しているが、あの時の封印を解き放つききっかけになつたおまえとのライブを、静流が放り出すことはないと思つ……大丈夫だ。3年前とは、違う

まるで自分にも言い聞かせるような悠斗の言葉に、首肯を返したけれど。

やるせなさはどうしようもなく、静流がこれ以上辛い思いをしなくてすむように、ただ祈るしかできない自分が、歯がゆくて仕方なかつた。

関東大会前日は、悠斗の剣道の大会があった。

結局団体戦のみに選手登録した悠斗は、大将として出場した試合は全て一本勝ちをしたが、準決勝で先に対戦校に三勝されて、ベスト4で終わった。それでも美楠剣道部としては、なかなかの成績だつたらしい。

三年間の部活動の花道に涙を散らすレギュラーたちから「ありがとう」と代わる代わる抱きつかれ、そんな彼らと（当社比でだが）親しげに言葉を交わす悠斗を見て、ホツとした。

バンドのせいで剣道部内で孤立してゐるのではないかと心配していだが、妬みを抱いていたのは、『ぐぐく一部の生徒だけだったらしい。夏休みに入つてからは、合宿の間以外は偏りなくほぼ両立させていたし、それがどんなに大変なことか、他の部員達も十分に理解してくれて』いるようだった。

夕刻の帰り道の電車の中で。

「お疲れさん。 カッコよかつたぜ」

今までの努力をねぎらう気持ちも込めて、本心から伝えると、悠斗はふいと視線をそらした。あ、照れてやがる。

「なんだよ、なんか返事しないよ。ほんとに、すげーと思つたんだか

「う

一や一やしてわざと視界に入るようこのぞき込んでやると、悠斗は「おまえな……」と顔をしかめたが、その後何気なく外に向けら

れた目が、みるみると面積を広げていく。

「静流……？」

形の良い唇から零れた咳きに、びっくりして窓に張り付いた。発車のベルと同時に瞳に飛び込んできたのは、フラフラと危なつかしい足取りで駅の階段に向かっていく細身の美少年の姿。電車はあつという間に速度を上げ、大きな看板や生垣いこがきが次々に流れていく光景しか見えなくなる。

ドクンドクン、とにわかに速くなる鼓動。

あれが、静流？

ひどく顔色が悪くて、心ここにあらず、といった雰囲氣で……たしかに顔かたちは静流だったが、まるで別人のようだった。たつた今自分の目で見たはずなのに、信じられない。

次の駅に停車するや、ホームに飛び降りて、ケータイを鳴らす。静流には、通じなかつた。

反対車線に入ってきた電車に、衝動的に飛び乗つた。

「和希、今更戻つて探しても、見つかるとは思えないぞ？」  
「だけど……もしかしたら、まだ駅の近くにいるかもしれないし。このまま真っ直ぐ帰るなんてできねーよ」

悠斗は小さくため息をついたが、付き合つてくれるらしい。

さつきの駅で降りて、改札を出たが、人の波。山の手沿線の副都心だから、確かにここでなんの当てもなく探し回るのは無謀というのだろう。

ギリ、と歯を食いしばって、駅前広場で視線をさまよわせていた  
「……」

「和希」

背後から、妖艶な低音が響いた。

「魔王！ ロン！」

意外な人物との遭遇に、目を丸くするおれと悠斗。

「あつれー、なにごと？ 勝気なアンタのそんな途方に暮れた顔見せられると、どーしょーもなくそそられちゃうんだけど」

軽口を叩くロンをガン無視して、魔王に息せき切つて問いかけた。

「おい、静流見なかつたか！？」  
「紫葉静流……？ 探しているのか？」

大きくなづくと、魔王はわずかに目を眇めてから「あいつのいきそなところは……」とライブハウス、クラブ、カラオケボックス、公園、ゲームセンターなどいくつかの候補名を挙げた。悠斗がうなずく。

「そのライブハウスと公園ならわかる」  
「分担しよう。魔王、クラブの場所、詳しく教えてくれ  
「ついてこい」

驚いて見上げると、ムスッとしたまま「案内してやる」と顎でうながす魔王。

「方向感覚皆無かいじゆのおまえが、一人でたどり着けるとは思えんからな」  
「恩に着るぜー」

魔王にも付き合つてもらつてあちこち探し回つたが、どこにも静流の姿を見つけることはできなかつた。

「ここも、外れか」

魔王のチツという忌々しげな舌打ちとともに、最後の候補地だつた店を出た。外はもう、すっかり暗くなつていた。

「……ありがとな。もう十分だ。あとは、一人で探してみる」  
「待て、和希……！」

魔王の制止を振り切つて、駆け出した。もう一度、公園のほうへ行つてみよう。

ポツリ。ポツリ……。

降り始めた雨が、まるで静流の流す涙のように思えて、胸がかき乱される。

いくら大人びてるつつても、見た目は華奢きやしゃな中学生だ。否が応にも人目を引くあいつが、あんな弱々しい姿で放浪してたら、どんな危険に巻き込まれるともわからない。

走り続けたせいで、心臓が口から飛び出しそうになりながらも、公園にたどり着くと、入り口近くで悠斗とロンが何か話していた。魔王の指示でやはり捜索に協力してくれていたロンは、駆け込ん

できたずぶ濡れのおれを見て、ピューチと口笛を鳴らす。

「馬鹿、無茶するな」

表情をそつと強張りせし、コソコソと眞つたのだから、ビール傘をおれの上に差し出す悠斗。

「静流、は……？」

ゼエゼエと苦しげ呼吸を整えながら尋ねると、二人は首を左右に振った。

「……諦めよう。大丈夫だ、あいは、賢い奴だ。自暴自棄になつて無茶な真似をするよくな」とは、ない

「……」

黙つたままひつむじていたら、やや強引に肩を抱かれるようになつて、うながされた。

抗う氣力はわからず、のろのろと歩き出す。

「つき合わせて悪かつたな」

「ホントにな。この借りは高くつべし。んじゃ明日会場でな

すべそばで交わされる一人の会話が、やけに遠く感じられた。

「……濡れネズミじゃ電車にも乗れないといつーとで、公衆トイレで悠斗の剣道部Tシャツとトレパンに着替えて、消沈しながら帰途についた。

「……家に着いたら、すぐに風呂に入つて身体を温めて、しつかり睡眠をとるんだぞ」

バラバラと傘に打ち付ける雨音に混じつて、悠斗の声。

「夏とは思えないほど、今夜は冷える。明日は本番なのに、あんなに雨に打たれて……どうして、おまえはやつ……」

やうじつてため息をつくことも、傘をほととぎすかに傾けていふせいで、右肩がびしょ濡れだつた。

「……人のこと言えねーだり」

色んな気持ちが渦巻いていたけど、無理矢理でも少し笑つてそう言つと、悠斗はもう一回大きく嘆息した。

重いながらも規則正しく進められていた歩みが、不意に止まつたのは、家まであと少し、という距離のことだった。

隣で小さく息をのむ音に、何事かと、うつむきがちだった視線を前方に向けて ドクン、と心臓が大きく跳ねた。

おれの家の前にたたずむ、濡れそぼつた一つの影。

力なく、ただただ一階を見上げる静流の頼りなさげな横顔が、街灯の青白い光に照らし出されていた。

「静流……！」

声をあげたおれに、振り返った静流は、瞬間、ホッとしたように、泣くのをこらえるように……いろいろな感情が混ざったように、顔を歪めさせた。

「センパイ……」

かすれて震えるようなその声を耳にした瞬間、無意識に駆け寄つて、抱きしめていた。

密着した肌が、驚くほど冷たくて、何かが込み上げてくる。

「馬鹿……おまえ、いつからここにいたんだよー！？」

その細い身体を少しでも温めたくて、ぎゅっと背中に回した腕に力を込めるとい、わかんない、とギリギリ聞き取れるくらいの小さな声。

「気がついたら、ここにきてたから」

「何があった？」

ちよつとだけ身を離して、真正面からのぞき込むと、静流は自嘲するよつこ弱々しい笑みを浮かべた。

「別に……わかつたことしかなかつたよ。もつ、どうもならなつて。別れるから、どうにつけづいてくるか、選べつて言われた。それだけ」

「……」

「……3年前に、願掛けしたんだ」

ぱつり、と話した静流の声は、やつぱり消え入りそうな音量しかなくて。

ザーザーと降りしきる雨とともにすればかき消されてしまいそうなその響きに、全神経を集中させて、言葉の続きを待つ。

「神仏なんて、ハナから信じてないくせに。好きなものを我慢したり、願い事が叶うつていうから……一度とライブをしない代わりに、離婚しませんようにって。馬鹿馬鹿しいって自分でも思いながら、でも、必死だつたから、たしかにそう祈つたんだ」

「…………」

「その時は、願いが叶つたと思った。でも、一人の仲はどんどん悪くなる一方で……地方赴任<sup>ふにん</sup>が決まつた時、母さんは意地になつてついていく事を選択したけど、もつとつぐにダメになつてゐことは、明らかだつた。オレは、断ち物<sup>たた</sup>なんか無意味だつて空しくなつて、そんな時、センパイの歌を聴いて、センパイ達のライブを見て、もうどうしようもなく一緒に演奏したくなつて……誓いを、破つた」

次第に、静流の声がボリュームを増し、激情をはらんだものになつていく。

「神頼みなんてらしくない、オレがどんなに祈つたところで、あの人たちのことはあの人たちにしか解決できなくて、なるようにしかならない。そう思つて、バンドに入つたけど きっとそんなの言い訳で、オレは結局、自分の欲に負けたんだ。オレはするい。オレのせいじゃないけど、オレのせいかもしない！ 頭じゃ論理的じやないつて理解できるのに、苦しくて、自分が嫌で、むかついて、吐き氣がして、爆発しそうになる。もう、なにがなんだか、わからんないんだ……！ オレは汚い。オレは最低だ。オレなんて消えたほ

「うがマシ」

「おまえは悪くない！」

叫ぶよつて自分を責める静流に居たたまれなくなつて、負けないくらいの大声で遮った。

「おまえは何も悪くない。おまえの言つとおつ、びつこひつもなかつたんだ。

静流はするくなんかないし、いつもよく周りをみて、人の気持ちを考えて行動できる、優しい奴だ。おまえが自分を責める必要なんて、全然ない」

雨か涙か……しきりに零の滴るほおを両手ではさんで、まっすぐに田を見て断言する。

「誓いを破らせて、おまえを引き込んだのはおれだから、もし責任があるって言つなり、おれのせいだ。謝るよ。辛い思いをさせて、ごめんな。でもおれは、おまえと一緒にバンドできるようになつて、本当に嬉しかつたし、感謝してる。どんなに憎まれても、恨まれても、おまえと一緒に音楽ができる」と、後悔なんてしない。おまえがいてくれて、よかつたよ。ありがとう

心からの思いを伝えて、祈つた。

どうか、わかつてほし。おまえは悪くないんだから。傷つく必要なんて無いんだから。

もうそんな悲しいことを、考えないでくれ！

静流は果然としたよつておれを見つめていたけれど、次第にその顔がくしゃくしゃになるや、こらえていた全てを爆発させるよう

悲鳴  
かうめい  
した。

おれは、この激しい雨が静流の悲しみを全て洗い流してくれたらいいのにと思いながら、その身体を、グッと抱きしめ続けた。

## 61・狂い出す歯車

「二人とも、家に入つて、すぐにシャワーだ」

静流の感情が静まつてきたのを見計らつたようなタイミングで、不意に煌の声がした。騒ぎに気づいて、玄関先に出てきていたらしい。

「静流は、俺の家で浴びるといい。二人とも、このままではいい加減、風邪をひくぞ」

いつのまにか、傘をおれ達の上に差しかけてくれていたらしい悠斗も、そう言いながら全身びちょびちょだつた。

シャワーを浴びてリビングに出て行くと、煌が温かいカップを渡してくれた。

本当に、今夜は8月とは思えないくらい寒い。風呂から上がつても、まだゾクゾクと寒気が続いていた。

淹れてもらったココアを一口すすると、喉内に広がる甘さと熱に生き返る心地で、自然、大きなため息がついて出た。

「大丈夫か？ 顔、赤いぞ」

心配そうにおれの額に手を当てた煌が、瞬間、ギョッとしたように目を見開く。

何事かと首を傾げた途端、いきなり横抱きに抱えあげられて、狼狽した。

「な、なにすんだ。離せ！」

「うるせー。おまえはもつ、問答無用でベッド直行」

煌はおれの抵抗にとりあわず、きつぱり言い切ると移動を始める。降ろせ、と暴れたくても、身体が重くてなぜか力が入らなかつた。結局、成すがままに自室のベッドまで運ばれて、布団をかけられた。

いつになく青ざめた芽生がもつてきた体温計が示した数値は39度2分。

「静流は……？」

全身に広がり始めた熱と痛みに朦朧もうろうとしながら、氷枕を敷いてくれた煌に尋ねると、淡い笑みとともにくしゃつと頭を撫なでられた。

「シャワーからあがつたら、ずいぶん落ち着いたらしい。おまえに『ありがとう。明日はがんばるから』って伝言残して、家に帰つたつて」

「そつ……か。よかつた……」

何か作るから薬飲もうな、と煌が階下に降りていったのを確認するや否や。

「あんた何やつてんのよー。」

つかみかからんばかりの勢いで、血相を変えた姉貴になじられた。

「こんな……こんな大会直前に体調崩すなんて信じられない。『ときメロ』で病気になるのは、休息を取らずに体力ゲージが5分の1以下になつた時……あんた、あたしが決めたスケジュール以外にも、

もしかして勝手に練習してたわけ！？

「…………」

おれの無言の肯定に、姉貴は頭を抱えた。

「ありえない……あたしは、ギリギリで最良のスケジュールを組んでたのよ？ 体力的にもせいいっぱいだつたはずなのに、なんでもだやううとするわけ！？ 睡眠時間どんだけ削つてたの？ いくらなんでも無茶しすぎよ！」

「…………限界まで、できる」としたかつたんだ。自分では、大丈夫だと……」

「バカバカバカバカ！ 倒れたら全イベント放棄で1週間ベッドに強制はりつけなのよ！？ ここまでやつてきてゲームオーバーとか、ありえない…………！」

涙目で告げてくる姉貴の言葉に、しばし田の前が真っ暗になつたが、グツと奥歯をかみしめた。

「…………そな」と、させない。関東大会には這つてでも出場して、歌う

「無理よ」

「無理じゃねえ！ この世界は前から、ねーちゃんの知つてゐる『ときメロ』とは違つてきてるんだろ！？ 『羽鳥和希』はテンプレのヒロインじゃねえ。全てがゲーム通りじゃないんなら、今回だつて、違つて展開にでれるはずだ…………！」

「…………」つなるよつに宣言するおれに、姉貴はパチパチと涙をこらえるよつに瞬きじてから、キュッとおれの手を握つてきた。

「…………」めさんね

泣き声交じりで囁くよつと零されたのは、耳を疑つよつた、殊勝な一言。

ばかりひ、縁起でもねーや。百万回謝つたつて、今更遅いつつーの。

そう、言つてやつたかったけど、もはやそんな余裕はなかつた。頭が割れそこにガンガンして、体中がズキズキして、しんどくてたまらない。

負けてたまるか。

おれは、歌うんだ。今まであんなにがんばってきたんだから、絶対、みんなで、最高の演奏を……。

必死に自分を奮い立たせよつとしたものの、おれの意識は、そこで途絶え、深い闇へと呑み込まれていった。

……

けたたましい、電子音。  
いつもの朝の光景だが、覚醒した瞬間、全身があわ立つた。まさ  
か！？

スタート地点へのループの可能性に戦慄したが、ふとベッドの脇  
を見ると、煌が床に座つたまま「クリ、クリ」と頭を揺すりながら、  
寝入つていた。そのかたわらには、タオルケットをかけられて横に  
なつた芽生の姿。

氷の溶けきつた洗面器の水面が、窓から差し込む朝日を反射し、  
キラキラと光つている。

顔を動かした時に頭からずり落ちてきた湿つたタオルをつかみ、  
まだ、ゲームオーバーにはなつていないと胸をなで下ろした。

「……和希」

おれが身体を起こす気配に気付いたのか、煌の目がぱちりと開いた。

「起きたのか。具合はどうだ？」  
「ああ、大分楽になつた。一晩中ついててくれたんだな……ありが  
とう」  
「おまえ、昨日はほんと死にそうだったからな……」

疲労と安堵が半々ににじんだ笑みを浮かべながら、煌の顔が近付  
いてくる。

え……？

ボーッとして反応が鈍くなつてゐるおれのひたいに、自分のひたいを合わせると、煌は眉をかすかにしかめた。

「まだ、少し熱があるな」

「ばかやろ。人が動けないと思つて何さらす！」

ブン、と振つた腕をひょこっと避けながら、「ま、昨日よりは明らかによくなつてはいるけど」とまつたく悪びれたといひなく言葉を継ぐ煌。

「今日はこのまま寝てた方がいい」

「馬鹿言つな。やつとたどり着いた関東大会だ。絶対出る」

「無茶だ」

「無茶でもやる。咽喉はやられてないし、歌える」

やつと言つてゐる間もフラフラしたが、ギュッとシーツを握り締めてじりと、汗むすびに宣言した。

「…………」

煌はしばらく黙つて見つめ返してはいたが、おれが頑として譲らないのを悟ると、大きく息を吐き出した。グッと身体を伸ばしながら、部屋のドアへと足を向ける。

「とりあえず、薬だな。すりおろした林檎くらいなら、食べられるか？」

あちこちで不協和音の軋みをあげる、鉛のよつよつに重い身体。激しい眩暈と汗でかすむ視界。

全身が熱くて、燃えるようだ。

一度は落ち着いたのだが、どうやらまた悪化してきたっぽい。関東大会の会場内、女子更衣室から控え室までのほんのちょっとの距離も、千里のように果てしない道のりに感じられる。

衣装の長いドレスの裾が、うつとうしくてならない。階段を踏む足が、するり、とずれて、やばい……！ と肝を冷やした刹那、力強い腕に抱きとめられた。

「どうみても瀕死ではないか。こんな状態で、舞台に立つとこりのなか？」

眉間に深いしわを刻み、間近で見下ろす絶世の面差しは魔王のそれ。髪はつしろで一つに束ね、ゴスロックのハードな黒い舞台衣装に身を包んでこる。

「うみせえ。やると決めたからには、やる」

はあっと息を吐いて体勢を立て直すと、再び階段を上り始める。

「うひやあ、見てらんねー」

言葉とは裏腹にどこか興奮したようなロンの声も聞こえたが、反応する余裕はなかった。

「…………？」

不意に、身体が浮いた、と思つたら、肩の上に抱えられるような  
かつこうで魔王に抱き上げられていた。

「な…………？」

「感謝しき。運んでやる」

無愛想にそつまつと、控え室へと歩を進める魔王。

「…………悪い」

反抗する気力もなく、ぐだつとそのままもたれかかることにした。  
はたからみたら、死体を運んでるよつて見えるかもだ。

「…………」

「…………」

「…………」

ドアの前で降ろされて、礼を言おうと顔を上げたおれにかけられたのは、そんな憎まれ口だった。

「くつ、おれ達の演奏きて、度肝抜かすなよ…………」

荒い呼吸をつきながら、精一杯唇の端を吊り上げて言つてやると、  
魔王はフツと微笑んだ。

「アンタ、マジでやるつもり？ 舞台で倒れたりしたら無様だぜ～

隣でケラケラと大笑いしてる馬鹿には、思いつきり冷たい無言の  
一瞥いちべつを投げつけてやる。ブルブルツと身を震わせてから、満面の笑

みでペロっと唇に舌を這わせる口……つと、元、ビーウー神経して  
んだよ、ここつ。

「 和希ちゃん。大丈夫? 」

控え室の扉を開けると、バーテン風の衣装をまとった4人が駆け寄ってきた。

「 無理しないで。棄権きけんを選んでも、僕たちは誰も君を責めたりしないよ 」

心から気遣わしげに眉根を寄せた王予。

「 いや、どうしても出たいんだ。体調管理が甘くて、『ごめんな』

悲痛な表情で、静流が大きく頭を下げる。

「 センパイ、本当に『ごめん、オレのせい』……! 」

「 やめろって。おまえが気に病むことはねーから 」

この体調不良の原因はオーバーワーク。おれさえしつかりしてればこんなことにはならなかつたのに、静流はひたすら自分を責めているようだった。うう、面白い……。

「 おまえこそ、大丈夫か? 」

ふらつく足を踏みしめながら問うと、静流は瞬きし、何か言いかけてからそれを飲み込んで、大きくなづいた。

「 まつ向を言つても無駄なんだろ？ …… 頑固な奴だ

呆れたように吐息を漏らしながら、心配そうに瞳を曇らせる凌斗。

「 おまえに言われたくないつての

煌は、じつとおれの田を見つめていた。

決意を込めて見つめ返すと、固く結ばれていたその口元がふつと  
三田円を描く。――

「 最高の演奏をじみつけ

「 ああ――」

## 63・関東大会。そして……

ぐりぐりと視界を揺らす眩暈、込み上げる吐き気、全身を苛む激痛。

その全てが、ステージで第一音が生まれた瞬間、どこかへ吹き飛んだ。

おれの意識は、火照りだけ残したまま、苦しくも甘やかな青の幻想世界を漂い、酔ったようにまぐらむ。

息つきもままならない溺れるような恋の幻覚に、悶え、焦がれ、多彩に絡み響き合う艶音に痺れを覚えながら、永遠のような刹那に陶酔する。

耽溺たんのきと浮遊感。

のの  
惱乱のうらんと多幸感。

めくるめく感覚の倒錯に半ば恍惚けいごとして、音の海を彷徨わがよいもがいていたおれは

“わあああああ……”

割れるような歓声と拍手で、我に返った。

終わつた……のか？

「おまえつてやつは……」

「最高だ」

「す」「いよ、和希ちゃん」  
「めっちゃゾクゾクした……！」

幕が下り、興奮で紅潮するみんなに囲まれても、朦朧としていて。

「おれ……歌えてた……？」

笑顔でうなずく4人の姿を見た瞬間、大きな安堵<sup>あんび</sup>が広がって、最後の糸が切れたように、おれはその場に崩れ落ちた。

熱い。息ができない。苦しい。助けて……！

目の前で、オレンジがかつた炎<sup>ほの</sup>がうさぎのぬいぐるみをまるまるうちに呑み込むのを、おれは、絶望とともに凝視<sup>きょうし</sup>してた。

悪魔のような炎は恐ろしい速さでのた打ち回りながらその魔手を広げ、ぐるりと見回した屋内はあつという間に火の海へと変わっていた。

恐怖で頭が真っ白になり、ガクガクと震えていたおれの肩に、不意に、何かが落ちてくる。あまりの激痛に、声にならない悲鳴が飛び出す。肌の焦げる匂い。

熱い。熱い。痛い。痛い。嫌だ。怖い。死にたくない……！

「 和希、しつかりして！ 和希！」

大きく揺さぶられて、覚醒<sup>かくせい</sup>したおれのすぐ近くに、今にも泣き出しそうな芽生の顔が見えた。

「あ……顔……」

田を開けたおれに、姉貴は「よかつた」と唇をわななかせて呟く。

「あんた、す「ぐ」くなされて……」のまま、死んじやうんじやないかと思つたわよ」

「みんなは……？」

「今、結果発表を聞きに行つてる。」の」は医務室。……大丈夫？顔色、真つ青よ」

指摘されなくても、わかつた。

ドツドツドツドツと胸を突き破りそつなほどけたたましく打ち付ける鼓動。

夢とわかつてもなお、手足はブルブルと震え、心の芯まで凍えるよつな恐怖が消えない。壮絶な、炎の記憶。

「す「ぐ」く、リアルで、恐い夢を見た。大きな炎に囲まれて、身動きできなくなつてゐ、夢……」

呆然としたまま告げたところ、姉貴の顔が驚愕きよくわくに満ちたそれに一変した。

「」の時期に、煌くんイベント……！？ そんな」とつて……」

その真意を問おうとした時、バタバタと足音が接近してきて、派手に扉が開く。

「優勝だ！」

飛び込んできた4人の笑顔に、じばらく呆氣ひきにとられてから、じ

わじわと、なんともいえない波がわき起しつていつた。

「やつたー！」

歓喜の衝動にまかせて勢いよく起き上がりつた途端、目がくらみ、またぐつたりと横たわるはめになる。

「センバイ！？」

גָּדוֹלָה וְגָדוֹלָה

「懸い、いきなじ

バツの悪い思いで力なく笑つてから、急に込み上げてくる何かに、ぐつと唇をかみしめた。震えるほお。ジワジワと熱くなる田頭。  
……やべ、ちょっと、我慢できねーかも。

突然頭から布団をかぶつたおれに、あいつらが、息をのむのわか  
つた。

「…………」「めん、熱で、感情セーブできなくなつてゐりまへー」「…………」

ボロボロと、堰<sup>せき</sup>が崩壊<sup>じやくはい</sup>したようにあふれ出した雫<sup>しづく</sup>をぬぐしながら、布団の中から言<sup>い</sup>ひ訳<sup>わけ</sup>したら、ポンポン、といたわるよ<sup>う</sup>にほたかれ

「お疲れ様」

「……おまえはあらじ奴だ」

「最高の歌を、あつがどう。」

『最強の歌を、ありかと』

みんなの声と言葉が、あまりにも優しくて。必死に抑えようとしたものが、いよいよこりうえきれなくなつた。

あーあ、恥ずかしいったらねーな。まだ、関東大会なのに……。

やう思いながらも、静かな医務室にしゃくりあげる音がもれるのを、もはやじうる」ともできなかつた……。

### 63・関東大会。そして……（後書き）

これにて2nd Phase終了です。

でもつて節目のお祝いに……というわけでもないのですが、Web拍手にてメインの男キャラ5人で対談をさせてみました。シリアス続きの反動でものじつつアホなものになりましたが、よろしかつたらどうぞ。変態でゴメンナサイ。

## 64・炎の追憶（前書き）

3rdステージ開幕。  
いきなりペリーな展開ですみません。rn

心身ともに相当まいっていたようで。布団にもぐってグスグス言つてゐるうちに力尽きてまた眠つてしまつていたらしい。

次に気づいた時、おれは病院のベッドの上。

あいつら、過保護すぎ……でもないのだろうか。

大丈夫だと思っていた咽喉も、ステージが終わるとズキズキと痛み出し、呼吸も思うようにできない。激しい咳も出てきて、一度咳き込むと止まらないし、とにかく全身が痛い。

倒れたら自宅から動けないというゲーム世界のルールに逆らつようなことをしたせい？

おれ、このまま、消えてしまふんだろうか？

熱い。とにかく、熱くてたまらなかつた。灼熱地獄であぶられるよつな感覚

『和希！』

炎の中から、誰かが鬼気迫る声と共に飛び出してきた。瞬間、彼のまどつていた布全体に火が燃え広がり、いまいましげにそれを脱ぎ捨てる。

煌？

違う。煌の、親父さんだつた。

その時、胸にわき上がつた感情の波は、どう表現したらいいのだ  
るづ。

とほうもない安堵。喜び。憧憬。しかし同時に、それらのプラスの思い全てをのみ込むよつな、すさまじい絶望感。

ダメ。アナタハ、キチャダメダメタノー。

『息、止めとけよ』

決死の形相でまなじりをつり上げた彼は、持っていたバケツに水と一緒に押し込まれていたビチョビチョのシーツですっぽりとおれを包むと、抱き上げ、走り出す。水に浸されていたはずのそれは、業火に熱され、一瞬火傷するかと錯覚するほどだった。

そんなに出口までは遠くなかったのだとと思うが、その時間は、無限のように感じられた。

熱気がおさまったと思った瞬間、全身を覆っていた布がひん剥かれる。

『……よかつ、た、無事……』

部分的に焼け焦げたシーツのすき間からおれが見たのは……。

「……和希！？」

全身汗だくで覚醒したおれを心配そうにのぞきこんでいたのは、少し年かさのいった優しそうな女性だった。どこか親近感のわく、見覚えのある面立ち。

「あなた、和希が田を覚ましたわ」

女性の呼びかけを待たずに、壮年の男性が近づいてくる。

「よかつた……まる2日も、田覚めなかつたんだぞ」

ホツとしたからか泣き笑いのようになつて、おれの手を握りしめ

てくる。

混乱するおれをフオローするように、そばにいた芽生が教えてくれた。

「パパとママ、お姉ちゃんが倒れたって煌お兄ちゃんから連絡を受けて、帰ってきてくれたんだよ」

なるほど、彼らはヒロインの両親 確か真治さんと弥生さん、だつたか。見覚えあるはずだ、いつも鏡で見てるヒロインの顔に似てるんだからな。（順番では逆なんだろ？けど。）

「煌の親父さんが死んだのって……おれのせいだったんだな」

カラカラに渴いた咽喉。震える唇から零されたおれの言葉に、真治さんが愕然としたように顔をこわばらせた。

「熱で、思い出したんだ……全部」

九年前の夏。ヒロインは煌と煌の親父さんの3人で、煌の父方の実家のばあちゃんちに宿泊中、火事にあった。

煌の父親が買い物で外出している間の発火。異変に気づいた時点でまっすぐ外に脱出していればよかつたのだが……彼にもらつたうわぎのぬいぐるみを取りにわざわざ奥の部屋に戻ったヒロインは、一人逃げ遅れてしまつたのだ。

まだ大したことはないと子ども心で過信していた炎は、すさまじい速さで家全体を覆つた。

煌の父が帰宅したのは、そのタイミング。ヒロインを救出するため炎の海に飛び込んだ彼は、その結果、目的は果たしたもの全身に大火傷を負い、死亡したのだった……。

最後に見た、あまりに痛ましい光景。大好きだった 初恋の人

の、変わり果てた悲惨な姿。

やりきれなさに、ボタボタと、大粒の涙があふれだす。

真治さんはつないでいた手にグッと力を込めるとい、低い声で、話し出す。

「おまえは救出された後、すぐ氣を失つて……今と同じよつて、田間うなされ続けて、ようやく田覓めたとき、火事に関わる全ての出来事を忘れていた。幼稚園に入つた頃から毎年、夏にはあの田舎に遊びに行つていたのだけど……金城一家のことだけは、綺麗もつぱり覚えていなかつたんだ。医師からは、大きすぎる罪悪感と恐怖による、記憶障害と診断された」

「……煌と、煌のばあちゃんは？」

「煌くんは、おまえがついてきていないことに気付いて中にかけ戻つてすぐ、背中に火傷を負い、帰つてきた祟たがし」彼の父親に救い出されたそうだ。おばあさんは、最初の避難で火災はまぬがれたが、体調を崩して事件の一週間後に息をひきとられた。発火の原因は、旧い扇風機だつたらしい」

「でも、煌の親父さんを殺したのは、おれなんだよな!?」間接的には、きっとばあちゃんだつて。おれが戻らなければ、誰も死なずにすんだのに……！」

うめくようにそう吐き出したおれの頭を抱きながら、真治さんもたぶん、泣いていた。それでも、悲痛ではあるが落ち着いた聲音で、言い聞かせるよつて言葉を継ぐ。

「おまえのせいじゃないよ。直接の原因は扇風機だし……でも、親である私には、責任があると思つたし、できる限りの謝礼と償いがしたかつた。けれど、小百合さん……煌くんのお母さんには、私の顔などみたくないと強く拒絕されて、そのうち行方もわからなくな

つて 成長した煌くんに偶然会った時、彼にだけでも援助を申し出たのだが、それも断られてしまった

「煌も、内心ではおれを恨んでる……？」

胸にうず巻く大きすぎる感情に、飽和状態で呟いたおれを真つ直ぐ見つめながら、真治さんは「それはない」ときっぱり首を振った。

「彼は、誰も恨んだりしていない。おまえが事件のことを忘れているなら、忘れていられる方がいいと……うちで暮らすようにと誘つたときも、自分の存在が近くにあることでおまえが記憶を取り戻して、おまえが苦しむことになるんじゃないかと、そのことを何より恐れているようだつた。そんな彼だから、私はなおさら、困っているなら助けたいと思つたし、希望があるならできる限り叶えたいと思つたんだ」

「お母さんは、反対だつたのよ」

真治さんが席を外した後、青ざめてまだ呆然としているおれの手をぎゅっと握りながら、今度は弥生さんが話し始めた。

「親のエゴかもしれないけど、煌くんがそばにいることで、あなたの記憶が蘇よみがえてしまふかもしれない。記憶をなくすくらい辛い、もうどうにもならない昔の悲劇を、今更思い出して、苦しみしかないから……お父さんも、その可能性はわかつていて、それでも、彼をあなたに会わせてあげたかったみたい。

彼を家庭の悩みから切り離したいという気持ち以上に、彼の応援がしたかつたんだと思うわ。ほんと、すっかり入れ込んでやつてるんだから

「応援……？」

よく意図が飲み込めず首を傾げるおれに、弥生さんは柔らかく微笑んだ。

「あ」くいに子よね、煌くん。……まつすぐで、強くて、本当に、  
崇さんやつくり」

「…………」

「彼は、自分のせいであなたが辛い記憶を取り戻したらどうしよう  
つて本当に心配していたから……あなたが落ち込んで、これまでの  
明るさや素直さを失つたら、きっと自分を責めると思う。何も思  
い出していないふりができるなら、その方が、いいと思つわ」

思ひ出しがいい、ふりを、した方がいい……？ そうなのだろうか。

わからなかつた。おれはビーフいたらよくて、何ができるのか。全  
然、わからない。

「 そういうえば和希が寝てる間、バンドの友達が代わる代わるお  
見舞いに来てくれたのよ」

暗い顔で黙り込んだおれの気を取り直そうとしたのか、口調をガ  
ラリと変えて、弥生さんが話し始めた。

「それはもう引つ切り無しに。他のバンドの子たちもいたかしら。  
すごいじゃない和希、びっくりするよつたなイケメンばっかり！ さ  
すが私の子ね！」

「はあ……まあ……そうですか」

「お母さんはずつと悠斗くんお推しだつたんだけど、あんなにみんな  
カッコいいと、迷っちゃつわね~」

反応に困っていたら、いきなりズイツと顔をのぞき込まれる。

「で、和希は、誰が好きなの？」

「……いや、別に、好きか嫌いかと言えばみんな好きだけじゃ」

友達として、と続けよつとした言葉は、「ええつ 6股！？」といふ弥生さんの大声にかき消された。オイオイ、おばさん……てちょ、待て、6！？

「6股つて……え？ 煙と悠斗と王子と静流と魔王と……あとまたかロンも入れてる！？」

いくらなんでもそれはねーだろ、とほおを引きつらせるおれに、弥生さんはとんでもない爆弾発言をきましたのだ。

「ああ、たしかに紅龍ロンを彼氏ですつて紹介されたら、ちょっと困惑っちゃうわね」

紅、龍？

## 65・虚構と現実、運命と選択。

「……あいつの名前は、道家ロン、のはずだけ……」

事態が飲み込めず呆然と呟いたおれに、「あ、本名は道家つていうんだ」と弥生さんは目を瞬かせた。

「本名……？」

「知らない？ モデルの紅龍ロン。くれないじゅう紅の龍つて書いて、紅龍。あの顔といいファッションセンスといい、どう見ても本人でしょ。1年位前からちょこちょこファッション誌に出てるけど……まあ、確かにちょっとマイナーかしら。でも一部にはマニアックな人気があるのよ」

……えー！？

紅つて、色が名前に入ってるってことは……えー！？

パツと芽生の様子をうかがうと、久々に見る、人の悪い笑みを二ヤリと顔面いっぱいにたたえていた。

えー！？

えー！？

「隠しキャラつてやつね」

病室ではなかなかタイミングがつかめず、芽生とようやく一人つきりになれたのは日覚めた翌日、退院して自宅に戻つてからのことだった。

自室に入つてきて扉がパタンと閉まるやいなや、弾かれたようにベッドから身を起こすおれに、姉貴は開口一番そう言つた。

「じゃあ、やっぱロンも攻略可能キャラなわけ？ そんな、今更

……」

「心配しなさんな。彼はちょっと特殊な位置づけでね。ベストEDの全員攻略の条件には入らないの。あんた、めっちゃジビツてたわよね～あの時の顔つたらもう……グッジョブー！」

ブブツと思ひ出し笑いする姉貴。

「ああ、そうだよ、ここつはこーゆー奴だ……殴りてえ。ボコボコにしてやりてえ……！」

「まあ、ロンには近づかないことを強くオススメするわ。あんたはあたしのことをどうとか言つけど、あれに比べたらあたしなんて全然可愛い方だもの」

「……ありえねえ。どんだけだよ」

「そんなことより気になるのは、シナリオのズレよ」

ガラリとシリアスモードに表情を一変させた姉貴に、おれも怒りはひとまず横に置いて、その先の言葉を待つ。

「本来の『ときメロ』ではヒロインが過去のあの記憶を取り戻すのは、11月。全国大会間近の煌くんシナリオ最終段階のことよ。イベントとして体調を壊して、その時の熱で火事の記憶が蘇るんだけど……あんたが無茶をしたせいで、イベントと同レベルの熱が引き起こされて、結果として、まだ関東大会にもかかわらずシナリオを先取りするような形になつたみたい」

「最終段階のシナリオを、先取り……？」

復唱してしまったが、それが何を意味するのか、今ひとつピンとこない。

「先取りつていうより、早倒しつていつたほうがいいのかしら。まあ、彼らの親密度の上昇ぶりを見てたら決して不自然じゃないんだけど」

「上昇ぶりって、芽生には親密度やパラメータが具体的に見えるわけ?」

おれの質問に、姉貴はコクリとうなずいた。

「といつても数値として細かく把握できるわけじゃなく、大まかに感じがつかめるだけなんだけど。もともと、『妹』はゲーム攻略をヒロインにアドバイスするキャラだから、そういう能力を持つてるのはよね……で、和希。あんた、ほんぱないわよ」

腕組みしながら一ヤ一ヤとほおを緩めまくる姉貴。『ううう顔をするときは、うくなこと言わないんだよな、絶対……。』

「何がだよ」

「この時点ですでに全キャラほぼ恋愛マックス状態。本来のゲームシステム的にありえないペースよ。あんた、ほんっと彼らのツボつつきまくりみたいね~まさか和希にこんな才能があつたなんて。よつ、この天然小悪魔! 男たらし!~」

……ゲーム攻略がうまくなっているのは何よりだけど、素直に喜べない、なんだかのジレンマ。

「ま、考えてみれば恋愛マックスなら最終段階のイベントが起つても不思議はないわけなんだけど。

前々からあたしが知ってるゲームとは違う展開になつてるものや、そもそもゲームには存在しなかつたイベントはあつたけど、見てもとはやシナリオなんてあつてないようなものなのよね。あるのはゲーム製作陣の作った『設定』と『システム』という枠組み……でも、このシステムさえも、狂ってきてる。

さつき言ったような親密度の上昇率もそうだし、何より、関東大会の優勝。 本来は、どんなにがんばってもまだ『Der Luxus Tod』には勝てないはずだったのよ

「え……じゃあまたおれ達は2位通過のはずだったのか？」

「ええ。それにもかかわらず、通常とは違う状態でのぞんだせいが勝てちゃつた。結果として今回は『Der Luxus Tod』が2位通過……これがどういう風にこの先に影響してくるかはわからないけど、もうほんと、何が起こるかわかない感じ。

ゲームシステムを世界の輪郭として受け止めるなら、世界の崩壊が始まつてゐると思えなくもないから、ちょっと、ゾッとしたないけど。予定調和じゃない世界になつてきてる可能性だつてあるわけよ

……予定調和じゃない世界、か。でも、おれはもともとこの世界が予定調和だなんて考えたことはなかつた。

ときメロの世界は、もちろん2次元ならではのありえない設定やベタ過ぎる状況が満載で、虚構だつてわかつて。それにもかかわらず、リアルと錯覚しそうなほど、流れる日常や感覚は真実味があり、ここに生きてる奴らは確かにこの世界で「生きて」いた。

それぞれがそれぞれの思惑と事情を抱えて行動し、影響を与え合う。

おれの選択しだいで変わつているかもしれない未来もあれば、動かしようのない、まるで運命みたいなやつもある。

ただ、ヒロインであるぶん、おれの世界への影響力はきっと本来とは比べ物にならないほど大きいのだと慰ひと、恐ろしきはあるけど。

結局おれができるのは、今までと同じ。せこにぱいの事をして、日々を重ねていぐだけなんだ。

そうは思つても、このこくつかのズレが、やがて大きなほころびにつながるんじゃないかという不安は、胸の辻すみに簡単には消えない黒い点をつけて染みこんでいった……。

退院はしたものの、まもなく始まつた新学期はまだ体力が戻りきらないということで欠席。

結局、回復を実感できたのは発熱からほぼ一週間後となる土曜日だった。

「じゃあ、和希、芽生、元氣でな。煌くん、一人をよろしく」

その日、再び海外に戻る両親を見送りに来た成田空港で、真治さんはそんな言葉とともに煌の肩を叩いた。

なんかもう、おっさん、ベタ惚れだな……てのがこの数日でよくわかった。亡くなつた親友そつくりの息子だったら、無理ないのかもだけど。

一人が搭乗口の向こうに見えなくなると、煌がこっちを振り返る。

「んじや、帰るか」

「ああ……」

やべ、また不自然に田をそらしちまった。

あの記憶が蘇つて以来、おれは、どう煌に接していいか、未だにつかみかねていた。

真治さんや弥生さんは、煌は恨んでなんかいないつて言つてたけど……ヒロインがいなかつたら、父ちゃんもばあちゃんも死なずにするんだんだ。

償いきれない過ちを犯してしまつたヒロインは、おれじゃないけど、今はおれで。

申し訳なさと、やるせなれと……言葉では表しきれない色々な感情が絡まって、煌の田をまともに見れない。

「こんな状態じゃ、記憶を取り戻したこと、隠しとおせる気がしない。そもそも、思い出していないふりするのが正解なのかも、わからなーいんだけど……。」

ため息を飲み込んで帰りの電車の乗り場の方へと踵きびすを返したおれの手首が、不意に、グッとつかまれた。

「……と思つたけど。芽生ー！」

姉貴を呼ぶと同時に煌は、おれの手首を握つたまま、別方向へと歩を進め始めた。

「お、おい、煌？」

「一箇所、行きたいところができた。付き合つて」

連れて行かれたのは、海。シーズンオフの今は人気もなく、夏の明るさとは一変、物悲しい雰囲気が漂つていたけれど……。

「すげー……綺麗だな」

夕暮れ、なんだけど、オレンジじゃなくて。

紫と薄桃色のグラデーションに染まる空。沈んだばかりの太陽の周辺だけがまばゆい金色に輝いて、千切れ雲と穏やかな海は、オーロラのような光を抱いてそこにあった。

トワイライトの絶景に、おれはしばらく言葉を失い、魅入つていた。

「この場所で、おまえを見たんだ」

耳にすべり込んでいた優しい声に、驚いて振り返つて……また、すぐにつづむいた。煌の顔を見るのが、こわかつた。

「…………うわ、つくなよ」

じぼり出すよつこ紡いだおれの一言に、煌が小さく身じろぎしたのがわかつた。

「おれ達が会つたのは、もうとずっと前だ。思い出したんだ……火事のこじと」

やつぱり、何も知らないふりなんて、おれには無理だつた。ただのHゴでしかないかもだけど、苦しくて、全て吐き出してしまわないと、おかしくなりそうだつた。

「おまえの父親、おれを助けたせいで……。なのに、当本人のおれは、それも忘れて脳天気に生きてきて……」「めん」「めんなんて言葉で償えることじやないけど、恨んでも恨みきれないと思つけど……本当に、『めん』」

静寂が、訪れた。

ざーん、ざーんという潮騒だけが、鼓膜を震わせる。

「やつぱつ、思い出してたんだな

やがてその場に落とされた煌の声は、田の前の海よつともつと静かで、深かつた。

「俺が近くにいたら、こつかこんな日がくるんじやないかって思つたけど……辛い想いさせて、『めんな

「……なんでだよー なんでおまえが謝る!…」

思わず見上げた煌の夕空に照らされた顔は、寂しげだけど、どこまでも優しくて……本当に優しい瞳をしていたから、その瞬間、ふわっとおれの両目から涙があふれ出した。胸が締め付けられて、おかしくなりそうだった。

「和希は悪くない。逃げ遅れた子どもを救つて、その結果命を落とした……そんな親父を、俺は心から誇りに思つてるけど。あの火事は、誰が悪いわけでもない」

「うそだ! そんな割り切れるもんじゃ  
「うそじゃない!」

両肩をつかまれて一喝されて、おれはビクリと身を震わせ、口をつぐんだ。

「単純に、恨めたら、よかつたのか……?」

そう続けた煌もなんだか泣き出しそうに見えて、声も、一瞬かすかに震えたけれど、グッと唇を引き締めてから両手を下ろし、視線を海に向けて、言葉を継ぐ。

「俺の初恋は、5歳の時。夏休みに、父親の親友の娘だつて会わされた、一個年下の女の子。親父は普段は忙しくてのんびりできることは滅多になかったけど、毎年、夏の数日間だけは田舎で過ごして、その時はいつも真治さんも泊まりにきてた。俺は、その数日がいつも本当に楽しみで、心待ちにしてたけど、真治さんの予定が合わずに、小学校に入つたばかりの娘が一人で泊まりにきた夏が、最後の夏だった……」

おれは、ギリギリと全身をさになむ痛みに耐えるよつて、奥歯をかみ締める。ドクンドクン、と大きく鼓動が脈打ち、いやな汗が、噴き出す。

何よりも輝いていたそれまでの思い出が、悲劇で塗りつぶされた、夏。

煌はこつけをチラツと見て、蒼白のおれに心配そうに眉をひそめたけれど、思い切ったように言葉を継ぐ。

「正直、おまえを恨めしく思つ気持ちもあつたよ。一人だけ全部忘れて解放されるなんてするこつて、思つた。親父のことも、俺のことまで忘れてしまつたことも、悲しくて悔しかつた。でも、よく言つよつうな愛情が一転して全て憎しみに染まるとか、そんな簡単なもんじやなかつた。親父やばあちゃんも一緒の、おまえの笑顔であふれたあの夏の日々は泣きたいくらい幸せで大切な記憶で……色んな感情がうず巻いて、どうしたらいいかわからなかつた。

それに、恨むといえば、何もかも恨めしかつた。おまえも、買ひ替え対象になつてた旧い扇風機を使い続けていたばあちゃんも、俺を残して逝つてしまつた親父も、誰かに寄りかからなきや生きていけない弱い母親も！ 親父の存在はずつと俺の誇りで、支えで目標だつたけど、親父が生きていればこんな思いをしなくてすんだのになつて思うことも、数え切れないほどあつた。成長するにつれて負の感情の方が強くなつて、心もどんどんすさんでいつて……でも、絶望のどん底から救つてくれたのは、和希

「

おまえだつたんだよ、と真正面から搖るぎ無い視線で見つめながら、煌は言った。

不意に強い風が吹き付けて、おれたちの髪をバサバサとあおいだ。煌が身体の位置をずらしたのは、おれを底おつとしてだらうか。底そこが戻つてきたところで、話を再開する。

「母親の再婚相手が、絵に描いたような最低男で。酒飲んで暴れてすぐキレて殴つてくる。中1の秋、何もかもが嫌になつて、死のうと思つた。場所を探してフラフラしてゐつたにたまたまここにたどり着いて、おまえに、再会した。

ちょうど、今日みたいに綺麗な日暮れ時で、そこのテトラポットに座つて、俺が近くにいることも気付かずに、無心に歌つてた。薄紫の幻想的な景色の中で、どこまでも澄んで、優しい声で歌うおまえの姿に、涙があふれて止まらなかつた。

心から、純粹に、好きだと思った。ただ、ひたすら、好きだつて。うまく説明できないんだけど……理屈じゃなくて、ずっと心をぐるぐる巡つてた憎しみも恨みも、その時、消えていつたんだ。そして、こんな綺麗なものがあるなら、こんな綺麗な歌が歌えるこの子がこの世界にいるなら、それだけで、まだ生きていけると思つた

「…………」

何も言えずに、ただ見上げているしかできなかつたけど、煌は表情を和らげて、流れ続けるおれの涙をハンカチでぬぐつた。

「あんまり泣くと、干からびてミイラになるぞ。」  
「…………ばか。ならねーよ」

すびり、とひつぱり出したティッシュでわざと大きく鼻をすすつてやると、煌は小さく笑つてから、壊れ物を扱うみたいにそつとおれの頭をなでた。

「俺に会つと、忘れるくらい辛い記憶が蘇つて傷つけることになるかもしない……それがこわくて、すぐその場を去つたんだけど。おまえと一緒に来てた真治さんは気付いてたみたいで、追いかけてきてくれたんだ。その時、色々相談に乗つてもらつて、母親にも連絡を取つて……あのひどい義父と別れられたのは、真治さんが尽力してくれたおかげだつた。

この春に再会した時は、羽鳥家に来つて言つてもらえて……おまえが思い出さないかはすぐ心配で、さんざん迷つたけど……嬉しくてたまらなかつた。ずっと好きだつた和希がすぐ目の前にいて、笑つたり怒つたり呆れたり焦つたり。俺は一生懸命カツコつけて平気なフリしてたけど、おまえの一拳一動にいちいちドキドキして、心臓飛び上がりそうになつたり、めちゃめちゃテンションあがつたり、落ち込んだり……幸せすぎて、おかしくなりそうなくらい、幸せだった

やう言つて、くしゃりと破願した煌の言葉が心からの偽りない想いであることは、間違いなかつた。

……「うして、許せるんだが。そこまで優しくござるんだろう。

う。

……どんだけ、好きなんだよ。畜生……。

胸がいっぽいになつて、瞬間、突き上げてきたかつてない感情のうねりに、戸惑い、あわてて押し込める。やつと止めたと思つた涙がまた零れそうになつたから、まばたきをくつ返してこられた。

煌はそんなおれから視線を引き離すようにして、また、徐々に宵闇に溶けていく海を見ていたけど、突然「あ～～もう！」とがなつてからしゃがみ込んで、自分の頭をぐしゃぐしゃかき回した。

ビックリするおれを仰ぎみて、情けなやうに力なく笑う。

「やつぱり、思い出して欲しくなかつたし……もし思い出したとしたら、絶対こんな風には俺から告白はしないつて決めてたんだけどな」

「……どうして？」

「おまえは優しいから。俺がこんな話と一緒に告つたりしたら、同情して、別に俺のことハーハー意味で好きじゃなくても思えようとするんじゃないかと思つて」

ドキッとした。

「こいつの力になりたい、おれができることならなんだつてしてやりたい……そんな気持ちになつていたのは、事実だったから。

煌のことば、好きだつた。明るくておもしろくて話は合つし、奔放な言動に振り回されることもあるけれど、一緒にいると楽しくて居心地がいい。どんな時も前向きに進もうとする、まつすぐな強さ

を、尊敬もしていた。

そして今。

煌が抱えてきたものの大きさを知つて、優しさに触れて……今までとは比べ物にならないくらい、どうしようもなく、好きだと思った。

わき起こつたのは、抱きしめてやりたいといつ衝動。こいつを支えたいという、気持ち。

でも……これは、煌が望むものとは違う形のものなのかもしない。同情、ではないんだけれど。

黙りこじつてしまつたおれの両手おが、こきなじぐきをつままれて広げられる。

「あにふんはよー!?

「何すんだよ、と抗議するおれに、煌は一や一やしながら、じとじと明るく言った。

「辛氣臭い顔すんなつて。この話は聞かなかつたことにして、おまえはいつもじおつのはほほんとしてるよ……頼むから」

「……わ

かつたよ、といつ口調に、ぐきゅるるるる……といつ特大のおれの腹の虫が見事に被つた。

~~~~~なんだよこの絶妙のタイミング!

そりやずつと食欲なくて口クに食べてないから、腹は減つてただろつけど……わかつた、ベタが起こりやすいのはこの世界の仕様なんだ、間違いない!

数秒ポカンとしてから弾かれたように爆笑し始めた煌を蹴り飛ば

し、離れたところでも貝殻拾いに精を出していた萌生を「帰るやー」と呼びつける。

「……煌、いつまで笑つてんだ！」

「だつておまえ、狙つたようなあの返事……今も真つ赤になつてゆでダコみたいだし……！」

ギロリ、と全力で睨みつけてやると、ようやくコホン、と咳をして真顔になつた。それでも口元はまだ微妙に緩んでいる。

「夕飯は、何がいい？」

「……魔法のカレー」

おれの言葉に、ハツと息をのむ煌。

「おれ、思い出したこと、よかつたと思つて。苦しいけど、だからつてこの罪悪感は放り投げていいもんじゃないと思つて、命の恩人のこと、忘れたままなんて絶対に嫌だ。なにより……おまえの話が聞けて、よかつた」

「……」

「煌がいつも自分のことよりおれのことを考えて、気を遣つてくれてたのは、本当にすごく嬉しい。ありがとな。でも、これからは、一人でなんでも背負い込もうとするなんよ」

おれは煌の彼女になつてやることはできないし。今もなお胸にしづきるこの感情が、どんな名前がつくものかわからないけど。煌が抱える痛みや深い感情を、共有できるなら、したかった。でも、こんな中途半端な状態でこんなこと言つのは、血口満足でしかないのかな……。

こつものように後先考えずに言つてしまつて、ちょっと不安にな

つたけれど。

「……ありがとう」

煌が、田を潤^{うる}ませて本当に幸せそうに、穏やかに笑ってくれたから、おれもまた、もらい泣きしそうになった。……つたく、涙腺ぶつ壊てるな、今日は。

週明けから、ちょっとだけ出遅れた新学期がスタートした。

軽音部としては、とりあえず9月の第3水曜日の夜、煌のバイト先であるお馴染みのライブハウス『T・M GARAGE』で予定されてる対バンライブを目標に、練習を開始。

それはともかくとして、このところ土日のうまり方がはんぱなかつた。

煌と海に行つた次の週の土曜は王子と水族館。日曜は悠斗とロックフェス。その翌週の土曜は静流と動物園……。

誘いは原則断るな、という姉貴の厳命だが、この節操のなさははつきり言わなくても最低じやなからうか……この日、と提案される日がかぶらないのが、不思議でしかたない。

恐るべし、乙女ゲーヒロイン。許せ、みんな（涙）

今日、日曜日は久々に予定のない休日だったので、肺活量強化のボイストレーニングのため、一人で市民プールに泳ぎにきたのだが……。

『本日、改装工事のため休業』

反応しない自動ドアの前に置かれた看板に、脱力した。ちえつ、ついてねーや。

とぼとぼと引き返していくら、道路脇にいきなり黒の高級車が寄ってきてクラクションを鳴らされた。

停車して開かれたウインドウの中から現れたのは、見た瞬間震えの奔るほど艶麗な面立ち。

「まだ体調が優れぬのか」

「魔王……いや、もう完全回復だぜ。入院中は見舞い、さんざんな
「ではなぜそのように悄然としている?」

プールが休みだったことを話すと、「乗れ」とドアを開けられた。
……結局今日もドア一戸ですか。そうですか。

魔王につれてこられたのは、黒川系列のホテルの最上階に設けられたスイミングプール。

開閉式の全天候型のドーム天井。プールサイドには観葉植物やウッドチエアー、さらにはジャグジーなんかも備えられ、なんとも優雅な雰囲気に満ちあふれている。

あんまり激しく泳ぐ感じじゃないなあと思いつつも準備運動をしていたら、「和希」と呼びかけられた。

振り向くとブーメラン水着で魔王立ちする仏頂面の魔王がいて、思いつきり吹いた。

なんつーか、サービスしそぎだらー! 激しく皿のやり場に困るんですけどー!

こいつもプールに入るときいて、最初に想像したのは水面に浮かび上がった魔王の長い髪がメデューサの蛇のよつてのたくり広がった姿。

見てえ! と内心わくわくしていたのだが……髪は後ろですつきと一つのお団子にまとめられていた。

どうせならセーラーーンみたいなツインお団子だつたらおもしろかったのに……つておれは何を魔王に期待してるんだ。

「ほつ……」

魔王はおれを見て目を細める。また水着についてなんか言われるのだろうか。でももう何言われても動じねーぞ……

「その胸、
贋物だな」
にせもの

「な、なぜわかつたー！？」

「ハ、戀かビデーすみ、がへ！」

魔王は驚きの声を漏らしながら、魔羅の口を塞ぐべく手を握りしめた。

「俺の眼力をなめるな。女体のバストの数値であれば、衣服や下着の有無に關わらず、三リ単位で的確に見抜ける……」

「おまえそれ今度ステージで語つてみる。一気にファン減るから」

おれのシシ「ハハ」魔王は唇をかすかに緩めるが、「まあ、それは差し引く」しても「歩み寄ってきた。

「なかなかに潤いある光景だ」
いわゆるお

「ストップ！ プールではおれの半径2メートル以内に入つてこな

「おはようございます」と挨拶を交わす

「こんな半ヌードで二つの接近を許すほどおれだつてつかつじやないのだ。

ないのだ。

約束を破つたら即帰る、と伝えていたので、魔王はいらだたしげに舌打ちしたが、それ以上は近付こうとはしなかつた。なんか、猛獸手懐けたような感じで、ちょっとと楽しい。

ほとんど貸切状態のプールで、ひたすら泳いだ。

一時間ほど続けて、さすがに疲れてプールサイドにあがると、手前のコースで悠然と泳ぐ魔王の姿が見えた。無駄のないフォームで水をくぐり、かなりのスピードなのに余裕があつて気持ち良さそうだ。
端^はに手が触れて立ち上がり、落ちてきた濡れ髪をかき上げながら、ふつりとため息を漏らす。
……うーん、しゃべらなければ物凄いイケメンなんだよな、やつぱ。

つぐづく惜しいと思つていたら、突然、誰かに背中をつーっとなぞられた。

「か・ず・き・チヤン」
「～～～ロン！？」てめ、何しやがる……。「キレイな背中が無防備にわらされてたりこつや触らざるをえないでしょ……つてスマスマセーン！ ほんの出来心！」

「一ヤ一ヤしてたロンだが、こきなりサシと青ざめると大きく後ずさつた。

前方に視線を戻すと、全身から黒い渦^{ひず}をぐるぐると発生させた魔王が恐ろしい眼差しで、ザン、と水からあがつてくるといつだつた。ひいいいい、おつかねえええ。

「ロン……貴様、藻屑^{もくす}の泡と消えたいか……？」
「お、落ち着け、魔王！」

ロンは Bieber なつてもかまわねーなび、こいつが本気で暴れると一般客にもどんな被害が及ぶかわからない。

とつさに駆け寄つて、バキボキと鳴らされていた半握りの右の掌を押せると、すつと殺氣が薄れた。

正気に返ったか、とホッとした瞬間。
両腕で抱きすくめられる。

「近付いた途端なにやつてんだてめーはーー！」

おれの蹴りが炸裂さくれつし、プールにでかい水柱があがつた。

妖艶どこいつた魔王。

服を着てラウンジに出ると、ソファに座っていたロンが「よつ」と手を挙げた。相変わらず、ど派手な私服姿。

「さつときは命拾いしたぜー。ありがとさん

「魔王は?」

「まだ中。あの人、髪長いからさー」

ドライバーでキュー テイクルケアしてた魔王を想像してまた吹いた。やべえ、怒つたのに……いちいちツボつきやがるぜ、あの野郎。

「おもしろいよな、アンタ」

ロンが足をブラブラさせながら、おれをなめから見上げる。

「舞台に立つとまるで別人。こないだの関東大会はマジヤバかつたぜ。吐息交じりの歌が超セクシーでゾクゾクビンビン。あの歌声と表情だけで何度もイキそうになつた」

「下品」

おれの冷たい言葉に、笑み崩れるロン。こいつには罵りも蔑みも逆効果なんだよな……もづ、どつじるど。

「おまえはいつでも楽しそうでいいな

呆れるよつこつたといひ、ロンは「んあ?」と眉をひそめた。

「んなことねーぜ？ ぶっちゃけ毎日退屈で退屈でしかたなくて… なにもかも、ぶつ壊したくなるときがある」

ガラリと雰囲気を変えて吐き捨てるよつよつとロンの目が、ゾッとするような狂氣を宿したように見えて、おれはわずかに身を引いた。

けれどすぐに、ロンはいつものへらへらした綺まりない笑顔で話題を戻す。

「あのひどい体調でよくあそこまで歌えたもんだ……と思つたけど、熱に浮かされてるのが逆によかつたとか？」

なんだ今、と内心つぶたえながら、「そつかも」とうなずいた。

「今のおれじや、あの時みたいには歌えねーからな」「ヒヤハハッ怪我の功名つてヤツだな！」

……ただ、今となると優勝したほうがよかつたのかは、微妙だった。といつのも。

「あのさ、おまえらの……『D e - Luxus to d』のファンで、特に過激な子つて心当たりあるか？」

おれの質問の意図を探るよつよつと、ロンは爬虫類めいた瞳をぐるりと閃かせた。

「つーと？」

「関東大会以降、イタ電や差出人不明の嫌がらせや剃刀レターがくるようになつてさ」

最初はまた王子の親衛隊のセンも疑つたのだが、薰子たちはおれの姿を見ると蒼白になつて逃げていく。嫌がらせなんてする余裕もなく、とにかく関わりたくないという様子だった。（いつたい何をした王子よ……。）

「イタ電は煌が対応することで減つていき、やがて途絶えたのだが、『淫乱』『ビッグチ』と罵倒する手紙の頻度はますます上がった。

そんな中、先日「イカサマ」だの「八百長」だの単語を発見したので、これは魔王ファンからのものじゃないかと見当をつけたのだ。

『COLORFUL』が『Der Luxus tod』に勝つたことが許せない盲目的なファンがいるのではないか。それも、下手すると複数……。

「ん～オレ達、つか魔王サマのファンつて、わりとみんな熱狂的だからなあ。誰でもやりかねないつづーか」

「……そつか、厄介だな」

「俺の追っかけがおまえに何かしているのか？」

不意に、低い声がしてギクリと体が強張る。

振り向くと、魔王が不機嫌そのものの表情で立つていた。こいつに言つとまた面倒なことになりそつで、できるだけ聞かせたくないがつたんだけど……仕方なくうなづくと、魔王は底冷えする瞳で断言した。

「話は簡単だ。皆殺しにしてやればよい」

「ダメ、絶対！ 暴力反対！」

「……いつだつたら本当にやりかねないから恐ろしい。

「しつかし、となるとどう後のライブはけつこいつトソジヤラスな予感？」

あよととと首を傾げると、ロンは「あれ、知らねーの？」とおもしきがるような口調で続けた。

「今度の『T・M GARAGE』の水曜ライブ、オレ達も出演するだぜ」

そして運命の水曜日。

今日のライブでは、トロがおれ達『COLORFUL』で、その一つ前が『Der Luxus to d』となっていた。

ステージに立つのもだいぶ慣れてきたとはいえ、やはり本番前は緊張する。始まってしまえばそれもどつかへ吹っ飛ぶんだけど……。何度目かのトイレに向かう途中の廊下で、ゴスロリドレスに身を包んだ小柄な少女と遭遇した。『Der Luxus to d』のベースだ。

年の頃は13歳前後。色白で華奢な姿態。^{さやしゃ}ヘッドドレスをつけた艶やかな長髪は毛先がウーブした青鈍色。

美少女、といえる非常に整った顔立ちだが、その大きな瞳はガラス玉のように虚ろで、衣装効果も相まってまるで人形のような印象を受けた。

そういや、魔王と同じバンドで紅一点って、この子もそつとうつアンのバッシング受けてるんじやなかろーか……と思つたとき。

「わたしはだいじょうぶ」

いきなり、少女が無表情のまま語りだしたので、一度肝を抜かれた。^{じめか}

「わたしは黒川旺眞のいもうとだから」

「い、妹！？ 確かにいわれてみれば似てないこともないけれど」

「はじめてみたときからからふしきだつたのだけど」

「だから突つ込んでいいものやうと困惑つおれを感情の読めない瞳で見つめながら、少女は抑揚のない声で、言葉を継いだ。

「なぜ、おんなのからだにおとしはつてこるの？」

.....

もはや言葉もなく立ち尽くして、『詩衣菜』^{しげな}、「詩衣菜！」とロンが向こうからかけ寄ってきた。

「何やつてんだよ、もひすぐ出番だぜー あり、和希チャン？ どうかした？」

「いや……ステージ、楽しみにしてるわ。がんばれよ」

めいぢなく手を振るおれに、ロンは怪訝^{けげん}そうに眉を上げたが、本当に時間が迫つてゐるじへ、詩衣菜をせかしてステージの方へ走つていく。

「ええー、考えるのはあとだ。おれもライブに集中集中！」

弾ける光と音。歓声。

ど迫力で叩きつけられる華麗なドラマ。切なくうなるセンス抜群のギター。淡々となぞるようで熱の燻るベース。鮮やかに鍵盤を滑すべる如才ないキー・ボード。

今日もみんな絶好調だ。

心地いいリズム＆ビートに飛び跳ねながら、サビのクライマックスへと向かつておれはステージで声を張り上げる。

客席後方の壁際には、出番を終えた魔王も腕組みして観覧していた。相変わらずの仮頂面も、心なしか楽しげに見える。

さつきのこいつの歌声も、震えがくるほど凄かった。でも、負けないぜ？

目が合つて、おれは少しだけ口元をほじりぱせた。瞬間。ビュン、と何かが舞台にとんできた。

ぐちやり。

あわや頭にぶつかりそうになつたそれを、おれはとつそに受け止める。

掌でつぶれたそれは、生卵。

フン、こちとら体育祭に向けて運動パラメータ徹底強化中なんだ。

妨害工作もある程度予想済み、簡単にくらつてたまるかつての！

しかし立て続けに飛んできた第2弾を目にした途端、おれは力チンと固まつた。

おれのすぐ足元に着地したそれは、黄味がかつた茶色の毛に覆われた、掌サイズほどもある、大グモ……！

「…………！」

見るもグロテスクなそれはひょいとジャンプすると、なんとおれのスカパンから伸びた素足へ飛び移り、すじい速さでカサカサと上にのぼってきた！

「ああああああ……！」

全身鳥肌で総毛だつて悲鳴を上げた瞬間、一番そばにいた悠斗がバシッと手で払い落してくれた。舞台のすみに転がつたそれを、静流がぐしゃりと踏みつぶす。

「誰だ！」

煌や王子も血相をえて立ち上がり、舞台から客席を見回すのがわかつたが、おれは情けないことに悠斗にしがみついてガタガタと震えるしかできなかつた。

ゴキブリもムカデもナメクジも、遭遇したらそれなりに冷静に対処することができたけれど。

クモだけは昔から、本当にダメだった。生理的に受け付けない。至近距離で目の当たりにしてしまったアレは、思い出すだけで、血が凍り、今にも意識が遠のきそうだった。

パニックで喚きだしたくなる衝動を、必死で抑えていたら

「あやあああああ

客席から甲高い悲鳴が上がった。

視線をやると、魔王が鬼気迫る怒りの形相で一人の女の髪をつかみ、体を持ち上げていた。

「貴様……どうこいつもりだ?」

地の底から響き渡るような低音とともに、もう片方の手で女の顔をグイツとはさみ、詰問する。

「めんなさい」「めんなさい」と泣き叫ぶ女 嫌がらせの犯人だわう を心底不快げにねめつけると、大きく平手を振りかぶる。

「やめる、魔王! 女相手におまえが本氣だしたら死んじまつ」

「かまうものか、こんな下衆」

「落とし前はあとでおれが自分でつける。やめるんだ!」

氣を奮い立たせて懸命に叫ぶと、魔王はふつーっと長く息を吐き出してから腕を下げた。

地に足をつけたものの顔をおおつてシクシクと泣き出した女を、恐ろしく冷たい瞳で一瞥してから、「聞け!」と会場を見回して声を張り上げた。

「今回だけは見逃してやるが……今後その女に手を出すものは、死を覚悟せよ!」

脅しでもなんでもない本氣の宣告に、会場はシン、と静まり返りてから、また大きくざわめき出す。

「は、羽鳥和希は、旺眞様のなんなんですかー?」

取り乱したような質問が発せられた方角をギロコヒニヒミツツカ
から、魔王は一喝した。

「 知るか！ 僕が聞きたいわ！」

そのあまりに偉そうな言い様に、体にはまだ力が入らなかつたけ
どちょっとだけ笑つてしまつた。

「だが、和希に害を成すものは、俺が許さぬ」

響き渡つたその言葉に、何人もの女子が悲鳴をあげて泣き叫びだ
し、会場は一気に騒然となる。

おれの体調の都合もあり、その日のライブはそのまま幕を閉じざ
るをえなかつた。

「……あれ、あの女は？」

「もしかして、もう帰しちやつたの？」

オーナーへの挨拶で席を外していた煌と王子が、樂屋に戻つてき
た途端、眉をひそめた。

「ああ。もうだいぶ遅い時間だしな」

さつきまで「ここには、現行犯でつかまえた例の女がいたのだが…
…。

「センパイは甘すぎると」

いらだたしげに声を張り上げたのは静流。

「結局あいつ、泣くばっかりで反省の様子なんて無かつたのに」

「謝つてたじやん、もうしませんって」

「口だけならなんとでも言える。あーゆー女は、涙だつて自在に操るんだよ?」

不機嫌に指摘され、おれはぐ、と言ひよどんだ。
捕まえたら絶対一発殴つてやる、と思つてこたのに、田の前で「
旺眞様が好きなんです……悔しかつたんです……」とか弱げに泣か
れてしまふと、氣もそがれた。

しかも彼女、以前夏祭りの時に、魔王に無理やり帰された女達の
中に見覚えがあつたのだ。

そりや、恨みたくなる気持ちも起るだらうつてなもんで（いや、
恨みの対象がおれに向くのは不条理だと思ひけど）、あまり強くも
言えなくなつた、という事情もあつた。

「やつぱり、僕も残るべきだつたかな……」

すつと田を細める王子を、「こやでも」とこむる。

「静流たちが、もうおれに近付かないつて誓約書、書かせたし」

「……ちゃんと本名を書いてこむか、は怪しいものだがな」

ボソリと呟いて、ピッと悠斗が指で弾いた紙切れを受け取つた煌
が、素早く目を通すや大きくため息をついた。

「不安的中。
偽名だ」

「…?」

田を見開くおれに、煌は渋い表情で首をほぐしながら、言葉を継ぐ。

「俺がDer Luxus to dにいた頃から熱心に追っかけしてた女だよ。本名は、『檜居まゆか』。一人称まゆかでショッチャウアピールしてたから、覚えてる。ここに書いてあるのは、他のおひかけ仲間の名前だ」

……あ、の女……！

かあつと怒りで紅潮してから、ビリと凹んだ。

そんな最低女に簡単にだまされちまつて、やつぱおれ、馬鹿だなあ……情けねえ。

「ま、犯人がわかれば、手のつかり用もある。また何かあつたら、絶対すぐ言えよ？」

落ち込んでいた肩を、ポンといたわるように叩かれる。

「お人よしも数あるセンパイの魅力の一つだし、ね……今日はゆっくり休むんだよ？」

「そんな悲しい顔しないで、和希ちゃん。君が曇つていると、世界まで色を失つてしまつ」

「腹が減つただろう？ うまいものでも食べに行こう

みんなの励ましが、嬉しかった。

……そーだな、あんな奴のせいでいつまでも暗い気持ちでいても悔しいし。反省だけはあとで自分の部屋で存分にすることにして、沈むのはやめにしよう……てスイッチ切り替えようとしたけど、ん

な簡単にいくかー！

やつと落ち込みモード抜けたと思えど、またむしゃくしゃしきだ。嘘つくなーだけならともかく仲間の名前書くとか、マジでふてえ奴だ。

一度と関わりたくないけど、もしまだ何かちょっとかい出してやがつたら次は絶対許さねーからな……！

70・和希の弱点（後書き）

先日、小ネタ集に煌×和希の番外編？をアップしたので「J報告します。

例によつてベタなネタですが……

『和希クッキングするの巻』
<http://ncode.syo-setu.com/n3560w/7/>

71・君を自転車の後ろに乗せて

カレンダーは進み、10月上旬。水曜ライブから今日でちょうど2週間たつが、あれ以来、嫌がらせはパタリとおさまっている。

おれ達は心置きなく、バンド練習に専念 できたらよかつたのだが、美楠学園は体育祭期間に突入し、あわただしい雰囲気に包まれていた。進学校ではあるが、文武両道を掲げてあり、こういう行事にはかなり力を入れる校風らしい。

AからEまで3学年のクラスがたて割りで連合チームを組み、優勝を争うのだが、各連合の応援団がHR時などにしおりをくらスを回り、たきつけ、校内のあちこちには「組優勝」の類の勇ましい張り紙やカラフルな立看。体育祭が終わるまでは他クラスと/orを聞くな、という団長まで現れたなんて噂が立つほど、本番3日前にしてすでに校内は異様なムードが漂っていた。

「にしてもすごいね、バカちん。まさか花形のリレーで女子アンカーなんて……毎朝ジョギングしてるつていうだけあるよ。美楠じや運動部でも、普段そこまで走ってる女子はそんないもんね」

放課後の体育委員の仕事の最中。入場門のレタリングをしながら感心したように言つてきたかんなに、おれは苦く笑つた。

「ああ、自分でもビックリ……だけど、すげーブレッシャーだよ」

体育祭のラストを飾る選抜混合リレーは、一発逆転のチャンスも存分に秘めた高得点競技。というわけで素で夕日に向かって走り出しそうな超熱血・A組団長から「何がなんでも勝て!!」と凄まれ、選手は昼休みや放課後に集まつてほぼ毎日練習をしていた。

おかげでバンドの練習の方はろくにできない。煌も悠斗もリレー

選（しかもお約束のアンカー）だし、体育祭実行委員長になつたといつ王子も多忙そのので、軽音部自体がしばらく活動休止となつていた。

「入場門できたー！……けど、なんか物足りないね」

「花とかつけたら見栄えすんじゃねえ？ 先輩、経費はまだ残つてましたよね？」

おれの提案に、他の体育委員も賛同してくれる。

かんなと薄紙の買い出しに行くことになり、作業場だつた体育館から外へ出ると、入り口付近がなにやら騒然としていた。

B組連合とC組連合の血の氣の多い連中がもめ事を起こしたらしい。そわそわとし始めたかんなに「いいぜ、いつてこいよ」というと、手を合わせてから入ごみの中へ突っ込んでいった。あの野次馬根性には頭が下がる。

校門へ向かう途中で、王子とすれ違つた。おれを見て一瞬嬉しそうに発光したが、名残惜しそうに会釈だけして他の実行委員数名を引き連れて駆けていく。

「わ～忙しそう……だけど、あいつが行つたならもめ事もすぐおままるだろう。うん。

文房具屋まではけつこつ距離がある。

誰かにチャリでも借りればよかつたなと思いつつ急ぎ足で道を歩いていたら、チリンチリンとベルの音。

「どに行くの、センパイ？」

後ろからやつてきた制服姿の静流が、おれの隣でキキーッと自転車のブレーキを止めた。前カゴには通学カバン。

買い出しだと答えると、「乗つて」と荷台を示された。
お？ んじゃお言葉に甘えて。

後輪のどりよけの部分に立つて、肩に手を置くと、静流は勢いよくペダルを踏みしめた。

最初ちょっとだけよたよたしたが、スピードが上がるにつれ、安定する。

「楽ちん楽ちん～。でも、おまえはけつこつきついだろ？ 大丈夫か？」

「全然、余裕」

そう答える静流だけど、やや息が乱れて苦しそう。そこまで急じやないとはいえ、上り坂だしな。

「変わらつか？」

「やだ」

きつぱり拒否られてしまい、悪いなーと思つてゐるつうに、今度は長い下り坂。

ブレーキで調整された自転車は、坂道を緩やかに下つていいく。川沿いの道は幸い人も車も他に通りがなく、吹きぬける風が爽快だつた。

「センパイ、リレー選になつたんでしょう？ すごいね。がんばつてね」

「ああ！ でも、E組の煌がありえねータイムでさ。うちの悠斗も

速いんだけど、このままじゃ負けちまつってん、毎日必死でバトン練習してる」

仕方のない」ととはいって、少女漫画でいうこの時の陸上部は何をしてるんだと思う。対抗馬として名前は挙がるけど、ほぼ例にもれず当て馬だもんな……南無^{なむ}。

「いいな、楽しそう。……オレ、なんであと2年早く生まれてこなかつたんだろう」「

「ふせん 慄然としたように呟く静流は、少し可愛かった。仲間はずれみたいで、寂しいんだな。

「悠斗さんはずるいなあ。センパイと毎日同じクラスで過ごせて、席まで隣でしょ？ オレの知らないセンパイのこと色々知つてるつてだけで許せないのに……やっぱあの人、天敵」「んなこと言って、ほんとは好きなくせに」「

「はあ？」

静流は思いいつきり心外そうに声を張り上げたが、ふふん、おれだつてもうわかつちゃつたからな。

いちいちシャクに障るつてのは、気になつて仕方ない証拠。こいつが悠斗につつかるのは、ある意味甘えてるんだ。

3年前の事件で、素の自分をさらけ出してしまつて。弱みを見せるような形になつた恥ずかしさもあつて、素直にふるまえなくなつたんじやないかと思う。

憧れの気持ちと、悔しいと云う男のプライドのぶつかり合い。たぶん悠斗もなんとなくそれがわかつてゐるから、静流が冷淡でも気にしないんだろう。

「嫌いだよ。3年前……オレがギター教室やめるとき、あの人までやめたんだ。『ベースはどこでも弾けるから、おまえも』って、お節介。カツコつけすぎでしょ？ 今でも思い出すだけで、腹が立つ。オレの立つ瀬ないじやん」

「青いねえ~」

からかうように言つてやつたら、ちょっと尖つた声で「年上ぶらないでよ」とはねつけられた。やべ、怒らせた？

少しだけ焦つたけど、やがて「着いた」と自転車を止めて振り返つた静流はいつもと変わらない笑顔。ほつ、よかつた。

薄紙は購入したものの、あの長い坂をまたすぐ上らせるのも悪いので、向かいの公園で一休みしてから帰ることにした。木陰のベンチに腰掛けて自販機で買ったジュースを飲みながら、抜けるような青空を眺める。

わたのようなうすい雲が浮かぶ、清々しい秋晴れ。木漏れ日がチラチラとまぶしい。

「……先週からおふくろさんが帰ってきて、自宅通学になつたんだつけ」

「うん。このまま母親と暮らしていくつもり。……オレを必要としてるのは、母さんの方だと思ったから」

ふつきたような様子で淡々と話す静流は、さつき2年早く生まれたかったと拗ねていた奴とは別人のように、大人びて見えた。

……やっぱ、優しい奴だよな……。

ふわりとどこか懐かしいような甘い香りが鼻をついて、後ろを振り向くと、低木にオレンジの小さな花がたくさん咲いていた。

「金木犀きんもくせい……もうすっかり秋だね」

「なんか、気付けばあつという間だな。バンド結成したのはゴールデンウイーク明けだったのに……おまえと会ったのは、7月入つてからだけど」

おれの言葉に、静流もコクリとうなずく。

「あつといつ間だけど、まだ3ヶ月しか経つてないってのも信じられない気持ち。もう、センパイと会う前の自分が思い出せないくらいなのに」

……あの関東大会以来、静流の雰囲気は、少し変わった。

音楽を奏てる時以外に感じていた微妙なよそよしさが消え、自然体の笑顔が増える一方、時折ドキッとするほど物憂ものうげな表情を垣間見せるようになった。

さらりと口説き文句が飛び出るのは変わらないけど、そこに潜む
真摯な響きに、内心戸惑い、焦る。

「そろそろ帰るか」

立ち上がった直後手をグッとつかまれて、ヤバイと思つた。握られた手首が、熱い。

「……前に、センパイといふと落ち着くつて話したの、覚えてる?」

見つめてくる瞳に宿る切実な光に、逃げられないと、悟る。

「今でもそれは変わらないけど……最近は逆に、ちょっと離れてると、苦しくて、切なくて、心が引き絞られるんだ。ふとしたはずみに、まるで中毒にでもなつたみたいに、センパイに会いたくて仕方なくなる。オレが知らない間にまた誰かが近付いてたら、とか想像すると何も手につかなくなつて、そばにいても、センパイが他の男と楽しそうにしてるだけで、嫉妬に燃え盛つておかしくなりそう。束縛はするのもされるのも嫌いなはずなのに、時々、あなたを誰にも見えないどこかに閉じ込めてしまえたり、と思つ……！」

じりえきれなくなつたよつこまくし立てた静流は、そこで、ハツと息をのみ、顔をしかめた。

「……最低」

痛いほどだつた手首の拘束が緩み、離した手で、自分のひたいを覆つてうつむく。

激情をさらけ出してしまつた事を後悔しているのがわかつたが、余裕をかなぐり捨てた告白は逆に、真実味があり、胸が詰まつた。

「恋愛なんて、生まればはまるせど泥沼だつて知つてたはずなのに、
ほんと……「りしくな」……」

やがて顔を上げた静流は、たたずむおれを見上げ、請ひようじに囁いた。

「和希さん……オレの彼女になつて」

「……」
声音に滲むのは、おれ達をつづむ金木犀の香つよつもれいに甘く
て切ない響き。

「もへ、他のどんな女の子を見ても何も感じないんだ。絶対、あなただけを大切にするから」

「……静流」

「返事は、全国大会のあとで聞かせて欲しい。……ふられちゃった
ら、わすがに、顔合わせるの辛いってのもあるし」

「おれの台詞を遮るよつて、言葉を重ねる。

「オレ、本氣だから。それだけは、わかつて欲しいんだ」

73・体育祭（前書き）

思ひつゝやつゝ春モーニング。

見事に晴れ渡った秋空とロープに連なった国旗の下、鳴り響く鉄砲の音。応援団の太鼓やラッパ、にぎやかな声援。

体育祭の到来だ。

『天国と地獄』をBGMに、全力で駆け抜けてコースの先に落ちていた白い紙を拾い上げるとそこには「バラ」の二字。

「王子、頼む、口説いてくれ！」

本部テントに直行していきなり無茶な要求をするおれに、王子は落ち着きを失つた二ツ「コリ笑顔で。

「よつ」ヤ、僕の勝利の女神」

瞬間、背景に咲いた一輪を摘み取り、借り物競走では見事一着ゲット。

綱引き、一人三脚、パン食い競走、棒倒し……気付けば競技に出すつぱりで、さすがに疲れていたらしい。100m走に出場中、コナーで足がもつれて転んでしまった。

右ひじを大きくすりむいたため、悠斗に付き添われて保健室へ向かう。

「痛い痛い痛い」

「我慢しろ、馬鹿」

悶絶するおれにため息をつきながら、容赦なく消毒液を塗りつける悠斗。

「『』の冷血漢！」

「やかましい。こいつ行事のたびに怪我するな、おまえは」「ああ、そいや球技大会でもこんなことがあつたっけ」

ま、あの時は親衛隊の妨害のせいだけど……。

悠斗も同じ事を思い出したのか、少しだけ顔をしかめ、「それにしても」とすぐに話題を変えた。

「一人でどれだけの競技に出席するつもりだ。はりきりすぎだらう」「人数足りないから助けてつて摔まれちゃつて、断りきれなくてさ……」

「お人よし」

ビシッと切り捨てながら、傷口にそっとガーゼをあてて丁寧にテープを貼つていく。

「怪我はここだけか？」

「ああ。最後のリレーは普通に出れるから安心しろつて。猛特訓の成果、見せてやるうぜ」

おれの言葉に、悠斗は無言で深くうなずいた。お、これは燃えてるな。

リレーのアンカーだけは他の選手の2倍、校庭を2周といつかなりの距離を走るのだが、先週の練習の時、煌はなんとビリから4人抜きでゴールテープを切りやがったのである。さすがにゴール後は酸欠でぶつ倒れてたけど、チートもいいところだ。

とはいえた悠斗が抜かれたのは最後の最後。リレーはチームプレーだ、というわけでの日以来、ほぼ毎日バトン練習を繰り返してきた。絶対勝一つ。

そしてやつてきました、大トリの選抜混合リレー。

5チームの得点率はやつぱりというか混戦模様。すべての決着はリレーにゆだねられるという鉄板の展開だ。

「コースに向かう途中、「よつ」と背中を叩かれた。煌だ。E組力ラーのオレンジのハチマキを締めている。

「容赦しないからな」

「当然」

拳を握つて軽く胸を小突いてやると、満足そうに笑つて離れていった。おれは気合を入れなおすよつこ、赤ハチマキをぐつと締めなおす。

スタートの銃声で、5人の走者が一斉にスタートを切つた。沸き起ころる歓声。応援熱も最高潮だ。

第5走者のおれがバトンを受けたとき、3位。こけて順位を落としてしまった前走者、鳴海さん^{なるみ}が渡し際「ごめん」と泣きそうな声で呟いた。

任せろ！ まだまだこれからだ！

体を前へ前へと傾けて、大きく腕を振る。空気を切り裂く感覚。すぐそこにD組の背中が見えるけど、抜かすまではいかない。めまぐるしく流れしていく景色。あんなに大きかつた声援も、今は何も聞こえない。

バトンゾーンよりかなり手前に待機していた悠斗が、タイミング

を合わせてダッシュをきつた。一度も振り返らず、エリアに入った瞬間、右手を後ろに差し出す。抜群のシンクロ。最高速度でつないだ瞬間、ゾクッと震えが奔った。

グラウンド内で身体を前に折り曲げて、乱れた息を整えながら口ースに目をやると、A組は2位になっていた。

「バトンゾーンでD組を抜いたよ！」

興奮した声で、鳴海さんが教えてくれる。

悠斗は険しい表情で、目前の1位を追う。毎日走りこんでるあいつは、後半にめっぽう強い。いけるぞ！

と、どよめきが起る。煌にバトンが渡されたのだ。

最下位だったE組は、あつという間に差を縮めてB組を、そしてD組まで抜き去った。化け物みたいな速さで、ぐんぐん迫ってくる。2周目。悠斗がC組を抜いたが、まもなく煌も追いついてE組が2位にまで躍り上がる。残り4分の1周で、ついに、並んだ。

「悠斗ーがんばれーー」

声も限りに叫ぶ。

「がんばれ、負けるなーー！」

ま、ま同時にゴールしたように見えたが、判定は

「1位、

A組」。

「やったーー！」

「ば、馬鹿……！」

思わず飛びついたところ、全力疾走^{しつそう}でフラフラだった悠斗はそのまま後ろにじりもちをつく。

「悪い。でもでも、1位！ 優勝だ！」

「ああ、そうだな」

はしゃぐおれ達の横で、ぶつ倒れた煌がタオルを顔にかけたまま、「あーあ……」と拗ねたように呟くのが聞こえた。

73・体育祭（後書き）

煌悪役（笑）

ヒロインの声援は脚力大幅UPの補正がかかると思われますw

全身くたぐたでの後片付け。だが、優勝したので気分は軽い。

「本当によかつた。こけた時はもう、世界が終わつたと思つちゃつた」

体育倉庫にマットを運びながら、鳴海さんが目を細める。同じクラスの鳴海穂乃香さんは、ふわふわした長い髪の文句なしの美少女で、そんな風に笑いかけられるとちょっとビックドキする。

「ハハッ大げさ～。でも、ほんと、嬉しかったな！ 練習がんばつたかいあつた」

「うん。練習も、すゞく楽しかった……」

うなずいた鳴海さんだが、やがて、その黒目がちの瞳にみると涙がたまつていつたので、大いに焦つた。

「鳴海さんー？」

「……和希ちゃんはいいな。可愛くて、優しくて」

「いやいや鳴海さんが絶対ダンゼン可愛いぞー！？」

女子によくあるお世辞やほめ言いでなく心からのおメントだったが、鳴海さんはぽろぽろと玉のような涙をぽおに落として本格的に泣きになってしまった。

「ひい～、なんで？ どうして？」

「……蒼木くんのことが、好きなの」

とりあえず人目につかないといいく、とつながした体育館裏の水飲み場。ぬらしたハンカチで田を押さえながら、鳴海さんは言った。

「最初はいつも怒つてゐみたいで怖い人だと思つたけど、6月の雨の日、蒼木くんがダンボールに捨てられていた仔犬をすく優しい目で抱き上げていて……」

シリアルスな場面なのに、あやつゝ噴き出しそうになつて必死に我慢した。

今更とはいへ、いくらなんでもベタ過すぎるだろ。すげー似合つけど！ 超やりそっただけど！

「でも、好きになればなるほど、緊張して声をかけることもできなくなつて。一緒にリレー選になれて、近くにいられる時間が増えて、すくすく幸せだつたけど、もう終わっちゃつたと思うと……。和希ちゃんがうらやましい。いつでも自然に、そばにいられて」「それは、その、幼馴染だしな」

答えながら、なんとも居心地の悪い思いでいっぽいになる。おれ、恋敵こいがたきつてことになるもんな……」めん、鳴海さん。

見上げた空は徐々に茜色に染まりだしていだ。
日暮れの時刻もだいぶ早くなつてきたな……。

「あのね、私、手紙を書いたの」

やつと泣き止んでくれたことにホッとしたが、おれは鳴海さんの言葉の続きを待つ。

「でも、蒼木くんはそういうの、絶対受け取ってくれないって聞いて……。だからお願い、和希ちゃん、渡してもらえないかな？」

……は？

「い、いや、おれはそういうのはひとつと……」「

表情を強張らせるおれに、鳴海さんはまたボロボロと大粒の涙を零す。

うわーん、頼む、泣かないでくれ。おれも泣きたくなる……！

パニクるおれに、鳴海さんはさくさくとのどを詰まらせながら、懇願する。

「和希ちゃんからなら、せつと受け取つてもいいえると嬉しい。ダメでもいいの。知つてもらえたら……脈がないのはわかってるけど、想いだけでも伝えたいの。お願ひ……！」

もともと体育委員で片付けに残つていた上、女子更衣室の人気がけるのを待つてから着替えたので、校舎に戻つたのはもうほとんど生徒が帰宅したあとだった。

1-Aの扉を開けると、オレンジに染まつた教室に残つていたのは、すらりと長身の影が一つ。

窓から空を見上げていた悠斗は、いつになく穏やかな表情で振り返り、言った。

「知つてるか？ 今夜は10月りゅう座流星群の出現が予測されている。この天気なら日本でも、深夜の3時頃に、もしかしたら見え

るかもしない」

「へえ。でも3時か……。さすがに、今日はバテてるし、寝てそつ」

おれの言葉に、悠斗は「だな」と小さく笑った。優勝のせいか、じいつも機嫌がいいようだ。

教室に一人きり、とかお膳立てされてる感じだよな。でも、おれが今からじょじょにしてることは、自殺行為に他ならない。

断りきれずに無理矢理押し付けられてしまった淡いピンクの封筒……。じいつも男だ。あんな可憐な子から想われると思ったら、心が揺らいでもおかしくない。

とはいって、どういう形にしろいつたん受け取ってしまったものを握りつぶすなんてことは、おれにはできなかつた。

まったく、体育祭が終わつて浮かれてたところこんだトラップだ……。

「……どうした、和希？」

おれの様子がおかしいことに気付いた悠斗が、怪訝そうに首を傾げる。……ええい、ままよ！

意を決して、手紙を差し出した。

「これ」

悠斗が、息をのむ。

「鳴海穂乃香さんか？」

瞬間、その理知的な面が、凍りついた。

やつてはいけないことをした。

直感的に、それだけ思った。

ドクン、ドクン。

全身が心臓になつたように、自分の鼓動が間近に聞こえる。でも、ここまできたら、もう引き下がれない。のどがからからに渴いてるのを感じながら、言葉を継ぐ。

「あの子、本当におまえのこと好きみたいだからね、手紙だけでも読んで」

ひつたくられた、と思つた途端、田の前でビロビロに破かれた。

「……お、まえ、何すんだよ！？ 人の気持ち踏みにじるやつなこと……！」

血相けっそうを変えて叫んだが、

「ヒーヒの台詞だ！？」

全身を平手されるような勢いで吼ほえ返されて、身がすくんだ。ギラギラと燃えるように睨むなみつけてくる瞳。赤いほおは、夕日の照り返しのせいだけではないだろう。

田の前の悠斗は、本気で、怒っていた。

「……悠、斗……？」

「おまえの……おまえのやつこいつが、本当に……大嫌いだ！」

「つ……！」

両肩をこきなり強い力でつかまれたと思つたら

。

「……ひ

悠斗は荒い息をつきながら、呆然とするおれから身を離した。

一瞬、泣き出しそうにも顔をゆがめたけれど、すぐに口元を引き締めて走り去る。

バタバタといつ足音が消えると、辺りは静寂が訪れた。

……。

……えっと。

何が起きたのか、今ひとつ把握できないのだが、とりあえず。脣にはまだ、熱い感触が残つていたりして。

……。

……これはつまり。またしても。

キースー saree-ta-a-a-a-a-(エコー)

かたつむりよりも鈍い思考回路でよつやくその答えにたどりつき、奈落に落ちていくようなショックを受けるおれ。

あああああ自殺行為かもとは思つたけど、いつこの爆弾は予想外だよウワアアアン。

しばらくの間、頭を抱えてズーンと崩れ落ちていたが、やがてのうのうと自分の席に移動してカバンを手に取り、隣においてきぼりにされたもう一つもつかんで。大きくため息。

……ごめん、悠斗。

74・ラブレター（後書き）

甘酸っぱすぎて死にそうですが……。
k s t o k u r i m a i y a n

special than

白い長方形の部屋、薄緑のカーテンでスペースを区切られた、広い病室の一角。

パジャマ姿でベッドに横たわる幼い悠斗のすぐそばで、ヒロインがぽろぽろと涙を流していた。

『「じめんね……和希がバカなことしたせいで、悠ちゃんがこんなことに……』

『別に、じんなの、すぐなおるじ。和希は俺のために星をとりついでしてくれたんだろ?』

ぶつきらめつて、ヒロインを慰める悠斗。5歳の時の石垣島での事故後の出来事のようだ。

『お星さまをとるなんて、ムリなんだって。『「じめんね、和希、バカで、悠ちゃんに痛い思いさせちゃって……』

そう答えて、また泣いてしまつヒロイン。

悠斗は困ったように眉を寄せながら、話題を逸^そらしたかったのだろうか、枕の横に置かれていた小さな包みに手を伸ばす。

包装紙を開け、中の小袋をみた瞳が、見開かれた。

『和希。星、くれたじゃん』

『? それ、ママが持たさせてくれたお土産……?』

きょとんとするヒロインの掌をつかんで上向かせると、悠斗は小袋を傾ける。

ヒロインの手の上に転がったのは、カラフルな金平糖^{こんぺいとう}。

『……星だ』

『バツクリしたよつてばくヒロイン』、微笑む悠斗。

『ありがとな』

ヒロインの顔がみるみるほころび、涙のあとを残したまま、満面の笑みとなる。

『悠斗ちゃん、大好きー!』

ほつぺに、ちゅ。

『……おまじないだよ。和希が風邪ひくといつもママがしてくれるの。早くよくなりますよつて』

悠斗はポカーンとしてから、またたく間に真っ赤になった。

『悠斗ちゃんは、物語で読んだ騎士ナイトみたいだね。やさしくて、あたまがよくて、たのもしくて、いつも和希を守ってくれるの』

てんしんらんまん 天真爛漫にそう語るヒロインとは反対側に顔を背けて、悠斗は小さい声で、おひ……と応えた。

あ……甘酸っぱー……！

帰宅後、中間テストに向けて机にノートを広げているうちに、ダウンしていたらしく、覚醒かくせいしたものの、たつた今みた夢の内容に、

おれはしばらく机に顔を伏せたまま悶絶した。

でも。あいつ、あんなに昔から、想つてたんだな……。

体を起こし、椅子の上でぐつと伸びをする。

窓の外は、真っ暗。時計を見ると、午前3時過ぎ。

……なんかの流星群が見えるかも、とか言つてたつけ。

ガラツと窓を開けると、隣家の庭に、見慣れた影が見えた。

逡巡の後、おれはぐつと唇を引き締めると、部屋着にカーディガンを羽織つた。

キイ……。

門を開けるときの軋み音で、悠斗がこりらを振り向く。外灯に照りし出された目が真っ赤なのに気付いた瞬間、ズキリと胸が痛んだ。

悠斗は一瞬だけ、バツが悪そつなそぶりを見せたが、もひ、瞳を逸らそうとはしなかった。

「…………無神経だった。『ごめん』

そばまで近付いて、頭を下げるといや」と静かな声。

「俺の方こそ、悪かった」

こつものような、淡々とした声。でも顔を上げると、悠斗はまだ、おれを見つめていた。

「……なんでなんだろうな

「さつりと、低音が夜の闇に零される。

「なんで、こんなに好きなんだうつな……」

いつも凜として隙を見せない悠斗の、途方に暮れたようなその微笑を見た瞬間、鼻の奥がツンとなつて、まぶたの裏がじわじわと熱を帯びた。

だめだ。

ここで泣くのは、最悪だ。

ぐつと歯を食いしばって、夜空を見上げた。
深夜なので、点在する外灯以外に余計な光はない。
月は沈んだばかりで雲もなく、星見にはよさそうな天候だったが、
明るい星が少なく、物悲しい印象を受けた。

「 秋の星座の星には、1等星が一つしかない。みなみのうお座のフォーマルハウト……あれだ」

悠斗の指差す方に目をやると、南の空にまつと光る星。

「『秋の一つ星』などと言われるが……秋の空も、目を凝らせば、
密やかな星が無数に連なつている

「…………ほんとだ……」

意識しなければ見えてこないけれど。

尊く輝くものは、本当はいつも揺るぎ無くそこには輝いてこない。

「…………おまえが、俺をそういう対象としてみたことが無いのは知つ

ている。だが、これからは、一人の男として意識してほしい

まっすぐな視線とともに伝えられる、真摯な想い。

「俺は子どもの時からずっと 和希だけを、見てた」

「…………うん」

おれがうなづくと、悠斗はため息をついてから、また空に目を向ける。おれも、同じように視線を投げかけたその時

「あつ」

濃藍の空に、一筋の光。

「見た！ 見えた……あつまた……！」

息をのむ間もなく、次から次へと、空に描かれる放物線。
きりめき降り注ぐ、星屑の雨……。

おれ達は、願い事をするのも忘れて、永遠とも思える儚いその光
景にただただ魅入っていた。

75・流星群（後書き）

10月じゅう座流星群、今年は13年に一度の当たり年だったそうです。

この原稿をあげてから知つて、びっくりしました。

日時も設定とドンピシャの10月9日3時から…毎年8日前後に出現つてのだけは調べて書いたんですが、なんだこの偶然の一一致！でも実際そこまで見れたかはわかりません。その時間起きてたのに、うつかり忘れて二回動に熱中してた私…色々と残念すぎる。」

z

体育祭の次の週はすぐ中間テストで部活は強制休止。

今回のテストはわりと手こなえを感じて乗りきり、月曜日、久々に軽音部におもむくと、パッと顔を輝かせて静流が出迎えてくれた。

「センパイ、待ってたよ。会いたかった！」

「つじじさくわこまぎれて抱きつくな。部活は久々だけど体育祭見にきてただろ？」

「それでも、一日ぶり！ 一日千秋の思いだから精神的には実に九千秋！ 宇宙的スケールの再会だよ？ それにしてもあのリレーの颯爽と風をきるセンパイの勇姿、忘れられないな……」

流れのよくな口説き文句を繰り出す静流は、あの切ない告白などなかつたかのよにいたつて普通に接してくれたから、内心ホッとした。

「最後に音を合わせてから、一日ぶりか」

「あ、悠斗さん、いたんだ」

「……和希と一緒にきたが。おまえ本当は気付いてただろ？」

ドラムの前の椅子に腰かけて楽譜をさりうていた煌が顔を上げ、問う。

「新曲、ちゃんと練習してきたか？」

「できるだけはやつたが、まだまだだ」

「そりやみんなそーだろ」

悠斗の答えに、あつけらかんと、煌。

11月27日に控えた全国大会用に王子と静流が生み出した渾身の新譜『Rainbow Score』は、おれたちの持てる限りの技術と表現力の粹を極めたような超難曲。

コンセプトは、音楽家の卵である少女の虹色空想飛行。次々と万華鏡のようににいつり変わる曲調と可変拍子、散りばめられた超絶技巧、ジェットコースターのような音の高低差とスピード演奏、早口歌唱。

ディズニー音楽のように可愛らしく始まつたかと思えば、ヘビメタのようここにか不吉に重くかき鳴らし、かと思えばフュージョンのように自由に洒脱に、ロックのように激しく熱く……。

様々なジャンルが不思議に違和感なく溶け合ひ、一つの楽曲として完成しているのだから、見事としかいよいづがない。

つかみ所がないのに、クセになる。ひたすらカッコいい。弾いても聴いても鳥肌間違いなし。でも、これ、本当にモノにできるのか？　と呆然としてしまうような、レベルの高すぎる難曲中の難曲だった。

体育祭前に楽譜が配布され、以降は主に自宅で個人練習を重ねてきたが、みんなまだまだ合わせる段階まではいつていよいだ。それでも、どれだけ大変でも、おれ達はデモテープを聴いた瞬間から虜とりこになって、全国で弾くならもうこの曲しか考えられなかつた。こつこつと、練習あるのーみ。

扉が開き、「遅れてごめん」と王子が入ってきた。

「あ、梓茶、おまえ文化祭でも実行委員の副委員長だつて？　体力持つのか？」

煌の言葉に、かなりビックリした。

中高合同の美楠文化祭はおよそ2週間後、10月最後の日曜日に開催される。でも体育祭に引き続き、文化祭でも実行委員執行部つ

て……。

「マジで！？ 大丈夫か？ 今度はおまえが倒れたりしないでくれよ……」

青くなつてそう言つたといふ、王子はどうから謎のシャボン玉を大量発生させながら微笑んだ。

「嬉しいな……君に心配してもらえるなんて。その言葉だけで、僕はいぐらだつてがんばれる気がするよ」

……ここにきてまた新技披露とは侮れん。ま、この様子なら大丈夫そうか。

「しかし、全国大会では2曲披露することになつていてるだろ。限られた時間の中、他のもつ1曲はどうする？ 持ち歌の中から選ぶか？」

悠斗の疑問に、王子はコクリとうなずいた。

「個人的に、最後はこれだつてずっと考えていた曲があるんだ。もう何度もライブハウスでもやつてきた僕たちの十八番」

そこで王子は言葉を区切つたけれど、その場の全員が、すでに名前を聞かずとも納得していた。

「たしかに、あのナンバーと和希の声の相性は、はんぱないよな。何度も演奏しても、絶対飽きがこない」

「うん。『Rainbow Score』がテクニカルでめまぐるしいから、バランスもとれるし。名曲イコール難曲つてわけじゃあ

むちゅんないもんね」

「全国大会は観客投票もあるしな。あまりに定番のもの芸がないが、2曲中1曲は多少でも馴染みのある曲をやるとこのは、作戦としても正しことと思つ」

煌、静流、悠斗と意見を述べ、最後におれに視線が集まる。

「ああ。おれも最後に歌うならそれがいい」

王子は「じゃあ決定」と満足げに全員を見回すと、カバンから何かの用紙を取り出した。

「練習を始める前にもう一つ、話し合いたいことがあるんだ。これは文化祭の企画申込書なんだけど……軽音部の参加はどうする？ 全国大会のための練習が最優先だし、それぞれクラスの準備もあるからさすがに模擬店参加はきびしいと思うんだけど、ステージ出演だけで、持ち歌から盛り上がりそうなものを2~3曲とかなりどうかな？」

ぐるっと一同を見回した王子の提案に、みんな、特に異論はなかった。

「ナビや。どうせやるならこいつもひとかよつと違ひにしたくない？」

静流の言葉に、わかる！ と激しく同意するおれ。

「せつかくの祭りだしな。あ、じゃあ演奏前に寸劇とか？」「でたな、お祭り好き。あんまり凝りすぎて、練習ができなくなるのも困るぞ」

「こーんじやねえ？ メインはバンドなんだし、筋だけ決めて、あ

とはノリでやることにすれば、定番の衣装なら、演劇部の知り合いに借りられると思う」

「そうだね。本格的なものは演劇部にお任せするとして、僕らは肩の力を抜いて見られる余興のよつなものを」

月日は飛ぶように流れ、文化祭當日。

立派な入場門を始めとして校内のあちこちに貼られたカラフルなポスター、各クラスや文化部の凝つた展示品、様々な屋台や模擬店、お化け屋敷、迷路、占い館……生徒達は短い準備期間にも関わらず、その分集中して作業を進め、お祭りムード満点だ。

校外からもたくさんの方々が来場者。呼び込みの声もにぎやかで、どこもかしこも活気に満ちている。

おれと悠斗のクラス、1・Aの出し物は、メイド＆執事喫茶。

「おかえりなさいませ、『主人様！』

開口一番にくり返すこの台詞もだんだん慣れてきたとはいっても、やっぱりまだ恥ずかしい。なるべく客の顔を見ないようにして頭を下げたところ、クスクスと耳慣れた笑い声。

「ただいま。こんな可憐なメイドさんが家で待つていてくれるなら、毎日早く帰りたくてたまらないだらうな

「王子、来てくれたんだな。……お席に『案内いたします』

「つうん、見回りの最中だから。ティクアウトはできるのかな？」

君を

薔薇とキラキラのダブル攻撃キター。

「いいよ、バカちん、行つておいでよ。広報活動もかねて」

背中に「1・Aメイド&執事喫茶」とかかれた紙をペタリと貼られて、かんなに外へ追いやられる。この格好でねり歩けと…?

「パンフレット見たぜ。入場門とかの会場設営もだけど、よくまあ短期間でこれだけのもの仕上げたな～」

廊下を歩きつつ、心からの賞賛を贈つたところ、王子はパチリと見事なウインク。

「文化祭の実行委員は1学期から決まっていてね。夏休み中から少しずつ準備を進めていたんだ」

「この言葉には、納得すると同時に感心した。
こいつっていつも華やかなところにいるように見えて、さりげに裏方の仕事もたくさんやつてるよな……フォロー魔だし。

「考えてみればおまえ、生徒会長キャラだよな。ビーして立候補しなかつたんだ？」

「生徒会も考えたんだけど、任期の最後までいられないから、ね」

……そつか、冬で日本を離れるつて言つてたつけ。だから、思い出作りをしようとしたんな色々やつてるのかな……。

「そりいえば、和希ちゃんは『ミス美楠』出ないんだね。せつかくエントリーされてたのに……」

「出るわけねーじゃん！」

ときメロ豆知識　『美容』が一定ステータスに達したらミスコンにエントリーされる。らしい。けど選ばれても全然嬉しくないつづり。

「これ以上ライバルが増えても困るから、僕としては助かるけど……出れば断トツ優勝間違いなしだから、少しだけもつたいたいな」「おまえの日、曇りすぎだから……ってうわ、なんだこの長蛇の列……！」

階段の長い行列をたどつて降りていくと、新校舎と旧校舎の間の渡り廊下へと続き、そこにもまだズギー行列ができていた。なんだよ、ここは『ディーランド』か！？

どうやら中庭に並ぶ屋台のうちの一つかから伸びていてるらしい。

「リペーター続出！ 本日限定2・Eの『黄金のたこ焼き』最後尾はこちらでーす！」

「す、50分待ちだつて……」

「でも超イケメンがすっごい美味しいたこ焼き作ってくれるらしいよ」

「う

呼び込みの声と通りすがりの女子の会話で、把握。煌のやつ、今日一日で何個たこ焼くんだろう……。

うちのクラスも模擬店優勝ねらつてたが、これは分が悪そうだった。

やっぱ悠斗に無理矢理でも執事コスチューム着せるべきだったな……あいつは嫌がつて裏方入っちゃつたけど。

ああ、^{ああ}嗚呼、イケメンの無駄遣い。

「和希ちゃん、『写真館』だつて。入つてみよつ」

そう王子に促されたのは、どつかのクラスの出し物の一つ。入り口でぐじを引き、それに書かれた衣装を着て写真を撮れるという企画だった。

メイド服からさらにまた「スプレー」と…?

王子が引いたのは「科学者」。

白衣と眼鏡を身につけ、試験管を傾けながら一ヶ ハツと決め台詞。

「僕と恋の化学反応を実験してみない?」

はいはいワロスワロス。

しかし周囲の女子がすごい勢いでフラッシュをたきまくつて、まるで芸能人の記者会見のような騒ぎになつた。

続いておれが引いたのは ゲッ、マジで…?

「結婚前に着ると婚期が遅れるとかいうよな~」

まったく恥ずかしい褒め言葉をこれでもかと浴びせられたが、きつと…。

げんなりしながら純白のウエディングドレスをまとめて試着室のカーテンを開けたところ 王子はこいつを見つめたままボーザンと固まつてしまつた。

「…………おい、王子?」

「あひ、じめん。…………なんか、その、言葉にできない…………」

それだけ言って、ほおを紅潮させながら愛しげな眼差しで見つめてくる。

…………おいおい、美辞麗句を並べたてられるよりいたたまれない気がするんですけど…………!

「見つけた、北王子先輩! 大変です、1-Dのお化け屋敷でお客

さんに水をぶつ掛けた生徒がいたらしくて大騒ぎになつてます。それから、講演会の先生の到着が遅れていって……」

元の服に着替えて廊下に出た直後、実行委員の腕章をつけた生徒が半泣きでかけ寄ってきた。

「わかった、すぐに行くよ。『めん和希ちゃん、また午後のステージで』」

「ああ。大変だな、がんばれよ」

慌ただしく立ち去る王子を見送つてから、さて、今度は中等部の方に宣伝にいくか……と歩きはじめた時。

ふと、視線をめぐらせたはずみに、『こちらをにらみつける女の姿に気付いた。

おれと田が合ひつや、ギクリとしたように顔を強張らせて、曲がり角の向こうに身をひるがえす。

檜居まゆか！

とつさに追いかけようとしたが、途中の人ごみでなかなか進めなかつたせいもあり、見失つてしまつ。

……どうして、あいつがここに？ 文化祭を見物にきたのか？ 眉を寄せて考え込んでいたら、「和希」と喧騒けんそうの中でもひときわ響く低音が鼓膜を震わせた。

「なんだ、その格好は？」

「うつわ、激力ワなメイドがいるーと思えば和希チャンじゃん！－なに、『奉仕してくれんの？』

いつのまにか至近距離に、苦虫をかみつぶしたような顔の魔王と、対照的にテンションあがりまくりのロン。

あ、そつか、まゆかは魔王を追つかけてたのか。大変だな、こいつも……。

「クラスの出し物。けつこう紅茶やお菓子もこだわってんだぜ。よかつたらあとで……つておまえ、なんでそんな不機嫌そなわけ?」「あ~違つ違う。魔王サマのこれは照れ隠ゴフツ」

みぞおち
鳩尾に一撃をくらつて崩れ落ちるロンには目もくれず、魔王は仮頂面のまま「丁度よい。祭りを案内せよ」とおれの腕をつかんで歩き始めた。

「センパイいらっしゃい……つてメイド服とか反則でしょー。眼福すげて困るんだけど!」

静流のクラスの出店は、家から持ち寄ったテレビゲームを教室に並べた一回100円のゲームセンターだった。テレビは他の教室から調達したらしく。

「ラクしすぎだろ!」

「まあまあ堅いこと言わないで……元手タダだから儲かるのなんの」

確かに、これでなかなかの大盛況だ。ちつ、ちやつかりしてんな

……。

「魔王サマもやってみる?」

静流が差し出したのは初代「スーパーマリオブラザーズ」。

チャラッチャッチャラッラッター

いきなりBダッショウしてクリボーに激突した魔王に、泣くほど笑つた。この男……濶みねえ！

チャラッチャッチャラッラッター

今度はそろそろと近寄り、そばでジャンプするが、早すぎて着地と同時にまたしてもクリボーの餌食となる。マジで腹筋がヤバイ、助けてくれ……！

「貴様ら……そんなに死出に旅立ちたいか……？」

魔王はヒクヒクとほおを引きつらせながら爆笑するおれ達をにらみつけていたが、どうやらハマつたらしい。

何度もコンティニューしては、ジャンプと同時に隠しブロックに頭ぶつけて穴に落ちたり、はね返ったノコノコの甲羅に討ち死にしていた。

毎度、ばかばかしい小話を一つ……

「おー、魔王、そろそろ行こうぜ？」

「つるわーー、俺は退かぬ！ 媚びぬ！ 省みぬ！」

ちょ、その台詞……しかし魔王は例によつて素である。

「ひら、バカちん！ ずっと同じ場所いたら宣伝にならないじやん」

肩を軽く叩かれて振り返ると、メイド姿のかんなが「1-A」の看板を持って立つていた。こんな時でも首にはりやんと一眼レフカメラを提げているのはさすがの一言。

「悪い、でも魔王が動いてくれなくてさー」

「え、あの黒川旺眞がテレビゲーム！？」

魔王は苦心の末、ヒツヒツ・4までたどり着いていた。

「がんばれ、もうすぐボスだー！」

旋回する火の玉をかいぐぐり、飛んでくる炎もジャンプしてかわし

「いけー！」

Bダッシュでクッパに特攻死。

無情にも鳴り響くゲームオーバーのメロディ。

「なんだこの駄作はっ……」

「キャッ……！」

激昂^{げうこう}した魔王がいきなり立ち上がり、すぐそばでレンズを構えていたかんなが体勢を崩した。

「大丈夫か、かんな！？」

「ピックリして駆け寄つたが、かんなは顔をしかめて足首を抑えている。どうやら、倒れた時にひねってしまったらしい。」

「捻挫^{ねんざ}っぽい……けビビリじよ。これじゃバンドの劇、出られな

いよ」
「ああ、あんなんノリだけの余興だから心配すんな。保健室行こうぜ」

午後の軽音部のステージ出演で予定していたのは、白雪姫のパロディ劇。

役者が足りないので、かんなに友情出演を依頼していたのだが……。

「あらら、急いで代役さがさなきゃじやん。タイヘーン」

両手を頭の後ろで組んでニヤニヤ笑いを浮かべながら、チロリと視線を横に投げかけるロン。

「……なんだその目は」
「いえいえ、別に誰かさんのせいだとは言いませんケド」
「魔王さま、せつかくだしオレ達とセッションしない？」

静流の言葉に、仏頂面そのものだった魔王の眉がピクリと動いた。

「セッション……だと？」

「劇のラストから楽器演奏につながる流れになつてゐるからだ。魔王さまとセンパイのダブルボーカルつてのもかなりおもしろいこんじやないかなあ」

「いいな、それ。おれもちょっとやってみたい」

かんなに肩を貸しながら思わず口をはさむと、魔王は「チツ」と舌打ちし、渋々といつたようになづいた。

「今回だけは、貴様らの思惑に乗つてやるわ……」

演目『白雪姫と3人の王子』

ナレーター「昔々あるといふ、白雪姫とこいつても可愛なお姫様がいました」

かんなのナレーションと同時に舞台の左側にスポットライトが当たると、そこにはドレスをまとつた静流・美少女バージョンの姿。おお～っと男女問わず大きな歓声が起こる。

「お姫様はセンパイでしょ！？」と静流は渋つていたが、おれが姫やつたつてなにもおもじろくなーもんな。やっぱ、この配役で正解だろ。

ナレーター「しかし魔女であるお姫様、白雪姫をつとまつて思つておつました」

パツと右側に当てられたスポットライトに照らし出されたのは、お后に扮した魔王。ノリノリのロンと静流にバツチリ化粧を施され、ど迫力の美女に変身している。見るからに超不機嫌で黒いオーラでまくつてるけど、役的にはむしろ好都合。

お后「（怒りと屈辱で小刻みに震えながら）おい鏡、答える……この世でもっとも美しいものは誰だ？」

鏡「ヒヤハハハハツそんなん聞かなくてもわかつてんだろー？ アンタちよーっとばかじごつすぎだし。白雪姫の圧勝（バリーン、と破壊される）」

ナレーター「お后は、白雪姫を殺すように狩人に命じました。しかし、狩人は姫を殺すことはできず、森へ捨てるだけでした。白雪姫は幸運にも、森の奥で小人の家を見つけました」

白雪姫「まさか森の奥にこんなキユートな小人さんが暮らしていたなんて……まさに運命の出会いって感じ？」

小人「い、一緒に暮らしてもいいけど、妙な真似はするなよー！」

あらすじだけ決まつてるノリ重視の劇とはいえ、いきなり公然と口説き始めた静流にビビるおれ（小人役）。どんな白雪姫だよ、オイ！

ナレーター「これを知つたお后は怒り狂い、白雪姫を暗殺しようと企みました」

お后「食え。毒リンゴだ」

白雪姫「ウソのつけない人だね……毒と知つて誰が食べるの？」

お后「四の五の言わずに食すがよい！…」

ナレーター「無理矢理口に詰め込まれ、あわれ姫は窒息死……。しかし、ガラスのお棺に眠る白雪姫はあまりに可憐で、まるでまだ生きているかのよう……。小人が嘆いていると、王子様がやつてきました」

王子「いったいなぜ、そんなに泣いているんだい?」

正統派王子様ルックに身を包み登場した王子は、ま、まぶしい……！ 目がつぶれそうなほど全身キラキラ輝いている。

ああ、見える、横に白馬の幻が見える……！

非の打ち所のない王子様の降臨に、飛び交う黄色い声援。

王子「これはなんと美しい姫だらう！ どうか僕の妻になつてください」

小人「つてなんでおれ！？ 白雪姫そつちだし！！」

王子「僕のプリンセスは君しかいない」

お、王子暴走……！！

くらくらした瞬間、ぐつと腕を引かれ、新たな影に抱きしめられた。

王子？「悪いな、こいつは俺の婚約者なんだ」
（ファアンセ）

ナレーター「おおつと、隣国の煌王子が登場ー！」

しかし煌の顔にも横から鋭い剣の切つ先が突きつけられ

王子？「その手を離せ。嫌がっているだらう」

ナレーター「悠斗王子も現れた！ これはまさかの展開、3人の王子様から小人は誰を選ぶのか！？」

小人「いやおかしいだろ！ 白雪姫は！？」

お后「そうだ、貴様らはそこの死体をとりあつていろ。小人は俺が
もらつてやる」

白雪姫「さつきからおとなしく聞いてれば、みんない加減に
してくれない？ 一番最初に小人さんの魅力に気付いたのは誰だと
思つてるの！？」

ナレーター「なーんと既婚者はばずのお后や死亡していた白雪姫ま
で参戦！ はたして、魔性の小人は誰を選ぶのかー！？」

「本来は姫を蘇らせるのは音楽の魔法ってことで、みんなで協
力して演奏して、蘇った姫も一緒にライブするってシナリオだった。
はずなのに。

ああ、もう、どう收拾つけるんだよこれ！

小人「一つ言わせろ…… 小人は男だ――――――！」

会場に轟き渡ったのは、まさしく魂からの叫びだった……。

結局「小人さんを巡って勝負だ！」テーマは音楽」という王子の提案により、スムーズにバンド演奏に移行し、舞台はつつがなく終了した。

さすがフォロー魔・北王子梓茶……つたつてもとはあいつの暴走のせいで変な方向に転がつたわけだけど。

とりあえず、予想外に大うけしてたからよかつたものの、やれやれだ。一部女子の視線はめちゃめちゃ痛かったし。

「いや～楽しかったわ。まさかのコメディ展開に、旺眞くんとのセッションまで見れちゃうなんて最高。ぶつつけ本番だつたって話だけど、劇も演奏も息ピッタリだつたじゃない」

「ヤーヤとほおをほころばせる芽生に、ここつは気楽でいいよなあとまたどつと疲れが出た。

文化祭の屋台などが出ていない中庭の、人気がないスペース。ここなら気兼ねなく話せるだろうと、劇の終了後に楽屋を訪れた姉貴をつれてきた。

「なんか、ファンティスクをプレイさせてもらつてる気分よ」

「つーと、これもやっぱり正規のシナリオにはなかつた、ど……そーいえば、今日、またあの女を見たぜ。檜居まゆか。すげー目でにらみつけてきて、追いかけよつとしたらすぐ逃げちゃつたけど」

おれの言葉に、芽生の顔がさつとこわばつた。

「……不気味よね、あの子。わざわざあんたがクモが苦手なんてことまで調べ上げてきたり……そもそも、まゆかなんて、私の知つて

るゲーム『ときメロ』には登場しないキャラだもの。本来ならきっと、『Der Luxusstod』の熱狂的なファンの一人でしかないただのモブキャラだったのよ」

「…………つーことは、関東大会で『COLORFUL』が優勝したことにによる影響?」

「だと思つわ。もともと反感はあつたんだろうけど、崇拜する『Der Luxusstod』を破つて優勝することで、怒りと嫉妬が爆発したんぢやないかしら? 本来のシナリオ……全国が初優勝であれば直後に誰かの彼女になるからまだしも、今みたいにイケメンはべらしてゐる状態でそれやられちや、ふざけんなつてキレる気持ちもわからないでもないわ」

…………たしかに。でも好きでやつてるわけじゃあ断じてないんだ!

トホホ。

「やうそ、ライブやそのあとで色々ありすぎてすっかり忘れてたけど、魔王の妹、あいつ何者だ? いきなり『どうしておんなのからだにおとこがはいつてるの?』なんて聞かれてすげーびびつたんだけど」

「詩衣菜ちゃん……相手のオーラや考えていることをなんとなく感じ取れる不思議系美少女なのよね。ただ、やっぱりゲームにはあまり出てこないサブキャラポジションだし、正直何を考えてるのかわからな……!?

不意に、芽生の顔が苦しげにゆがみ、台詞が途切れ。

背後の茂みから突然でてきた影は、目を見開くおれの前で、片腕で姉貴の首を絞めるようにしてその体を押さえ込み、もう片方の手には、鋭いナイフを握っていた。

「さつきから聞いてたら、なんかおもしろい話してゐみたいなんだ

けど　「

もう見慣れたものであつたはずのニヤニヤ笑いの上に、隠してき
た狂氣をもはや全開に彩り。

姉貴の頸動脈けいどうみゃくにナイフの切つ先を突きつけながら「オレにも詳し
く教えてくれないかなあ、和希チヤン？」と、ロンは言った。

「この世界はゲームのために作られた虚構であり、和希チヤンはも
ともと男だけビロインに転生してしまつた。リアル世界に戻るた
めには全国大会までに魔王サマも含めた5人の男全員を落とさなき
やならない 今の話をまとめると、つまりこんな感じ？」

ゆつくりとした問い返しに蒼白になりながらうなずくと、ロンは
すつと目を細めてから、顔を伏せた。

次第にその肩が、細かく震え始める。……クッ。小さなうめき。

「ロン……？」

「クッ……クククククッヒヤーッハハハハハ！ 何それ、ありえね
ー。アンタそんなヤバイ人だつたんだ？ いや、いいぜ、別に他人
に迷惑かけないならいくらでも空想世界で遊んじけば！」

爆笑されて、心底ホッとした。

「そうだよな。こんな話、まともに信じられるわけがない。

「ああ、おれたちの勝手な空想遊びだよ。だからほつとけ

わざとぶつきらぼうこそつ言つと、ロンは芽生を解放し、「じめ
んじめん」と大げさに両手を合わせた。

「たしかに現実離れしたイケメンがそろいすぎだもんな～ゲームでもおかしくない！でも、万が一その話が本当だとすると……アンタも、えらいペテン師だな」

「……！」

かたまるおれを心情の読めない薄笑いとともに見つめながら、口は言葉を継ぐ。

「だつてそうだろ？ 自分の勝手な都合で周りの奴らの心を弄んでるわけだ。それってはつきりいって」

“最低じやん。”

その一言を最後に、禍々しい色彩を宿す影はその場から姿を消した。

地平線付近で茜色あかねと藍色が溶け合い、空には一番星の瞬きだす時刻。

校庭では、大きなキャンプファイヤーが燃え盛り、文化祭用に製作された看板や様々な道具類がくべられていく。それを囲むように円状になつた生徒達が吹奏楽部の伴奏に合わせて歌うのは……『今田の日はよづなら』。

「「」などこにいた

誰もいない屋上から一人、文化祭のクライマックスを眺めていたおれは、すぐ背後から投げかけられた声にビクッと身を緊張させて

から、ゆるゆると振り返った。

「……びっくりせんなんよ」

「「めん」

いつのまに、とため息をはくおれに、王子はクスクスと笑みを零^{ハラフ}してから、「やられたの?」と穎やかに問う。

「……別に。文化祭も終わりだな~ってたそがれてただけ」

「……そ、うなんだ?」

「おまえにやられたんだよ、」んなとひられて。執行委員が現場離れていいわけ？」

「僭越ながら、」今までほとんど僕が中心になつて動かしてきたからね。最後くらいは生徒会と委員長にお任せして、抜けてきちゃつた」

「最後が一番盛り上がつて、感無量なんじゃねーの？ がんばつてきた立場からすれば」

首を傾げるおれに、王子は「やうだね」とつなづきを返した。

「でも、だからこそ……最後だけは、どうじとも、好きな子と一緒に過ごしたかつたんだ」

「…………」

おれは何もいえないまま、ぐるりと背を向けると、胸の高さまである柵わくにもたれかかるようにして校庭に視線を戻した。

「和希ちゃん……？」

心配そうな王子の声がしたけど、振り向くことができなかつた。返事も、無理。

口を開こうとするだけでも、嗚咽おえつが漏れてしまいそうで、不意に、後ろから、抱きすくめられた。

「……僕じゃ、ダメかな？」

耳元に落とされたのは、想いの熱に震える切なげな聲音。

「いつも君のそばにいたい。一番近くで、君の力になりたい。悩みがあるなら、なんでも話してほしいんだ」

「……ありがとう」

ゆづくじと腕をといて、振り向きながら。なんとか、笑った。

「でも、大丈夫だから」

王子はぐっと唇をひき締めて、悲しげに瞳を曇らせる。

「……どうしてだら?」

ぱつっと、笑つ。

「イギリスへ行くのは僕なのに……なんだか、君の方がどこか遠くへ行つてしまつような気がする」

「……な、に言つてんだよ。んなわけねーじゃん!」

「やうだよね」

おれが力強く否定すると、王子はホッとしたように微笑んだが、その端麗な面差しにはまた、物憂げな影が落ちる。

「もうすぐここを去る僕が、いつもそばにいたいとか一番近くでとか、無責任だよね。でも……わがままなことを言えば、一緒に来てほしい。あっちでの生活も決して不自由させないし、絶対に幸せにするから 和希ちゃん」

王子は、真剣そのものの表情でおれの手をとつ、言つた。

「僕と、結婚してください」

「…………も、劇は終わったんだぞ？」

乾いた声で囁くように問うと、「本気だよ」と王子は握る手に力を込めた。

「……付き合ってもないのに、おかしいよね。でも、君以上に好きになる人なんて、この先絶対いない。

一人のときは、どこにいてもここに君がいればと考える。何を見ても、君を連想する。どんなに疲れても君の笑顔を見れば、力がわいてきて、またがんばろうと思える。……何十年先の君も、今と変わらず好きだと誓うよ……」

ひたむきに訴えていた王子の瞳が、そこで、驚いたように大きく見開かれる。

限界だった。

みんなの心からの想いが伝わるほど、胸の奥をえぐっていた罪悪感。ひどいことをしているという、後ろめたさ。好かれれば好かれるほど 苦しかった。

王子は戸惑ったような表情を浮かべながら、声もなくほおを濡らすおれを、ためらいがちにそっと抱き寄せる。

「……ごめん。ごめんね。泣かないで……！」

わけがわからず自分の方こそ泣きたい心境だらうに、懸命になだめられて、なおさら胸を締めつけられた。

ふり払わなければと王子の両腕に手を添えたけれど、それ以上の力がわからず逆にしがみつくようになつて、泣いていたら

キイ……

金属のきしむ音。
とつさに振り向くと、階段から屋上へとつながる扉が開いていて。
呆然としたような煌が、そこに立ち尽くしていた。

おれ達と田が合ひつと、顔をこわばらせ、無言で背を向けて離れて
いぐ。

「 待て、煌！」

思わず追いかけて、階段をいくつも降りた途中でよつよつかま
えた。

「 その……別におれたち、そつこひのじや、ないから

息をきらして後姿に告げたけど、おれ、なんでもわざわざこんな言
い訳みたいなこと口にしてるんだひ。

たぶん、こいつがあんまり傷ついたような顔するから？

ゆつくりふり向いた煌は、段差のせいで同じ高さになつた田線で、
おれの瞳をのぞきこむ。涙のあとがバレバレだひと細つと氣まず
かつたが、目をそらしたくはなかつた。

「 ……梓茶に告白、された？」

うなずくと、「 もうか」と咳こて、しづらべ黙つていた。
にわかに校舎がざわざわと騒がしくなる。生徒達が、戻つてきた
らしく。

「……帰るか」

すぐに洗面所で念入りに顔を洗つたから泣いた形跡は残らずすんだ……と思つたのに、教室にいた悠斗に声をかけると、じつと見つめられてから「どうした?」と尋ねられた。

なんでもないと答えると、それ以上の追究はしてこなかつたけど……ちよつとした変化も、すぐ気づくんだよな、こいつ。

気がかりそうな視線を振り切るよつて、「帰る?」と追い立てた。

「模擬店部門優勝はやはり2・Eだつたな」

「ああ、学食の食券半年分ゲット。今度おごつてやるよ」

「午後もずーっと並んでたもんな! 煙、今日だけ一生分のたこ焼いたんじゃねえか?」

「ブツ! 一生分のたこ! ってなんだそれ!? もう腕、腱鞘炎けんじょうえんにな

るかと思つたぜ。ずっと解放してもらえなくて、和希のメイド姿見

逃したのがすげー悔しい……写真ねーの、悠斗?」

「俺にきくな」

帰り道は、いつもどおり。3人であれこれしゃべりながら、すっかり暗くなつた夜道をたどる。朝夕は、吹き抜ける風がすいぶんと冷たくなつてきた。

家について、淹いれてもらつた紅茶を飲んでホツと一息ついていたら、「和希」といつになくまじめな表情で、食卓の向かいに座つていた煌が切り出した。

「俺、この家、出よつと思つ」

「…………」

予想外の言葉に目をみはるおれに、煌は淡々と続ける。

「少し前から考えていたことなんだ。バイト先で知り合った人が、下宿をやってて。学校からも近いし、特別に格安で部屋貸してくれって言うから、バイト代だけでもやっていくるし……」

「出て行くって、どうじて？」

動搖を抑えながら尋ねると、煌は少しだけためらひつつなそぶりを示したけど、意を決したように、口を開く。

「…………最初は一緒にいられるだけで、幸せだった。おまえがそこにいてくれるだけでいい、誰と付き合ってもかまわない、本気でそう思つてた。でも、どんどん欲が出てきて……近くで過（す）すづく、一緒にいる時間が増えるほど、他の誰にも渡したくなこと、思つようになつてた。

和希を俺だけのものにしたい　そういう気持ちが、それなり、抑えきれなくなってきたから。暴走する前に、離れる」

煌の口調は静かで落ち着いていたけど、こうこうしゃべり方をする時ほど、内心の強い感情を制御しようと意識してこなことば、気付いていた。

「まー俺がいなくなつた後の食生活がかなり心配ではあるけど……おまえの料理の才能のなさは驚異的なレベルだからな

そして、空気が重くなると、いつもおひやひけたよつな」と言つて和ませようとするんだ。

「……経験つめば、おれだつて上達するぜ。おれの学習能力、はんぱないんだから」

「それは認める。この半年で、成績も体力もすこい躍進だよな。一番進化したのは、やっぱ歌唱力だけど」

「そりやー、力入れてますから」

「おまえの歌はすごいよ。聞いてると本当に、なんていうか、生きる希望みたいなのがわいてくる」

「それはいくらなんでも持ち上げ過ぎやー。」

大げさな褒め言葉に呆れたように苦笑してみせてから。

「……いつ、出て行くんだ？」

なるべくせりげなく聞こえるよつこと願いつつ付け加えると、煌もさりと「数日中には」と答えた。

頭から降り注ぐ、熱い雨。

水圧が痛いくらいのそれをさんざん浴びてから、きゅうと蛇口をじやくいじめた。

浴室の扉を開けると、ふわりと白い湯気が脱衣所にあふれ出る。雲の滴る全身を柔らかいバスタオルで包んだところで、大きなため息が漏れた。

田の前の鏡には、髪の先からぼたぼたと水滴をたらした、しょぼくれた顔のおれが映つていて。

文化祭、ロンのこと、王子の告白、煌の話……今日は色々あります

きて本当に疲れたけど、それにしても。

「凹みすゞ」

苦笑して、鏡に背を向けた。

手早く全身の水気をふき取り、下着を身につけたその時。

ガラッ

脱衣所の窓が小さく開き、すき間から、何かが投げ込まれた。口の開かれた巾着袋。その中から、落下の衝撃とともに床に無数に散らばったのは

「無理無理無理無理無理　！」

パニックになつてリビングへ飛び出したおれに、ソファで雑誌を見ていたらしい煌がギョッとしたように振り返る。

「な、なにごとだ……！？」

「クククククモ！　クモ！　クモがうじゅーとー　いっぽいー！」

脱衣所を指さして片言で訴えるおれに、硬い表情で現場へ向かう煌。

頭の中が真つ白のままへたり込んでガクガクと震えていたら、不意に大判のバスタオルが降つてきた。同時に、なだめるよつな、煌の声。

「和希、大丈夫だ。全部オモチャだつた」

「オモチヤ……？」

「悪質な嫌がらせには違いないけど……とりあえず、服、着てくれ

なんとも氣まずそつと皿線を逸ひしながらの煌のやの皿襯に、元来たるよ。

「やへ、我に返つた。」

「わ、悪い……」

タオルで身体を覆いながら立ち上がり、まだおぼつかない足取りで移動しようとしたところ。
するつ。

床に落ちていた雑誌に足をとられ、つんのめる。

「わわつ」

「…」

とつそに、近くにいた煌に抱きつくよつな体勢になつた。ぎやー、
なんとこ「ハブ」メ…！

「いめん……ー。」

あわてて離れよつとしたけれど、瞬間、ぐこつと腰を弓げ寄せられるとしたら視界が反転し、ソファに倒れこんだ。真上に天井と、吐息のかかる位置に、煌の顔。
その瞳を見て、ゾッとした。
いつもの煌じやない。

「あき　つ」

呼びかけは、強引に封じられた。
全てを食つてしまつとすくなつた、荒々しい口付け。

「……ふつ……はあつ、ちよ、落ち着けつ……！」

離れたすきに必死でなだめようとしたが、また、塞ふさがれる。

逃れようと身を揺すつても強い力で押さえ込まれビクともしない。抵抗しようとするほど激しさは増し、つながりは深くなる。

つまく呼吸ができず苦しい。

からだをまさぐる、性急な愛撫あいぶ。

「 痛つ 」

不意に、のしかかっていた熱いからだがビクリと震え、封印がとされる。

口の中に広がる、鑄さびた鉄のよくな味。

顔をしかめながら唇の端はしについた血を舐なめとつた煌の瞳に、瞬間、理性の光が戻り、ガバッと身を起こした。

あふれそうな雫をこらえながら、真つ赤になつて荒い息をつくおれを見て、みるみる色を失くす。

「和、希……」

伸ばされた手を、とつさに振り払い、叫んでいた。

「いやだ……！」

刹那。

パリーン！

ガラスが割れたような音がおれの脳内に鳴り響き、視界が粉々に崩れ去るよつな錯覚。

あまりの衝撃におれは背筋をしならせたが、不思議と煌に今の音が聞こえた様子はなかつた。

「…………」めん……

「の上なく悲痛に顔を歪ませて、低く呻くよつこよつ漏らすと、煌は立ち去つた。

ガチヤン、と玄関のドアが乱暴に閉められる音が鳴り響く。

「ちょっと和希！ 何があつたの！？ 今 」

一階からかけ降りてきた姉貴もひどく狼狽していただけれど、おれに答える余裕はなく、声を殺してソファに突つ伏した。

凄まじいショックと血口嫌悪で、吐きそつだつた。

何もかもが、本当に 最低だつた。

芽生によると、煌の攻略は「恋愛不可」という失敗状態になつたらしい。いうなるともいへ、必然的にベストエンディングへの道も閉ざされる。

「まさかあの煌くんが、こんな行動にでるなんてねえ……」

おれから大まかな話を聞いた姉貴は、心底驚いたといつもより深い息をついて、言った。

「親密度マックス状態突き抜けて、臨界点超えちゃったのかしい。ほんと、何が起じるかわからない……」

あの巾着きんちやくを放り込んだのはおやじめゆかだらうと思つたが、追及する氣力はわかなかつた。

その夜はベッドに入つても全然寝付けず、何度も寝返りを繰り返していたところ、明け方前に煌が帰つてくる気配があつた。自分の部屋に入つてしまはうしてからまた出て行き、それ以来、煌がうちに戻つてくることはなかつた。

翌週の軽音部にもずっと、あいつの姿は無かつた。

11月4日、金曜日。

以前から決まつていたライブハウスでの公演にはきつぎりでやつてきただけど、お互にまともに手を合わせることができなかつた。

その夜のステージは、ひどいものだつた。煌は何度もどちらでテンポは安定しないし、おれもリズムに乗り切れずはずれたり、

走つたり、外したり。他のメンバーもいら立ちや焦りが音に滲んでいて、会わせようとするべきいつものペースを失つてバラバラになつていつた。

まばらな拍手を背に、苦い気持ちで楽屋へ戻る。

「なに、あの肺抜けたドラム。お密やんを馬鹿にしてる?」

開口一番、発せられた王子の声の冷ややかさに、背筋が凍る思いがした。

「和希もだ。全然集中できていない。金城にいたっては、バイトを理由に練習もこない。その結果が、これか!」

珍しく感情をあらわにして、悠斗が強い口調で非難する。つづむいて、ごめん、以外に何も言えないでいると、ガン、と派手に椅子が倒れた。

「話にならないね」

そう一言だけ言つて、静流は樂屋を出て行く。

「……黙つていたらわからないだらうー。」

業を煮やして胸倉につかみかかった悠斗をわざわざしゃつに振り払い、煌は自分のカバンを手に取つた。

「どこへ行く?」

「帰る」

瞬間、悠斗のほおが紅潮し、その拳が煌の顔面を強打した。

「……和希ちゃん！」

背後から王子の呼びかけが聞こえたけれど、おれは振り向かずに、逃げるようにその場から走り去った。

胸を突き破りそうなほどドクンドクンと激しく跳ねる鼓動。

全力疾走で乱れた息を整えながら、ネオンに照らされた街をふらふらと歩いていたら、どん、と通行人にぶつかって、よろめいた。迷惑そうな一瞥から目をそらして、うつむいたまま当てもなく歩く。全身に力が入らない。何もかもが、もう、どうでもよかつた。

いつのまにか、街の大通りにでていた。

横断歩道の向こうがわの喫茶店。窓際の席で向かい合つ、見覚えある一つの顔をガラス越しに認識した瞬間、全身にゾワッとする寒が走った。

どうして、あいつらが ？

衝撃で固まっていたおれの肩が、不意に、背後から伸びた大きな手につかまれた。

「和希」

かすかに鼻にかかつたような低音美声と、ふわり……蠱惑的な香り。

振り返ると、魔王がいつも以上の仏頂面でおれを見下ろしていた。

「ついてこ」

そう一言に「う」と、おれの腕をぐつと握り、道路脇でタクシーを呼び止める。

「待てよ、今はどつかにでかける気分じゃ……」

「今日は俺の生誕した日だ」

ビシリと言いつかられ、呆気にとられてこらへりに車内に押し込まれる。

いや、誕生日だからどうした、と思わないでもなかつたが、さも当然というかの如く腕を組んで隣に座る魔王の横顔を眺めてこらへりに、抗議する気も失せた。

もう、煮るなり焼くなり好きにしやう……。

「ひどい歌だつたな」

前方を見つめたまま述べられた率直な感想に、うな垂れる。

「聞いてたのか。……悪い」

「なぜ謝る?」

「がつかりさせたと思って」

おれの言葉に、魔王はフンと鼻を鳴らす。

「正直失望した。が、おまえがいちいち密の心情まで気にする必要はない。好きに歌え」

「…………」

「ライブは生ものだ。こつも同じ歌が歌えるわけでもあるまい」

無愛想に言い切る魔王だけど……慰めてくれてるのかな。

「おまえも失敗することあるのか?」

「うへへ稀にな。だが、俺の不調などとこつ稀有な事例に遭遇で
きるなりば、むしろ僥倖きやうこうといふべきであつ」

……こつは……と呆れてから、あまりにらしい物言いに、今度
は無性におかしくなつてきた。

クククッと肩を震わせると、魔王は「何がおかしい」としかめつ
面をしてから、フツと少しだけ唇の端はしを吊り上げた。

83・ヘリ・クルージング

つれてこられた先は、高層ビルの屋上ヘリポート。

「乗れ」

ミントグリーンにオレンジの流線的なラインが描かれたスタイリッシュな機体の内部は、落ち着いたトーンで統一され、驚くほど広々としていた。なめし革の張られた座席の横、大きな窓の前にはサイドテーブルまで備えられている。

「…………すげえ…………」

離陸してまもなく、眼下に広がった無数の宝石を散りばめたような壮大な都会の夜景に、言葉を失った。

輝く川のような首都高。紫の円を縁取るお台場の観覧車。

とりわけ、燐然たるオレンジをまとう東京タワー 風景の一部として上から臨んでも、その際立つた存在感と美しさは圧巻だった。

「人がゴミのようであらう?」

「…………このシチュエーションでその台詞はなんか違つと思ひやう?」

相変わらず素でボケまくる魔王に、ついつい突っ込んでしまう。そんな気力、残つてないと思つてたのに。

「違わぬ。この夜景を前にすると、どのような不快な出来事も瑣末さまつ事に過ぎぬと思えてくる」

「…………ありがとな。あと、言い忘れてたけど、誕生日おめでとう。……なんか、これでいいのかって気もするけど」

「どういう意味だ？」

「だって、これじゃおれのがプレゼントもらつてゐみたいじゃん」

魔王はテーブルに置かれていたワインを口ポコポコグラスに注ぐと、ゆっくりとそれを口に呑んだ。

「……そうでもない。俺が、この景色をおまえと見たかっただけのこと」「……」

それに、と言葉を継ぎながら、おれの腕をぐいっと引っ張る。

「プレゼントなら、これからもいえばよい」

悠然としたつむぎとともに、バランスを崩して座席に横たわったおれの上に、大きな影が覆いかぶさった。

キヤビンと「クク」ピットは仕切られ、完全個室となつた空間。静かなエンジン音だけが、響いている。

やけに虚ろな気持ちで、すぐ間に迫る翠がかつた双眸を見上げていたら、「よいのか?」「よいのか?」と低い囁きが落とされた。撫でられるほおから甘い痺れのような感覚が広がつていいくのを受け止めながら、「おまえこそ」と投げやりな口調でおれは言い捨てる。

「いいのか? おまえ、だまされてるぞ」

「……だます? 誰が?」

「おれが。ずっと、みんなをだましてきた」

「……でもなれとこいつ気持ちで吐き出すと、魔王はぽかんとした
よつこわざかに口を開いた。

やがて身を起こしてソファに身を沈めると、田元を手で覆い、ク
クククク……と忍び笑いを始める。

「馬鹿馬鹿しい。おまえがそんな器用なタマか。まあ……おまえほ
ど単純で明け透すで、にもかかわらず説のわからぬ女も他におらぬ
が」

「……」

ゆつくり体を起こしたおれが黙りこくつたまま、硬い表情を崩さ
ないのを見て、魔王の眉間にいぶかしむよつんしづが刻まれる。

「……別にかまわぬ」

ワインを一気にあおつて、唇の端に滲んだ赤を親指でぬぐいなが
ら、魔王は言った。

「おまえの背景にどこのよつな虚偽が満ちていよつと、そんなおまえ
に、惚れたのだ」
「……おれが本当は男だつて言つても？」
「おまえは女だ」

即座に一蹴したあと、ハッとしたように切れ長の田を見開く。

「……まさか、下には？」
「……いや、そういうわけじゃねーけど」
「よしんば男だとしても、まあ、なんとかなるのではないか？ 多
少は勝手が変わるだろ？ が、よつは入れば
「てめーはなんでそーゆー方向にしか思考が回らねーんだよつー？」

本当にこの男は……と脱力するおれに、魔王は不可解そうに首をひねっていたが、サイドテーブルにほお杖をついて、つまらなそうに言い放った。

「おまえの正体になど興味ない。俺は『和希』が欲しい、それだけだ」

田を丸くするおれの顎に指を添え、傲慢に、艶笑。

「そして俺は望みは必ず叶える。だから ひとつひと観念しない」

魔王のおかげで、なんだかずいぶん気が楽になった。

あの直後また迫られて、はねつけるのに苦労したけど、そんな気力が復活したのに自分で驚いた。

結果としてみんなをあざむくような形になってしまってこるのは心苦しいし、自分のうかつな言動に情けなさや後悔はどうしても消せないけど……いつまでもこんな状態のままウジウジしてるのは、嫌だ。

たとえ先が見えなくとも、自暴自棄になるのは、もうやめよう。そつ思えるようになつて、中断していたボイトレも再開した。

ヘリクルージングの2日後、日曜日。おれは再びライブハウス『T・M GARAGE』に足を運んでいた。

ここで夕方から行われる『Der Luxusstadt』のライブに招待されたのだ。

あの熱狂的なファンに混ざるのはちょい恐い、としり込みするおれに、魔王は一般には解放されない2階席を指定した。関係者席つてヤツだな。

開演よりちよい早めの時間に、裏口から入れてもらう。もう何度もきてるけど、そーいや2階席に上るのは初めてだな……と思いつつ階段を上りきったところで、ギクリと足が止まった。

窓からの遮光にちらちらと反射する埃が舞う中。

袖をまくったカジュアルな白シャツにジーンズ姿で廊下の掃き掃除をしていたのは……煌。左ほおの口の際とほお骨の辺りには、殴られたあの青痣がしつかり残つて痛々しい。

ふと目線を上げ、おれに気付くと驚いたように田を見開いて プツと小さく噴き出した。

「ねまえ……なんだよ、そのかつ！」

ストールをぐるりと耳や頭の周囲に巻きつけ（『真知子巻き』といつりし）、「テカイサン」グラスで装備を固めたおれは、ガーン、と軽くショックを受ける。

「いや、魔王ファンにバレないように変装したつもつだつたんだけど……あつさり見抜かれた？」

「バレバレの上に座しそるつてー。」

「とにかくねまえは……と苦笑する煌は、ちよつと元気になつたっぽい？」

普通に言葉を交わせることだが、なんか、無性に嬉しくて、うつかり泣きそうになつた。なんだおれ、このところ情緒不安定にもほどがある。

「……怖い思こせじ、『めんな。もへ、なるべくそこには寄らぬよ』といつてゐるか？」

煌の言葉を遮るよつて、尋ねた。

「今日仕事、何時まで？」

「……ライブが6時までの予定だから、それが終わつて30分くら

い

「待つていいか？ ちゃんと、話したい」

おれの言葉に煌は一拍置いてからひつなかき、「じや、あとでな」と手を上げて階段を下りていった。

魔王のステージは2階から見ても圧倒された。

9月の水曜ライブでおれをかばつたせいで、一時期ファンがガクツと減つたなんてうわさも聞いていたのだが、客席はしつかり満員だつたし、熱狂ぶりも相変わらず。

歌いだすと同時に一瞬にして会場を『Der Luxus ist Tod』の世界観に染め上げてしまうあのカリスマ性は、本当にすごいと思う。

声量、表現力、音域の幅　歌唱力もまた、上がっている。てか、

今日はほんと、一段と気合入ってんな……！

ボーカルだけでなく、ギターもベースもドラムもそれぞれ個性と感性爆発で聞き応えバツチリ。

狂愛と耽美。退廃と幽玄。

異空間の幻想に満ちた美しくも刺激的な迫力のサウンドに、すぐパワーをもらつた。……サンキュー、魔王。

おれもまた、いいライブがしたいな。心の底からそう思つて、ウズウズする気持ちが抑えきれずに小さな声で新曲を口ずさんでいたところ、煌が「おまたせ」と迎えに来た。

「腹減つたし夕飯でも……あ、けど芽生が待つてるか」

「大丈夫。今日は遅くなりそうだったから、あいつだけ悠斗んちで食べさせてもらうことになつてる」

「じゃ、どつかで食べながらでいいか？」

『T・M GARAGE』を出てからひと進んでいく煌だけど、歩幅はおれに合わせてくれる。

ただ、何気なく肩を並べていても、以前に比べて微妙に開いたこの距離が、おれ達の間に生じた確かな溝を感じさせた。

「 痛あや、痛そーだな」

「 ああ。あいつ、本氣でやりやがったからなー。あのあと、悠斗と殴り合いで大喧嘩。樂屋メチャメチャにしてオーナーには警察呼ばれるし、散々だった」

「 うそー?」

「 うそ」

あつさつ言つて、ニヤリと笑う。……こいつはー！

「 一発殴られて、目が覚めたっていうか、スッキリして。で、帰り道で静流にもたまたま合流したから、4人で反省会も兼ねて飯食つて、いろいろしゃべつてるうちに、ちょっと復活した」

「 そつか……」

「 出で行つたおまえのことは心配だつたけど、芽生から無事帰つたつて連絡もらつたから」

姉貴はおれを追いかけていたが、魔王とタクシーに乗り込むところを見て、とつさにそんな彼女なりの機転を利かせたらしい。

「 何食べる？ 落ち着いた場所がいいよな。洋食系？」
「 ん~、今の気分は……」

大通りの横断歩道。

向かいの喫茶店が目に入つた瞬間、一昨日の光景が蘇り、背筋を走つた凄まじい悪寒に、足が止まつた。

不思議そうに振り返つた煌の顔が、ハッと緊張を帶びて、おれを突き飛ばす。

えー？

おれがいた場所に、背後から影が飛び込んで

アスファルトに腰を打ちつけた痛みに顔をしかめながらも見上げた視界。

そこに映りこんだ光景に、何が起ったのか、しばらくわからなかつた。

「……なんで？ 私、違う、いやああああああ

金切り声を上げ、取り乱したようにブルブル震えているのは、檜居まゆか。

そのすぐ横で、小さなうめきとともに、ガクリと煌が膝をつぐ。ジッパーのあいた黒のライダースジャケットの狭間^{はざま}。白いシャツの腹部に刺さつた何かから、じわり。広がつていいく、鮮やかな染み。

「なんだ、どうした！？」

「きやああああ

「人が刺された！ 救急車を」

にわかに騒然となる周囲の様子も、なにもかもが、まるで遠い世界の出来事のようだ。

「あき、ひ……？」

ゆつくつと伸びた手をかすめて、長身がぐつたりとアスファルトに横たわる。

「うそだろ？ また、からかってるんだろ……煌」

呆然とじつつ抱き上げると、ぬめり。嫌な感触。真つ赤に染まった掌を見て、横つ面をガン、と張り倒されたような衝撃を受けた。

みるみる、おれの服にも、伝染していく鮮血。

……血、とにかく血を止めなきや。でも腹の止血つて、どうやつて？

救急車、は誰かが呼んでた。でも遅すぎないか？ なにしてんだよ、早く来いよ……！

頭がぐるぐる混乱して、震えが止まらない。とにかく、恐くてしかたなかつた。

握った手がゾッとするほど冷たくて、泣きやうになりながら自分のコートを脱いで煌のからだをくるむ。

「おー、田を開けろよ、煌！ 煌……！」

おれはただ、馬鹿みたいにひたすら名前を呼び続けたけど、蒼白のまま顔まぶたをふせた煌は、ピクリとも動かなかつた。

84・暴走の果てに（後書き）

ついに刃傷沙汰。ときメロだつたはずがこいつのまにか昼メロに……
(誰がつまごとと言えと)

85・対峙（前書き）

週始めからすみません。
問答無用の修羅場です。

運びこまれた病院の、手術室前の廊下で。

ベンチに腰掛け、ガチガチと歯の根があわないまま両手を組んでうつむいていると、カツカツカツ……急速に近付いてくる、ハイヒールの靴音。

息せき切って現れたのは、30代半ばぐらしに見える、デルマンニットとスキニーパンツに大判のストールを羽織った女性。明るめカラーのニコアンスボブの、どことなく色っぽい雰囲気を醸し出す彼女は、ハアハアと呼吸を整えながら、「手術中」と点灯した赤いランプを睨みつけ、悲痛そうに顔を歪める。……と、その時、ゆっくりと扉が開き、中から、険しい表情の医師が出てきた。

「煌くんのお母様ですか？」

はし
あの
煙は
！」

崩し状況です。もちろん、最高位へありますか

万一の覚悟はなさつていなくていい、その言葉に、ふりつと細い身体が傾ぐ。とつたに立ち上がり抱きとめた。

線を向ける。

その瞳が焦点を結ぶや、激しく手を振り払われた。

「触らないで！」

「ぐく、と思わずあざわらつたおれに突き刺され、憎悪に満ちた眼差し。

「また、あなたなの？」私から崇さんを奪つて、今度は、煌まで…

…

吹雪の中で、頭から氷水をかけられたような心地だった。謝罪をしなければ、と口を開きかけたけれど、「今すぐここから去つて！」と突き刺すような口調で遮られる。

小百合さんは、グッと両手を握り締め、涙で顔をぐしゃぐしゃにして叫ぶ。

「早く出て行きなさい！ 出で行け、この悪魔……！」

「お母さん、落ち着いてください……」

医師のなだめる声も聞かず、もはや言語になつていらない金切り声で喚き続けるその姿に、ぎりぎりと胸を鋭い錐でえぐられるような心地がした。

それでも、おれはここにいたかった。

どれだけ罵られても、居たたまれなくとも、煌のやばを離れたくなかつた。

けれど。医師から田配せをされ、騒ぎに駆けつけた看護士からも、そつと腕を引かれて。

おれがいると、彼女の精神も、壊してしまつ。

それがわかつたから、小百合さんと医師の双方に限界まで深く一礼してから、歯を食いしばつてその場をあとにした。

「こへ行けばいいんだろ？……。

病院の自動ドアをくぐつて、数歩だけ歩いてみたけれど、このまま帰る気にはなれなかつた。

手術室前にはいられなくても、できるだけ、離れたくない。屋上にでも上がつてこようか……。

きびすを返しかけたところで、視界に滑り込んできた人影に、全
身が硬直する。

駐車場に隣接した、ぽつぽつと外灯に照らし出された道の向こう
からやつてきたのは、極彩色のひょろりとしたシルエット。
闇の中浮かび上がる派手な色彩は、やけに禍々しき不吉な印象を
与えた。

「もしかして帰る?」だった? ラシキー。行き遅いにならなくて
よかつた~」

状況にそぐわない脳天氣な口調と一いや一いや笑いで、おれの反応を
うかがいつよく顔をのぞき込んでくる。

「よかつたらオレと、月夜の散歩とでもしゃれこまない?」
「……おれも、おまえとは話さなきゃいけないと思つてた」

院内の中庭の遊歩道。ひんやりとした乾いた空氣。
整然と植えられた並木の間からのぞく中天には、やけに赤い月が
かかっていた。

「あの女、サツに連れてかれたぜ。そりゃそーだよな、よつこよつ
てあんな往来のあつらいのど真ん中で……。煌ちゃんの容態は?」

「まだ手術中……」

答えながら、おれは歩みを止める。

「一昨日の金曜日、喫茶店で、おゆかと何話してたんだ?」

その質問に、弾むよつな足取りで少し先を歩いていたロンも立ち

止まり、ゆっくりとこちらを振り返った。

酷薄さの滲む、薄笑い。

「文化祭の魔王-samaとアンタのセッションみて、あの女、またブチ切れたみたいだな。わざわざ和希ちゃんの着替え中にクモ投げ込んだりしたんだって？ 裸同然で飛び出して恥かかせてやつたって言つてたけど……大丈夫だった？ 煌ちゃんに襲われたりしなかつた？」

黙つたまま睨みつけると、ロンはつまらな^{そういう}にひょいと肩をすくめてから、何気ない口調で続けた。

「 詩衣菜がさ、アンタの中身は男だつていうんだ」

意外な名前が飛び出して田を見開くおれに、首を「キキキキと鳴らしながら、言葉を継ぐ。

「文化祭でアンタ達の話を聞いたあと、まさかとは思いつつ、詩衣菜に確かめたわけ。あいつはガキの頃から知つてるけど、不思議なやつで、ときどき人の気持ち読んだり、未来が見えたりするんだ。だから、羽鳥和希がこんなこと言つてたんだけど、つて話したら、『そうかもしれない』つて。『だつて、すくなくとも、あのこのなかみはおとこよ』つて……」

ゴクリ、と唾^{つば}を飲み込むおれの前で、ロンは小刻みに肩を揺らし始めた……と思つた瞬間、割れるような^{じりじよう}哄笑。

「ヒヤーッハハハハハハ！ アハハハハハハ！ フハツハツハハツハツハツハ……ヒーッヒーッ……ふざけんな！」

突如としてぶちキレて、ぶん、と何かを振り上げる。

月光に、キラリと閃く白刃。

身動きできないおれの鼻先をかすめて、すぐ横の木に鋭利なナイフが突き刺さつた。

激怒と苛立ちで大きく歪む顔が、しかし次の瞬間、ブツとまた崩れる。

「……なーんちやつて、ビックリしたあ？ この世界が作りものか
どーかなんてのは、どーでもいいんだ。正直ピンとこねーし、そん
なこともあるかもなあつてくらい？ あの魔王サマ達が攻略されち
やうとかマジ笑えるし？ 脇役上等、徹底的にひつかき回してやる
……そう思つて、あのバカ女をそそのかした。『羽鳥和希が消えれ
ば魔王サマも目を覚ます。あんな最低女刺されて当然だ』みたいな
感じでな。ヒロインが消えたらこの世界はどうなるのかつてのは、
興味あつたし？ まさかほんとにやるとは思わなかつたけどな～ヒ
ヤハハハハツ！ マジ救いよーのねえバカ 」

瞬間、おれの右の拳がロンの左のほおに食い込んだ。
細身のからだは衝撃でよろつと数歩後ずさつてから、ペッと血液
を吐き出す。

「痛～、拳でぐる～、やっぱ男なんだな、アンタ……」

上げられた顔に張り付いていたのは、相も变らぬ暗い半笑い。

「悪いけどさ、オレ、好きになつた子はいじめたくなつちやうんだ
「まだ、なにかやるつもつか？」

怒りを押し殺して低く尋ねると、ロンはおどけるように両の掌を
広げて上に向けた。

「残念ながら、詩衣菜にバレちゃってね。まだあんたに手を出すよ
うなら、魔王サマに言いつけるつて……オレ、あの人を敵に回す気
はまだねーんだわ」

ゲーム『ときメロ』ではロンの攻略ルートは魔王をクリアした後
開けるのだと姉貴に聞いた。詳しいことはわからないが、ロンにと
つて、魔王は特別な位置づけにある存在らしい。

……おれは、こいつにとても残酷なことをした。恨まれて当然の
ことを。

それはわかるけど、それでも。

「おれは、おまえを絶対、許せない」

両の拳を握り締め、うなるように告げたおれに、爬虫類はちゅうるいめいた瞳
が、かすかに面積を広げた。

今すぐ横に刺さったままのナイフを手に取り、こいつののど笛を
めちゃめちゃに^か掻き切つてやりたい……そんな衝動を、なんとか抑
え込む。

早まるな。こんな奴のせいで全てを失うなんて、まっぴらだ。でも……。

「もし煌になんかあつたら、その時は……」

ロンは憤りにのど笛を詰めたりすおれをまじまじと見つめていたが、
その顔がみるみる歪むや、心底嬉しそうに、満面の笑みをかたびつ
た。

「うん。こ、こよ。憎んで憎んで憎みつづいて そしたらオレのこ

と、あれられないだろっ。」

煌は一命を取り留めたものの、大量出血によって引き起された低酸素脳症の影響で昏睡状態のまま、すでに三日目に入っていた。医師との連絡により症状は把握していたものの、小百合さんの日があるため、見舞いにさえいけない。

いついつとしたまま、抜け殻のようになつて学校も休んでいたら、昼過ぎに王子から電話があつた。

「君を見たときの煌のお母様の反応が尋常じゃなかつたと聞いて……君たちの過去について、調べさせてもらつた。勝手な詮索をしてごめんよ……」

煌が搬送されたのは北王子系列の病院だつたため、色々な情報が入るらしい。

「煌のお母様は、今からまもなく、一度家に戻られるらしい。僕達がなるべく引き止めるから、その間に煌のところに……きっと、彼も君に会いたがつてゐると思つから」

『204号室 金城 煌様』

ネームプレートを確認してから、そつと扉を開く。

窓際のベッドで眠る煌は、頭、腕、胸……体のあちこちから色んな管につながれていたけれど、その顔は、まるで昼寝でもしているかのようになつて、静かで、呼吸も穏やかで。

少し痩せてはいたけれど、今でも生死の淵を彷徨つてゐるなんて、到底信じられなかつた。

カーテンの隙間から差し込んだ幾筋もの柔らかな陽射しの中。
息をひそめるようにして煌の上にかがみこみ、そつと、唇を含む。
せる。

狂おしいほど祈りを込めて重ねた長い口付けに、返されたのは、
依然変わらぬ静寂。

「……なんだよ。起きるよ。ヒロインがキスしてんだぜ？」

ぽろぽろと涙が零れ落ち、まだ^{あや}癌の残るほおを弾いたけれど、煌
はまるで人形のように時を止めたまま、微動だにしない。

「おれ、恋とか愛とか、まだわかんないし。誰かを独占したいとか、
そいつの全部が欲しいと思う気持ちもよくわからないけど……おま
えのこと、すうぐ好きだよ」

出合つてたつた半年だけ。……もしかしたらもつて、家族より。

「おまえが家を出て行くつて聞いて、すうぐショックだった。もと
もと別れがくることはわかつてたのに、おまえの口から、予想より
も早くそれが告げられて、自分でも不思議なくらい落ち込んだ。で
きるなら、ずっとおまえの隣にいたい……いつのまにか、そう思う
ようになつてたんだ。こんな形でおまえを失うなんて、耐えられな
い……！」

手を握り締め、正直な思いを吐露^{しゆろ}したけれど、普段はきびきびと
動作する長身も端整な面差しも、やつぱりピクリとも動かないまま、
何の反応も示さなかつた。

おれにできることって、なんだらう?

ただ、見てるしかできないのか? 待つてるだけなのか?

おまえは何をして欲しい? なあ、煌……!

不意に蘇ったのは、こいつが家を出て行く直前に交わした何気ない会話。

『 おまえの歌はすごいよ。聞いてると本当に、なんていふか、生きる希望みたいなのがわいてくる』

おれは涙をぬぐうと、深呼吸する。

ありつたけの想いを込めた歌声が、静かに病室に響き始めた。

夕焼けが街の風景を染めあげて。
哀愁漂う鳥の鳴き声が耳を撃つ頃、おれの声はかすれて、のどは

ひりひりと痛みを訴え始めていた。

バンドでやつた歌、煌が好きだつて言つてた歌、知つてる歌……
片つ端から歌つてきたけれど、そろそろ時間的にも体力的にも限界
かもしけない。

次は何を歌おう……。

のどをさすりながら少しだけ考えて、選んだのは、MY LOVETE
LORERの「Hello, Again」。昔からある
場所……。

さつきも歌つたけど、もう一回。この曲は、特別だから。
おれ達のバンドのきつかけになつた歌。

『いつも 君と 待ち続けた 季節は 何も言わず 通り過
ぎた

雨はこの街に 降り注ぐ 少しのリグレットと罪を

包み込んで』

初めてこの歌を聴いたとき、煌が泣いていた理由が、今ならわかる。

煌にとつて救いそのもので、けれど再び聴けるとは思わなかつたヒロインの歌声を4年ぶりに聴いた……そのことに加えて、この歌詞は、どれだけ煌の心に響いたことだらう。

『記憶の中でずっと二人は生きていける

君の声が 今も胸に響くよ それは愛が彷徨う影

「こいつはいつも銜いなく、ことあることに好意を示してきたけど、おれの答えや見返りを求めることは決してなかつた。」

おれに過去の負い目がある事をわかつてゐるから、そこにつけ込むよくなことになるのを恐れて。

それどころか、最初は近づくことをも避けてたんだ……記憶の中だけで生きていければいいって、切ない気持ちを抑え込んで？

恨みも憎しみも全部のみ込んでしまつくらい、好きで仕方なかつたくせに。

『僕は この手伸ばして 空に進み 風を受けて
生きて行こう どこかでまためぐるよ 遠い昔からある場所』

起きるよ、煌。

おまえがもう一度笑ってくれるなら、なんだつてするから。もう、元の世界に戻れなくつたつていいから、だから。

『雨は やがて あがつていた』

カーテンの隙間から漏れた金色の夕射しが、日没で角度を変え、煌の顔に差し掛かる。

降り注ぐ光のベールに、閉ざされたまぶたがかすかに震え、ゆつくつと眩しそうに、その瞳が開かれた。

何度か瞬きをしてから、かたわらで手を握り締めるおれを見上げて、しばらく無言。だから、やつと、口を開いた。

笑いながら。

「……和希。おまえ、けつこう泣き虫だよな」

とうとう顔をあげて泣きじゃくるおれに、煌は、愛してる、と囁いた。

86 祈り(後書き)

引用: JASRAC 034-5192-5『Hello, Again』昔からある場所

作詞者: 小林武史

『零れた涙がいくつも弾けて空にかかった七色のきらはし溢れだす音の粒舞い踊る樂譜ときめきの旋律奏でよう君に』

歌声に合わせて、ベッドの上で半身を起こした煌がステイックを振る。掛布団の上で跳ね回る、ポスボスッと鈍い音。

「明日退院だよね？ 全国大会まで1週間ちょっと……なんとかなる、かな？」

腕組みする王子に、煌は「なんとかする」と力強くうなずいた。

「もともと俺は個人練習は基本イメトればっかだっだし……文化祭以降の1週間は、T・M GARAGEでバイトの後バカみたいに叩きまくってたから、一人でやる分にはほぼ完璧なんだ。おまえらの方は？」

「自分のパートはみんなマスターした。一昨日から、ドラムだけ打ちこみで合わせている。……やはり、おまえの音じゃないとしつくりこないが」

「J・K自然に付け加えられた悠斗の言葉に、煌はちょっと面はゆそくに視線を窓の方にそらし、ポリポリとほおを搔いた。

「ま、明日からの1週間は死ぬ氣で行こうぜ」

「つてほんとに死にかけたんだから無茶はすんなよ」

「平気平気。一応脳の検査とかがあるからって入院長引いてたけど、傷はもうほとんど塞がってるし」

「さすが！ 煙先輩の体力、化け物並みだもんね～」

「褒めてねーだろ、それ」

からかうよつて言つた静流をヘッドロックまでしてるのでから、ひとたび田覚めてからのにいつの回復力は確かにすさまじいようだ。

「……それにしても、最後までやつぱりギリギリなんだな～」

ため息をつくおれに、「いいじゃん、それでもいつもまくいくんだから」と快活に笑う煙。

「今回も絶対、つまくいく。今まで一番いい演奏になるぜ」

自信たっぷりに言こきりると、本当にそんな気がしてきた。

「うん、おれ達の総決算だもんな。最高のステージにしてみせるー。

……と。こんな時間か」

「ああ……」めん。ありがとな」

ちょっと申し訳なれやうな煙にふるふると首を振つてから、連れだつて病室を去つた。

昏睡状態から田覚めた煙は小百合さんを説き伏せ、彼女とは時間をずらして顔を合わさないようにする、といつ条件でおれも見舞いを許可されるようになった。納得してもらつまではかなり大変だったんじやねーかと思うけど……以来10日間、毎日午後6時から7時がおれに許された面会時間。基本、部活の後こんなふうに皆で来ることが多かつた。

Hレベータホールで階下ボタンを押して、やがて扉の向こうから現れた人影に、おれは思わず背筋を伸ばした。

短めのニュアンスボブの、スレンダー美人。

……まだ定時の10分前なのにビリして……。

「少しだけ、いいかしら？」

そんな申し出に、気を利かせた三人は先にエレベーターで降りていぐ。

小百合さんは硬い表情で、おれを見つめていた。
ギュッと結ばれていた脣がほどかれて、じぼれた言葉は

「あの時は『めんなさい』。取り乱して、酷いことを言つたわ。大人
がなかつたと、反省してる」

気まずそうに手を伏せながらの、予想外の謝罪に、焦つた。

「いえ、とんでもないです」「
でも、あなたを許したわけじゃないの」

強い調子でたたみ掛けながら、小百合さんはまたキッときつい眼
差しでおれを見すえる。

「できるなら、もう煌に関わらないでほしい。その気持ちは変わら
ないわ。だけど……あの子は、あなたが来ると、元気になるから」

胸元をギュッと自分の両手で握りしめてから、たたずむおれを残
し、病室へと向かっていく小百合さん。

「……毎日来ててくれて、ありがと」

振り返らずに、投げかけられた声。

その裏にひそむ葛藤を思つと、何も言えなくて。

離れていく後ろ姿に、おれはただ、深々とお辞儀をした。

芽生によると、11月に入つてからは全員の親密度などはわからなくなつてしまつたけれど、煌の覚醒とともに「恋愛不可」は解除された氣がする、とのこと。

複数のキャラが暴走したり死にかけたり……想定外の連続で、システムも相当混乱してんじゃなかるーか。

はたして最後のステージで優勝したら、元の世界に帰れるのだろうか。……おれは、どうしたいんだろう。どう、すべきなんだろう。病院からの帰りのバスに乗りながら物思いに耽つていたら、肩を揺すられる。

「和希。降りるぞ」

下車したのは、繁華街の大通り前。

退院祝いに明日、ちょっととしたパーティーでもやるかといつ話になつて、そのための買い出しにきたのだ。すぐ閉店時間になるから、いそがねーと。

引用：『Rainbow Score』 作詞者・北王子梓茶（なんちゃって。笑）

私生活がバタバタしててうつかり見落としていたのですが、いつのまにか

100万PV突破してました。大感謝！！

というわけで104万PV（笑）を記念して、『人気投票』を企画してみます。

1位のキャラは和希と両想いという設定で短編を一つ書こうかななんて。

そんなBL（？）読みたくないという方は何卒スルーしてくください。

やり方は

？お一人様持ち点10票

？一人のキャラに10票入れても、5票と3票と2票、など分散させてもOK

？web拍手のメッセージ欄にて投票お願いします。

？無記名投票ももちろんOKですが、原則お一人様10票ということで

「ご理解ください。

？投票期間は本日から1週間、23日水曜日まで。

全体数がそんなないので、あなたの1票の影響力はとても大きいです（笑）
ご協力よろしくお願ひします♪

11月も後半に入り、街はすでにクリスマスマード満開だ。陽気な音楽が流れ、華やかなイルミネーションに染め上げられていた。

「クリスマスパーティーもしたいけど……無理か

静流の言葉に、ヒロヒコは反応できなかつた。

「イギリス行きは1~2月半ばだったか。そつちの準備も忙しいだろ

う~

「うん、大丈夫。……ずっとこのままにいられたらいいの

ぱりりと零れた王子の咳きこ、少しだけ沈黙が落ちる。

「じゃあこっそ、退院と一緒にクリスマスも祝ひやうかー…?」

おれの提案に、「まだ一ヶ月以上あるぞ」と悠斗が呆れたように吐息を漏らした。

「いーかも。煌先輩にケーキ焼いてもらつて、プレゼント交換したり

「いや、それじゃ完全に快気祝いがどつかいつてるだらつ。プレゼントを用意する時間もない

生真面目にシッ「む悠斗がおもしろくて、懸ノリするあれ達。

「プレゼントの予算は決めておいつか。でないと王子、やたら高級品もつてきそうでこわい

「「「確かに。ああ、センパイのプレゼントが当たるといいな。自分で用意したものがくると寒いけど」

「なんとなく蒼木くんにはありそつ、そのパターン」

「なぜ」

王子のさりげにひざにコメントと、悠斗の返しの間合いが絶妙だつた。爆笑する静流。おれも、笑つた。涙が出るくらい。

「あ」

不意に、少女の、小さいけれど、不思議に響く声。視線を巡らせるど、左手の道の先に、黒いトレンチコートを羽織つた美貌の男と、ゴスロリドレスにケープを纏つた華奢な美少女がたたずんでいた。

「魔王、詩衣菜……」

「ほひ、奇遇だな」

フツと口の片端を吊り上げ接近してきた魔王は、ゴスロリ、ブランドのものらしき紙袋を携えている。

「もしかして、詩衣菜の買い物の付き添い？　いい兄貴してんじやん」

「成り行きだ」

田を丸くしたおれに不機嫌そうに一言返しから、「おまえたちは……」と顎を上げた。

「こんなところで何を群れている？」

「明日、煌が退院するから快気祝いのための買出しにね。よかつた

「いや、魔王くんも一緒に遊びたい？」

王子の誘いを馬鹿馬鹿しい、とでもこいつはこ一 眉間に笑する魔王。

「あの死にぞこないが、もう退院か……しぶとい奴だ」

「そんなこと言つて、魔王さま、内心ホッとしてるくせに」

「……素直じゃない男だ」

「貴様に言われる筋合ひはない」

詩衣菜は少し離れたところからパチパチと長い睫毛を瞬かせてや
りとりを静観していたが、おれと視線が合つと、くいくい、と手招
きする。

そばまで近付いていくと、深々と頭を下げられた。

「『めんなさい』」

「なんだいきなり？」

「あのあと『……ロロン』、よけいなことつてしまつた

顔をあげた詩衣菜は、相変わらず無表情だったが、かすかに愁い
が浮かんでるような気がした。

「いや……おまえも、ショックだつたんじゃないかな？　『ごめんな。
おれがうかつだつたばっかりに

「いいの。わたしは、なにもかわらないから……」

詩衣菜はふるふると首を振つてから、じつとおれを見つめてきた。
どこか虚ろな、けれど驚くほど澄んだ大きな瞳が、次第に魔王と
はまた少し違う不思議な翠のベールにけぶり、揺らめく。

「…………だいじょ「つぶ」

その神秘的な光に魅入られ、立ち尽くすおれに、詩衣菜はまるで神託しんたくをくだす巫女のように、さうりと、けれどどこか厳かに、語つた。

「あなたがおもう『せこあく』には、ならない。このせかいは、つづいていく。だから　　ただしいとおもうみちをすすんで」

にぎやかな雑踏ざっとうの中、ほんの囁きに過ぎないはずのその言葉は、おれの体内で大きく反響し、じんわりとした痺れとともに、深く沁み渡つた。

「…………ありがと」

心の底からあんとの安堵あんどとともに、感謝を述べると、詩衣菜は「クリとうなずいた。その双眸そうめいは、もういつもの色に戻つている。

「おこいさま。わたし、もんげん」

「そうだ、おれ達も、早く行かなきゃ店閉まるー。今何時だー？」

事態が飲み込めず不思議そうな顔をしている男どもを促して、おれ達はそれぞれの目的地へ向かつていった。

来週の日曜日が、全国大会　。

キャラクターファイル？

名前：紅龍（道家）ロン

身長：177

星座：水瓶座

血液型：B

年齢：16

一人称：オレ

二人称：和希ちゃん。煌ちゃん。クールくん。王子さま。静流。魔王さま。

趣味：ギター。ファッショń。ゲーム。ギャンブル。徘徊。SMプレイ（

花にたとえるなら：洋ラン（パフィオペデイルム）

イメージボイス：神谷 史

常人には理解できないセンスの衣装に身を包む、派手好きお祭り好きな刹那主義者。

一見陽気で口が上手く、普段は自ら道化を買って出ますが、その実、本性は抜け目なく狡猾。

根っからのいじめっ子でメシウマ、常に刃物を所持している犯罪者予備軍。

絶対リアルではお近づきになりたくないタイプですが、キャラとしてはとても動かしやすい、不思議とクセになる男。作者がどんだけ貶めても心が痛まないのはこいつだけw

自分本位なトリックスターですが、幼馴染の魔王だけは特別な位置づけにあるようです。

実はいい所のボンボン。ただし母親は幼い頃に自殺。テーマは「歪んだ愛情」。

好意なんてあやふやなものより憎しみの方がよほど信憑性が高いと
本気で思ってます。恐い恐い。

11月27日。全国大会当日。
2000人の観客を前に、大ホールのひのき舞台に立つのは10組の高校生グループ。

この日は朝から、静かな雨が降っていた。
いつもよりずいぶんと早く目が冷めて、ゆっくりと支度を整える。
ここまできたら、気負わず、いつもの自分たちらしい演奏をしよう。
そんな意図から、最後のステージには、普段の制服で立つことになっていた。

藍色のセーラーカラーに、オフホワイトのジャケット。空色のリボン。胸元にエンブレム。膝上丈の藍色のプリーツスカートにワンポイント入りの黒のハイソックス……すっかり着慣れたそれらを身にまとい、階下へと降りていく。

「おはよう」

まもなく姉貴も起きてきて、食卓で向かい合っての朝食。

「こよこの日がきたのね……」

感慨深そうに呟いて、シリアルを口元に運びかけて、やめる。力チャン、という音を響かせてスプーンを置いた姉貴は、じつとおれの目をのぞきこんだ。

「和希、あんた、帰りたい？」

おれは黙つたまま、彼女の言葉の続きを目で促す。

「ハーレムエンドをクリアすれば、元の世界に戻れる……『芽生』になつて、直感的にそう思つたんだけ。もし、あんたが『ここに留まりたいなら、今日誰かに告白すれば、もしかしたら……』『その選択肢は、ないよ』

即座に否定した。

「いきなり『ときメロ』の世界にじばされて。

最初はパニックで、嫌で嫌で仕方なかつたけれど、だんだんそんな感覚も薄れていつた。

慣れとは恐ろしい、というだけなく、体が女だから、というのもあるのかもしれない。

男どもに迫られても、戸惑いや抵抗はあつたが、生理的な嫌悪感は次第に無縁のものとなり、一緒にいる時間が増えるほど、あいつらの「こと」がどんどん好きになつていつた。

「おれは男だ」……そつ頑なに信じて、ずっと認めようじなかつたけど。

真摯な愛情に触れるにつれ、本当は苦しいだけでなく、今まで体験したことのない心とからだのざわめきも、感じるようになついた。

この想いに応えられたら、という衝動も、何度も突き上りてきたけれど。

「無限ループ」

おれの一言に、芽生はハツとしたように息をのみ、顔をしかめた。

「前に言つてたよな。たとえゲームオーバーにならなくても、至高

エンド以外なら、何度でも同じ時間やシチューションを繰り返し、体験する羽目になる可能性がある……って。もう一度同じことをしろっていわれても、それは色々な意味で、おれには無理だよ」

もしひとたび『やり直し』の罠にまつたら、もつ抜け出せないだろ。それはおれだけでなく、この世界の全ても、永遠の時間の檻に閉じ込めることを意味する。

そんな危険は、到底冒せない。

「リセッタはきかない。もう迷ったから、こじまでもやつてこれたんだ

だ

わつぱつと言つて切るおれに、姉貴は深々とため息をつくと、ベターッと机の上に伸びた。

「あああ～ わよひな～、夢の2次元ライフ！ わよひな～！ケメン天国……！」

「……あんたはつべづべ、気楽でいいよなあ……」

『Rainbow Soccer』のイントロは、声量抑え目の歌

声からスタートする。

わづくつとまどひよひな、可愛らしくふわふわしたハープ音のキーボに合わせ、慈しむよひな、優しい歌唱。

そこに、不意に切り込むダイナミックなドラマフレーズ。一転、全楽器がボリューム全開でさざざめく。

扉が開かれた！

急上昇するテンション。踏み切るアクセス。舌をかみそつた早口
歌唱。疾走するリズム。

アップテンポの4拍子が、6拍子に変わり、メルヘンチックな気配がのぞいたと思いきや、曲調は下降し、不吉な影。それを振り切るような跳躍とともに、ピアノの美しいトリルが鳴り響く心躍るサビにダイブ！

スタッフカードで弾んで、クライマックスは伸びやかに、極限の高音。

間奏部分は、各楽器の見せ場がリレーのように連なる。

鍵盤を自在に行き来しかき鳴らされる甘やかなジャズ調のピアノ。思いつきり前面に出た情熱的なベースが、ギターの研ぎ澄ました艶音とともにこれでもかという超絶技巧で驚異的なユニゾン。とどめに花火がいくつも炸裂するような、華々しい圧巻のドラムソロ。

高潮した観客の熱氣があれたちを煽り、昂揚させる。

まだだ。

これで終わつたと思つなよ？

急にボリュームが収まったロメロ。迷い彷徨うように次々と数小節ごとに拍子が変化する展開部。焦らすような葛藤のトンネルを抜けた先には、光と希望に満ちた大サビ。

うねりは最高潮。

全員のとつておきの音が反響して、洪水となる。体中を駆け巡る快感の波。

楽しい！ 楽しい！ 楽しそうにかなうそつだ。

弾けるリズム。
興奮のビート。

降り注ぐ音のシャワーを超えて歓喜の歌を響かせたその時、ステージにかかる、大きな虹が見えた気がした。

チャン、と軽快なピアノの一重和音で演奏が結ばれると、一瞬の静寂の後、どうつと歓声と拍手が巻き起こつた。

バクバクと破裂しそうな鼓動を鎮めるように、深呼吸。スイッチを、切り替える。

観客の熱狂がほどよく収まつていくタイミングを見計らつ。

……ああ。好きだな。
終わりたくない。
ずっとここで、歌つてみたい。でも、そんなわけにも、いかないから。

メンバーに目配せして、うなづく。
最後の一曲。

独特の入りのベースとドラムに、胸を締め付けるようなギターリフがかぶさり、おれ達の始まりの曲が響き始めた……。

89 ラストステージ（後書き）

http://www.youtube.com/watch?v=dFGp_Cv_wOQ

彼らが演奏していると妄想しながら聴いてくださいw

27日田曜日午前中に、後夜祭と最終回を同時更新します。

人気投票の結果発表と短編についての詳細は、同日夕方頃に活動報告にて。

ご協力してくださった皆様、ありがとうございました！
(まだ今日まで投票受け付けてますw)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7786s/>

『ときメロ』 - 恐怖のイケメン学園 -

2011年11月23日07時54分発行